

Enterprise Vault™ Exchange Server アーカイブ の設定

12.3

Enterprise Vault™: Exchange Server アーカイブの設定

最終更新日: 2018-03-20。

法的通知と登録商標

Copyright © 2018 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、Enterprise Vault、Compliance Accelerator、Discovery Accelerator は、Veritas Technologies LLC または同社の米国およびその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、Veritas 社がサードパーティへの帰属を示す必要があるサードパーティソフトウェア (「サードパーティプログラム」) が含まれる場合があります。一部のサードパーティプログラムはオープンソースまたは無償ソフトウェアライセンスの下で利用できます。ソフトウェアに付属している使用許諾契約は、それらのオープンソースまたは無償ソフトウェアライセンスで規定されている権利または義務を変更するものではありません。この Veritas 製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所で入手できます。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載する製品は、使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバース・エンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。Veritas Technologies LLC からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

文書は「現状有姿のまま」提供され、市販性、特定目的との適合性または権利を侵害していないことを含むすべての明示または黙示の条件、表明および保証は、そのような免責が法的に無効であるとされた場合を除き、免責されます。VERITAS TECHNOLOGIES LLC は本書の供給、実行、または使用に関連した付随的、間接的な損害に対する責任を負わないものとします。本書に含まれる情報は、事前の通知なく変更される場合があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212 の規定によって商用コンピュータソフトウェアとみなされ、場合に応じて、FAR セクション 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202「Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation」、その後継規制の規定により、ベリタスがオンプレミスとして提供したか、ホストサービスとして提供したかにかかわらず、制限された権利の対象となります。米国政府による本ソフトウェアの使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

Veritas Technologies LLC
500 E Middlefield Road
Mountain View, CA 94043

<https://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートは、世界中にサポートセンターを設けています。すべてのサポートサービスは、サポート契約と、その時点でのエンタープライズテクニカルサポートポリシーに従って提供されます。

サポートサービスとテクニカルサポートに連絡する方法について詳しくは、次の当社の **Web** サイトを参照してください。

https://www.veritas.com/support/ja_JP.html

次の URL で **Veritas Account** の情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

既存のサポート契約に関して当社に問い合わせる場合は、次に示すご利用の地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

全世界 (日本以外)

CustomerCare@veritas.com

日本

CustomerCare_Japan@veritas.com

テクニカルサポートに連絡する前に、**Veritas Quick Assist (VQA)** ツールを実行して製品のマニュアルに記載されているシステムの必要条件を満たしていることを確認してください。VQA は **Veritas** サポート **Web** サイトの次の記事からダウンロードできます。

https://www.veritas.com/support/en_US/vqa

マニュアル

最新版のマニュアルを確認してください。各マニュアルの 2 ページ目に最終更新日が表示されています。最新のマニュアルは **Veritas** の **Web** サイトで入手できます。

https://www.veritas.com/support/ja_JP/article.100040095

マニュアルのフィードバック

お客様のフィードバックは当社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの間違い、脱字などのご報告をお願いします。その際、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。フィードバックは次のアドレスに送信してください。

evdocs@veritas.com

次の **Veritas** コミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問することもできます。

<https://www.veritas.com/community>

目次

第 1 章	本書について	12
	このマニュアルについて	12
	Enterprise Vault についての詳しい情報の入手先	12
	Enterprise Vault トレーニングモジュール	15
第 2 章	Exchange Server フォームの配布	16
	Exchange Server アーカイブ設定時の Microsoft Exchange フォーム配布について	16
	Exchange Server アーカイブ設定時の個人用フォームライブラリの使用	17
	Exchange Server アーカイブ設定時の組織フォームライブラリの使用について	17
	次に実行する処理	20
第 3 章	メールボックスからのアーカイブの設定	21
	Enterprise Vault メールボックスアーカイブ設定前の注意事項	22
	Exchange Server メールボックスアーカイブでのボルトストアグループ、ボルトストア、パーティションの使用	22
	Exchange Server のデータベース可用性グループの使用	22
	Exchange Server メールボックスのアーカイブポリシーの定義	24
	Exchange Server アーカイブ設定時のメールボックスポリシー設定	25
	Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシーの定義	31
	Exchange サーバーアーカイブのデスクトップポリシー設定	32
	Exchange Server アーカイブ対象の追加	41
	アーカイブ用の Exchange Server ドメインの追加	41
	アーカイブ用の Exchange Server の追加	41
	Exchange Server アーカイブのプロビジョニンググループの追加	42
	Exchange サーバーをアーカイブするための Exchange プロビジョニングタスクの追加	44
	Exchange メールボックスのアーカイブタスクの追加	45
	Enterprise Vault サイトのデフォルト設定のレビュー	46

Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの使用	47
Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの ShortcutText.txt のレイアウト	49
Exchange Server アーカイブの自動メッセージの編集について	50
Exchange Server アーカイブの Welcome メッセージの編集	50
Exchange Server アーカイブの、アーカイブの使用限度メッセージの 編集	51
Exchange Server アーカイブ設定時のタスク制御サービスとアーカイブタ スクの起動	52
メールボックスの Exchange Server アーカイブの有効化	52
Exchange Server アーカイブの共有アーカイブの作成	54
Exchange Server アーカイブサーバーへの Outlook アドインのインストー ル	55
PSTDisableGrow の上書き	55
Exchange Server メールボックスアーカイブのユーザーの作業	56

第 4 章

ユーザーのデスクトップの設定	57
Exchange Server アーカイブのユーザーのデスクトップの設定について	57
Exchange Server アーカイブの Enterprise Vault Outlook アドイン	58
Exchange Server アーカイブの Windows デスクトップサーチプラグ インの有効化	59
Exchange Server アーカイブの Active Directory への Outlook アド インの公開	60
Outlook アドインの手動インストールの設定	61
Exchange Server アーカイブを使う Mac OS X 用 Enterprise Vault クラ イアント	64
Mac OS X 用 Enterprise Vault クライアントの Kerberos 認証の設定	64
Exchange Server アーカイブ使用時の Outlook のフォームの同期	65
Exchange Server アーカイブのユーザー側の準備	65
Exchange Server アーカイブの Windows Search の設定	66
次に実行する処理	67

第 5 章

ボルトキャッシュと仮想ボルトの設定	68
ボルトキャッシュと仮想ボルトについて	68
ボルトキャッシュの内容の扱い方	71
ボルトキャッシュの同期	72
ボルトキャッシュのヘッダーの同期と内容のダウンロード	73
ボルトキャッシュと仮想ボルトの状態	74
ボルトキャッシュの初期同期	75

ボルトキャッシュによる内容のダウンロードの同時要求の制御	75
ボルトキャッシュを使う場合の Enterprise Vault サーバーのキャッシュ の場所	75
仮想ボルトを使用する場合の保持カテゴリの変更	76
ボルトキャッシュを使う場合の事前キャッシング	76
ボルトキャッシュウィザード	77
ボルトキャッシュと仮想ボルトの設定	77
ボルトキャッシュの詳細設定	78
ダウンロードするアイテムの経過日数の限度 (Exchange のボルトキャッ シュの設定)	79
ダウンロードしたアイテムの経過日数の限度をロック (Exchange のボ ルトキャッシュの設定)	80
手動アーカイブの挿入 (Exchange のボルトキャッシュの設定)	80
オフラインストアが必要 (Exchange のボルトキャッシュの設定)	80
一時停止間隔 (Exchange のボルトキャッシュの設定)	81
アイテムごとのスリープ (Exchange のボルトキャッシュの設定)	81
事前アーカイブ (Exchange のボルトキャッシュの設定)	82
ルートフォルダ (Exchange のボルトキャッシュの設定)	82
ルートフォルダの検索パス (Exchange のボルトキャッシュの設定)	83
セットアップウィザードを表示 (Exchange のボルトキャッシュの設定)	83
同期するアーカイブの種類 (Exchange のボルトキャッシュの設定)	84
WDS 検索の自動有効化 (Exchange のボルトキャッシュの設定)	84
仮想ボルトの詳細設定	84
1 回の同期におけるアーカイブ要求の最大数 (Exchange 仮想ボルト 設定)	86
アイテムをアーカイブする最大試行回数 (Exchange の仮想ボルトの 設定)	86
1 回の同期でアーカイブされるデータの最大量 (Exchange 仮想ボルト 設定)	87
1 回の同期における削除要求の最大数 (Exchange の仮想ボルトの 設定)	87
アーカイブするアイテムの最大サイズ (Exchange 仮想ボルト設定)	88
1 回の同期におけるアイテム更新の最大数 (Exchange の仮想ボルト の設定)	88
内容がない場合の操作の最大合計サイズ (Exchange の仮想ボルト の設定)	89
アーカイブするアイテムの最大合計サイズ (Exchange 仮想ボルト設 定)	89
閲覧ウィンドウに内容を表示 (Exchange 仮想ボルトの設定)	90

同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)	91
同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)	92
ユーザーがアイテムをアーカイブ可能 (Exchange 仮想ボルトの設定)	93
ユーザーが別のストアにアイテムをコピー可能 (Exchange の仮想ボルトの設定)	93
ユーザーがアーカイブ内のアイテムをコピー可能 (Exchange 仮想ボルトの設定)	94
ユーザーがアイテムを削除 (復元不可) 可能 (Exchange の仮想ボルトの設定)	94
ユーザーがアイテムを再編成可能 (Exchange 仮想ボルト設定)	95

第 6 章	パブリックフォルダのアーカイブ設定	96
	パブリックフォルダのアーカイブについて	96
	パブリックフォルダからアーカイブを設定する場合のボルトストアとパーティションに関する注意事項	97
	パブリックフォルダアーカイブの作成	97
	パブリックフォルダタスクの追加	98
	パブリックフォルダポリシー設定について	98
	Exchange パブリックフォルダポリシー設定	98
	パブリックフォルダのアーカイブ対象の追加	103
	パブリックフォルダのアーカイブ対象を追加する手動 (標準) の方法	104
	自動でパブリックフォルダのアーカイブ対象を追加する方法	104
	パブリックフォルダへのアーカイブ設定の適用	105
	パブリックフォルダタスクのスケジュール設定	106
	アーカイブ対象パブリックフォルダの削除に関する注意事項	107

第 7 章	ジャーナルメッセージのアーカイブの設定	108
	ジャーナルメッセージのアーカイブ設定の準備	108
	ジャーナルメッセージをアーカイブする場合のボルトストアグループ、ボルトストア、パーティション	109
	ジャーナルアーカイブの作成	109
	ジャーナルアーカイブへの権限の追加	109
	Exchange ジャーナルタスクの追加	110
	ジャーナルポリシー設定のレビュー	111
	Exchange Server ジャーナルメールボックスのアーカイブ対象としての追加	111
	ジャーナルタスクの起動	112
	ジャーナルメッセージのアーカイブ設定後の処理	112

第 8 章	エンベロープジャーナル	114
	Enterprise Vault と Exchange Server のジャーナルレポートについて	114
第 9 章	Exchange Server 2013 以降用の Enterprise Vault Office Mail App の設定	115
	Microsoft Office メールアプリケーションについて	115
	Enterprise Vault について Office Mail App	116
	Enterprise Vault Office Mail App の機能	117
	Enterprise Vault Office Mail App のポリシー設定とオプション	118
	Enterprise Vault Office Mail App の使用に必要な HTTPS の初期設定	120
	Enterprise Vault Office Mail App の配備	120
	Office Mail App 向けの PowerShell cmdlet について	121
	New-App cmdlet を使用した Office Mail App の配備について	121
	Enterprise Vault Office Mail App 用の New-App コマンドパラメータ	123
	個々のユーザーへの Enterprise Vault Office Mail App の配備	124
	複数ユーザーへの Enterprise Vault Office Mail App の配備	125
	個々のユーザーに配備した後の Enterprise Vault Office Mail App	126
	組織内への Enterprise Vault Office Mail App の配備	127
	組織に配備した後の Enterprise Vault Office Mail App について	129
	Office Mail App の使用を有効にするためにアップグレードした後の	
	メールボックスの同期	131
	Enterprise Vault Office Mail App のユーザーのコンピュータに関する追	
	加の必要条件	131
	特定のデバイスタイプに対する Enterprise Vault Office Mail App の無効	
	化と再有効化	132
	ユーザーまたは組織のための Enterprise Vault Office Mail App の削除、	
	無効化、再有効化	133
	Enterprise Vault Office Mail App のトラブルシューティング	135
	Enterprise Vault Office Mail App: クライアントのトレース	136
	Enterprise Vault Office Mail App: サーバーのトレース	136
	Enterprise Vault Office Mail App の配備の確認	137
	Enterprise Vault Office Mail App マニフェストファイルが作成されな	
	い	138
	Enterprise Vault Office Mail App を組織レベルで配備できない	139
	Enterprise Vault Office Mail App のウィンドウは空白またはエラーメッ	
	セージを含んでいます	139

Enterprise Vault Office Mail App の処理が失敗し、エラーメッセージが表示されます	140
--	-----

第 10 章

Enterprise Vault から Exchange Server 2010 上の OWA クライアントへのアクセスの設定	142
OWA クライアントの Enterprise Vault の機能について	143
Enterprise Vault の OWA フォームベース認証について	144
Exchange Server 2010 環境の Enterprise Vault OWA Extensions	144
クラスタ化された OWA の設定	146
OWA ユーザーの Enterprise Vault アクセスの設定手順	146
Exchange 2010 CAS サーバーから匿名で接続するための Enterprise Vault の設定	148
ExchangeServers.txt ファイルの作成	149
データアクセスアカウントの設定	149
OWA 設定用の管理サービスの再起動とメールボックスの同期	150
OWA 用の Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーの設定	151
Enterprise Vault OWA 2010 Extensions のインストール	155
OWA で使うための Exchange Server 2010 CAS プロキシ処理の追加の設定手順	156

第 11 章

Outlook RPC over HTTP クライアントから Enterprise Vault へのアクセスの設定	157
Outlook RPC over HTTP と Outlook Anywhere の設定について	157
Exchange Server Outlook Anywhere の設定について	158
Outlook RPC over HTTP クライアントにアクセスするための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定について	159
Enterprise Vault への Outlook Anywhere クライアントアクセスの設定	161
Enterprise Vault への Outlook Anywhere アクセスを設定するための必須作業	162
Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定	162
Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定	162
Enterprise Vault プロキシサーバーからの匿名接続用の Enterprise Vault サーバーの設定	163
Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーでの RPC over HTTP の設定	166

第 12 章	OWA および Outlook への外部アクセスのための ファイアウォールソフトウェアの使用	168
	Outlook 2013 および OWA 2013 向けの Threat Management Gateway 2010 について	168
	OWA 2010 から Enterprise Vault にアクセスする場合の ISA Server 2006 の設定	169
	Outlook Anywhere クライアントから Enterprise Vault にアクセスする場合 の ISA Server 2006 の設定について	170
第 13 章	フィルタ処理の設定	171
	フィルタについて	171
	エンベロープジャーナルによるジャーナルフィルタについて	172
	ジャーナルの選択の設定	173
	ジャーナルの選択ルールファイルの作成	173
	ジャーナルの選択フィルタルール	173
	ジャーナルの選択のレジストリ設定の追加	175
	ジャーナルの選択を使った無効な配布リストの管理	176
	ジャーナルのグループ化の設定	177
	ジャーナルのグループ化ルールファイルの作成	178
	ジャーナルのグループ化フィルタルール	179
	ジャーナルのグループ化のレジストリ設定の追加	180
	ジャーナルのグループ化設定のテスト	180
	カスタムフィルタの設定	181
	分散 Enterprise Vault 環境でのカスタムフィルタについて	183
	Exchange Server ジャーナルカスタムフィルタのレジストリ設定	183
	Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリ設定	185
	Exchange Server パブリックフォルダカスタムフィルタのレジストリ設定	187
	カスタムフィルタルールセットの概要	188
	デフォルトのカスタムフィルタの動作の制御について	191
	カスタムフィルタのルールセットファイルの一般的な形式について	195
	カスタムフィルタのルール処理について	199
	カスタムフィルタのメッセージ属性フィルタについて	202
	カスタムフィルタの添付ファイル属性フィルタ	215
	カスタムフィルタへのメッセージフィルタと添付ファイルフィルタの適用 方法	218
	カスタムフィルタのルールセットファイルの例	221
	カスタムプロパティと内容カテゴリの設定	225
	Custom Properties.xml の一般的な形式について	228
	カスタムプロパティでの追加 MAPI プロパティの定義	230

内容のカテゴリについて 233

サードパーティのアプリケーションでのカスタムプロパティの表示方法
の定義 236

カスタムプロパティの要素と属性の概略 240

カスタムプロパティの例 244

本書について

この章では以下の項目について説明しています。

- [このマニュアルについて](#)
- [Enterprise Vault についての詳しい情報の入手先](#)

このマニュアルについて

このマニュアルでは、Microsoft Exchange サーバー上のメールボックスとパブリックフォルダからアイテムをアーカイブできるように Enterprise Vault を設定する方法について説明します。

このガイドでは、次の Microsoft 製品の管理方法を理解していることを前提にしています。

- Windows Server
- Exchange Server
- SQL Server
- Message Queue Server
- IIS (Internet Information Services)

Enterprise Vault についての詳しい情報の入手先

[表 1-1](#) に、Enterprise Vault に付属のマニュアルの一覧を示します。このマニュアルは、Veritas [ドキュメントライブラリ](#) から PDF および HTML 形式でも入手可能です。

表 1-1 Enterprise Vault マニュアルセット

マニュアル	コメント
Veritas Enterprise Vault ドキュメントライブラリ	<p>横断検索の可能な Windows のヘルプ (.chm) 形式の次のドキュメントがすべて含まれています。Acrobat (.pdf) 形式のマニュアルへのリンクも含まれています。</p> <p>このライブラリには、次を含む複数の操作でアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows エクスプローラで Enterprise Vault インストール先フォルダのサブフォルダ Documentation¥language¥Administration Guides を参照し、EV_Help.chm ファイルを開きます。 ■ 管理コンソールの[ヘルプ]メニューで[Enterprise Vault のヘルプ]をクリックします。
導入および計画	Enterprise Vault の機能の概要を説明します。
Deployment Scanner	Enterprise Vault をインストールする前に必要なソフトウェアと設定を確認する方法を説明します。
インストールおよび設定	Enterprise Vault の設定に関する詳細な情報を提供します。
アップグレードの手順	既存の Enterprise Vault インストールを最新バージョンにアップグレードする方法を説明します。
Domino サーバーアーカイブの設定	Domino メールファイルとジャーナルデータベースからアイテムをアーカイブする方法を説明します。
Exchange Server アーカイブの設定	Microsoft Exchange ユーザーメールボックス、ジャーナルメールボックス、パブリックフォルダからアイテムをアーカイブする方法を説明します。
ファイルシステムアーカイブ (FSA) の設定	ネットワークファイルサーバーに保存されているファイルをアーカイブする方法を説明します。
IMAP の設定	Exchange アーカイブとインターネットメールアーカイブへの IMAP クライアントアクセスを設定する方法を説明します。
SharePoint Server アーカイブの設定	Microsoft SharePoint サーバーの文書をアーカイブする方法を説明します。
Skype for Business のアーカイブの設定	Skype For Business のセッションをアーカイブ化する方法を説明します。
SMTP アーカイブの設定	他のメッセージングサーバーから SMTP メッセージをアーカイブする方法を説明します。

マニュアル	コメント
Microsoft ファイル分類インフラストラクチャを使用した分類	Windows Server の新しいエディションに組み込まれた分類エンジンを使用して、新規と既存のすべてのアーカイブ済みコンテンツを分類する方法について説明します。
Veritas Information Classifier を使用した分類	Veritas Information Classifier を使用して、業界標準の分類ポリシーの包括的なセットを基準に新規とアーカイブ済みのすべてのコンテンツを評価する方法について説明します。Enterprise Vault を使用した分類を初めて行う場合は、以前の直観的でないファイル分類インフラストラクチャエンジンではなく、Veritas Information Classifier の使用をお勧めします。
管理者ガイド	日常的な管理を実行する方法を説明します。
PowerShell コマンドレット	Enterprise Vault PowerShell コマンドレットを実行して、さまざまな管理タスクを実行する方法を説明します。
監査	Enterprise Vault サーバー上でイベントの監査情報を収集する方法を説明します。
バックアップと回復	システムエラーが起きた場合にデータ損失を防止する効果的なバックアップ戦略の実装方法や、回復手段を利用する方法を説明します。
レポート	Enterprise Vault サーバー、アーカイブ、アーカイブ済みアイテムの状態に関するレポートを提供する、Enterprise Vault Reporting の実装方法を説明します。FSA レポートを設定すると、ファイルサーバーとそのボリューム用の追加レポートを利用できます。
NSF 移行	Domino ファイルと Notes NSF ファイルから内容を Enterprise Vault アーカイブにインポートする方法を説明します。
PST 移行	Outlook PST ファイルから内容を Enterprise Vault アーカイブに移行する方法を説明します。
ユーティリティ	Enterprise Vault のツールとユーティリティについて説明します。
レジストリ値	レジストリ値を一覧表示している参照用の文書で、さまざまな側面から Enterprise Vault の動作を修正する場合に使うことができます。
管理コンソールのヘルプ	Enterprise Vault 管理コンソールのヘルプ。
Enterprise Vault Operations Manager のヘルプ	Enterprise Vault Operations Manager のヘルプ。

サポートされているデバイスとソフトウェアのバージョンの最新情報について詳しくは、『Enterprise Vault [Compatibility Charts](#)』を参照してください。

Enterprise Vault トレーニングモジュール

Veritas 教育サービスでは、基本的な管理から詳細トピック、トラブルシューティングまで、Enterprise Vault の包括的なトレーニングを提供します。教室でのトレーニングや仮想トレーニングなど、さまざまな形式でトレーニングできます。

Enterprise Vault トレーニング、カリキュラムのパス、認定オプションについて詳しくは、<https://www.veritas.com/services/education-services> を参照してください。

Exchange Server フォームの配布

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange Server アーカイブ設定時の Microsoft Exchange フォーム配布について](#)
- [次に実行する処理](#)

Exchange Server アーカイブ設定時の Microsoft Exchange フォーム配布について

Exchange Server アーカイブを実装する場合、Microsoft Exchange Server 組織全体に Microsoft Exchange フォームを配布する必要があります。異なる言語バージョンのフォームは、Enterprise Vault サーバーキットと、Outlook アドインのインストーラキットで提供されます。

フォームは、次の方法で配布できます。

- Outlook アドインで各ユーザーの個人用フォームライブラリにフォームを格納できるようにします。これはデフォルトの方法です。
p.17 の「[Exchange Server アーカイブ設定時の個人用フォームライブラリの使用](#)」を参照してください。
- Exchange Server 上の組織フォームライブラリにあるフォルダにフォームをインストールします。
p.17 の「[Exchange Server アーカイブ設定時の組織フォームライブラリの使用について](#)」を参照してください。

メモ: Exchange フォームは、Mac OS X 用 Enterprise Vault クライアントのユーザーには影響はありません。

Exchange Server アーカイブ設定時の個人用フォームライブラリの使用

Enterprise Vault Outlook アドインでは、デフォルトで、ユーザーの個人用フォームライブラリにフォームが自動的に配備されます。これには、管理者による設定が必要ないという利点があります。

Exchange Server アーカイブ設定時の組織フォームライブラリの使用について

必要に応じて、ユーザーの個人用フォームライブラリにフォームを配備するのではなく、組織フォームライブラリにフォームをインストールできます。ただし、これには一定の設定作業が必要になります。特にデフォルトで組織フォームライブラリを提供しない Exchange Server 2010 以降のバージョンでは重要です。

このセクションでは、組織フォームフォルダを作成し、それをフォームにインストールする方法について説明します。組織フォームライブラリには、インストールするフォームの言語バージョンごとにフォルダを 1 つ作成します。また、このセクションでは、配備方法を変更するにはデスクトップポリシーでポリシー設定を変更する必要がある、ということについても説明します。

p.17 の「[Exchange Server アーカイブ設定時の組織フォームフォルダの作成](#)」を参照してください。

p.19 の「[Exchange Server アーカイブ設定時の Microsoft Exchange フォームのインストール](#)」を参照してください。

p.20 の「[Exchange Server アーカイブ設定時の配備方法を変更するためのデスクトップポリシーの更新](#)」を参照してください。

Exchange Server アーカイブ設定時の組織フォームフォルダの作成

Exchange Server 2010 以降では、組織フォームライブラリとフォルダの作成方法が変更され、管理ツールは使えなくなりました。このセクションで説明する方法では、Microsoft Exchange Server MAPI エディタ MfcMapi.exe を使います。このエディタは、Microsoft 社の Web サイトの次のページから入手できます。

<http://go.microsoft.com/?linkid=5684182>

Exchange Server 2010 以降で組織フォームフォルダを作成するには

- 1 次の手順を実行して、新しい組織フォームフォルダを作成します。
 - Exchange 管理シェルの開きます。

- Exchange 管理シェルのプロンプトで、次のコマンドを実行します。
`New-PublicFolder -Path "¥NON_IPM_SUBTREE¥EFORMS REGISTRY" -Name "Enterprise Vault Forms (English)"`
 ここで指定されている名前は例です。公開する言語ごとに、このコマンドを繰り返してフォルダを作成します。
- 2 パブリックフォルダが Outlook に表示されていることを確認します。
 - Exchange Administrators グループに属しているアカウントを使って、Outlook がインストールされている Enterprise Vault サーバーにログオンします。
 - 新しいメールプロファイルを設定して Outlook を起動します。
 - パブリックフォルダストアが数秒以内に表示されない場合、Exchange Server が更新するまで待機する必要がある場合があります。代わりに、Exchange Server インフォメーションストアを再起動して、強制的に更新することもできます。
- 3 次の手順を実行して、PR_EFORMS_LOCALE_ID プロパティを追加して、フォームフォルダの言語を設定します:
 - Microsoft Exchange Server MAPI エディタ (MfcMapi.exe) を起動します。
 - [Session]メニューで、[Logon and Display Store Table]をクリックします。Exchange Administrators グループに属しているアカウントの Outlook プロファイルを使ってログオンします。
 - [MDB] メニューで、[Open Public Folder Store]をクリックしてから[OK]をクリックします。
 - [Public Root]、[NON_IPM_SUBTREE]、[EFORMS REGISTRY]の順に展開します。
 - ステップ 1 で作成したパブリックフォルダをクリックします。たとえば、"Enterprise Vault Forms (English)" をクリックします。
 - [Property pane]メニューで、[Modify Extra Properties]をクリックします。
 - [Add]、[Select Property Tag]の順にクリックします。
 - リスト内の[PR_EFORMS_LOCALE_ID]をクリックしてから、[OK]をクリックします。
 - [OK]を2回クリックします。新しい[PR_EFORMS_LOCALE_ID]プロパティの横に赤色のマークが表示されます。
 - [PR_EFORMS_LOCALE_ID]をダブルクリックします。
 - [Unsigned Decimal]ボックスに必要なロケール ID を入力し、[OK]をクリックします。
 たとえば、英語の場合は 1033、イタリア語の場合は 1040 を入力します。
 他のロケールについて、そのロケール ID を特定するには、次の Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

<http://msdn2.microsoft.com/library/aa579489.aspx>

- [PR_PUBLISH_IN_ADDRESS_BOOK]を選択して右クリックし、[Edit Property]を選択、[Boolean]を選択解除して、[OK]をクリックします。
- MAPI エディタを終了します。

Exchange Server アーカイブ設定時の Microsoft Exchange フォームのインストール

組織フォームライブラリ内のフォルダに対する所有者アクセス権限が設定されているメールボックスを使って、Microsoft Outlook のフォームをインストールできます。これは、Enterprise Vault キットから Microsoft Exchange フォームをインストールしたコンピュータ (通常は Enterprise Vault サーバー) で行います。

メモ: Enterprise Vault フォームをアップグレードまたは再インストールする場合は、既存のコピーに新しいフォームを上書きインストールするのではなく、必ず先に既存のコピーをアンインストールしてください。

Enterprise Vault Outlook アドインをインストールすると、新しいフォームにアクセスできるようになります。

フォームをインストールする方法

- 1 Outlook の[ツール]メニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [その他]タブの[拡張オプション]で、[ユーザー設定フォーム]をクリックし、次に[フォームの管理]をクリックします。
- 3 ダイアログボックスの右側にある[設定]をクリックします。
- 4 [フォームライブラリ]をクリックし、使用するフォームライブラリの名前を選択します。
[OK]をクリックします。
- 5 [インストール]をクリックします。
- 6 Enterprise Vault プログラムフォルダの Languages\Forms サブフォルダをクリックします。
- 7 インストールするフォームの言語に対応する言語フォルダを選択します。
- 8 ファイルの種類フィルタを[フォームメッセージ (*.fdm)]に変更します。
- 9 [EVPendingArchive.fdm]をダブルクリックしてプロパティを表示させ、このフォームが Enterprise Vault アーカイブ待ちアイテムフォームであることを確認します。
- 10 [OK]をクリックします。
- 11 次に対して、5、8、9、10 を繰り返します。

- EVPendingArchiveHTTP.fdm: Enterprise Vault アーカイブ待ちアイテム HTTP フォーム
- EVPendingDelete.fdm: Enterprise Vault 削除待ちアイテムフォーム
- EVPendingRestore.fdm: Enterprise Vault 復元待ちアイテムフォーム
- EVShortcut.fdm: Enterprise Vault アーカイブ済みアイテムフォーム

12 [Forms Manager]ダイアログボックスと、開いている他のダイアログボックスを閉じます。

Exchange Server アーカイブ設定時の配備方法を変更するためのデスクトップポリシーの更新

組織フォームライブラリを使ってフォームを配布する場合は、Enterprise Vault 管理コンソールで **Exchange** デスクトップポリシーを設定するときに、**Outlook** 詳細ポリシー設定の [ローカルにフォームを配備] の値をそのデフォルト値 [常に配備] から変更する必要があります。

p.40 の「[Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシーの\[詳細\]タブでの、Exchange フォームを配備するデフォルトの方法の変更](#)」を参照してください。

次に実行する処理

必要に応じて、Enterprise Vault 管理コンソールを使って、Exchange Server メールボックス、ジャーナル、パブリックフォルダのアーカイブを設定できます。

メールボックスからのアーカイブの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [Enterprise Vault](#) メールボックスアーカイブ設定前の注意事項
- [Exchange Server](#) メールボックスのアーカイブポリシーの定義
- [Exchange Server](#) アーカイブのデスクトップポリシーの定義
- [Exchange Server](#) アーカイブ対象の追加
- [Exchange](#) サーバーをアーカイブするための [Exchange](#) プロビジョニングタスクの追加
- [Exchange](#) メールボックスのアーカイブタスクの追加
- [Enterprise Vault](#) サイトのデフォルト設定のレビュー
- [Exchange Server](#) アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの使用
- [Exchange Server](#) アーカイブの自動メッセージの編集について
- [Exchange Server](#) アーカイブ設定時のタスク制御サービスとアーカイブタスクの起動
- メールボックスの [Exchange Server](#) アーカイブの有効化
- [Exchange Server](#) アーカイブサーバーへの [Outlook](#) アドインのインストール
- [PSTDisableGrow](#) の上書き
- [Exchange Server](#) メールボックスアーカイブのユーザーの作業

Enterprise Vault メールボックスアーカイブ設定前の注意事項

Enterprise Vault アーカイブのメールボックスを有効にする前に、少し時間をとって、次の必要条件を見直します。

- ボルトストアグループ、ボルトストア、パーティション
p.22 の「[Exchange Server メールボックスアーカイブでのボルトストアグループ、ボルトストア、パーティションの使用](#)」を参照してください。
- Exchange Server データベース可用性グループ。
p.22 の「[Exchange Server のデータベース可用性グループの使用](#)」を参照してください。

Exchange Server メールボックスアーカイブでのボルトストアグループ、ボルトストア、パーティションの使用

メールボックスのアーカイブを有効にするには、ボルトストアグループ、ボルトストア、ボルトストアのパーティションが存在する必要があります。アーカイブ対象のメールボックスを有効にすると、Enterprise Vault によって選択したボルトストアに各メールボックスのアーカイブが自動的に作成されます。

Enterprise Vault が新しいメールボックスアーカイブを作成する場所を制御するために、次のレベルでデフォルトのボルトストアを設定できます。

- Enterprise Vault サーバープロパティ
- Exchange Server プロパティ
- プロビジョニンググループプロパティ

プロビジョニンググループを作成すると、デフォルトのボルトストアが Exchange Server プロパティから継承されます。Exchange Server プロパティに優先ボルトストアが指定されていない場合、Enterprise Vault サーバープロパティに指定されているボルトストアが使われます。

詳しくは、『インストール/設定』ガイドのストレージの設定に関する章を参照してください。

Exchange Server のデータベース可用性グループの使用

最近の Exchange Server のバージョンは、メールボックスサーバーまたは個々のメールボックスデータベースのエラーからのデータベースレベルの自動回復を提供するためにデータベース可用性グループ (DAG) を使います。DAG の 1 つのデータベースでエラーが発生すると、Exchange は異なるメールボックスサーバーのデータベースの別のパッシブコピーをアクティブにします。

アーカイブを有効にするメールボックスを Enterprise Vault で常に利用可能にするには、すべての DAG メンバーのサーバーにアーカイブを設定する必要があります。また 1 つの Enterprise Vault サイト内のすべての DAG メンバーのサーバーを対象にしてください。

サーバーがアクティブな Exchange データベースをホストしている場合にのみ、そのサーバーに対して Exchange メールボックスアーカイブタスクを追加できます。ディザスタリカバリ (DR) サーバーとしてのみ動作し、通常はアクティブな DAG メンバーデータベースをホストしない Exchange サーバーが環境に含まれている場合があります。アクティブな DAG メンバーデータベースはこれらのサーバーにフェールオーバーできるため、これらのサーバーは Exchange サーバーアーカイブ用に設定する必要があります。ただし、これらのサーバーがアクティブなデータベースをホストしていない間は、これらを Exchange メールボックスアーカイブ用に設定することはできません。

DR 専用サーバーに対して Exchange メールボックスアーカイブを設定する方法

- 1 アクティブなデータベースを DR 専用サーバーにフェールオーバーします。このデータベースは、Enterprise Vault システムメールボックスを格納しているデータベースである必要があります。
- 2 DR 専用サーバーを Exchange メールボックスのアーカイブ対象として追加します。
- 3 DR 専用サーバーに対して Exchange メールボックスアーカイブタスクを追加します。
- 4 データベースを元のホストサーバーにフェールバックします。

すべての DAG メンバーのサーバーがアーカイブするように設定されているとき、データベースとサーバーのフェールオーバーはメールボックスのアーカイブを中断しません。

Exchange Server メールボックスアーカイブでの Exchange メールボックスのアーカイブとデータベースのフェールオーバー

Exchange メールボックスのアーカイブの間、メールボックスアーカイブタスクは各メールボックスサーバーに関連付けられます。メールボックスアーカイブタスクはメールボックスサーバーに存在するメールボックスデータベースのアクティブコピーのみを処理します。Enterprise Vault はデータベースのパッシブコピーからはアーカイブしません。

DAG の 1 つのデータベースでエラーが発生すると、Exchange はデータベースの別のパッシブコピーをアクティブにします。失敗したコピーを処理したメールボックスアーカイブタスクは Enterprise Vault のプロビジョニングタスクが実行されるまでデータベースの新しいアクティブコピーを処理し続けます。プロビジョニングタスクが実行されたら、新しいホストの Exchange Server に関連付けられているメールボックスアーカイブタスクによってデータベースの新しいアクティブコピーが処理されます。

実際には、プロビジョニングタスクが実行され、各メールボックスアーカイブタスクによって処理されるデータベースのリストを更新する前に、エラーが発生したデータベースが最初の Exchange ホストに復元されることがあります。

管理コンソールの[Exchange メールボックスアーカイブタスクプロパティ: 対象]タブを使って、メールボックスアーカイブタスクが現在処理しているデータベースを判断できません。

Exchange Server メールボックスのアーカイブポリシーの定義

Exchange メールボックスポリシーは Enterprise Vault で対象の Exchange Server メールボックスをアーカイブする方法を定義します。メールボックスのグループごとに異なるポリシーを作成できます。必要に応じて、プロビジョニンググループごとにカスタムメールボックスポリシーを作成できます。

デフォルトの Exchange メールボックスポリシーは、設定ウィザードによって管理コンソールで作成されます。

デフォルトの Exchange メールボックスポリシーのプロパティを表示、修正する方法

- 1 管理コンソールで、Enterprise Vault サイトを展開します。
- 2 [ポリシー]、[Exchange]、[メールボックス]の順に選択します。
- 3 右側のペインで[デフォルトの Exchange メールボックスポリシー]を右クリックして、[プロパティ]を選択します。必要に応じて、このポリシーのプロパティを変更したり、新しいポリシーを作成したりすることもできます。

新しい Exchange メールボックスポリシーを作成する方法

- 1 管理コンソールで、Enterprise Vault サイトを展開します。
- 2 [ポリシー]、[Exchange]、[メールボックス]の順に選択します。
- 3 [メールボックス]コンテナを右クリックし、[新規作成]、[ポリシー]の順に選択して、新しいポリシーウィザードを起動します。

新しいポリシーが右側のペインに表示されます。

- 4 ポリシーのプロパティを調整するには、ポリシーを右クリックし、[プロパティ]を選択します。

デフォルトの Exchange メールボックスポリシーとして異なるポリシーを設定する方法

- 1 管理コンソールで、Enterprise Vault サイトを展開します。
- 2 [ポリシー]、[Exchange]、[メールボックス]の順に選択します。
- 3 右側のペインで、デフォルトのポリシーとして設定するポリシーを右クリックして、[デフォルトとして設定]を選択します。

Exchange Server アーカイブ設定時のメールボックスポリシー設定

このセクションでは、Exchange メールボックスポリシーで利用可能なさまざまな設定の概要を説明します。各設定について詳しくは、メールボックスポリシーのプロパティのヘルプを参照してください。

[全般]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

表 3-1 に、[全般]タブの設定の一覧を示します。これらの設定で、ポリシーの名前と説明を入力します。

表 3-1 Exchange メールボックスポリシーの[全般]タブ設定

設定	説明	デフォルト値
名前	ポリシーの名前。	なし。
説明	必要に応じて何回でも変更できる、ポリシーの任意の説明。	なし。

[アーカイブルール]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

表 3-2 に、[アーカイブルール]タブの設定の一覧を示します。これらの設定によって、経過日数ベースのアーカイブおよびメールボックス空き容量のクォータベースのアーカイブの使用と、その他のアーカイブオプションを制御します。

表 3-2 Exchange メールボックスポリシーの[アーカイブルール]タブ設定

設定	説明	デフォルト値
アーカイブ戦略	<p>次のいずれに基づいてアーカイブするかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 経過日数: アイテムの経過日数 クォータ: メールボックスの空き容量の限度のうち、解放されている割合 経過日数とクォータ: 経過日数オプションとクォータオプションの組み合わせ <p>クォータまたは経過日数とクォータに基づくアーカイブの設定について詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。</p>	<p>アイテムが修正されてから経過した期間に基づいてアーカイブします。期間は 6 カ月です。</p> <p>設定はロックされます。</p>

設定	説明	デフォルト値
経過日数ベース	経過日数ベースのアーカイブおよび経過日数とクォータベースのアーカイブの使用期間。	6 カ月。
クォータベース	クォータベースのアーカイブおよび経過日数とクォータベースのアーカイブの使用割合。	10%
次より新しいアイテムはアーカイブしない	アーカイブされたアイテムの経過日数の絶対限度。	2 週間。
次より大きいアイテムから開始	Exchange メールボックスタスクでアイテムを優先する際に基準となるサイズ。このサイズよりも大きいアイテムが最初にアーカイブされます。	未設定。
添付ファイル付きのメッセージのみをアーカイブ	他のすべてのアーカイブ基準が満たされているとして、添付ファイルがある場合にのみ、アイテムをアーカイブします。 これは、添付ファイルのみをアーカイブするのとは異なります。 詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。	未設定。

[アーカイブ処理]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

表 3-3 で、[アーカイブ処理]タブの設定について説明します。これらの設定で、アイテムをアーカイブするときの Enterprise Vault の動作を制御します。

表 3-3 Exchange メールボックスポリシーの[アーカイブ処理]タブ設定

設定	デフォルト値
アーカイブ後、元のアイテムを削除する	アーカイブした後に元のアイテムはメールボックスから削除されます。 設定はロックされます。 このオプションは、[アーカイブルール]タブでアーカイブ戦略として[経過日数に基づく]を選択した場合にのみ利用できます。
アーカイブ後、アーカイブ済みアイテムのショートカットを作成する	アーカイブした後にメールボックス内のアイテムはショートカットに置き換えられます。 設定はロックされます。

設定	デフォルト値
未読アイテムをアーカイブする	メールボックス内の未読アイテムはアーカイブされません。 設定はロックされます。
全体ロック	ユーザーがメールボックスアーカイブのポリシー設定を使うように強制します。これにより、[アーカイブ処理]セクションの設定と、[アーカイブルール]タブの[アーカイブ戦略]の設定がロックされます。

[ショートカットの内容]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

表 3-4 で、[ショートカットの内容]タブの設定について説明します。これらの設定は Enterprise Vault のショートカットのサイズと動作を制御します。

表 3-4 Exchange メールボックスポリシーの[ショートカットの内容]タブの設定

設定	説明	デフォルト値
受信者情報を含める	ショートカットに受信者情報 (宛先と CC の詳細) を保存するかどうかを設定します。 通常、ショートカットには差出人と件名の情報が含まれます。	ショートカットに受信者情報を含めます。
ショートカット本文	ショートカットに保存するメッセージ本文の量。設定値に関係なく、メッセージ全体 (添付ファイルを含む) をアーカイブに保存します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ なし。メッセージテキストはショートカットに保存されません。 ■ メッセージ本文を使用。ショートカットにメッセージ本文のすべてのテキストを含めますが、添付ファイルは含めません。 ■ カスタマイズ。ショートカットに含めるテキストとリンクの量を選択します。 <p>p.47 の「Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの使用」を参照してください。</p>	メッセージ本文の最初の 1000 文字をショートカットに保存します。

カスタマイズしたショートカットを設定する場合は `ShortcutText.txt` ファイルが必要です。このファイルは、無題の添付ファイルの標準ショートカットを処理する場合にも使うことができます。

p.47 の「[Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの使用](#)」を参照してください。

[メッセージクラス]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

[メッセージクラス]タブの一覧には、ポリシーが適用されるときにアーカイブされるアイテムのクラスが表示されます。

必要に応じて、メッセージクラスチェックボックスにチェックマークを付けたり、はずしたりします。

利用可能なメッセージクラスの一覧を編集する必要がある場合は、[ディレクトリプロパティ]の[Exchange メッセージクラス]タブに移動します。

[ショートカットの削除]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

[ショートカットの削除]では次の操作が行われます。

- このタブで指定した日数を経過したショートカットを削除します。Enterprise Vault はショートカットの経過時間を判断するために更新日かアーカイブされた日付を使います。[サイトプロパティ]の[ストレージの有効期限]タブでどの日付を使うかを指定できます。
- 孤立したショートカットを削除します。これらは、通常はユーザーによって、アーカイブから削除されたアイテムへのショートカットです。

ショートカットの削除は、Exchange メールボックスアーカイブタスクによって実行されます。[今すぐ実行]を使ってタスクを実行する場合、ショートカット処理を含む[実行モード]を選択できます。

[表 3-5](#) に、利用可能な設定を示します。

表 3-5 Exchange メールボックスポリシーの[ショートカットの削除]タブ設定

設定	説明	デフォルト値
フォルダ内のショートカットを削除	<p>このオプションを設定すると、Enterprise Vault は、指定した日数を経過したショートカットを削除します。対応するアーカイブ済みアイテムには影響しません。ユーザーは引き続きアーカイブ済みアイテムを検索できます。</p> <p>たとえば、12 カ月より古いすべてのショートカットを削除するように選択した場合でも、アーカイブ済みアイテムは数年間保持できます。</p>	選択されていません
孤立したショートカットを削除	<p>このオプションを設定すると、対応するアーカイブ済みアイテムが削除された場合に、Enterprise Vault はメールボックスのショートカットを削除します。</p> <p>元のメッセージからのテキストを含むショートカットを使っている場合、アーカイブ済みアイテムが削除されてもこれらのショートカットが役立つ場合があります。ただし、大量のショートカットを削除すると、Exchange Server の記憶容量を回復できます。</p>	チェックマークが付けられていない

カレンダーアイテム、タスクアイテム、ミーティングアイテムなどの特定のアイテムがアーカイブされた場合、元のアイテムはショートカットに置き換えられません。デフォルトでは、アーカイブタスクはショートカットの削除を実行するときに、元のアイテムを削除しません。このようなアイテムをショートカットの削除に含めるには、**DeleteNonShortcutItems** レジストリを設定します。この設定について詳しくは、『レジストリ値』ガイドを参照してください。

[インデックス]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

表 3-6 に、[インデックス]タブの設定の一覧を示します。これらの設定は、ユーザーが利用可能なインデックスの詳細情報の量を制御します。この設定は、ポリシーが割り当てられたメールボックスのグループに適用されます。

表 3-6 Exchange メールボックスポリシーの[インデックス]タブ設定

設定	説明	デフォルト値
インデックスレベル	<p>ポリシーを割り当てるメールボックスのグループに必要なインデックスレベル。</p> <p>インデックスレベルは、アーカイブ済みアイテムの検索時にユーザーがフィルタ処理できる内容を定義します。簡略インデックスでは、アイテムの件名と作成者などの情報のみを検索できます。完全インデックスでは、各アイテムの内容も検索できます。</p> <p>簡略インデックスは、元のデータに必要な空き容量のおよそ 4% を占めます。プレビューの長さが 128 文字の完全インデックスは、元のデータに必要な空き容量のおよそ 12% を占めます。</p> <p>サイトのプロパティで、サイト全体のデフォルトインデックスレベルを設定できます。メールボックスポリシーで特定のメールボックスのグループについて、またアーカイブのプロパティで特定のユーザーについて、サイトの設定を上書きすることができます。</p>	完全
プレビューの長さ	この設定で Enterprise Vault が検索結果の一覧に示すテキストの量を制御できるようにします。プレビューの長さを増やすとインデックスのサイズが増加します。	128 文字
添付ファイルのプレビューの作成	この設定によって Enterprise Vault で添付ファイルの内容のプレビューを作成できます。これらのプレビューは Enterprise Vault のこのリリースでは表示できません。このオプションを有効にするとインデックスのサイズは増加します。	プレビューの作成をしない

[詳細]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

[詳細]タブには、詳細なアーカイブの動作を制御するさまざまな設定が含まれています。他のタブでの設定と同じように、これらの設定のバージョンが複数必要な場合は、別のポリシーを作成できます。

表 3-7 で、利用可能な設定について簡単に説明します。各詳細設定について詳しくは『管理者ガイド』に説明されています。

表 3-7 Exchange メールボックスポリシーの[詳細]タブ設定

設定	説明
一覧表示する設定の種類	一覧に表示される設定のカテゴリを制御します。次の 1 つのカテゴリのみが存在します。 <ul style="list-style-type: none">■ [アーカイブ全般]。アーカイブ動作を制御する設定。 各詳細設定について詳しくは『管理者ガイド』に説明されています。
すべてをリセット	このオプションを選択すると、一覧内のすべての設定がデフォルト値に戻ります。すべての値をリセットするかどうかを尋ねる確認メッセージが表示されます。
修正	このオプションを使うと、選択した設定の値を修正できます。また、設定をダブルクリックして修正することもできます。
説明	各設定が制御する内容についての簡潔な説明。

[対象]タブ (Exchange Server アーカイブのメールボックスポリシー設定)

後で、プロビジョニンググループを作成してアーカイブ対象としてメールボックスを追加する場合、必要な Exchange メールボックスポリシーを各プロビジョニンググループに割り当てます。これにより、関連付けされたプロビジョニンググループがメールボックスポリシーの[対象]タブに表示されます。

Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシーの定義

Exchange デスクトップポリシーは、エンドユーザーが体験する Enterprise Vault Outlook アドイン、OWA クライアント、Office Mail App、Client for Mac OS X の動作を定義します。これには、ユーザーのデスクトップコンピュータで使用できる Enterprise Vault の機能を制御する設定が含まれます。異なるプロビジョニンググループで異なるポリシー設定

を使用する場合は、複数のポリシーを作成できます。必要に応じて、プロビジョニンググループごとにカスタムデスクトップポリシーを作成できます。

デフォルトの **Exchange** デスクトップポリシーは、設定ウィザードによって管理コンソールで作成されます。

Exchange メールボックスアーカイブの設定後にデスクトップポリシーを修正する場合は、完了後、**Exchange** メールボックスアーカイブタスクのプロパティの[同期]タブにあるボタンを使ってメールボックスを同期します。

デフォルトの **Exchange** デスクトップポリシーのプロパティを表示、修正する方法

- 1 管理コンソールで、**Enterprise Vault** サイトを展開します。
- 2 [ポリシー]、[Exchange]、[デスクトップ]の順に選択します。
- 3 右側のペインで[デフォルトの **Exchange** デスクトップポリシー]を右クリックして、[プロパティ]を選択します。必要に応じて、このポリシーのプロパティを変更したり、新しいポリシーを作成したりすることもできます。

新しい **Exchange** デスクトップポリシーを作成する方法

- 1 管理コンソールで、**Enterprise Vault** サイトを展開します。
- 2 [ポリシー]、[Exchange]、[デスクトップ]の順に選択します。
- 3 [デスクトップ]コンテナを右クリックし、[新規作成]、[ポリシー]の順に選択して、新しいポリシーウィザードを起動します。

新しいポリシーが右側のペインに表示されます。

- 4 ポリシーのプロパティを調整するには、ポリシーを右クリックし、[プロパティ]を選択します。

デフォルトの **Exchange** デスクトップポリシーとして異なるポリシーを設定する方法

- 1 管理コンソールで、**Enterprise Vault** サイトを展開します。
- 2 [ポリシー]、[Exchange]、[デスクトップ]の順に選択します。
- 3 右側のペインで、デフォルトのポリシーとして設定するポリシーを右クリックして、[デフォルトとして設定]を選択します。

Exchange サーバーアーカイブのデスクトップポリシー設定

このセクションでは、**Exchange** デスクトップポリシーで利用可能なさまざまな設定の概要を説明します。各設定について詳しくは、デスクトップポリシーのプロパティのヘルプを参照してください。

[全般]タブ (Exchange Server アーカイブデスクトップポリシー設定)

表 3-8 に、[全般]タブの設定の一覧を示します。これらの設定で、ポリシーの名前と説明を入力します。

表 3-8 Exchange デスクトップポリシーの[全般]タブ設定

設定	説明	デフォルト値
名前	ポリシーの名前。	なし。
説明	必要に応じて何回でも変更できる、ポリシーの任意の説明。	なし。

[オプション]タブ (Exchange Server アーカイブデスクトップポリシー設定)

[機能]の設定では Enterprise Vault の機能や Exchange サーバーのアーカイブに対応した Enterprise Vault クライアントのツールバーボタンを制御できます。

[Outlook の動作]設定では、Outlook と OWA の削除オプションでショートカットのみを削除するか、ショートカットとアーカイブ済みアイテムを削除するか、ユーザーが選択するかを制御します。

Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシーの[オプション]タブでの[機能]の設定

これらの設定では Exchange アーカイブの Enterprise Vault クライアントで使用可能なオプションとツールバーボタンを制御します。

[有効化]チェックボックスによって、機能をオプションとして、場合によってはボタンで表示するかどうかを制御します。

[ツールバー上]チェックボックスは、[有効化]チェックボックスにチェックマークを付けると利用可能になります。

次の点に注意してください。

- Outlook クライアントでは、[有効化]チェックボックスにのみチェックマークを付けると、メニューオプションが[Enterprise Vault]タブの[その他の処理]メニューに表示されます。[有効化]チェックボックスと[ツールバー上]チェックボックスの両方にチェックマークを付けると、メニューオプションは[その他の処理]メニューに表示されません。その代わりに、ボタンは[Enterprise Vault]タブに、または有効期限レポートの場合には、Enterprise Vault Backstage ビューに直接表示されます。
- Mac OS X のメニューオプションはメニューバーの[Veritas Enterprise Vault クライアント]メニューで提供されます。

- OWA 2010 クライアントのメニューオプションは OWA プレミアムクライアントのアイテムを右クリックすると表示されるショートカットメニューで提供されます。ナビゲーションウィンドウのボタンを使用すると、[ボルトの検索]などの機能にアクセスできます。
- OWA 2013 以降では、Office Mail App に Enterprise Vault 機能が備わっています。Office Mail App について詳しくは、『Exchange Server アーカイブの設定』を参照してください。

表 3-9 に[機能]の設定の一覧を示します。各設定の効果は、使用中の Enterprise Vault クライアントに応じて異なります。これらの設定について詳しくは、管理コンソールの Exchange デスクトップポリシーに関するヘルプを参照してください。[オプション]タブ

表 3-9 Exchange デスクトップポリシーの[オプション]タブでの[機能]の設定

設定	制御対象のユーザー操作
ボルトに格納	手動アーカイブの実行。
ボルトから復元	ショートカットによる、ボルトからのアイテムの復元。
ボルトの検索	アーカイブの検索。
ボルトから削除	アーカイブ済みアイテムとその対応するショートカットの削除。
キャンセル	保留中のアーカイブ、復元または削除操作の取り消し。
有効期限レポート(Outlook のみ)	Outlook からの有効期限レポートの実行。
ヘルプ	Enterprise Vault ヘルプへのアクセス。

[キャンセル操作]設定は、Mac OS X 用の Enterprise Vault クライアントで実行するアーカイブ処理では現在サポートされていません。

Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシー用[オプション]タブでの [Outlook の動作] の設定

[オプション]タブの[Outlook の動作]の設定は、通常の[削除]オプションがショートカットおよびアーカイブ済みアイテムへ与える影響を制御します。

- Enterprise Vault Outlook アドインをインストールしている Outlook (すべてのバージョン)
- OWA 2010

(設定は、Mac OS X 用の Enterprise Vault クライアントや Office Mail App が有効になっている Exchange Server 2013 以降の OWA クライアントには影響しません。)

表 3-10は[Outlook の動作]の設定を示しています。

表 3-10 Exchange デスクトップポリシーの[オプション]タブでの[Outlook の動作]の設定

設定	説明	デフォルト値
ショートカットの削除	<p>ユーザーが Outlook や OWA の標準の削除オプションの 1 つを使用してショートカットを削除した場合 (ショートカットを選択して Delete キーを押すなど) の動作を制御します。</p> <p>サイトの設定の[ユーザーはアーカイブからアイテムを削除できる]が選択されていない場合、この設定は無視され、ショートカットのみが削除されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ [ショートカットのみ]。ショートカットは削除されます。ユーザーが Shift キーを押したまま削除操作をすると、ショートカットは[削除済みアイテム]に入れられずに削除されます。■ [両方を削除]。ショートカットとアーカイブ 済みアイテムの両方が削除されることがユーザーに通知されます。ユーザーが操作の続行を選択すると、ショートカットと対応するアーカイブ 済みアイテムの両方が削除されます。■ [ユーザーに確認]。ショートカットと元のアイテムを削除するか、ショートカットのみを削除するかについてユーザーに確認します。	ショートカットのみ

[Web アプリケーション]タブ (Exchange Server アーカイブデスクトップポリシー設定)

表 3-11 で、[Web アプリケーション]タブの設定について説明します。これらの設定によって、エンドユーザーの Web ベース検索の定義を制御します。

表 3-11 Exchange デスクトップポリシーの[Web アプリケーション]タブ設定

設定	説明	デフォルト値
イントラネットゾーンにすべての Enterprise Vault サーバーを追加	<p>ユーザーのブラウザのローカルイントラネットゾーンにすべての Enterprise Vault サーバーを追加する場合は、この設定を選択します。この設定では、ユーザーは、アーカイブを検索するときやアーカイブ済みアイテムを復元するときに、ログオン情報の入力を求めるメッセージが表示されなくなります。</p> <p>この設定の選択を解除すると、既存の Enterprise Vault サーバーはローカルイントラネットゾーンに残ります。この設定の選択を解除した後は、新しいサーバーは追加されません。</p> <p>この設定を上書きするには、Exchange デスクトップポリシーの[詳細]タブの Outlook 設定の[イントラネットゾーンにサーバーを追加]そして[イントラネットゾーンからサーバーを削除]の設定を使います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ローカルプロキシサーバーをバイパス]。ユーザーのローカルプロキシサーバーをバイパスするには、この設定を選択します。 この設定では、次のようになります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ローカルエリアネットワーク (LAN) の設定で [ローカルアドレスにはプロキシサーバーを使用しない]が選択される ■ プロキシ設定で Enterprise Vault サーバーが例外リストに追加される <p>この設定の選択を解除すると、[ローカルアドレスにはプロキシサーバーを使用しない]の選択が解除されます。既存の Enterprise Vault サーバーは[例外]リストに残ります。</p>	<p>選択されています。</p> <p>(以前のバージョンの Enterprise Vault からアップグレードした場合は、選択されていません。)</p>

ユーザーが所属する組織内の **Windows** コンピュータに **USGCB (United States Government Configuration Baseline)** グループポリシーオブジェクト (GPO) を適用している場合は、[イントラネットゾーンにすべての **Enterprise Vault** サーバーを追加]設定は使えません。これらの状況でユーザーに対してブラウザを設定する方法については『**Veritas Enterprise Vault インストール/設定**』で、「**USGCB 準拠コンピュータへの Enterprise Vault サーバーの詳細の公開**」に関するセクションを参照してください。

[ボルトキャッシュ]タブ(Exchange Server アーカイブデスクトップポリシー設定)

表 3-12 で、[ボルトキャッシュ]タブの設定について説明します。これらの設定によって、ボルトキャッシュの可用性、最大サイズ、利用可能な機能が制御されます。これらの設定には、ユーザーが仮想ボルトを利用できるようにするオプションも含まれています。

メモ: このリリースでは、ボルトキャッシュ機能を Mac OS X ユーザー用の Enterprise Vault クライアントで使うことはできません。

表 3-12 Exchange デスクトップポリシーの[ボルトキャッシュ]タブ設定

設定	説明	デフォルト値
ボルトキャッシュをユーザーに対して利用可能にする	<p>この Enterprise Vault サイトでボルトキャッシュ機能を利用可能にするには、この設定を選択します。この設定をクリアすると、新しいボルトキャッシュは作成されません。ユーザーは既存のボルトキャッシュにアクセスできますが、新しいアイテムは追加されません。</p> <p>ボルトキャッシュを利用可能にした場合は、追加設定によって次のいずれかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none">ローカルのボルトキャッシュをユーザー用に自動的に設定する方法。Outlook の[ボルトキャッシュを有効化]オプションを使って、ローカルのボルトキャッシュをいつ設定するかをユーザーが決定できるようにする方法。	<p>ボルトキャッシュは使用できません。新しいボルトキャッシュは作成されません。ユーザーは既存のボルトキャッシュにアクセスできますが、新しいアイテムは追加されません。</p> <p>ボルトキャッシュを利用可能にした場合、デフォルトでボルトキャッシュがユーザーのコンピュータ上で自動的に有効化されるようになります。</p>

設定	説明	デフォルト値
ボルトキャッシュの限度サイズ	<p>この設定を使って、ボルトキャッシュのサイズを制限します。</p> <p>[初期空き容量の使用上限]では、未使用のディスク領域の割合を指定します。この割合は、ボルトキャッシュが作成される時点で計算されます。</p> <p>[最大サイズ]では GB 単位でサイズを指定します。</p> <p>ボルトキャッシュが指定されたサイズに達すると、最も古いアイテムが自動的に削除され、新しいアイテムが入る余地を確保します。</p> <p>[内容の扱い方]では、アーカイブ済みアイテムの内容のボルトキャッシュでのストレージの扱い方を指定します。オプションは次のとおりです：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [キャッシュにアイテムを格納しない]。アイテムのヘッダーはボルトキャッシュと同期されますが、アーカイブ済みアイテムの内容はボルトキャッシュに格納されません。 ■ [すべてのアイテムを格納する]。アイテムのヘッダーはボルトキャッシュと同期され、アーカイブ済みアイテムの内容はボルトキャッシュに格納されます。 ■ [ユーザーが開くアイテムのみを格納]。アイテムのヘッダーはボルトキャッシュと同期されますが、アーカイブされたアイテムの内容はボルトキャッシュに自動的に格納されません。このオプションでは、ユーザーが仮想ボルトで開く各アイテムの内容がボルトキャッシュに格納されます。 	<p>デフォルトのサイズの上限は、ボルトキャッシュが作成されたときの未使用ディスク領域の 10% です。</p> <p>デフォルトの内容の扱い方は[すべてのアイテムを格納する]です。</p>

設定	説明	デフォルト値
機能	<ul style="list-style-type: none"> ■ [ボルトキャッシュを同期]オプションで、ユーザーがボルトキャッシュを手動で更新できるかどうかを制御します。 Outlook 2010 以降の場合： <ul style="list-style-type: none"> ■ その他の処理メニューの[ボルトキャッシュを同期]オプションを表示するには、[有効化]を選択します。 ■ [Enterprise Vault]タブのボルトキャッシュグループの[同期]ボタンを表示するには、[ツールバー上]を選択します。[ツールバー上]を選択すると、[ボルトキャッシュを同期]オプションはその他の処理メニューに表示されません。 ■ [ボルトキャッシュのプロパティ]により、ユーザーが Outlook の[ボルトキャッシュのプロパティ]ダイアログボックスにアクセスできるかどうかを制御します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [ボルトキャッシュオプション]では、ユーザーはローカルのボルトキャッシュのサイズと Outlook が起動してからボルトキャッシュで同期する必要があるファイルを確認するまでの猶予期間を設定できます。[ボルトキャッシュのプロパティ]ダイアログボックスの[オプション]タブを表示するには、[有効化]を選択します。 ■ [ボルトキャッシュの詳細]を使って、ユーザーはボルトキャッシュに関する詳細情報を表示できます。[ボルトキャッシュのプロパティ]ダイアログボックスの[詳細]タブを表示するには、[有効化]を選択します。 ■ [仮想ボルトを利用可能にする]。Outlook ユーザーが仮想ボルトを利用できるようにするには、[有効化]を選択します。 	ボルトキャッシュを利用可能にした場合は、これらの機能がすべて有効になります。

p.78 の「[ボルトキャッシュの詳細設定](#)」を参照してください。

p.84 の「[仮想ボルトの詳細設定](#)」を参照してください。

[ボルトキャッシュ]タブ (Exchange Server アーカイブデスクトップポリシー設定)

[詳細]タブでは、Enterprise Vault Office Mail App、Outlook、OWA、ボルトキャッシュ、仮想ボルトのさまざまな詳細設定を行うことができます。

表 3-13 で、利用可能な設定について簡単に説明します。ポリシーでの他の設定と同じように、これらの設定のバージョンが複数必要な場合は、別のポリシーを作成できます。

表 3-13 Exchange デスクトップポリシーの[詳細]タブ設定

設定	説明
一覧表示する設定の種類	一覧に表示される設定の種類を制御します。次のカテゴリから選択します。 <ul style="list-style-type: none">■ Office Mail App■ Outlook■ OWA の 2013 年以前のバージョン■ [ボルトキャッシュ]■ 仮想ボルト 『管理者ガイド』は各詳細設定について説明しています。
すべてをリセット	一覧内のすべての設定がデフォルト値に戻ります。すべての値をリセットするかどうかを尋ねる確認メッセージが表示されます。
修正	このオプションを使うと、選択した設定の値を修正できます。また、設定をダブルクリックして修正することもできます。
説明	各設定が制御する内容について簡潔な説明を表示します。

Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシーの[詳細]タブでの、Exchange フォームを配備するデフォルトの方法の変更

Outlook カテゴリでの詳細設定の 1 つに、[ローカルにフォームを配備]があります。この設定のデフォルト値は[常に配備]です。このデフォルト値により Enterprise Vault フォームがユーザーの個人用フォームライブラリに自動的に配備されます。この方法を使用しない場合は、この設定の値を変更する必要があります。

[ローカルにフォームを配備]設定に指定できる値は次のとおりです。

- [配備しない]: フォームをローカルに配備しません。
- [組織フォームがない場合]: 利用可能な組織フォームライブラリがない場合にのみフォームを配備します。
- [常に配備]: 常にフォームをローカルに配備します。これはデフォルト値です。
- [削除]: ユーザーの個人用フォームライブラリから Enterprise Vault フォームを常に削除します。

p.16 の「[Exchange Server アーカイブ設定時の Microsoft Exchange フォーム配布について](#)」を参照してください。

[対象]タブ (Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシー設定)

後で、プロビジョニンググループを作成してアーカイブ対象としてメールボックスを追加する場合、必要な Exchange デスクトップポリシーを各プロビジョニンググループに割り当

てます。これにより、関連付けされたプロビジョニンググループがデスクトップポリシーの [対象] ページに表示されます。

Exchange Server アーカイブ対象の追加

管理コンソールで、ドメイン (Exchange 組織) とアーカイブする Exchange Server を追加する必要があります。

メモ: Exchange 環境でデータベース可用性グループ (DAG) を使う場合は、DAG のすべてのメンバーにアーカイブを設定してください。

p.22 の「[Exchange Server のデータベース可用性グループの使用](#)」を参照してください。

アーカイブ用の Exchange Server ドメインの追加

アーカイブする Exchange Server を追加する前に、Exchange Server が存在するドメインを追加する必要があります。

ドメインを追加する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインで、[対象]が表示されるまで Enterprise Vault サイトの階層を展開します。
- 2 [対象]を展開します。
- 3 [Exchange] を右クリックし、[新規作成]、[ドメイン]の順にクリックします。
[新規ドメイン]ウィザードが起動します。
- 4 [新規ドメイン]ウィザードは新しいドメインを作成するために必要な情報を要求します。次の情報を指定する必要があります。
 - アーカイブする Exchange Server を含むドメインの名前。
 - Enterprise Vault はドメインのグローバルカタログサーバーを自動検出します。ただし、必要な場合は、特定のグローバルカタログサーバーを指定できます。
 - Enterprise Vault は Exchange 2013 Server のための接続ポイントを自動検出します。ただし、必要な場合は、特定のプロキシサーバーおよび証明書のプリンシパルを指定できます。

アーカイブ用の Exchange Server の追加

これで、該当するドメインに対象の Exchange Server を追加できます。

Exchange Server を追加する方法

- 1 管理コンソールの左ペインの[対象]を展開します。
- 2 Exchange Server を含むドメインを展開します。
- 3 [Exchange Server]を右クリックし、ショートカットメニューを[新規作成]、[Exchange Server]の順にクリックします。

新規 Exchange Server ウィザードが起動します。

- 4 ウィザードの手順に従って Exchange Server を追加します。

次の情報が必要です。

- Exchange Server の名前
- 必要に応じて、ウィザードで作成したユーザーメールボックス、ジャーナルメールボックス、パブリックフォルダのアーカイブタスク。Exchange メールボックスタスクを作成する場合は、ドメインの Exchange プロビジョニングタスクも必要です。これが存在しない場合、Exchange メールボックスタスクのチェックボックスにチェックマークを付けると、ドメインの Exchange プロビジョニングタスクが自動的に作成されます。
- タスクを作成する Enterprise Vault サーバーの名前 (ローカルコンピュータでない場合)。
- Exchange Server に接続するために使うシステムメールボックスの名前。
- 必要に応じて、この Exchange Server のメールボックスのアーカイブを作成するときに Enterprise Vault が使うデフォルトの優先ボルトストア。

Exchange Server のボルトストアが明示的に設定されていない場合、Enterprise Vault サーバープロパティからデフォルトのボルトストア設定が継承されます。

Exchange Server アーカイブのプロビジョニンググループの追加

プロビジョニンググループを使うと、Exchange メールボックスポリシー、Exchange デスクトップポリシー、PST 移行ポリシーを各ユーザーまたは Exchange Server ユーザーのグループに適用できます。

ユーザーのグループごとに異なるポリシーを割り当てる場合、Exchange Server 組織全体で構成される 1 つのプロビジョニンググループ、または複数のプロビジョニンググループを設定できます。

次のいずれかを使って、プロビジョニンググループに関連付けされたメールボックスを選択できます。

- Windows グループ
- Windows ユーザー
- 配布グループ (Active Directory で「グループの種類」の「配布」のもの)

- 組織単位
- LDAP クエリー
- Exchange Server 組織全体

メモ: メールボックスのアーカイブを有効にするには、そのメールボックスがプロビジョニンググループに含まれている必要があります。

Exchange プロビジョニングタスクではプロビジョニンググループを処理し、メールボックスを有効にします。

プロビジョニンググループを追加する方法

- 1 管理コンソールの左ペインの[対象]を展開します。
- 2 **Exchange Server** を含むドメインを展開します。
- 3 [プロビジョニンググループ]を右クリックし、ショートカットメニューで[新規作成]、[プロビジョニンググループ]の順にクリックします。

新規プロビジョニンググループウィザードが起動します。

- 4 ウィザードの手順に従ってプロビジョニンググループを追加します。

次の情報が必要です。

- プロビジョニンググループの名前。
- プロビジョニンググループに含まれるメールボックス。Windows グループまたはユーザー、配布グループ、組織単位、LDAP クエリー、Exchange 組織全体のいずれかを使ってメールボックスを選択できます。
- 適用する Exchange デスクトップポリシー、メールボックスポリシー、PST 移行ポリシー。
- メールボックスからアーカイブする場合に適用するデフォルトの保持カテゴリと保持計画。必要に応じて、ウィザードを使って新しい保持カテゴリや保持計画を作成できます。

保持計画を適用するには、**Exchange** プロビジョニングタスクを実行し、**Exchange** メールボックスアーカイブタスクのプロパティの[同期]ページにあるボタンを使ってメールボックスを同期する必要もあります。

- 必要に応じて、このプロビジョニンググループのメールボックスのアーカイブを作成するときに **Enterprise Vault** が使うデフォルトの優先ボルトストア。プロビジョニンググループ内のメールボックスのアーカイブが自動的に有効にされている場合、その後プロビジョニンググループに追加されるメールボックスには、このボルトストアが使われます。

プロビジョニンググループのボルトストアが明示的に設定されていない場合、**Exchange Server** プロパティからデフォルトのボルトストア設定が継承されます。

Exchange Server プロパティにボルトストアが指定されていない場合、Enterprise Vault サーバープロパティの設定が使われます。

- Enterprise Vault で新しいメールボックスのアーカイブを自動的に有効にするかどうか。

新しいメールボックスとは、Enterprise Vault で新しいメールボックスです。

Enterprise Vault を初めて使うときに、すべてのメールボックスが新しいメールボックスになります。自動有効化を設定すると、Exchange メールボックスタスクが次に実行されるときは、既存のすべてのメールボックスが有効になっています。その後作成されるすべてのメールボックスも有効になり、関連付けされたアーカイブが自動的に作成されます。

メールボックスの無効化ウィザードを使って、各メールボックスを明示的に無効にできます。これにより、そのメールボックスは自動的に有効にならず、ユーザーがメールボックスの有効化を選択するまで、メールボックスはアーカイブされません。

- 自動有効化が選択されている場合、初期のアーカイブを中断するかどうか。つまり、ユーザーが有効にするまで、メールボックスのアーカイブは開始されません。これにより、ユーザーは必要に応じて、アーカイブを開始する前に、アーカイブのデフォルトを変更できます。

Exchange Server アーカイブのプロビジョニンググループの順序

複数のプロビジョニンググループを作成する場合、それらが一覧表示される順序が重要です。グループは一覧の上から下の順に処理されます。複数のプロビジョニンググループに表示されるメールボックスでは、そのメールボックスが表示されている先頭のグループの設定が使われます。

最も限定的なグループを一覧の一番上にして、最も限定されないグループを一覧の一番下にします。

プロビジョニンググループを並べ替える方法

- 1 管理コンソールツリーで、[プロビジョニンググループ] コンテナを右クリックし、[プロパティ] を選択します。
- 2 [上に移動] と [下に移動] を使ってグループを再調整します。

Exchange サーバーをアーカイブするための Exchange プロビジョニングタスクの追加

各 Exchange サーバードメインに Exchange プロビジョニングタスクが必要です。このタスクは、作成したプロビジョニンググループのメールボックスを有効にします。

このセクションで説明するように **Exchange** プロビジョニングタスクを手動で追加すること
も、**Exchange** メールボックスアーカイブタスクを初めて追加するときに **Enterprise Vault**
で自動的にこのタスクを追加することもできます。

ボルトサービスアカウントで **Exchange** プロビジョニングタスクを実行することを推奨しま
す。異なるアカウントを使う場合は、メッセージ管理者ロールにアカウントを追加する必要
があります。

Exchange プロビジョニングタスクを手動で追加するには

- 1 管理コンソールの左側のペインの **Enterprise Vault** サイト階層を展開し、[**Enterprise Vault サーバー**] コンテナを表示します。
- 2 [**Enterprise Vault サーバー**] を展開します。
- 3 プロビジョニングタスクを作成するコンピュータの名前を展開します。
- 4 [タスク] を右クリックし、ショートカットメニューで[新規作成]、[**Exchange** プロビジョ
ニングタスク] の順にクリックします。

新規タスクウィザードが起動します。

- 5 ウィザードに従って操作します。次の情報が必要です。
 - **Exchange** プロビジョニングタスクの名前
 - 処理する **Exchange** サーバードメインの名前
- 6 タスクのプロパティ設定を見直すには、右側のペインでタスクをダブルクリックします。
タスクのスケジュール、必要なレポートレベル、レポートモードでタスクを実行するか
どうかなどのプロパティを修正できます。

新しいメールボックスを追加するときは常に、メールボックスを有効にする前に
Exchange プロビジョニングタスクで処理する必要があります。

Exchange メールボックスのアーカイブタスクの追加

アーカイブタスクを追加する前に、**Enterprise Vault** システムメールボックスが利用可能
であることを確認します。手順について詳しくは、『インストール/設定』ガイドを参照してく
ださい。

メモ: **Exchange** 環境でデータベース可用性グループ (DAG) を使う場合は、DAG のす
べてのメンバーにアーカイブを設定してください。

p.22 の「[Exchange Server のデータベース可用性グループの使用](#)」を参照してくだ
さい。

Exchange メールボックスのアーカイブタスクを追加する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインの Enterprise Vault サイト階層を展開し、[Enterprise Vault サーバー]コンテナを表示します。
- 2 [Enterprise Vault サーバー]を展開します。
- 3 アーカイブタスクを作成するコンピュータの名前を展開します。
- 4 [タスク]を右クリックし、ショートカットメニューを[新規作成]、[Exchange メールボックスタスク]の順にクリックします。
新規タスクウィザードが起動します。
- 5 ウィザードに従って操作します。次の情報が必要です。
 - アーカイブ対象の Exchange Server の名前
 - 使用する Enterprise Vault システムメールボックス

ドメインに Exchange プロビジョニングタスクが存在しない場合は、自動的に作成されます。

Enterprise Vault サイトのデフォルト設定のレビュー

Enterprise Vault サイトのプロパティに設定されているデフォルト設定を確認します。

サイトのプロパティには次の設定が含まれます。これらの一部は、下位レベルで上書きできます。たとえば、タスクプロパティでスケジュールを設定することによって、特定のタスクのサイトアーカイブスケジュールを上書きできます。

表 3-14 サイトプロパティ

タブ	設定
全般	<ul style="list-style-type: none">■ ボルトサイトエイリアスと説明。■ Web Access アプリケーションで使うプロトコルとポート。■ Web Access アプリケーションのユーザーのシステムメッセージ (必要な場合)。■ PST 保留領域詳細のサイトプロパティ設定は Exchange Server アーカイブにのみ適用されます。■ 管理者用のメモ (必要な場合)。
アーカイブの設定	<ul style="list-style-type: none">■ デフォルトの保持カテゴリ。■ ユーザーがアーカイブ済みアイテムの保持カテゴリを更新する可能性がある処理を実行したときに更新を許可するかどうか。■ アーカイブ内のアイテムの削除をユーザーに許可するかどうか。■ ユーザーが削除したアイテムを回復できるかどうか。■ 削除済みアイテムが回復に利用可能である期間。

タブ	設定
ストレージの有効期限	<ul style="list-style-type: none"> ■ ストレージの有効期限機能を実行するためのスケジュール。この設定に従って、割り当てられた保持期間よりも古いすべてのアイテムがアーカイブから削除されます。 ■ 有効期限の計算をアイテムの変更日、またはアーカイブ日から開始するか設定。
サイトスケジュール	<ul style="list-style-type: none"> ■ 自動バックグラウンドアーカイブを実行するためのスケジュール。
アーカイブの使用限度	<ul style="list-style-type: none"> ■ 必要に応じて、アーカイブサイズの限度を設定できます。
インデックス	<ul style="list-style-type: none"> ■ インデックスレベル: [簡略]または[完全]。 ■ Disclaimer など、インデックス付けすべきではない電子メールの内容。 ■ インデックスサブタスクが削除されるまでの保留期間。
詳細	<ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Vault サイト内での Enterprise Vault のインデックス付け動作の調整に使える詳細設定。 <p>メモ: テクニカルサポートプロバイダの指示がない限り、[インデックス]設定は変更しないでください。</p>
監視	<ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Vault を監視するためのパフォーマンスカウンタ。

Enterprise Vault サイトのデフォルト設定をレビューする方法

- 1 管理コンソールで、Enterprise Vault サイトが表示されるまで、左側のペインの内容を展開します。
- 2 Enterprise Vault サイトを右クリックし、ショートカットメニューの[プロパティ]をクリックします。

代わりに、サイトを選択し、ツールバーの[サイトプロパティを確認]ボタンをクリックすることもできます。
- 3 詳しい情報を参照するには、[サイトプロパティ]タブの[ヘルプ] をクリックします。

Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの使用

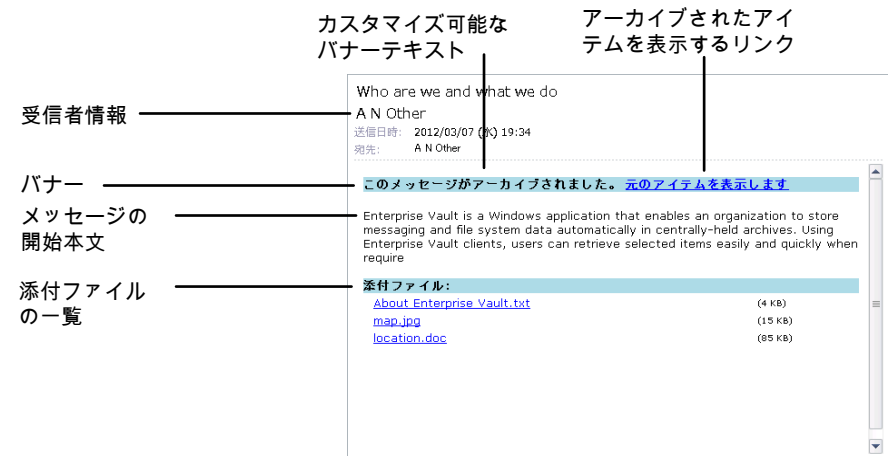
標準の Enterprise Vault ショートカットは、IMAP クライアントまたは POP3 クライアントでは正しく機能しません。これらのクライアントを使っているユーザーがいる場合は、カスタムショートカットを使うことができます。これらは、HTML コンテンツを表示できる Outlook Express などのクライアントを使って表示できます。

新しい Enterprise Vault インストール環境では、デフォルトのショートカットには、次の情報が保存されます。

- 差出人と件名情報
- 受信者情報 (宛先、CC、BCC)
- すべてのアーカイブ済みアイテムへのリンクを含むバナー
- Shortcut bodyメッセージ本文の最初の 1000 文字
- あれば、添付ファイルへのリンク

図 3-1 に、デフォルトのショートカットの構造を示します。

図 3-1 ショートカットの構造



ショートカットの設定を変更して、必要な情報を保存できます。IMAP または POP3 クライアントを使っているユーザーがいる場合は、アーカイブされた添付ファイルへのリンクを含むようにショートカットをカスタマイズできます。ユーザーはリンクをクリックし、添付ファイルを開くことができます。

設定の変更は、今後生成されるショートカットにだけ適用され、すでに作成されているショートカットには適用されません。

カスタムショートカットの内容の詳細は、Enterprise Vault フォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) にある ShortcutText.txt ファイルに保存されます。新規インストールでは、このファイルの英語版が Enterprise Vault フォルダに配置されます。このファイルの言語バージョンは、言語フォルダの Enterprise Vault\Languages\ShortcutText にあります。

このファイルは、標準のショートカットの無題の添付ファイルの処理にも使われる場合があります。

カスタムショートカットの内容を定義する方法

- 1 `ShortcutText.txt` ファイルの必要な言語バージョン (`Enterprise Vault¥Languages¥ShortcutText` の下) を検索します。
- 2 Windows のメモ帳を使って `ShortcutText.txt` を開き、必要な変更を行います。
p.49 の「[Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの ShortcutText.txt のレイアウト](#)」を参照してください。
- 3 ファイルを Unicode ファイルとして保存します。
- 4 ファイルを Enterprise Vault のプログラムフォルダ (たとえば、`C:¥Program Files (x86)¥Enterprise Vault`) にコピーします。
- 5 Enterprise Vault サイトに配置されている他のすべての Enterprise Vault サーバーの Enterprise Vault プログラムフォルダにファイルをコピーします。
- 6 メールボックス、パブリックフォルダのいずれかまたは両方の Exchange Server アーカイブタスクを再開し、変更を適用します。

変更した内容を新しいショートカットに適用する方法

- 1 管理コンソールを起動し、[Exchange メールボックスポリシー]プロパティの[ショートカットの内容]タブに移動します。
- 2 [ショートカット本文の内容]で[カスタマイズ]を選択し、必要なオプションを指定します。詳しくは[ショートカット]タブの[ヘルプ]をクリックしてください。
- 3 Exchange メールボックスアーカイブタスクのプロパティウィンドウを開き、[同期]タブをクリックします。
- 4 必要なメールボックスの[アーカイブの設定]を同期します。

Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの ShortcutText.txt のレイアウト

`ShortcutText.txt` は、標準的な `Windows.ini` ファイルのレイアウトになっています。

```
[Section]
Item1="value1"
Item2="value2"
```

ファイルに含まれる値は、すべて変更できます。各値は、引用符で囲んでください。次に例を示します。

```
"IPM.Task=This task has been archived."
```

`ShortcutText.txt` 内のセクションは次のとおりです。

[Archived text]	<p>このセクションのエントリは、ショートカットの最上部のパナーに表示されます。</p> <p>ショートカットに使われるエントリは、アーカイブ済みアイテムのメッセージクラスに一致するエントリです。たとえば、IPM.Note メッセージクラスを使うアイテムへのショートカットには、「This message has been archived」というテキストが保存されます。</p> <p>このセクションのすべての値には、閉じる引用符の前に空白があります。この空白により、テキストとリンクテキストが区切られます。</p>
[Link text]	<p>このセクションのエントリは、アーカイブ済みアイテムへのリンクが表示されるパナーのテキストを指定します。</p>
[Attachment table]	<p>このセクションの Title エントリは、添付ファイルの一覧のすぐ上に表示されるテキストを指定します。</p> <p>タイトルのない添付ファイルのラベルには DefaultItemTitle エントリが使われます。</p>

Exchange Server アーカイブの自動メッセージの編集について

ユーザーのメールボックスのアーカイブが有効になっている場合、Enterprise Vault はユーザーに自動メッセージを送信します。

限度が設定されている場合、オプションで、ユーザーのアーカイブが最大サイズに近づいたときに自動警告を送信するように Enterprise Vault を設定できます。

サンプルメッセージがインストールされていますが、組織に合わせてテキストをカスタマイズする必要があります。

Exchange Server アーカイブの Welcome メッセージの編集

Enterprise Vault でメールボックスのアーカイブを有効にすると、そのメールボックスに Welcome メッセージが自動的に送信されます。Welcome メッセージには、ヘルプの表示方法と使える機能に関する基本的な情報が含まれます。このメッセージを送信する前に、Enterprise Vault の設定を反映するために編集する必要があります。

Enterprise Vault をインストールすると、Welcome メッセージは次の Enterprise Vault プログラムフォルダに格納されます。

Enterprise Vault¥Languages¥Mailbox Messages¥lang

lang は使っている言語を表します。

Welcome メッセージは、EnableMailboxMessage.msg という名前のファイル内にあります。

Welcome メッセージを設定するには

- 1 使用する EnableMailboxMessage.msg の言語を決定し、ファイルを検索します。
- 2 Microsoft Outlook がインストールされているコンピュータの Windows エクスプローラで、EnableMailboxMessage.msg ファイルをダブルクリックして、Welcome メッセージを編集します。
- 3 テキストをレビューし、必要な変更を行います。必要に応じて、Enterprise Vault アドインをコンピュータにインストールする方法に関する指示を追加します。
p.61 の「[Outlook アドインの手動インストールの設定](#)」を参照してください。
- 4 メッセージを保存します。
- 5 サイトに配置されているすべての Enterprise Vault サーバーの Enterprise Vault プログラムフォルダ (C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault など) に、EnableMailboxMessage.msg をコピーします。

Exchange Server アーカイブの、アーカイブの使用限度メッセージの編集

サイトプロパティの[アーカイブの使用限度]ページで、ユーザーのアーカイブの最大サイズを設定できます。同じページで、アーカイブの限度に近づいているかまたはすでに達したユーザーにメッセージを送るかどうかを指定できます。限度に近づいているユーザーには、メッセージをどの時点で送るかも定義できます。

[ユーザーへの通知]のいずれかにチェックマークを付けた場合、サイトの Enterprise Vault サーバーがすべて利用可能な適切なメッセージを作成する必要があります。

Enterprise Vault をインストールすると、アーカイブ限度警告メッセージは Enterprise Vault プログラムフォルダに格納されます。

Enterprise Vault\Languages\Mailbox Messages\lang

lang は使っている言語を表します。

メッセージファイルは ApproachingArchiveQuotaLimit.msg と ArchiveQuotaLimitReached.msg という名前です。

アーカイブ限度警告メッセージを設定する方法

- 1 使用するメッセージの言語バージョンを決定し、ApproachingArchiveQuotaLimit.msg と ArchiveQuotaLimitReached.msg というファイルを検索します。
- 2 Microsoft Outlook がインストールされているコンピュータの Windows エクスプローラでファイルをダブルクリックして、メッセージを開きます。
- 3 テキストをレビューし、必要な変更を行います。

- 4 メッセージを保存します。
- 5 サイトに配置されているすべての Enterprise Vault サーバーの Enterprise Vault プログラムフォルダ (C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault など) に、2 つのメッセージファイルをコピーします。

Exchange Server アーカイブ設定時のタスク制御サービスとアーカイブタスクの起動

タスク制御サービスとアーカイブタスクを作成した時点では、これらはまだ起動されていません。メールボックスを有効にする前にこれらを起動する必要があります。デフォルトでは、タスク制御サービスを起動するとアーカイブタスクが自動的に起動されます。

タスク制御サービスとアーカイブタスクを起動する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインの [Enterprise Vault サーバー] コンテナを展開します。
- 2 タスク制御サービスを追加するコンピュータを展開し、[サービス] をクリックします。
- 3 右側のペインで、[Enterprise Vault Task Controller Service] を右クリックし、ショートカットメニューの [開始] をクリックします。
- 4 左側のペインで、[タスク] をクリックし、Exchange メールボックスアーカイブタスクが開始されていることを確認します。
- 5 タスクは、スケジュール設定した時刻に自動的に実行されます。[今すぐ実行] オプションを使って、強制的にアーカイブを実行することもできます。このオプションは、[スケジュール] プロパティと、タスクを右クリックしたときに表示されるメニューから利用できます。

メールボックスの Exchange Server アーカイブの有効化

新しいメールボックスを有効にするには、Exchange プロビジョニングタスクによってメールボックスが処理されている必要があります。システムのデフォルトでは、このタスクは 1 日に 1 回実行されます。タスクのプロパティで、1 日に 2 回、指定した時刻にタスクが実行されるようにスケジュールを設定できます。また、プロビジョニンググループに追加された新しいメールボックスを処理するために、強制的に実行することもできます。

メモ: デフォルトでは、Enterprise Vault は Exchange の [グローバル アドレス一覧] に記載されているメールボックスのみを処理します。[グローバルアドレス一覧] に含まれないメールボックスをアーカイブする場合は、『管理者ガイド』の「非表示のメールボックス」セクションを参照してください。

Exchange プロビジョニングタスクによって Exchange Server メールボックスが処理されたら、そのメールボックスを有効にする必要があります。Exchange メールボックスタスクの実行時に自動的に有効にすることも、手動で有効にすることもできます。

Enterprise Vault のメニューオプションとボタンは、ユーザーのメールボックスが有効になり、ユーザーが Outlook を再起動するまで Outlook には表示されません。したがって、ユーザーのメールボックスが有効になるまでは、Enterprise Vault の Outlook アドインをロールアウトできます。

Exchange Server メールボックスを有効にすると、プロビジョニンググループに対して指定されているボルトストアに、メールボックスの新しいアーカイブが作成されます。

アーカイブには課金用に使われる関連付けされたアカウントがあり、1人以上のユーザーがそのアーカイブに格納された情報にアクセスできます。

Exchange プロビジョニングタスクで強制的にメールボックスを処理する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインで、[Enterprise Vault サーバー]を展開し、Enterprise Vault サーバーを展開します。
- 2 [タスク]をクリックします。
- 3 右側のペインで、Exchange プロビジョニングタスクを右クリックし、[プロパティ]を選択します。
- 4 レポートレベルが必要なレベルであることを確認します。完全なレポートには、処理される各メールボックス、プロビジョニンググループ、メールボックスに関連付けされているユーザー名に割り当てられたメールボックスポリシーと PST ポリシー、実行される処理が一覧表示されます。レポートの最後には、タスクの実行に関する概略の統計情報が含まれます。

レポートモードと標準モードのどちらかで実行した場合にも、レポートが生成されるようにタスクを設定できます。
- 5 右側のペインで、Exchange プロビジョニングタスクを右クリックし、[今すぐ実行]を選択します。
- 6 タスクをレポートモードまたは標準モードのどちらで実行するかを選択します。このタスクによって、プロビジョニンググループ内のメールボックスの処理が開始されます。
- 7 メールボックスのアーカイブを自動的に有効にするオプションが選択されている場合は、次の Exchange メールボックスタスクの実行時に、メールボックスが有効になります。

新しいメールボックスを自動的に有効にするオプションが選択されていない場合は、それらを手動で有効にする必要があります。

1 つまたは複数のメールボックスを手動で有効にする方法

- 1 管理コンソールの[ツール]メニューの[メールボックスの有効化]をクリックする、またはツールバーの[アーカイブ対象メールボックスを有効化]アイコンをクリックします。
 メールボックスの有効化ウィザードが起動します。
- 2 ウィザードの指示に従い、詳しくはウィザードの[ヘルプ]をクリックしてください。

Exchange Server アーカイブの共有アーカイブの作成

多数のユーザーで共有できる追加のアーカイブの作成が必要な場合があります。たとえば、特定のプロジェクトに関するすべての文書を同じアーカイブにアーカイブする場合などです。

手動で共有アーカイブを作成し、アーカイブに権限を設定して、各ユーザーにアクセス権を付与します。ユーザーはいつでも追加または削除できます。

共有アーカイブにはフォルダは含まれません。

アーカイブを手動で作成する方法

- 1 Enterprise Vault 管理コンソールを起動します。
- 2 管理コンソールの左側のペインで、[アーカイブ]コンテナが表示されるまで、Enterprise Vault サイト階層を展開します。
- 3 [アーカイブ]コンテナを展開してさまざまな種類のアーカイブを表示します。
- 4 [共有]を右クリックし、[新規作成]、[アーカイブ]の順に選択します。
 アーカイブの新規作成ウィザードが起動します。
- 5 ウィザードの質問に答えてアーカイブを作成します。次の情報を指定するように求められます。
 - アーカイブ用のボルトストア
 - 使用するインデックスサービスとインデックスレベル
 - 課金用アカウント

共有アーカイブのアクセス権限を設定する方法

- 1 左側のペインで、[アーカイブ]コンテナが表示されるまで、Enterprise Vault サイト階層を展開します。
- 2 [アーカイブ]コンテナを展開し、[共有]をクリックします。
- 3 右側のペインで、修正するアーカイブの名前をダブルクリックします。
- 4 変更するアーカイブを右クリックして、[プロパティ]をクリックします。
- 5 必要に応じて権限を修正します。

Exchange Server アーカイブサーバーへの Outlook アドインのインストール

Enterprise Vault サーバーに Enterprise Vault Outlook アドインをインストールするための必要条件はありません。

PSTDisableGrow の上書き

レジストリ値 PSTDisableGrow が有効になっている場合、Enterprise Vault の使用には次の制限事項があります。

- Outlook を開くと Enterprise Vault Outlook アドインに関する警告メッセージが表示されます。
- ユーザーは Enterprise Vault のショートカットを Outlook で開くことができません。
- 同期が失敗するため、ボルトキャッシュ機能は機能しません。
- クライアント主導の PST 移行は機能しません。クライアント主導の PST 移行について詳しくは『PST 移行』ガイドを参照してください。
- PST ファイルに Compliance Accelerator と Discovery Accelerator をエクスポートするとイベント ID 236 で失敗します。

PSTDisableGrow ポリシーをバイパスするには、レジストリ値

PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides を有効にします。次のレジストリの場所の PSTDisableGrow を設定できます。

- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Microsoft¥Office¥Office バージョン¥Outlook¥PST.この場所は PSTDisableGrow のデフォルトの場所です。
- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Policies¥Microsoft¥Office¥Office バージョン¥Outlook¥PST.

次のレジストリの場所の PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides のみを設定できます。

- HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Policies¥Microsoft¥Office¥Office バージョン¥Outlook¥PST

PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides を有効にしても、ユーザーは新しい PST ファイルを作成したり、既存の PST ファイルにアイテムを追加したりできません。PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides の設定により、Outlook アドインによるこれらの処理が可能になります。

PSTDisableGrow が有効で、PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides が無効になっている場合には、Enterprise Vault の Outlook アドインは Outlook でロードされるときに警告を表示します。

PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides を使ってユーザーのコンピュータを設定する方法

- 1 最新の Enterprise Vault Outlook アドインをユーザーのコンピュータにインストールします。
- 2 次のいずれかの場所で、レジストリ値 PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides を有効にします。

- Outlook 2010 の場合:

HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Policies¥Microsoft¥Office¥14.0¥Outlook¥PST

- Outlook 2013 の場合:

HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Policies¥Microsoft¥Office¥15.0¥Outlook¥PST

ここに示されている場所の 1 つを使う必要があります。PSTDisableGrow のデフォルトの場所とは異なり、これらのパスには ¥Policies サブキーが含まれることに注意してください。

PSTDisableGrow と PSTDisableGrowAllowAuthenticcodeOverrides の両方が REG_DWORD 型で、値 1 を持つ必要があります。

Exchange Server メールボックスアーカイブのユーザーの作業

プロビジョニンググループ内のメールボックスの自動有効化が設定されていて、初期状態でアーカイブを中断するように選択した場合、Outlook ユーザーはメールボックスの自動アーカイブを手動で有効にする必要があります。

メールボックスのアーカイブを有効にする方法について詳しくは Outlook の Enterprise Vault ヘルプと Welcome メッセージを参照してください。

Outlook でユーザーがメールボックスの自動アーカイブを有効にする方法

- 1 Outlook で、Outlook ナビゲーションペインが開いていて、メールボックスフォルダが表示されていることを確認します。メールボックスを右クリックします。
- 2 ショートカットメニューの[データファイルのプロパティ]をクリックします。
- 3 [Enterprise Vault]タブをクリックします。
- 4 [変更]をクリックします。
- 5 [Enterprise Vault によるこのメールボックスのアーカイブを中断]のチェックマークをはずします。
- 6 [OK]をクリックします。

ユーザーのデスクトップの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [Exchange Server アーカイブのユーザーのデスクトップの設定について](#)
- [Exchange Server アーカイブの Enterprise Vault Outlook アドイン](#)
- [Exchange Server アーカイブを使う Mac OS X 用 Enterprise Vault クライアント](#)
- [Exchange Server アーカイブ使用時の Outlook のフォームの同期](#)
- [Exchange Server アーカイブのユーザー側の準備](#)
- [次に実行する処理](#)

Exchange Server アーカイブのユーザーのデスクトップの設定について

デスクトップポリシーは、エンドユーザーが Enterprise Vault Exchange クライアントを使うときの使用範囲を定義します。デスクトップポリシーの設定は、メールボックスアーカイブの設定の一部として記述します。

p.31 の「[Exchange Server アーカイブのデスクトップポリシーの定義](#)」を参照してください。

他のセクションでは、Enterprise Vault で動作するようにユーザーのデスクトップを設定するために必要な追加手順について説明します。手順には、Outlook アドインの配布とインストールの有効化、Windows デスクトップサーチによるアーカイブの検索の有効化、フォームを同期するための Outlook の設定が含まれます。

Exchange Server アーカイブの Enterprise Vault Outlook アドイン

Enterprise Vault Outlook アドインは MSI のインストーラパッケージとして利用可能です。32 ビット版と 64 ビット版の Windows のインストールごとに異なるバージョンがあります。64 ビット版では、Outlook の 32 ビット版と 64 ビット版の両方をサポートします。このパッケージは、Enterprise Vault 配布メディアの Outlook Add-In フォルダにあります。

Exchange デスクトップポリシーの Outlook 詳細設定[Outlook のアドインの動作]を使うと、以下のいずれかのモードで動作するように Outlook アドインを設定できます。

- 完全モード。完全モードでは、Outlook アドインの動作に機能的な制限はありません。
- 簡易モード。このモードはデフォルトです。ライトモードでは、次の制限が適用されます:
 - フォルダの Enterprise Vault プロパティにアクセスできません。
 - 手動アーカイブの実行時に、アーカイブ先と保持カテゴリを指定できません。
 - アーカイブされたアイテムを復元するときに、宛先フォルダを選択できません。Outlook アドインはショートカットがあるフォルダにのみアイテムを復元します。

詳細設定[Outlook のアドインの動作]の詳細については、『管理者ガイド』を参照してください。

Outlook ユーザーが RPC over HTTP を使って Exchange Server 2010 にアクセスする場合は、RPC over HTTP 接続用の Enterprise Vault Outlook アドインも有効にする必要があります。

p.157 の「[Outlook RPC over HTTP と Outlook Anywhere の設定について](#)」を参照してください。

Outlook 内から Enterprise Vault 機能にアクセスする前に、Outlook アドインを各デスクトップコンピュータにインストールしておく必要があります。

Outlook アドインの配布

Outlook アドインを配布するには、さまざまな方法があります。たとえば、次のいずれかの方法を使えます:

- Active Directory グループポリシーを使ってデスクトップコンピュータに MSI キットを配備する

メモ: この配布方法は廃止予定です。今後のリリースではサポートされません。

p.60 の「[Exchange Server アーカイブの Active Directory への Outlook アドインの公開](#)」を参照してください。

- Microsoft System Center Configuration Manager などのソフトウェア配布アプリケーションを使ってデスクトップコンピュータに MSI キットを配備する
- 手動インストールを設定する
p.61 の「[Outlook アドインの手動インストールの設定](#)」を参照してください。

Enterprise Vault のボタンとメニューオプションは、ユーザーのメールボックスが有効になり、ユーザーが Outlook を再起動するまで Outlook には表示されません。したがって、ユーザーのメールボックスが有効になるまでは、Enterprise Vault の Outlook アドインをロールアウトできます。

Outlook アドインの言語サポート

Outlook アドインは通常、Outlook のデフォルトの表示言語と同じ言語を使います。Outlook アドインが Outlook の言語をサポートしない場合は、Windows のロケールに一致するよう試みます。そのロケールがサポートされていない場合は、英語がデフォルトに設定されます。

Exchange Server アーカイブの Windows デスクトップサーチプラグインの有効化

Windows デスクトップサーチのプラグインは、Enterprise Vault Outlook アドインに組み込まれています。Exchange デスクトップポリシーの詳細設定を使うと、Windows デスクトップサーチからボルトキャッシュを検索できます。

Outlook アドインをインストールする前に、Windows デスクトップサーチをデスクトップコンピュータにインストールしておく必要があることに注意してください。

Outlook アドインのインストール時、デフォルトではこのプラグインは有効になっていません。

ボルトキャッシュユーザーがボルトキャッシュを検索できるようにする方法

- 1 管理コンソールで、Exchange デスクトップポリシーの[詳細]プロパティを開きます。
- 2 ドロップダウンリストから[ボルトキャッシュ]設定を選択します。
- 3 [WDS 検索の自動有効化]を[強制的に有効化]に設定します。
- 4 [Exchange メールボックスタスク]プロパティの[同期]ページで、ユーザーメールボックスを同期します。
- 5 ユーザーが次回に Outlook を起動すると、ポリシーの変更内容が実装されます。

p.66 の「[Exchange Server アーカイブの Windows Search の設定](#)」を参照してください。

Windows デスクトップサーチを使ってボルトキャッシュを検索する場合、デスクトップコンピュータの管理者権限は必要ありません。

Exchange Server アーカイブの Windows デスクトップサーチプラグインのコマンドラインからの有効化

ボルトキャッシュの検索を有効にするには、Exchange デスクトップポリシーの[WDS 検索の自動有効化]設定を使うことを推奨します。代わりに、インストール時にコマンドラインパラメータ `ACTIVATE_WDS_PLUGIN=1` を含めることによって、プラグインを有効にすることもできます。このコマンドラインスイッチでは大文字と小文字が区別されます。

たとえば、サイレントインストールのコマンドラインは次のようになります。

```
msiexec /I path_to_installer ACTIVATE_WDS_PLUGIN=1 /qn
```

`path_to_installer` は Enterprise Vault Outlook アドイン MSI ファイルのパスです。

p.61 の「[Outlook アドインの手動インストールの設定](#)」を参照してください。

Exchange Server アーカイブの Active Directory への Outlook アドインの公開

このセクションでは、Active Directory グループポリシーを使って Outlook アドインを公開する手順について説明します。

メモ: この配布方法は非推奨です。今後のリリースではサポートされません。

Exchange Server アーカイブの Active Directory の Outlook アドインを公開するには

- 1 Enterprise Vault 配布メディアから MSI ファイルを配布先のネットワーク共有にコピーします。

32 ビット版 Windows では、Enterprise Vault メディアの Outlook Add-In¥x86 フォルダにある MSI ファイルを使います。

64 ビット版 Windows では、Enterprise Vault メディアの Outlook Add-In¥x64 フォルダにある MSI ファイルを使います。
- 2 Windows で、[グループポリシー管理]の管理ツールを開きます。
- 3 左側のペインで、Outlook アドインを公開する組織単位までナビゲートします。
- 4 [組織単位]を右クリックし、ショートカットメニューで[このドメインに GPO を作成し、このコンテナにリンクする]をクリックします。
- 5 「EV Desktop Rollout」など、GPO (Group Policy Object) の名前を入力し、[OK]をクリックします。
- 6 新しい GPO を右クリックし、ショートカットメニューで[編集]をクリックします。[グループポリシー管理エディタ]が表示されます。

- 7 左側のペインから、[コンピュータの構成]の下[ポリシー]と[ソフトウェアの設定]を展開します。
- 8 [ソフトウェアインストール]を右クリックし、ショートカットメニューを[新規作成]、[パッケージ]の順にクリックします。
- 9 手順 1 でコピーした MSI ファイルを選択します。[ファイル名]ボックスで、ファイル名にファイルの UNC パスが含まれていることを確認します。次に例を示します。

`¥¥mycomputer¥distribute¥Veritas Enterprise Vault Outlook
Add-in.msi`

次に、[開く]をクリックします。[ソフトウェアの展開]ダイアログボックスが開きます。
- 10 [割り当て]を選択して、[OK]をクリックします。

インストールされているソフトウェアの一覧に、新しいパッケージが表示されます。
- 11 [グループポリシー管理エディタ]を閉じます。

新しいパッケージは、各ユーザーがコンピュータを再起動したときにインストールされます。

Outlook アドインの手動インストールの設定

Outlook アドインをインストールする通常の方法は、ソフトウェア配布アプリケーションを使ってデスクトップコンピュータへ MSI のパッケージを配備することです。または、Outlook アドインをユーザーが自分でインストールするようにもできます。ユーザーが Outlook アドインをインストールするには、ローカルの管理者権限を持っている必要があります。

ユーザーが MSI を直接起動できる場合もありますが、一部のユーザーには setup.exe ファイルを提供する必要があります。ユーザーは MSI を起動するために setup.exe を実行する必要があります。必要な setup.exe ファイルは、Enterprise Vault メディアの MSI ファイルと同じフォルダにあります。

次の条件の両方が該当する場合には、setup.exe ファイルを提供する必要があります。

- クライアントコンピュータのオペレーティングシステムが Windows 7、Windows 8、または Windows 10 である。
- Windows のユーザーアカウント制御 (UAC) が有効になっている。

setup.exe を使って MSI を起動することにより、MSI を起動する前にインストール処理を実行する特権が与えられます。この早い段階での特権付与は、インストールの全処理を完了するために必要とされます。UAC が有効になっており、ユーザーが MSI を直接起動しようとした場合には、インストール処理においてエラーメッセージが表示されます。

メモ: ユーザーが setup.exe を実行する場合には、MSI ファイルと同じフォルダにある必要があります。

MSI ファイルと setup.exe をユーザーが利用できるようにするには

- 1 必要であれば、共有フォルダに setup.exe とともに MSI ファイルを配置します。

32 ビット版 Windows では、Enterprise Vault メディアの Outlook Add-In¥x86 フォルダにあるファイルを使用します。

64 ビット版 Windows では、Enterprise Vault メディアの Outlook Add-In¥x64 フォルダにあるファイルを使用します。
- 2 次のいずれかの操作を行います。
 - Enterprise Vault の新規インストールでは、ようこそメッセージへのリンクを追加して、ユーザーがそこから共有フォルダにアクセスできるようにします。ようこそメッセージを編集して、適当な方法説明を追加します。setup.exe を提供した場合には、MSI ファイルではなく setup.exe を実行するようにユーザーに指示します。ユーザーがファイルをダウンロードする場合には、ファイルが同じフォルダにある必要があることを伝えてください。
p.50 の「[Exchange Server アーカイブの Welcome メッセージの編集](#)」を参照してください。
 - アップグレードのインストールでは、ユーザーによるようこそメッセージは送信されないため、別の方法によって知らせてください。setup.exe を提供した場合には、MSI ファイルではなく setup.exe を実行するようにユーザーに指示します。ユーザーがファイルをダウンロードする場合には、ファイルが同じフォルダにある必要があることを伝えてください。

p.58 の「[Exchange Server アーカイブの Enterprise Vault Outlook アドイン](#)」を参照してください。

Outlook アドインの手動アップグレードまたはアンインストールの FilesInUse ダイアログボックスの管理

このセクションの情報は、FilesInUse のダイアログボックスで選択するべきオプションに関して、管理者が必要に応じてユーザーに助言できるように提供されています。このセクションでは、FilesInUse ダイアログボックスを非表示にする方法も説明されています。

Windows 7、Windows 8、または Windows 10 で Outlook アドインを手動でアップグレードすると、Windows Restart Manager が 1 つ以上のファイルがロックされていることを検出する場合があります。この場合、Restart Manager は関連したアプリケーションを閉じる必要があるという旨の FilesInUse ダイアログボックスを表示します。Outlook アドインのアンインストールの際にこのダイアログボックスが表示されることもあります。Outlook アドインを新規インストールする場合、ダイアログボックスは表示されることもありますが、ほとんどの場合は表示されません。

ユーザーは次のオプションの 1 つを選択できます。

- セットアップ完了後、アプリケーションを自動的に閉じて、再起動します。このオプションがデフォルトです。

- アプリケーションを閉じません。ただし、システム再起動は必要になる場合があります。アプリケーションを自動的に閉じて再起動するオプションの選択を推奨します。

表 4-1 に、ダイアログボックスに表示される可能性が高いアプリケーションを示します。

表 4-1 FilesInUse ダイアログボックスのアプリケーション

アプリケーション名	メモ
Windows エクスプローラ	<p>ファイルは、Windows エクスプローラが検索機能をサポートするためにロードしたため、ロックされています。</p> <p>Windows エクスプローラを自動的に閉じるように選択すれば、すべてのエクスプローラウィンドウが閉じられます。デスクトップアイコンとタスクバーが少しの間思いがけなく消える場合があります。インストールが続行され、Windows エクスプローラが再起動します。</p>
Windows ホストプロセス (Rundll32)	<p>Windows コントロールパネルのインデックスのオプションとの統合をサポートするために、Windows がこのプロセスを使って Enterprise Vault DLL をロードしている場合があります。</p> <p>プロセスを自動的に閉じるよう選択すればインストールは続行し、プロセスは再起動されます。ただし、ユーザーはプロセス名がわからない場合があります。アプリケーションが Windows を閉じてしまうことを考え、アプリケーションを閉じたくないと思いますが、選択するオプションがわからなくなる場合があります。</p>
Outlook	<p>Outlook アドインをインストールまたはアップグレードする前に Outlook を閉じることを推奨しますが、必須ではありません。ユーザーは Outlook を自動的に閉じることを選択できます。</p>

再起動マネージャが無効な場合は、FilesInUse ダイアログボックスに次のようなさまざまなオプションが用意されていることがあります。

- インストールをキャンセルする。このオプションがデフォルトです。
- ユーザーがアプリケーションを閉じた後に、再試行する。
- ロックされたファイルを無視する。このオプションによって、システムの再起動が必要になる場合があります。

ロックされたファイルを無視するオプションを推奨します。

Restart Manager を無効にするには、msiexec のコマンドラインで MSIRESTARTMANAGERCONTROL をDisable に設定できます。

または、MSI パッケージに変換を適用して、Restart Manager を無効にできます。または、変換を使って、インストーラから FilesInUse ダイアログボックスを削除することもできます。

p.58 の「[Exchange Server アーカイブの Enterprise Vault Outlook アドイン](#)」を参照してください。

p.61 の「[Outlook アドインの手動インストールの設定](#)」を参照してください。

Exchange Server アーカイブを使う Mac OS X 用 Enterprise Vault クライアント

Mac OS X 用の Enterprise Vault クライアントのインストーラキットは、ディスクイメージ (.dmg) ファイルとして入手できます。ファイルは Enterprise Vault 配布メディアのフォルダ Client for Mac OS X にあります。

クライアントを配布するには、さまざまな方法があります。たとえば、次の操作を実行できます。

- .dmg ファイルへのショートカットをユーザーに送信する。
p.50 の「[Exchange Server アーカイブの Welcome メッセージの編集](#)」を参照してください。
- ソフトウェア配布アプリケーションを使って、デスクトップコンピュータに .dmg ファイルを配備する。

Mac OS X 用 Enterprise Vault クライアントの Kerberos 認証の設定

Mac OS X と Exchange 用 Enterprise Vault クライアントおよび Enterprise Vault サーバー間で Kerberos 認証を使うには、次の両方を実行する必要があります。

- 各 Exchange サーバーおよびサイトの Enterprise Vault サーバーは、Internet Information Services を (IIS) を設定し、ネゴシエーション設定を有効にして Windows 認証を許可します。これはユーザーが Enterprise Vault クライアントにログインし、ツールバーとメニューの機能を選択するために必要です。
- Active Directory と各 Enterprise Vault サーバーおよび DNS エイリアスの Service Principal Name (SPN) を登録します。

ネゴシエーション設定を有効にして Windows 認証を許可するように IIS を設定する

- 1 IIS (インターネットインフォメーションサービス) マネージャを開きます。
- 2 左ペインで、管理するレベルに移動します。

Microsoft Exchange サーバーで、これは Exchange および EWS 仮想ディレクトリです。Enterprise Vault サーバーでは、EnterpriseVault の仮想ディレクトリです。

- 3 [機能ビュー]で、[認証]をダブルクリックします。

- 4 [認証] ページで、[Windows 認証] の状態が [有効] であること確認してください。
[Windows 認証] の状態が [無効] なら、[Windows 認証] を選択し、[アクション] のペインの [有効] をクリックします。
- 5 [Windows 認証] を選択し、[アクション] ペインの [プロバイダ] をクリックします。
- 6 有効なプロバイダのリストがネゴシエートを含んでいること確認してください。

各 Enterprise Vault サーバーと DNS エイリアスの Active Directory と SPN を登録する

- ◆ SPN を登録する方法のガイドラインについては、Microsoft 社の Web サイトの次の技術情報を参照してください。

<http://social.technet.microsoft.com/wiki/contents/articles/717.service-principal-names-spns-setspp-syntax-setspp-exe.aspx>

Exchange Server アーカイブ使用時の Outlook のフォームの同期

Outlook のユーザーが [Exchange キャッシュモードを使う] を有効にしている場合、デフォルトでは Outlook フォームは同期されません。この場合、アーカイブ済みアイテムの Enterprise Vault アイコンは表示されません。

Outlook のフォームを同期する方法

- 1 Outlook を起動します。
- 2 [送受信グループ] ダイアログボックスを開きます。
 - Outlook 2010 以降では、[ファイル] タブをクリックしてから、[オプション] をクリックし、[詳細] をクリックします。[送受信] の下で、[送受信] をクリックします。
- 3 グループ名が [すべてのアカウント]、送受信するタイミングが [オンラインとオフライン] の送受信グループを選択し、[編集] をクリックします。
- 4 [フォームの同期] を選択します。
- 5 Outlook を終了してから、再起動します。
- 6 アーカイブ済みアイテムを開きます。これにより、フォームが自動的にインストールされます。

Exchange Server アーカイブのユーザー側の準備

配布先のユーザーが、その他のセクションで説明しているいずれかの方法を必要に応じて使って Enterprise Vault Outlook アドインまたは Mac OS X 用のクライアントをインス

トールする方法を知っていること、Enterprise Vault を使う方法を知っていることを確認する必要があります。

ユーザーのブラウザで JavaScript が有効になっている必要があります。

ユーザーがスタンドアロンのブラウザで Enterprise Vault 検索などの機能を起動できるようにするには、使用する URL をユーザーに知らせる必要があります。この情報は Welcome メッセージに含めることができます。

p.50 の「[Exchange Server アーカイブの Welcome メッセージの編集](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 用の Microsoft Exchange フォームを組織フォームライブラリを使って利用可能にする場合は、Enterprise Vault が動作するすべての Microsoft Exchange Server コンピュータに、Enterprise Vault 用の Microsoft Exchange フォームがインストールされていることを確認してください。

p.16 の「[Exchange Server アーカイブ設定時の Microsoft Exchange フォーム配布について](#)」を参照してください。

p.61 の「[Outlook アドインの手動インストールの設定](#)」を参照してください。

Exchange Server アーカイブの Windows Search の設定

Windows Search の Enterprise Vault プラグインが有効になっている場合、Windows Search を使ってローカルのボルトキャッシュを検索することができます。ただし、これを実行するには、Outlook と Windows Search が起動している必要があります。

次の手順を使って、Windows Search のインデックスの作成にボルトキャッシュと仮想ボルトが設定されていることを確認し、Windows Search で、アーカイブ済みアイテムのインデックスを作成することができます。

Windows Search のオプションを確認する方法

- 1 [コントロールパネル]を開いて[インデックスのオプション]をクリックします。
- 2 [インデックスのオプション]ダイアログボックスで、[変更]をクリックします。
- 3 [選択された場所の変更]リストで、仮想ボルトのエントリが選択されていることを確認します。また、リストに Veritas ボルトキャッシュの場所が表示されている場合は、それが選択されていることも確認します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [インデックスのオプション]ダイアログボックスを閉じます。

コンピュータがアイドル状態になると、Windows Search によってインデックスが更新され、ボルトキャッシュにアイテムが含まれるようになります。

次に実行する処理

Enterprise Vault システムの設定は完了しました。Enterprise Vault を使っていくうちに、必要条件を満たすために一部のプロパティの変更が必要な場合があります。そのような場合と Enterprise Vault のその他の機能の詳細については、ヘルプを参照してください。

ボルトキャッシュと仮想ボルトの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [ボルトキャッシュと仮想ボルトについて](#)
- [ボルトキャッシュの内容の扱い方](#)
- [ボルトキャッシュの同期](#)
- [ボルトキャッシュを使う場合の事前キャッシング](#)
- [ボルトキャッシュウィザード](#)
- [ボルトキャッシュと仮想ボルトの設定](#)
- [ボルトキャッシュの詳細設定](#)
- [仮想ボルトの詳細設定](#)

ボルトキャッシュと仮想ボルトについて

ボルトキャッシュとは、ユーザーの **Enterprise Vault** アーカイブのローカルコピーです。ボルトキャッシュは、ユーザーのコンピュータで **Enterprise Vault Outlook** アドインにより管理されています。

ボルトキャッシュには主に次の機能があります。

- 仮想ボルトを有効にするように選択した場合、ユーザーが仮想ボルトを利用できるようにします。
- オフラインユーザーが、アーカイブ済みアイテムを **Enterprise Vault** ショートカットから開くことができます。

仮想ボルトはユーザーのアーカイブのビューを **Outlook** のナビゲーションペインに統合します。ユーザーに対しては、仮想ボルトはメールボックスまたは個人用フォルダのように表示され、これとほぼ同様に動作します。たとえば、ユーザーはアーカイブ済みアイテムを開き、ドラッグアンドドロップで仮想ボルトに移動したり仮想ボルトから移動したりすることができます。

図 5-1 に、**Outlook** ナビゲーションペインのメールボックスと仮想ボルトを示します。

図 5-1 仮想ボルトの例

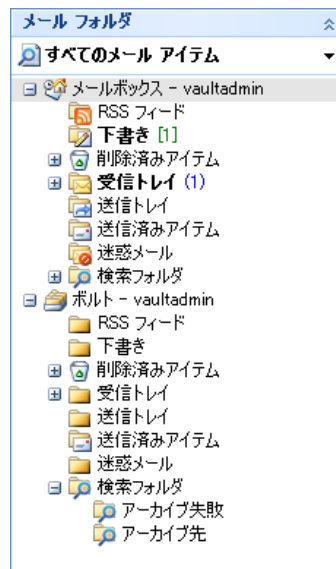
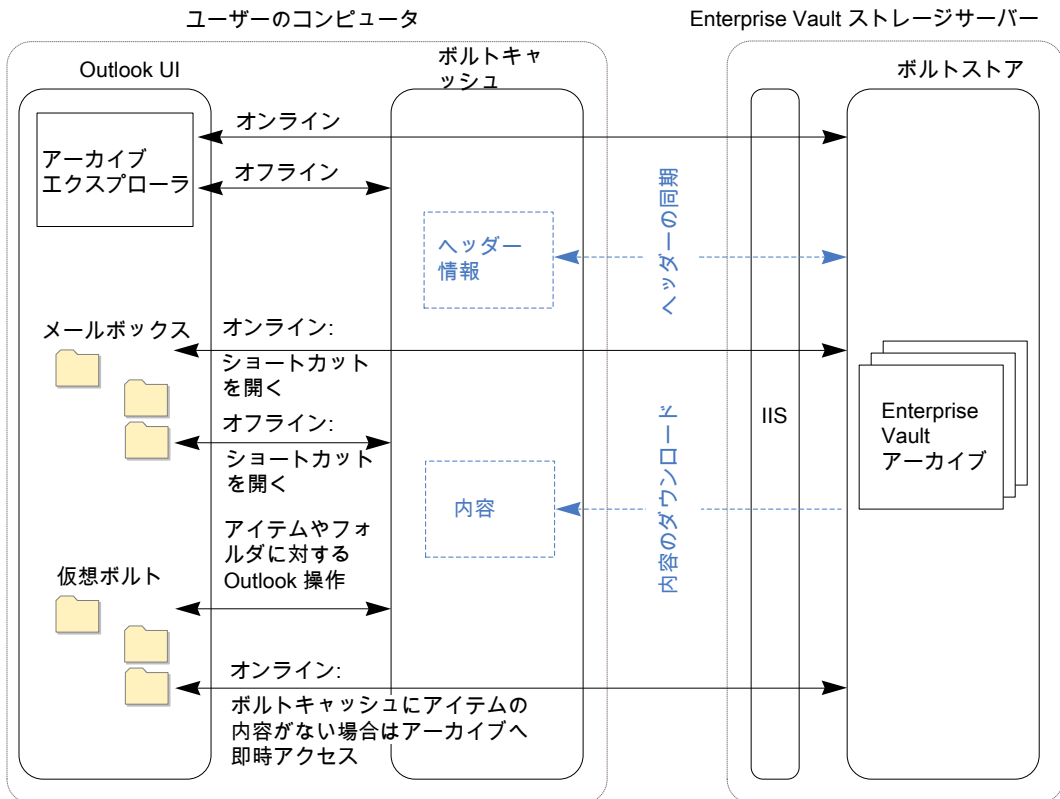


図 5-2 に、ボルトキャッシュと仮想ボルトの関係、ボルトキャッシュのオンラインアーカイブとの同期を示します。

図 5-2 ボルトキャッシュと仮想ボルト



必要な権限をユーザーが持っている場合、プライマリメールボックスのアーカイブ以外のアーカイブをボルトキャッシュと同期できます。仮想ボルトが有効な場合、ボルトキャッシュと同期される各アーカイブには独自の仮想ボルトが備わっています。仮想ボルトでは、ユーザーのプライマリメールボックスのアーカイブ以外のアーカイブへのアクセスは、読み取り専用です。

ユーザーは仮想ボルトで次のような処理を実行できます。

- アーカイブ済みアイテムの表示、転送、返信を行う
- Outlook で送信する電子メールを開き、仮想ボルトから電子メールにアイテムをドラッグアンドドロップして添付ファイルとして送信する
- Outlook のクイック検索、Outlook の高度な検索または Windows デスクトップサーチで仮想ボルトを検索する
- アイテムとフォルダを削除する

- フォルダ間でアイテムを移動したり、フォルダを整理する
- ドラッグアンドドロップを使ってアイテムをアーカイブする
- Outlook のルールを使って仮想ボルトにアイテムを移動する

次の点に注意してください。

- ユーザーは、自分のメールボックス内の既存のフォルダにリンクされている仮想ボルトフォルダを移動、削除、または名前変更できません。この制限は、アーカイブに保持計画を適用して保持フォルダとして指定したフォルダにも適用されます。しかし、ユーザーが自分で保持フォルダに追加したサブフォルダには、この制限は適用されません。ユーザーは、それらの個人的なサブフォルダを自由に移動、名前変更、削除できます。
- Mac OS X 版 Enterprise Vault クライアントでボルトキャッシュ機能を利用することはできません。

ボルトキャッシュの内容の扱い方

アーカイブ済みアイテムの内容のボルトキャッシュへの格納方法の扱い方を指定できます。内容の扱い方により、アイテム全体を格納するか、アイテムのヘッダーのみを格納するかをローカルに制御できます。

内容の扱い方オプションは、Exchange デスクトップポリシーの [ボルトキャッシュ] タブで次のように設定します。

- [キャッシュにアイテムを格納しない]。アイテムのヘッダーはボルトキャッシュと同期されますが、アーカイブ済みアイテムの内容はボルトキャッシュに格納されません。オンラインユーザーが仮想ボルトのアイテムを開くと、Enterprise Vault はオンラインアーカイブからすぐに内容を取得します。
- [すべてのアイテムを格納する]。このオプションがデフォルトです。アイテムのヘッダーはボルトキャッシュと同期され、アーカイブ済みアイテムの内容はボルトキャッシュに格納されます。
- [ユーザーが開くアイテムのみを格納]。アイテムのヘッダーは、ボルトキャッシュと同期されます。オンラインのユーザーが仮想ボルトでアイテムを開いた場合、または閲覧ウィンドウを開いているときにアイテムを選択した場合、Enterprise Vault はオンラインアーカイブからすぐに内容を取得します。ユーザーが仮想ボルトで開く各アイテムの内容が、ボルトキャッシュに格納されます。

p.90 の「[閲覧ウィンドウに内容を表示 \(Exchange 仮想ボルトの設定\)](#)」を参照してください。

p.73 の「[ボルトキャッシュのヘッダーの同期と内容のダウンロード](#)」を参照してください。

ボルトキャッシュの同期

ボルトキャッシュの同期では、オンラインアーカイブに行われた変更でボルトキャッシュが更新され、ボルトキャッシュに行われた変更でオンラインアーカイブが更新されます。ボルトキャッシュとオンラインアーカイブとの間で同期される変更には、アイテムとフォルダの作成、更新、削除の処理があります。

ボルトキャッシュでオンラインアーカイブが完全に最新な状態に維持されているかどうかは、ボルトキャッシュの同期と **Exchange** メールボックスアーカイブタスクが最後に実行されたタイミングに依存します。

ボルトキャッシュが初めて有効にされる初期同期の後、同期は次のようにして開始できます。

- **Enterprise Vault Outlook** アドインは、ボルトキャッシュの同期を 1 日 1 回自動的に実行します。**Outlook** アドインが **Enterprise Vault** に接続できない場合、5 分以上待機してから、サーバーにもう一度接続します。

スケジュール設定同期時刻に合わなかった場合、**Outlook** アドインはユーザーが次回 **Outlook** を開いたときに同期を試行します。最初の試行は、**Exchange** デスクトップポリシーのボルトキャッシュの詳細設定[一時停止間隔]で指定された期間の経過後に行われます。

たとえば、週末に **Outlook** を使わない場合、ボルトキャッシュのスケジュール設定同期時刻に合わないことがあります。この場合、ヘッダーの同期要求が月曜日の同じ時刻に多数発生する可能性があります。**Enterprise Vault** サーバーへの過剰な負荷を回避するために、**Enterprise Vault** の機構では受け入れるヘッダー同期要求の数が制限されます。この機構が動作すると、一部のユーザーではスケジュール設定同期が正常に行われます。他のユーザーは、ヘッダー同期要求が処理されるまで待機する必要があります。この機構はユーザーには見えないため、エラーメッセージは表示されません。ヘッダー同期要求は、成功するまで通常どおり 5 分以上の間隔で繰り返されます。同期に成功すると、スケジュール設定済みの日次同期時刻は成功した同期の時刻にリセットされます。

または、レジストリ設定の **OVAAllowMissedMDCSyncOnStartup** を使って、ユーザーが **Outlook** を開いたときに実行されなかったスケジュール設定済みボルトキャッシュ同期を無視するように設定できます。この設定を有効にすると、ボルトキャッシュの同期はスケジュール設定された次の同期時間に実行されます。

- 他の時間にボルトキャッシュの同期が必要な場合、ユーザーが **Outlook** を使って同期を開始できます。手動による同期を実行しても、自動同期の次のスケジュール設定時刻には影響がありません。
スケジュール設定同期とは違って、失敗した手動同期は再試行されません。
- 自動ボルトキャッシュの同期をトリガするために、仮想ボルトの詳細設定の[同期をトリガするアイテムの数のしきい値]と[同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値]を使うことができます。設定は仮想ボルトで保留中のアーカイブのアイテムの数と合計サイズのしきい値を指定します。

これらのしきい値の設定は、アイテムをアーカイブするためにユーザーが仮想ボルトにメールボックスからアイテムを移動またはコピーする場合に重要です。スケジュール設定同期と手動同期のみが使用中のとき、アイテムは予定時刻までおそらくアーカイブされません。その時まで、移動されたアイテムとコピーされたアイテムはユーザーのコンピュータにのみ存在します。しきい値の設定により、同期が行われるタイミングを制御できます。そのため、データ損失のリスクを最小化できます。

デフォルトでは、しきい値の設定はアクティブではありません。必要に応じて、1 つまたは両方を設定できます。両方を設定した場合、到達または超過した最初のしきい値が同期をトリガします。

ユーザーがボルトキャッシュの同期を中断し、これらのしきい値の設定のいずれかがアクティブな場合、ユーザーは仮想ボルトにアイテムを移動またはコピーできません。スケジュール設定同期とは違って、自動的にトリガされる同期が失敗した場合は、再試行されません。

p.91 の「[同期をトリガするアイテムの数のしきい値 \(Exchange 仮想ボルトの設定\)](#)」を参照してください。

p.92 の「[同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 \(Exchange 仮想ボルトの設定\)](#)」を参照してください。

Enterprise Vault サーバーから Outlook クライアントへの内容のダウンロードでは、Microsoft Background Intelligent Transfer Service (BITS) テクノロジが使用されます。

ボルトキャッシュの同期の問題のトラブルシューティングについて詳しくは、『[管理者ガイド](#)』の付録「[トラブルシューティング](#)」を参照してください。ボルトキャッシュの同期の問題のセクションには、ボルトキャッシュ診断 Web ページを使う詳細な方法が説明されています。この Web ページは各ユーザーから、同期する各アーカイブに対して行われるの最後のボルトキャッシュ同期の試行が表示されます。ページに表示されたレポート情報は、同期を試みた直後にその結果に関係なく、クライアントコンピュータによって投稿されます。

p.75 の「[ボルトキャッシュの初期同期](#)」を参照してください。

ボルトキャッシュのヘッダーの同期と内容のダウンロード

ボルトキャッシュの同期は、次の処理で構成されます。

- ヘッダーの同期
- 内容のダウンロード

ボルトキャッシュヘッダーの同期

ヘッダーの同期は、必ずボルトキャッシュの同期内で実行されます。アイテムヘッダーには、仮想ボルトなどでアイテムを表すのに十分な情報が含まれています。また、ヘッダーをアイテム全体の内容に関連付ける情報も含まれています。

オンラインアーカイブで変更が行われた場合、ボルトキャッシュの同期により **Enterprise Vault** サーバーからヘッダー情報のダウンロードが行われ、変更がボルトキャッシュに適用されます。

メールボックス内の一部の変更は、メールボックスアーカイブタスクを次に実行するまで、オンラインアーカイブに反映されません。たとえば、ユーザーがアーカイブ済みアイテムを移動した場合、またはメールボックスでフォルダを作成した場合に、メールボックスアーカイブタスクを実行する必要があります。

オンラインアーカイブを変更すると、ヘッダーの同期に加えて、内容のダウンロードもボルトキャッシュの同期に含めることが必要となる場合があります (アイテムが自動的にアーカイブされた場合など)。ただし、事前キャッシングが使われている場合、内容のダウンロードは不要ことがあります。

p.76 の「[ボルトキャッシュを使う場合の事前キャッシング](#)」を参照してください。

仮想ボルト、したがってボルトキャッシュで変更が行われた場合、それらの変更はオンラインアーカイブと同期されます。

ヘッダーの同期では、オンラインアーカイブまたは仮想ボルトでフォルダ階層に行われた変更も同期されます。ユーザーはフォルダがメールボックスに存在すれば、仮想ボルトでフォルダの移動、削除、名前の変更を行うことができません。ユーザーは、メールボックス、**Outlook** または **OWA** でこれらのフォルダに対する処理を実行する必要があります。

ボルトキャッシュの内容のダウンロード

内容のダウンロードは、内容の扱い方が [すべてのアイテムを格納する] の場合にのみ実行されます。ボルトキャッシュの同期では、オンラインアーカイブからアイテムの内容がボルトキャッシュにダウンロードされます。最初のボルトキャッシュの同期の後、内容のダウンロードは事前キャッシングにより最小限にできます。事前キャッシングを実行するアイテムの経過日数は、ボルトキャッシュの詳細設定 [事前アーカイブ] を使って判断できます。

p.76 の「[ボルトキャッシュを使う場合の事前キャッシング](#)」を参照してください。

内容の扱い方が [ユーザーが開くアイテムのみを格納] であれば、アイテムの内容はユーザーがアイテムを開いた直後にダウンロードされます。この後、内容は後で使えるようにボルトキャッシュに格納されます。

ボルトキャッシュと仮想ボルトの状態

ボルトキャッシュの同期の状態および詳細は、ユーザーのコンピュータの **Outlook** の [ボルトキャッシュのプロパティ] ダイアログボックスで確認できます。

ユーザーがアイテムを仮想ボルトに移動することによってアイテムをアーカイブできるようになっている場合は、ユーザーの仮想ボルトに以下の検索フォルダが含まれます。

- [アーカイブ失敗]。このフォルダには、詳細設定[アイテムをアーカイブする最大試行回数]で設定された試行回数の後、ボルトキャッシュの同期でアーカイブされなかったアイテムが一覧表示されます。
- [アーカイブ先]。このフォルダには、ユーザーが仮想ボルトに移動またはコピーし、アーカイブを待機しているアイテムが一覧表示されます。フォルダには、ボルトキャッシュの同期でアーカイブされなかったアイテムは含まれません。

ボルトキャッシュの初期同期

ボルトキャッシュでメールボックスが有効に設定されている場合、ヘッダーの同期はボルトキャッシュウィザードの終了時に開始します。内容のダウンロードは、内容の扱い方で内容のダウンロードが要求される場合にも実行されることがあります。アーカイブに大量のアイテムが格納されている場合、内容のダウンロードに要する時間はヘッダーの同期の場合よりも相当に長くなります。

アイテムの最大経過日数は、ボルトキャッシュの詳細設定 [ダウンロードするアイテムの経過日数の限度] と [ダウンロードしたアイテムの経過日数の限度をロック] を使うと、内容の初期ダウンロード時に制御できます。

次の基準が満たされていると、仮想ボルトがユーザーのプロファイルに自動的に追加されます。

- **Enterprise Vault** アーカイブタスクによって、ユーザーがアクセスできるすべてのアーカイブが処理されている。
- ヘッダーの初期同期が完了している。
- 以前にユーザーがプロファイルから仮想ボルトを削除していない。

仮想ボルトがナビゲーションペインに自動的に表示されない場合は、[ボルトキャッシュのプロパティ] ダイアログボックスの [仮想ボルト] タブで選択できます。

ボルトキャッシュによる内容のダウンロードの同時要求の制御

ボルトキャッシュの内容のダウンロードによって使われるシステムリソースの量を制御するには、サーバーが一度に管理する内容のダウンロード要求の数を制限します。内容のダウンロード要求の数を制限するには、**Enterprise Vault** サーバープロパティの [キャッシュ] タブの設定 [同時更新の最大数] を使います。

ボルトキャッシュを使う場合の Enterprise Vault サーバーのキャッシュの場所

オンラインアーカイブに新しいアイテムが追加されると、それらのアイテムのコピーが一時的に **Enterprise Vault** サーバーのキャッシュに保持されます。この後、アイテムはユーザーのコンピュータにダウンロードされます。サーバーのキャッシュの場所は **Enterprise Vault** サーバープロパティの [キャッシュ] タブで指定されています。

仮想ボルトを使用する場合の保持カテゴリの変更

仮想ボルトでは、アイテムとフォルダの保持カテゴリに影響する変更があります。このような変更は、次のように処理されます。

- ユーザーが保持カテゴリの異なるフォルダ間でアイテムを移動した場合、そのアイテムの保持カテゴリは更新されます。
- ユーザーは、保持カテゴリを継承するフォルダを、有効な保持カテゴリの異なるフォルダに移動できます。(有効な保持カテゴリは、継承された、または特別に割り当てられた保持カテゴリです。)この場合、移動したフォルダとその内容は新しい保持カテゴリを継承します。保持カテゴリを継承するすべてのサブフォルダとその内容も、同様に更新されます。
- ユーザーは特定の保持カテゴリのフォルダを、有効な保持カテゴリの異なるフォルダに移動できます。この場合、移動したフォルダの保持カテゴリは変更されません。
- ユーザーが仮想ボルトで新しいフォルダを作成した場合、このフォルダは親フォルダの保持カテゴリを継承します。
- ユーザーのアーカイブでフォルダを保持フォルダに指定すると、その保持フォルダのアイテムに保持カテゴリが適用されることがあります。たとえば、保持フォルダにアイテムを移動すると、アイテムの保持カテゴリがフォルダに適用された保持カテゴリに変更されることがあります。
保持フォルダについて詳しくは、『管理者ガイド』を参照してください。
- **Enterprise Vault Search** の設定方法に応じて、ユーザーはアイテムの保持カテゴリを変更できます。

メモ: 保持カテゴリにこれらの処理を行った場合の影響は、**Enterprise Vault** サイトプロパティの[アーカイブの設定]タブにある[ユーザーにカテゴリの更新を許可]の設定によっても異なります。これらの設定では、ユーザーがアーカイブ済みアイテムの保持カテゴリを更新する可能性がある処理を実行したときに **Enterprise Vault** が更新を許可するかどうかを決定します。

ボルトキャッシュを使う場合の事前キャッシング

ボルトキャッシュへのダウンロードを最小限にするために、**Outlook** アドインは間もなくアーカイブが必要なアイテムがないか、定期的にメールボックスを検索します。このようなアイテムをボルトキャッシュに自動的に追加します。この機能は、事前キャッシングと呼ばれます。

ボルトキャッシュの詳細設定 [オフラインストアが必要] は、**Outlook** でボルトキャッシュを有効にする場合、オフラインストアが必要かどうかを制御します。ユーザーが **OST** ファイルを利用できない場合は、**Enterprise Vault** によって事前キャッシングは実行されません。

p.80 の「オフラインストアが必要 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」を参照してください。

p.82 の「事前アーカイブ (Exchange のボルトキャッシュの設定)」を参照してください。

ボルトキャッシュウィザード

ユーザーのメールボックスにボルトキャッシュを自動的に有効にするか、**Outlook** でのボルトキャッシュウィザードの実行によってユーザーがボルトキャッシュを有効にするかを選択できます。

ウィザードにより、ユーザーのプライマリメールボックスに対してのみボルトキャッシュを有効にすることができます。ユーザーが他のアーカイブにアクセスできる場合は、それらのアーカイブが **Outlook** の [ボルトキャッシュのプロパティ] ダイアログボックスの [ボルト] タブに一覧表示されます。ユーザーがダイアログボックスで追加のアーカイブを選択するまでは、それらはボルトキャッシュと同期されません。

ボルトキャッシュと仮想ボルトの設定

仮想ボルトを設定する前に、『Virtual Vault Best Practice Guide』を参照してください。このガイドは次の URL からダウンロードできます。

<https://www.veritas.com/docs/100022180>

ボルトキャッシュを有効にするには、**Exchange** デスクトップポリシーの [ボルトキャッシュ] タブで [ボルトキャッシュをユーザーに対して利用可能にする] を選択します。仮想ボルトを有効にするには、[仮想ボルトを利用可能にする] と [ボルトキャッシュをユーザーに対して利用可能にする] を選択します。

また、次のいずれかを実行します。

- [ボルトキャッシュ] タブで、デフォルトのボルトキャッシュの設定を変更します。
- **Exchange** デスクトップポリシーで、ボルトキャッシュと仮想ボルトの詳細設定を設定します。更新したポリシーをユーザーのメールボックスと同期させる前に、詳細設定をレビューし、必要に応じて変更する必要があります。

Windows ユーザーのメールボックスプロファイルごとにボルトキャッシュが作成されます。1 人のユーザーが複数のメールボックスプロファイルにアクセスできる場合、そのユーザーは複数のボルトキャッシュを持つことができます。

Exchange デスクトップポリシーでボルトキャッシュと仮想ボルトを設定する方法

- 1 **Exchange** デスクトップポリシーの[ボルトキャッシュ]タブで[ボルトキャッシュをユーザーに対して利用可能にする]を選択します。
- 2 [ボルトキャッシュ]タブで、その他の設定値を必要に応じて選択または選択解除します。仮想ボルトを有効にする場合、[仮想ボルトを利用可能にする]を選択します。設定の説明を確認するには、[ボルトキャッシュ]タブで[ヘルプ]をクリックします。
- 3 [適用]をクリックします。
- 4 **Exchange** デスクトップポリシーの[詳細]タブで、[一覧表示する設定の種類]メニューの[ボルトキャッシュ]をクリックし、ボルトキャッシュの詳細設定を行います。
p.78 の「[ボルトキャッシュの詳細設定](#)」を参照してください。
- 5 [適用]をクリックします。
- 6 仮想ボルトを有効にした場合、[一覧表示する設定の種類]メニューの[仮想ボルト]をクリックし、仮想ボルトの詳細設定を行います。
p.84 の「[仮想ボルトの詳細設定](#)」を参照してください。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 ユーザーのコンピュータでレジストリエントリ `PstDisableGrow` を設定して、**PST** ファイルの展開を無効にした場合、ユーザーのコンピュータ上でいくつか追加の設定タスクを実行する必要があります。
p.55 の「[PSTDisableGrow の上書き](#)」を参照してください。

ボルトキャッシュの詳細設定

Vault Cache の詳細設定を行うと、ボルトキャッシュの動作を制御できます。

表 5-1 に、ボルトキャッシュの詳細設定を示します。

表 5-1 ボルトキャッシュの詳細設定

詳細設定	説明
「ダウンロードするアイテムの経過日数の限度 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	アイテムが古すぎると見なされ、ボルトキャッシュへの最初のダウンロードが不可能となる、アイテムの最大経過日数を指定します。
「ダウンロードしたアイテムの経過日数の限度をロック (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	ユーザーがダウンロードの経過日数の限度を変更できるかどうかを制御します。
「手動アーカイブの挿入 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	手動でアーカイブしたアイテムをボルトキャッシュに自動的に追加するかどうかを制御します。

詳細設定	説明
「オフラインストアが必要 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	オフラインストア (OST) ファイルが存在しない場合、ボルトキャッシュを有効にできるかどうかを制御します。
「一時停止間隔 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	Enterprise Vault が、ボルトキャッシュに追加が必要なアイテムの検索を開始するまでに待機する時間 (分) です。
「アイテムごとのスリープ (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	ボルトキャッシュを更新する場合、アイテム間で使われる遅延時間 (ミリ秒) です。
「事前アーカイブ (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	Outlook アドインは、事前キャッシングを実行するアイテムの経過日数を決定する場合、この値を使います。
「ルートフォルダ (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	ボルトキャッシュを格納する場所。
「ルートフォルダの検索パス (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	ボルトキャッシュの格納が可能な場所の一覧を表示できます。
「セットアップウィザードを表示 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	クライアントにボルトキャッシュ設定ウィザードを表示するかどうかを制御します。
「同期するアーカイブの種類 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	ボルトキャッシュと同期される内容を制御します。
「WDS 検索の自動有効化 (Exchange のボルトキャッシュの設定)」	Windows デスクトップサーチのボルトキャッシュ検索プラグインを、ユーザーに自動的に有効にするかどうかを制御します。

ダウンロードするアイテムの経過日数の限度 (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明

アイテムが古すぎると見なされ、ボルトキャッシュへの最初のダウンロードが不可能となる、アイテムの最大経過日数を指定します。

たとえば、[ダウンロードするアイテムの経過日数の限度] を 30 に設定すると、経過日数が 30 日以下のアイテムがダウンロードされます。[ダウンロードするアイテムの経過日数の限度] を 0 に設定すると、すべてのアイテムがダウンロードされます。

サポートされる値

- 0。経過日数を制限しません。すべてのアイテムがダウンロードされます。
- 整数。ダウンロードするアイテムの最大経過日数。この経過日数以下のすべてのアイテムがダウンロードされます。

以前の名前 OVDownloadItemAgeLimit

ダウンロードしたアイテムの経過日数の限度をロック (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明 ユーザーがダウンロードの経過日数の限度を変更できるかどうかを制御します。

サポートされる値

- [有効]。ロックします。
- [無効]。ロックしません。

以前の名前 OVLockDownloadItemAgeLimit

手動アーカイブの挿入 (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明 手動でアーカイブしたアイテムをボルトキャッシュに自動的に追加するかどうかを制御します。

サポートされる値

- [有効](デフォルト)。手動でアーカイブしたアイテムをボルトキャッシュに自動的に追加します。
- [無効]。ボルトキャッシュに追加しません。

以前の名前 OVNoManualArchiveInserts.

オフラインストアが必要 (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明 オフラインストアが存在しない場合、ボルトキャッシュを有効にできるかどうかを制御します。

Outlook Exchange キャッシュモードが有効になっている場合、ユーザーはオフラインストア (OST) ファイルを利用できます。ユーザーが OST ファイルを利用できない場合は、Enterprise Vault によって事前キャッシングは実行されません。

事前キャッシングが実行されないと、新しくアーカイブしたアイテムに対してボルトキャッシュの内容が同期されるときに負荷が増加します。ボルトキャッシュの内容の扱い方が [すべてのアイテムを格納する] の場合は、この負荷の増加について考慮します。

サポートされる値

- [はい](デフォルト)。ボルトキャッシュを有効にするにはオフラインストアが必要です。
- [いいえ]。ボルトキャッシュを有効にするのにオフラインストアは必要ありません。

以前の名前

OVRequireOfflineStore

一時停止間隔 (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明

ボルトキャッシュへの追加が必要なアイテムの検索を Enterprise Vault が開始するまでの待機時間 (分) です。

サポートされる値

■ 整数値。デフォルトは 3 (分) です。

以前の名前

OVPauseInterval

アイテムごとのスリープ (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明

ボルトキャッシュを更新する場合、アイテム間で使われる遅延時間 (ミリ秒) です。

サポートされる値

■ 整数。ボルトキャッシュの更新時にアイテム間で使われる時間 (ミリ秒)。デフォルトは 100 (ミリ秒) です。

以前の名前

OVPerItemSleep

事前アーカイブ (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明	<p>Outlook アドインは、アイテムがアーカイブ対象になる前に、ユーザーの Outlook .OST ファイルからボルトキャッシュにアイテムをコピーします。この処理は、事前キャッシングと呼ばれます。事前キャッシングは、ユーザーのコンピュータで実行されます。事前キャッシングにより、メールボックスアーカイブとボルトキャッシュを同期するときにメールボックスアーカイブからボルトキャッシュにダウンロードする必要があるアイテムの数が減少します。</p> <p>事前キャッシングは、Exchange メールボックスポリシーのアーカイブルールの設定に従います。</p> <p>Outlook アドインは、事前キャッシングを実行するアイテムの経過日数を決定する場合、[事前アーカイブ] の値を使います。経過日数を特定するため、Exchange メールボックスポリシーのアーカイブルールの [次より古いアイテムをアーカイブ] の値から [事前アーカイブ] の値が引かれます。</p> <p>たとえば、[事前アーカイブ] をデフォルト値から変更していないとします。メールボックスポリシーの [次より古いアイテムをアーカイブ] を 6 週間に設定しています。Outlook アドインは、6 週間から [事前アーカイブ] のデフォルト値である 7 日を引き、5 週間以上経過しているアイテムを事前にキャッシュします。</p> <p>クォータを含むアーカイブ戦略を使うと、アイテムがアーカイブされる経過日数の予測が難しくなります。通常は、できるだけ早くアイテムの事前キャッシングを実行する方が有益です。したがって、次の両方に該当する場合、Enterprise Vault は事前キャッシングを実行する経過日数として 0 日を使います。</p> <ul style="list-style-type: none">■ メールボックスポリシーで、クォータベース、または経過日数とクォータベースのアーカイブ戦略を使っています。■ [事前アーカイブ] 設定をデフォルト値から変更していません。
サポートされる値	<ul style="list-style-type: none">■ 日数を指定する整数。デフォルトは 7 です。
以前の名前	OVPremptAdvance

ルートフォルダ (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明	<p>ボルトキャッシュを格納する場所。この値はユーザーがボルトキャッシュを有効にする場合に使います。この値を変更しても、既存のボルトキャッシュには適用されません。</p>
サポートされる値	<ul style="list-style-type: none">■ パス。Enterprise Vault がユーザーのローカルコンピュータ上に作成可能なフォルダへのパス。[ルートフォルダ]を指定しないと、Enterprise Vault はユーザーのアプリケーションデータフォルダ内の[Enterprise Vault]サブフォルダを使います。

以前の名前 OVRotDirectory

ルートフォルダの検索パス (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明 ボルトキャッシュの格納が可能な場所の一覧を表示できます。一覧に記載されている、ユーザーのコンピュータで有効な最初の場所が、ボルトキャッシュが作成されるときに使われます。これにより、さまざまな構成のコンピュータに適する可能性が高い一覧を指定できます。

たとえば、E:\vault;C:\vault と指定した場合、ユーザーのコンピュータで E:\vault が有効な場合はこのパスにボルトキャッシュが作成され、有効でない場合は C:\vault に作成されます。

どの場所も有効でない場合、可能であれば[ルートフォルダ]で指定されているパスが使われます。

p.82 の「[ルートフォルダ \(Exchange のボルトキャッシュの設定\)](#)」を参照してください。

サポートされる値 ■ テキスト文字列。ボルトキャッシュで利用可能な場所の、セミコロンで区切った一覧。

以前の名前 OVRotDirectorySearchPath

セットアップウィザードを表示 (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明 クライアントにボルトキャッシュ設定ウィザードを表示するかどうかを制御します。

セットアップウィザードでは、次の処理を行います。

- ボルトキャッシュの処理内容と、これから実行する処理の概要を表示します。
- 最初のスキャンが終了したらダウンロードを自動的に開始するかどうかを確認します。デフォルトではダウンロードを開始します。

ウィザードが無効にされている場合、ボルトキャッシュは[一時停止間隔]に指定されている時間待機してから、ダウンロードするアイテムの検索を自動的に開始します。

p.81 の「[一時停止間隔 \(Exchange のボルトキャッシュの設定\)](#)」を参照してください。

サポートされる値 ■ 無効セットアップウィザードを表示しません。
■ 有効 (デフォルト)。セットアップウィザードを表示します。

以前の名前 OVSetupWizard

同期するアーカイブの種類 (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明	ボルトキャッシュと同期される内容を制御します。
サポートされる値	<ul style="list-style-type: none"> ■ [デフォルトのメールボックス]。プライマリメールボックスのみを同期します。 ■ [すべてのメールボックスアーカイブ]。プライマリメールボックスアーカイブと、ユーザーがアクセスできるすべての代理メールボックスアーカイブを同期します。 ■ [すべてのメールボックスと共有アーカイブ]。プライマリメールボックスアーカイブと、ユーザーがアクセスできるすべての代理または共有メールボックスアーカイブを同期します。
以前の名前	OVSyncArchiveTypes

WDS 検索の自動有効化 (Exchange のボルトキャッシュの設定)

説明	<p>Windows デスクトップサーチのボルトキャッシュ検索プラグインを、ユーザーに自動的に有効にするかどうかを制御します。</p> <p>このプラグインは Outlook アドインとともにインストールされ、これによりユーザーは Windows デスクトップ検索を使ってボルトキャッシュを検索できます。</p>
サポートされる値	<ul style="list-style-type: none"> ■ [強制的に無効化]。この機能を無効にします。 ■ [強制的に有効化]。この機能を有効にします。 ■ [ユーザーの設定を保持]。この機能のユーザーの設定を保持します。
以前の名前	OVWDSAutoEnable

仮想ボルトの詳細設定

仮想ボルトの詳細設定を行うと、仮想ボルトの動作を制御できます。

表 5-2 に、仮想ボルトの詳細設定を示します。

表 5-2 仮想ボルトの詳細設定

詳細設定	説明
「1 回の同期におけるアーカイブ要求の最大数 (Exchange 仮想ボルト設定)」	ボルトキャッシュの同期におけるアーカイブ要求の最大数を制御します。
「アイテムをアーカイブする最大試行回数 (Exchange の仮想ボルトの設定)」	ボルトキャッシュがアイテムをアーカイブする試行回数を指定します。

詳細設定	説明
「1 回の同期でアーカイブされるデータの最大量 (Exchange 仮想ボルト設定)」	ボルトキャッシュの同期中にアップロードできるデータの最大量を MB 単位で制御します。
「1 回の同期における削除要求の最大数 (Exchange の仮想ボルトの設定)」	ボルトキャッシュの同期における削除要求の最大数を制御します。残りの要求は次の同期で処理されます。
「アーカイブするアイテムの最大サイズ (Exchange 仮想ボルト設定)」	仮想ボルトに移動またはコピーできるアイテムの最大サイズを MB 単位で制御します。
「1 回の同期におけるアイテム更新の最大数 (Exchange の仮想ボルトの設定)」	ボルトキャッシュの同期におけるプロパティ変更要求の最大数を制御します。残りの要求は次の同期で処理されます。
「内容がない場合の操作の最大合計サイズ (Exchange の仮想ボルトの設定)」	ボルトキャッシュ内のアイテムに内容がない場合のコピー操作と移動操作の最大合計サイズを MB 単位で制御します。この設定は、Outlook 標準のメールの種類 (メールアイテム、カレンダーアイテム、タスク、連絡先など) にのみ適用されます。
「アーカイブするアイテムの最大合計サイズ (Exchange 仮想ボルト設定)」	ボルトキャッシュのアーカイブ保留中のデータの最大合計サイズを MB 単位で制御します。
「閲覧ウィンドウに内容を表示 (Exchange 仮想ボルトの設定)」	Outlook の閲覧ウィンドウに内容を表示するかどうかを制御します。
「同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」	ボルトキャッシュの自動同期をトリガする、仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの総数を指定します。
「同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」	ボルトキャッシュの自動同期をトリガする、仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの合計サイズを MB 単位で指定します。
「ユーザーがアイテムをアーカイブ可能 (Exchange 仮想ボルトの設定)」	ユーザーが仮想ボルトを使ってアイテムを手動でアーカイブできるかどうかを制御します。
「ユーザーが別のストアにアイテムをコピー可能 (Exchange の仮想ボルトの設定)」	ユーザーが仮想ボルトから別のメッセージストアにアイテムをコピーまたは移動できるかどうかを制御します。
「ユーザーがアーカイブ内のアイテムをコピー可能 (Exchange 仮想ボルトの設定)」	ユーザーがアーカイブでアイテムをコピーできるかどうかを制御します。
「ユーザーがアイテムを削除 (復元不可) 可能 (Exchange の仮想ボルトの設定)」	ユーザーが仮想ボルトからアイテムを完全削除できるかどうかを制御します。

詳細設定	説明
「ユーザーがアイテムを再編成可能 (Exchange 仮想ボルト設定)」	ユーザーが仮想ボルトでアイテムを再編成できるかどうかを制御します。

1 回の同期におけるアーカイブ要求の最大数 (Exchange 仮想ボルト設定)

説明	<p>ボルトキャッシュの同期におけるアーカイブ要求の最大数を制御します。残りの要求は次の同期で処理されます。</p> <p>ユーザーがアーカイブされていないアイテムを仮想ボルトに格納しても、ボルトキャッシュの次のヘッダーの同期後までアーカイブ操作は行われません。</p> <p>値を制限しない場合、または高い値を設定した場合は、ボルトキャッシュの同期が完了するのに必要な時間が長くなる可能性があります。負荷の追加によって Enterprise Vault サーバーが影響を受ける場合は、これについて考慮します。</p> <p>また、ユーザーが仮想ボルトに格納したアイテムがオンラインアーカイブにアーカイブされるまで、移動およびコピーしたアイテムはユーザーのコンピュータにのみ存在します。仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの数が合計サイズに基づいて、ボルトキャッシュの自動同期をトリガする 2 つのしきい値を設定できます。</p> <p>p.91 の「同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p> <p>p.92 の「同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p>
サポートされている値	■ 整数値。デフォルトは 0 です (限度はありません)。
以前の名前	OVMaxItemArchivesPerSync

アイテムをアーカイブする最大試行回数 (Exchange の仮想ボルトの設定)

説明	<p>Enterprise Vault がアイテムをアーカイブする試行回数を指定します。</p> <p>指定した回数までアーカイブ操作が試行された後、アイテムは仮想ボルトの [アーカイブ失敗] という名前の検索フォルダに一覧表示されます。</p>
サポートされる値	■ 整数値。デフォルトは 3 です。

以前の名前 OVItemArchiveAttempts

1 回の同期でアーカイブされるデータの最大量 (Exchange 仮想ボルト設定)

説明 ボルトキャッシュの同期中にアップロードできるデータの最大量を MB 単位で制御します。残りのデータは次の同期でアップロードされます。

値を制限しない場合、または高い値を設定した場合は、ボルトキャッシュの同期が完了するのに必要な時間が長くなる可能性があります。負荷の追加によって Enterprise Vault サーバーが影響を受ける場合は、これについて考慮します。

また、ユーザーが仮想ボルトに格納したアイテムがオンラインアーカイブにアーカイブされるまで、移動およびコピーしたアイテムはユーザーのコンピュータにのみ存在します。仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの数が合計サイズに基づいて、ボルトキャッシュの自動同期をトリガする 2 つのしきい値を設定できます。

p.91 の「同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。

p.92 の「同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。

この設定の値は、[アーカイブするアイテムの最大サイズ]と同じかそれより大きい値である必要があります。そうでない場合は、[アーカイブするアイテムの最大サイズ]の値が使われます。

サポートされている値 ■ 整数値。デフォルトは 512 (MB) です。値 0 を指定すると、制限されません。

以前の名前 OVMaxToArchivePerSyncMB

1 回の同期における削除要求の最大数 (Exchange の仮想ボルトの設定)

説明 ボルトキャッシュの同期における削除要求の最大数を制御します。残りの要求は次の同期で処理されます。

削除要求によって使われる Enterprise Vault サーバーのリソースは、比較的小規模です。

サポートされる値 ■ 整数値。デフォルトは 0 です (限度はありません)。

以前の名前 OVMaxItemDeletesPerSync

アーカイブするアイテムの最大サイズ (Exchange 仮想ボルト設定)

説明	<p>仮想ボルトに移動またはコピーできるアイテムの最大サイズを MB 単位で制御します。</p> <p>この値が[アーカイブするアイテムの最大合計サイズ]の値とほぼ同じである場合は、完全同期が 1 つのアイテムで構成される可能性があります。</p> <p>[1 回の同期でアーカイブされるデータの最大量]または[アーカイブするアイテムの最大合計サイズ]で、[アーカイブするアイテムの最大サイズ]の値が自動的に使われることがあります。これらの設定の値が[アーカイブするアイテムの最大サイズ]の値より小さい場合に、[アーカイブするアイテムの最大サイズ]の値が使われます。</p> <p>仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの数か合計サイズに基づいて、ボルトキャッシュの自動同期をトリガする 2 つのしきい値を設定できます。</p> <p>p.91 の「同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p> <p>p.92 の「同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p>
サポートされている値	<ul style="list-style-type: none"> ■ 整数値。デフォルトは 256 (MB) です。値 0 を指定すると、制限されません。
以前の名前	OVMaxMessageSizeToArchiveMB

1 回の同期におけるアイテム更新の最大数 (Exchange の仮想ボルトの設定)

説明	<p>ボルトキャッシュの同期におけるプロパティ変更要求の最大数を制御します。残りの要求は次回の同期で処理されます。</p> <p>更新要求によって使われる Enterprise Vault サーバーのリソースは、比較的小規模です。</p>
サポートされる値	<ul style="list-style-type: none"> ■ 整数値。デフォルトは 0 です (限度はありません)。
以前の名前	OVMaxItemUpdatesPerSync

内容がない場合の操作の最大合計サイズ (Exchange の仮想ボルトの設定)

説明	<p>ボルトキャッシュ内のアイテムに内容がない場合のコピー操作と移動操作の最大合計サイズを MB 単位で制御します。この設定はメールボックスに直接配置される文書には適用されません。メールアイテム、カレンダーアイテム、仕事、連絡先などの Outlook の標準メールタイプにのみ適用されます。</p> <p>内容のない 2 つ以上のアイテムが操作に関係する場合にのみこの設定が適用されます。アイテムのサイズにかかわらず、取り込みは実行できます。</p>
サポートされる値	<ul style="list-style-type: none"> ■ 整数値。デフォルトは 64 (MB) です。値 0 を指定すると、制限されません。
以前の名前	VVDenyMultiContentlessOpsAboveMB

アーカイブするアイテムの最大合計サイズ (Exchange 仮想ボルト設定)

説明	<p>ボルトキャッシュのアーカイブ保留中のデータの最大合計サイズを MB 単位で制御します。</p> <p>アーカイブ保留中のデータは、ユーザーが仮想ボルトに移動またはコピーしたアイテムで構成されています。これらのアイテムは、ボルトキャッシュの同期によって正常にアップロードとアーカイブが行われるまで、アーカイブ保留中になります。</p> <p>この設定の値は、[アーカイブするアイテムの最大サイズ]と同じかそれより大きい値である必要があります。そうでない場合は、[アーカイブするアイテムの最大サイズ]の値が使われます。</p> <p>仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの数か合計サイズに基づいて、ボルトキャッシュの自動同期をトリガする 2 つのしきい値を設定できます。</p> <p>p.91 の「同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p> <p>p.92 の「同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p>
サポートされている値	<ul style="list-style-type: none"> ■ 整数値。デフォルトは 512 (MB) です。値 0 を指定すると、制限されません。
以前の名前	OVMaxTotalToArchiveMB

閲覧ウィンドウに内容を表示 (Exchange 仮想ボルトの設定)

説明	<p>Outlook の閲覧ウィンドウに仮想ボルトで選択されたアイテムの内容を表示するかどうかを制御します。</p> <p>アイテム自体が文書の場合は、閲覧ウィンドウに表示されません。閲覧ウィンドウのメッセージで、アイテムを開いて内容を読み込むように指示されます。</p>
サポートされている値	<div><div><div><div>■</div><div>[内容を表示しない]。閲覧ウィンドウには、選択したアイテムのヘッダーのみが常に表示されます。元のアイテムを開くリンクがバナーによって提供されます。</div></div><div><div>■</div><div>[ボルトキャッシュ内の場合](デフォルト)。閲覧ウィンドウには、選択したアイテムのヘッダーが表示されます。アイテムがボルトキャッシュにある場合は、内容も表示されます。内容が表示されない場合は、元のアイテムを開くリンクがバナーによって提供されます。ボルトキャッシュの内容の扱い方が[ユーザーが開くアイテムのみを格納]の場合は、この値を設定すると、閲覧ウィンドウには以前に開いたアイテムの内容のみが表示されます。</div></div><div><div>■</div><div>[常に内容を表示]。閲覧ウィンドウには、仮想ボルトで選択されたアイテムのヘッダーと内容が常に表示されます。</div></div></div><p>次の条件が当てはまる場合、[閲覧ウィンドウに内容を表示]の値は[常に内容を表示]のみとなります。</p><div><div>■</div><div>以前のリリースからアップグレードしました。</div></div><div><div>■</div><div>以前のリリースでは、[閲覧ウィンドウに内容を表示]の値は[常に内容を表示]でした。</div></div><p>[常に内容を表示]は、[設定の修正]ダイアログボックスでは利用できません。そのため[常に内容を表示]が現在の値の場合、それを変更すると元に戻すことはできません。</p></div>
以前の名前	VVReadingPaneContent

同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)

説明	<p>ボルトキャッシュの自動同期をトリガする、仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの総数を指定します。</p> <p>アーカイブ保留中のデータは、ユーザーが仮想ボルトに移動またはコピーしたアイテムで構成されています。これらのアイテムは、ボルトキャッシュの同期によって正常にアップロードとアーカイブが行われるまで、アーカイブ保留中になります。</p> <p>この設定を有効にしたら、他の設定とどのように相互に作用するか、次のとおり考慮してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ [アーカイブするアイテムの最大サイズ]と[アーカイブするアイテムの最大合計サイズ]はユーザーが仮想ボルトにアイテムを追加することを防ぐことができます。その結果、しきい値に達することがなくなります。■ [1 回の同期におけるアーカイブ要求の最大数]は[同期をトリガするアイテムの数のしきい値]の値より低い値であることがあります。この場合、自動同期は発生しますが、アーカイブ保留中のアイテムの一部はアーカイブされません。
サポートされている値	<ul style="list-style-type: none">■ 0 (デフォルト)。しきい値は非アクティブです。■ ゼロ以外の整数。ボルトキャッシュの自動同期をトリガする、仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの合計数。
以前の名前	VVAutoSyncItemThreshold

同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)

説明	<p>ボルトキャッシュの自動同期をトリガする、仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの合計サイズを MB 単位で指定します。</p> <p>アーカイブ保留中のデータは、ユーザーが仮想ボルトに移動またはコピーしたアイテムで構成されています。これらのアイテムは、ボルトキャッシュの同期によって正常にアップロードとアーカイブが行われるまで、アーカイブ保留中になります。</p> <p>この設定を有効にしたら、他の設定とどのように相互に作用するか、次のとおり考慮してください。</p> <ul style="list-style-type: none">■ [アーカイブするアイテムの最大サイズ]と[アーカイブするアイテムの最大合計サイズ]はユーザーが仮想ボルトにアイテムを追加することを防ぐことができます。その結果、しきい値に達することがなくなります。■ [1 回の同期でアーカイブされるデータの最大量]は[同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値]の値より低い値であることがあります。この場合、自動同期は発生しますが、アーカイブ保留中のアイテムの一部はアーカイブされません。
サポートされている値	<ul style="list-style-type: none">■ 0 (デフォルト)。しきい値は非アクティブです。■ ゼロ以外の整数。ボルトキャッシュの自動同期をトリガする、仮想ボルトのアーカイブ保留中のアイテムの合計サイズ (MB)。
以前の名前	VVAutoSyncItemsSizeThresholdMB

ユーザーがアイテムをアーカイブ可能 (Exchange 仮想ボルトの設定)

説明	<p>ユーザーが標準の Outlook 処理を使って仮想ボルトに新しいアイテムを追加することによって、手動でアイテムをアーカイブできるかどうかを制御します。このような標準の Outlook 処理の例には、ドラッグアンドドロップ、移動とコピー、ルールなどがあります。</p> <p>この設定を無効にしても、[ユーザーがアイテムを再編集可能]が有効になっている場合、ユーザーはフォルダを作成できます。</p> <p>この設定を有効にしたら、ボルトキャッシュの自動同期をトリガするしきい値を設定することを考慮してください。</p> <p>p.91 の「同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p> <p>p.92 の「同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p> <p>メモ: デフォルトでは、ユーザーが仮想ボルトからアーカイブするアイテムのセーフコピーはありません。セーフコピーが必要な場合は、ユーザーのアーカイブをホストするボルトストアを設定して、Enterprise Vault がセーフコピーをストレージキューに保管するようにできます。この設定を変更すると、これらのボルトストアに対するすべてのアーカイブが影響を受けます。</p>
サポートされている値	<ul style="list-style-type: none">■ [はい] (デフォルト)。ユーザーは仮想ボルトでアイテムを手動でアーカイブできます。■ [いいえ]。ユーザーは仮想ボルトでアイテムを手動でアーカイブできません。
以前の名前	VVAllowArchive

ユーザーが別のストアにアイテムをコピー可能 (Exchange の仮想ボルトの設定)

説明	<p>ユーザーが仮想ボルトから別のメッセージストアにアイテムをコピーまたは移動できるかどうかを制御します。</p> <p>ユーザーが仮想ボルトからアイテムをコピーまたは移動できる場合は、内容がボルトキャッシュで利用可能であれば、アイテムはボルトキャッシュから取り込まれます。</p> <p>ボルトキャッシュの内容の扱い方が [キャッシュにアイテムを格納しない] である場合、アイテムはオンラインアーカイブから取り込まれます。この場合は、仮想ボルトの詳細設定 [内容がない場合の操作の最大合計サイズ] を使って、表示操作、コピー操作、移動操作の最大合計サイズを制御します。</p>
----	---

サポートされる値	<ul style="list-style-type: none">■ [はい](デフォルト)。ユーザーは別のメッセージストアにアイテムをコピーまたは移動できます。■ [いいえ]。ユーザーは別のメッセージストアにアイテムをコピーまたは移動できません。
以前の名前	VVAllowInterStoreCopyAndMove

ユーザーがアーカイブ内のアイテムをコピー可能 (Exchange 仮想ボルトの設定)

説明	<p>ユーザーがアーカイブでアイテムをコピーできるかどうかを制御します。</p> <p>アーカイブでアイテムをコピーできる場合は、内容がボルトキャッシュで利用可能であれば、アイテムはボルトキャッシュから取り込まれます。</p> <p>ボルトキャッシュの内容の扱い方が[キャッシュにアイテムを格納しない]である場合、アイテムはオンラインアーカイブから取り込まれます。この場合は、仮想ボルトの詳細設定[内容がない場合の操作の最大合計サイズ]を使って、表示操作、コピー操作、移動操作の最大合計サイズを制御します。</p> <p>この設定を有効にしたら、ボルトキャッシュの自動同期をトリガするしきい値を設定することを考慮してください。</p> <p>p.91 の「同期をトリガするアイテムの数のしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p> <p>p.92 の「同期をトリガするアイテムの合計サイズのしきい値 (Exchange 仮想ボルトの設定)」を参照してください。</p>
サポートされている値	<ul style="list-style-type: none">■ [はい]。ユーザーはアーカイブでアイテムをコピーできます。■ [いいえ](デフォルト)。ユーザーはアーカイブでアイテムをコピーできません。
以前の名前	VVAllowIntraStoreCopy

ユーザーがアイテムを削除 (復元不可) 可能 (Exchange の仮想ボルトの設定)

説明	<p>ユーザーが仮想ボルトからアイテムを完全削除できるかどうかを制御します。</p> <p>この設定を有効にするには、[サイトプロパティ] ダイアログボックスにある [アーカイブの設定] タブで [ユーザーはアーカイブからアイテムを削除できる] オプションを有効にする必要があります。</p> <p>この設定を無効にしても、[ユーザーがアイテムを再編成可能] が有効になっている場合、ユーザーは[削除済みアイテム]フォルダにアイテムを移動できます。</p>
----	--

サポートされる値	<ul style="list-style-type: none"> ■ [はい](デフォルト)。ユーザーは仮想ボルトからアイテムを完全削除できます。 ■ [いいえ]。ユーザーは仮想ボルトからアイテムを完全削除できません。
以前の名前	VVAllowHardDelete

ユーザーがアイテムを再編成可能 (Exchange 仮想ボルト設定)

説明	<p>ユーザーが仮想ボルトでアイテムを再編成できるかどうかを制御します。</p> <p>この設定によって、ユーザーはフォルダ間でアイテムを移動できるようになるだけでなく、フォルダの作成、移動、名前の変更、削除もできるようになります。</p> <p>メモ: ユーザーは、自分のメールボックス内の既存のフォルダにリンクされている仮想ボルトフォルダを移動、削除、または名前変更できません。この制限は、アーカイブに保持計画を適用して保持フォルダとして指定したフォルダにも適用されます。しかし、ユーザーが自分で保持フォルダに追加したサブフォルダには、この制限は適用されません。ユーザーは、それらの個人的なサブフォルダを自由に移動、名前変更、削除できます。</p> <p>[ユーザーがアイテムを削除 (復元不可) 可能]を有効にしないと、ユーザーは空のフォルダしか完全に削除できません。</p>
サポート対象の値	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい(デフォルト)。ユーザーは、仮想ボルト内のアイテムを再編成できます。 ■ いいえ。ユーザーは、仮想ボルト内のアイテムを再編成できません。
以前の名前	VVAllowReOrg

パブリックフォルダのアーカイブ設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [パブリックフォルダのアーカイブについて](#)
- [パブリックフォルダからアーカイブを設定する場合のボルトストアとパーティションに関する注意事項](#)
- [パブリックフォルダアーカイブの作成](#)
- [パブリックフォルダタスクの追加](#)
- [パブリックフォルダポリシー設定について](#)
- [パブリックフォルダのアーカイブ対象の追加](#)
- [パブリックフォルダへのアーカイブ設定の適用](#)
- [パブリックフォルダタスクのスケジュール設定](#)
- [アーカイブ対象パブリックフォルダの削除に関する注意事項](#)

パブリックフォルダのアーカイブについて

このセクションでは、パブリックフォルダからのアーカイブを設定する方法について説明します。

パブリックフォルダからアーカイブを設定するときには、次のような手順で行います。

- 組織に **Exchange Server** コンピュータを追加し、ボルトストアを作成して、タスク制御サービスを追加します。これらは、メールボックスからのアーカイブを設定するときに作成済みです。
- 必要に応じて、パブリックフォルダアーカイブを作成します。

- 必要に応じて、新しい保持カテゴリを作成します。
- パブリックフォルダポリシー設定をレビューします。
- **Exchange** パブリックフォルダタスクを追加します。
- パブリックフォルダのアーカイブ対象を追加します。
- **Exchange** パブリックフォルダタスクをスケジュールします。

パブリックフォルダアーカイブを設定するには、適切な **Exchange Server** の権限を持つアカウントでログインする必要があります。ボルトサービスアカウントには正しい権限が設定されています。代わりに、使いたいアカウントを正しい権限を持つように設定することもできます。手順の詳細については、『**Veritas Enterprise Vault インストール/設定**』の「**Exchange Server** アーカイブの追加の必要条件」セクションを参照してください。

パブリックフォルダからアーカイブを設定する場合のボルトストアとパーティションに関する注意事項

パブリックフォルダのアーカイブを有効にするには、ボルトストアとボルトストアパーティションが存在している必要があります。**Enterprise Vault** の最適化された単一インスタンスストレージを使う場合は、ボルトストアグループ、ボルトストア、ボルトストアパーティションが要件に合わせて正しく設定されていることを確認してください。

『インストール/設定』ガイドのストレージの設定に関する章を参照してください。

ターゲットのパブリックフォルダのアーカイブを自動有効化した場合、**Enterprise Vault** はパブリックフォルダのアーカイブターゲット用に選択したボルトストア内にパブリックフォルダのアーカイブを自動的に作成します。

パブリックフォルダアーカイブの作成

自動有効化機能を使って、自動的にアーカイブを作成するように **Enterprise Vault** を設定できます。自動有効化機能を使わない場合は、必要なアーカイブを手動で作成する必要があります。その後、パブリックフォルダのアーカイブ対象の設定時にアーカイブを割り当てます。複数のパブリックフォルダでアーカイブを共有できます。

パブリックフォルダアーカイブを作成する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインの[アーカイブ]コンテナを展開します。
- 2 [Exchange パブリックフォルダ]を右クリックし、ショートカットメニューを[新規作成]、[アーカイブ]の順に選択します。

新規パブリックフォルダアーカイブウィザードが起動します。

- 3 ウィザードに従って操作します。次の情報を指定する必要があります。

- Enterprise Vault Indexing Service コンピュータ
- このアーカイブに格納されるすべてのアイテムに使うインデックスレベル
- 課金先

パブリックフォルダタスクの追加

このセクションでは、パブリックフォルダタスクの追加に必要な手順について説明します。

パブリックフォルダタスクを追加する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインのサイト階層を展開し、[Enterprise Vault サーバー] コンテナを表示します。
- 2 [Enterprise Vault サーバー] コンテナを展開します。
- 3 パブリックフォルダタスクを追加するコンピュータの名前を展開します。
- 4 [タスク] を右クリックし、ショートカットメニューを[新規作成]、[Exchange パブリックフォルダタスク]の順に選択します。

新規パブリックフォルダタスクウィザードが起動します。

- 5 ウィザードに従って操作します。次の情報を指定する必要があります。
 - パブリックフォルダをホストする Exchange Server
 - タスクの名前
 - Exchange Server への接続時に使う Enterprise Vault システムメールボックス。これは Exchange メールボックススタックが使うのと同じシステムメールボックスにすることができます。

パブリックフォルダポリシー設定について

パブリックフォルダのアーカイブ時に使う設定は、使用するパブリックフォルダポリシーから指定されます。[デフォルトの Exchange パブリックフォルダポリシー]というデフォルトのパブリックフォルダポリシーがあり、必要に応じて編集できます。代わりに、必要に応じて別のポリシーを作成し、デフォルトのポリシーとして異なるポリシーを設定することもできます。

Exchange パブリックフォルダポリシー設定

設定には、次のカテゴリがあります。

- 「[全般]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシー設定)」
- 「[アーカイブルール]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)」

- 「[アーカイブ処理]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)」
- 「[ショートカット]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)」
- 「[メッセージクラス]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)」
- 「[詳細]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)」
- 「[対象]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)」
- 「[ショートカットの削除]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシー設定)」

[全般]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシー設定)

表 6-1 にこのタブの設定を示します。このタブを使って、アーカイブ対象のパブリックフォルダのインデックスレベルを上書きします。

表 6-1 [全般]設定

設定	デフォルト値
[名前]と[説明]	ポリシーの名前と説明。必要に応じて、後で変更できます。
インデックスレベル	対象のパブリックフォルダからアーカイブする際に、[簡略]、[完全]のどちらのインデックスを使うか。内容のフレーズ検索が可能なのは、完全インデックスの場合のみです。 インデックスレベルは、サイト、ポリシー、アーカイブのレベルで設定できます。アーカイブの設定が優先されます。

[アーカイブルール]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)

表 6-2 にこのタブの設定を示します。このタブを使って、サイズに基づいてアーカイブするか、クォータに基づいてアーカイブするかを選択します。

表 6-2 [アーカイブルール]設定

設定	説明	デフォルト値
新しいアイテム	アイテムをアーカイブできる最小期限。	2 週間。
大きいアイテム	小さいアイテムより大きいアイテムを優先してアーカイブするかどうか。大きいアイテムを優先する場合は、優先度のしきい値となる最小サイズ。	未設定。

設定	説明	デフォルト値
アーカイブ戦略	アイテムの経過日数に基づいてアイテムをアーカイブします。	アイテムが修正されてから経過した期間に基づいてアーカイブします。期間は 6 カ月です。 設定はロックされます。
添付ファイル付きのメッセージのみをアーカイブ	他のすべてのアーカイブ基準が満たされているとして、添付ファイルがある場合にのみ、アイテムをアーカイブします。 これは、添付ファイルのみをアーカイブするのとは異なります。詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。	未設定。

[アーカイブ処理]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)

表 6-3 にこのタブの設定を示します。このタブを使って、Enterprise Vault がアイテムをアーカイブするときの動作を制御します。

表 6-3 [アーカイブ処理]の設定

設定	デフォルト値
アーカイブ後、元のアイテムを削除する	アーカイブした後に元のアイテムはパブリックフォルダから削除されます。 設定はロックされるため、ユーザーによってポリシー設定が使われます。
アーカイブ後、アーカイブ済みアイテムのショートカットを作成する	パブリックフォルダ内のアイテムがアーカイブされると、ショートカットに置き換えられます。 設定はロックされるため、ユーザーによってポリシー設定が使われます。

[ショートカット]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)

表 6-4 にこのタブの設定を示します。このタブを使って、Enterprise Vault のショートカットのサイズや動作を制御できます。

表 6-4 ショートカットの設定

設定	説明	デフォルト値
受信者情報を含める ショートカットに受信者情報を含める	ショートカットに受信者情報(宛先と CC の詳細)を保存するかどうかを設定します。 通常、ショートカットには差出人と件名の情報が含まれます。	ショートカットに受信者情報を含めます。
ショートカット本文	ショートカットに保存するメッセージ本文の量。設定値に関係なく、メッセージ全体(添付ファイルを含む)をアーカイブに保存します。 <ul style="list-style-type: none">■ なし。メッセージテキストはショートカットに保存されません。■ メッセージ本文を使用。ショートカットにメッセージ本文のすべてのテキストを含めますが、添付ファイルは含めません。■ カスタマイズ。ショートカットに含めるテキストとリンクの量を選択します。	なし

カスタマイズしたショートカットを設定する場合は、ShortcutText.txt ファイルが必要です。このファイルは、無題の添付ファイルの標準ショートカットを処理する場合にも使うことができます。

p.47 の「[Exchange Server アーカイブでのカスタマイズされたショートカットの使用](#)」を参照してください。

[メッセージクラス]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)

このタブの一覧には、ポリシーが適用されるときにアーカイブされるアイテムのクラスが表示されます。必要に応じて、メッセージクラスチェックボックスにチェックマークを付けたり、はずしたりします。

利用可能なメッセージクラスの一覧を編集する必要がある場合は、[ディレクトリプロパティ]の[メッセージクラス]タブに移動します。

[詳細]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)

このタブの設定で、タスクでアーカイブに失敗したアイテムの処理方法などのパブリックフォルダアーカイブの定義を制御します。これらの設定について詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。

[対象]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシーの設定)

このタブには、このポリシーを使うアーカイブ対象のパブリックフォルダが表示されます。

[ショートカットの削除]タブ (Exchange パブリックフォルダポリシー設定)

[ショートカットの削除]では次の操作が行われます。

- このページで指定した日数を経過したショートカットを削除します。Enterprise Vault はショートカットの経過時間を判断するために更新日かアーカイブされた日付を使います。[サイトプロパティ]の[ストレージの有効期限]タブでどの日付を使うかを指定できます。
- 孤立したショートカットを削除します。これらは、通常はユーザーによって、アーカイブから削除されたアイテムへのショートカットです。

ショートカットの削除は、Exchange パブリックフォルダタスクによって実行されます。[今すぐ実行]を使ってタスクを実行する場合、ショートカット処理を含む[実行モード]を選択できます。

表 6-5 ショートカットの削除の設定

設定	説明	デフォルト値
フォルダ内のショートカットを削除	<p>このオプションを設定すると、Enterprise Vault は、指定した日数を経過したショートカットを削除します。対応するアーカイブ済みアイテムには影響しません。ユーザーは引き続きアーカイブ済みアイテムを検索できます。</p> <p>たとえば、12 カ月より古いすべてのショートカットを削除するように選択した場合でも、アーカイブ済みアイテムは数年間保持できます。</p>	選択されていません

設定	説明	デフォルト値
孤立したショートカットを削除	<p>このオプションを設定すると、対応するアーカイブ済みアイテムが削除された場合に、Enterprise Vault はパブリックフォルダのショートカットを削除します。</p> <p>元のメッセージからのテキストを含むショートカットを使っている場合、アーカイブ済みアイテムが削除されてもこれらのショートカットが役立つ場合があります。ただし、大量のショートカットを削除すると、Exchange Server の記憶容量を回復できます。</p>	チェックマークが付けられていない

パブリックフォルダのアーカイブ対象の追加

Exchange パブリックフォルダタスクによってアーカイブ対象パブリックフォルダがアーカイブされます。アーカイブ対象パブリックフォルダはパブリックフォルダの 1 つの階層で、ルートパスから始まります。必要に応じて、少数または多数の **Exchange** パブリックフォルダタスクを作成できます。各 **Exchange** パブリックフォルダタスクによって、複数のアーカイブ対象パブリックフォルダを処理できます。

他の **Exchange** パブリックフォルダタスクによって処理されるフォルダや、**Enterprise Vault** プロパティがフォルダのアーカイブを禁止するように変更されているフォルダを除き、各アーカイブ対象のルートパスにあるすべてのフォルダが **Exchange** パブリックフォルダタスクによって処理されます。

既存のアーカイブ対象パブリックフォルダのルートパスより上位のパブリックフォルダの階層のルートパスにアーカイブ対象パブリックフォルダを追加できます。下位のルートパスにはアーカイブ対象パブリックフォルダを追加できません。

Outlook を使ってパブリックフォルダのプロパティを表示する場合は、フォルダのパスをクリップボードにコピーして、対象のパブリックフォルダのルートパスとして貼り付けます。

パブリックフォルダの追加には、手動で行う方法と自動で行う方法があります。

- 手動で追加する方法 (標準)。パブリックフォルダとそれに使われるアーカイブを選択します。フォルダとそのサブフォルダには同じアーカイブが使われます。
- 自動的に追加する方法。**Enterprise Vault** 自動有効化機能を追加して、指定したフォルダの直下にあるフォルダを有効にできます。これらのフォルダとそのサブフォルダはすべてアーカイブが有効になります。
デフォルトでは、このレベルのフォルダごとに個別のアーカイブが自動的に作成されます。

たとえば、¥myPublic Folder に自動有効化機能を追加した場合、新しいアーカイブは ¥myPublic Folder¥Finance と ¥myPublic Folder¥Property に作成されます。¥myPublic Folder¥Property¥Commercial は親フォルダ (¥myPublic Folder¥Property) と同じアーカイブを使うため、このフォルダにはアーカイブは作成されません。

代わりに、既存のアーカイブを使うように選択できます。

後で新しいフォルダを追加した場合は、それらも自動的にアーカイブされます。

パブリックフォルダのアーカイブ対象を追加する手動 (標準) の方法

このセクションでは、パブリックフォルダを手動で追加する方法について説明します。パブリックフォルダとそれに使われるアーカイブを選択します。フォルダとそのサブフォルダには同じアーカイブが使われます。

パブリックフォルダのアーカイブ対象を追加するには

- 1 管理コンソールの左ペインで、[対象]が表示されるまで階層を展開する
- 2 [対象]を展開します。
- 3 [Exchange]を展開します。
- 4 追加するフォルダをホストする Exchange サーバーがインストールされているドメインを展開する
- 5 [Exchange Server]を展開します。
- 6 追加するパブリックフォルダを含む Exchange サーバーを展開する
- 7 [パブリックフォルダ]を右クリックして、ショートカットメニューで[新規作成]、[パブリックフォルダ]の順に選択する。
[新規パブリックフォルダ]ウィザードが起動します。
- 8 ウィザードに従って操作します。次の情報を指定する必要があります。
 - アーカイブする最上位レベルのパブリックフォルダのパス
 - 使用する Exchange パブリックフォルダのタスク
 - 割り当てる Exchange パブリックフォルダのポリシー
 - 使用する保持カテゴリまたは保持計画
 - 使用するアーカイブ

自動でパブリックフォルダのアーカイブ対象を追加する方法

このセクションでは、パブリックフォルダを自動で追加する方法について説明します。Enterprise Vault の「自動有効化」を追加して、指定したフォルダの直下にあるフォルダ

を自動的に有効にできます。これらのフォルダとそのサブフォルダはすべてアーカイブが有効になります。

デフォルトでは、このレベルのフォルダごとに個別のアーカイブが自動的に作成されます。

パブリックフォルダ自動有効化機能を追加するには

- 1 管理コンソールの左ペインで、[対象]が表示されるまで階層を展開する
- 2 [対象]を展開します。
- 3 [Exchange]を展開します。
- 4 追加するフォルダをホストする **Exchange** サーバーがインストールされているドメインを展開する
- 5 [Exchange Server]を展開します。
- 6 追加するパブリックフォルダを含む **Exchange** サーバーを展開する
- 7 [パブリックフォルダ]を右クリックして、ショートカットメニューで[新規作成]、[パブリックフォルダ自動有効化機能]の順に選択する。
[新規パブリックフォルダ自動有効化機能]ウィザードが起動します。
- 8 ウィザードに従って操作します。次の情報を指定する必要があります。
 - アーカイブする最上位レベルのパブリックフォルダのパス
 - ルートフォルダのアイテムをアーカイブするかどうか アーカイブする場合は、使用するアーカイブの指定が可能
 - 使用する **Exchange** パブリックフォルダのポリシー
 - 使用する **Exchange** パブリックフォルダのタスク
 - 使用する保持カテゴリまたは保持計画。
 - 新しいアーカイブを作成するボルトストア

パブリックフォルダへのアーカイブ設定の適用

デフォルトのパブリックフォルダのアーカイブ設定は、すべてのパブリックフォルダに適用されます。つまり、[Exchange パブリックフォルダポリシー]プロパティの[アーカイブルール]ページと[アーカイブ処理]ページで指定した設定は、すべてのパブリックフォルダに適用されます。

Enterprise Vault User Extensions for Outlook を使っている場合は、パブリックフォルダへの所有者アクセス権限を持つユーザーだけがこれらの設定をカスタマイズできます。

パブリックフォルダにアーカイブ設定を適用する方法

- 1 **Enterprise Vault User Extensions** がインストールされている **Outlook** クライアントを使って、パブリックフォルダを表示します。
- 2 パブリックフォルダを右クリックして、ショートカットメニューの [プロパティ] をクリックします。
パブリックフォルダのプロパティが表示されます。
- 3 [Enterprise Vault] タブをクリックします。
Enterprise Vault のプロパティに、アーカイブ設定が現在適用されていないフォルダが表示されます。
- 4 [変更] をクリックします。
[Enterprise Vault プロパティの変更] ダイアログボックスが表示されます。
- 5 適用する設定を選択します。
カスタム設定は、パブリックフォルダポリシーのプロパティの [アーカイブ処理] ページの設定がロックされていない場合にのみ、パブリックフォルダに適用できます。
- 6 設定の適用が終了したら、[OK] をクリックします。

パブリックフォルダタスクのスケジュール設定

すべてのパブリックフォルダタスクは、設定したスケジュールに従って実行されます。

それぞれの **Exchange** パブリックフォルダタスクを以下に従って実行するように設定できます。

- サイトのプロパティの [サイトスケジュール] ページで定義したスケジュール。デフォルトでは、すべてのアーカイブタスクがこのスケジュールに従って実行されます。
- タスクの [スケジュール] プロパティページで定義した独自のスケジュール

単一タスクのスケジュールの修正方法

- 1 管理コンソールの左側のペインで階層を展開して、[Enterprise Vault サーバー] コンテナを表示します。
- 2 [Enterprise Vault サーバー] コンテナを展開します。
- 3 修正するタスクを実行しているコンピュータを展開します。
- 4 [タスク] をクリックします。
- 5 右側のペインで、修正するタスクをダブルクリックします。
- 6 [スケジュール] タブをクリックします。
- 7 必要に応じてスケジュールを修正します。

すべてのアーカイブタスクのスケジュールを修正する方法

- 1 管理コンソールで、対象ペイン (左ペイン) のコンテンツを展開して **Enterprise Vault** サイトを表示します。
- 2 **Enterprise Vault** サイトを右クリックして[プロパティ]を選択します。[サイトプロパティ]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [サイトスケジュール]タブをクリックします。
- 4 必要に応じてスケジュールを修正します。

アーカイブ対象パブリックフォルダの削除に関する注意事項

下位レベルのアーカイブ対象パブリックフォルダを削除する場合は注意が必要です。別のアーカイブ対象パブリックフォルダの下にあるアーカイブ対象パブリックフォルダを削除すると、フォルダは以前と同じアーカイブにアーカイブされます。この場合に、パブリックフォルダがアーカイブされないようにするには、下位レベルのパブリックフォルダがアーカイブされないように設定を変更します。

アーカイブ対象パブリックフォルダを削除する場合は管理コンソールを使います。管理コンソールを使うと、**Enterprise Vault** がルートパスフォルダに配置するマーカーが削除されるためです。

これは、たとえば、後で削除する予定のコンピュータで、**Exchange** パブリックフォルダタスクを含む **Enterprise Vault** のパイロットインストールを実行している場合に重要です。単に **Exchange** パブリックフォルダタスクのコンピュータを削除するだけではマーカーが削除されず、そのルートパスに別のアーカイブ対象パブリックフォルダを追加できません。

ジャーナルメッセージのアーカイブの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [ジャーナルメッセージのアーカイブ設定の準備](#)
- [ジャーナルメッセージをアーカイブする場合のボルトストアグループ、ボルトストア、パーティション](#)
- [ジャーナルアーカイブの作成](#)
- [ジャーナルアーカイブへの権限の追加](#)
- [Exchange ジャーナルタスクの追加](#)
- [ジャーナルポリシー設定のレビュー](#)
- [Exchange Server ジャーナルメールボックスのアーカイブ対象としての追加](#)
- [ジャーナルタスクの起動](#)
- [ジャーナルメッセージのアーカイブ設定後の処理](#)

ジャーナルメッセージのアーカイブ設定の準備

Enterprise Vault Exchange ジャーナルタスクを設定するには、すべてのメールが 1 つまたは複数のジャーナルメールボックスに転送されるように、Exchange Server をあらかじめ設定しておく必要があります。

ジャーナルメッセージをアーカイブする場合のボルトストアグループ、ボルトストア、パーティション

ジャーナルメールボックス内のすべてのアイテムはアーカイブする必要があります。

Exchange ジャーナルアーカイブと **Exchange** メールボックスアーカイブを両方設定している場合は、**Enterprise Vault** の最適化された単一インスタンスストレージを利用できます。ボルトストアグループ、ボルトストア、ボルトストアパーティションが要件に合わせて正しく設定されていることを確認してください。

『インストール/設定』ガイドのストレージの設定に関する章を参照してください。

ジャーナルアーカイブの作成

このセクションでは、ジャーナルアーカイブを作成する方法について説明します。ジャーナルアーカイブを作成する前に、ジャーナルボルトストアとパーティションを作成しておく必要があります。

ジャーナルアーカイブを作成する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインで、階層を展開して[アーカイブ]を表示します。
- 2 [アーカイブ]を展開します。
- 3 [ジャーナル]を右クリックし、ショートカットメニューを[新規作成]、[アーカイブ]の順にクリックします。

新規ジャーナルアーカイブウィザードが起動します。

- 4 ウィザードに従って操作します。ボルトストアを選択するように求めるメッセージが表示されたら、作成したストアを選択します。

次の情報を指定する必要があります。

- アーカイブの作成先となるボルトストア
- 必要なインデックスサービス
- インデックスレベル
- 課金用アカウント

ジャーナルアーカイブへの権限の追加

ジャーナルメールボックスからアーカイブされたアイテムにアクセスできるようにする必要のあるユーザーに対して、権限を追加する必要があります。

ユーザーに与えることができるアーカイブへのアクセス権限は、次のとおりです。

読み取り	アーカイブのアイテムの表示と取り込みを行うことができます。監査役など、ジャーナルメールボックスからアーカイブされたアイテムを検索する必要があります。あるユーザーは、読み取りアクセス権限以上の権限が必要です。
書き込み	ユーザーは、アーカイブにアイテムをアーカイブできます。ジャーナルメールボックスの所有者は、アーカイブに対する書き込みアクセス権限以上の権限が必要です。このアクセス権限があると、ジャーナルメールボックスからアイテムをアーカイブできます。
削除	ユーザーはアーカイブからアイテムを削除できます。 ここで削除権限を付与しても、[サイトプロパティ]ダイアログボックスの[アーカイブ設定]タブで[ユーザーはアーカイブからアイテムを削除できる]オプションが選択されていない場合は、ユーザーはアーカイブから削除できません。

ジャーナルアーカイブへの権限を追加する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインで、階層を展開して[アーカイブ]を表示します。
- 2 [アーカイブ]を展開します。
- 3 [ジャーナル]をクリックします。
- 4 右側のペインで、権限の一覧を修正するアーカイブをダブルクリックします。
アーカイブのプロパティが表示されます。
- 5 [権限]タブをクリックします。

Exchange ジャーナルタスクの追加

このセクションでは、Exchange ジャーナルタスクを追加する方法について説明します。

Exchange ジャーナルタスクを追加する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインのサイト階層を展開し、[Enterprise Vault サーバー] コンテナを表示します。
- 2 [Enterprise Vault サーバー] コンテナを展開します。
- 3 [Exchange ジャーナルタスク] を追加するコンピュータの名前を展開します。
- 4 [タスク] を右クリックし、ショートカットメニューを [新規作成]、[Exchange ジャーナルタスク] の順にクリックします。

新規 Exchange ジャーナルタスク ウィザードが起動します。

- 5 ウィザードに従って操作します。次の情報を指定する必要があります。
 - ジャーナルメールボックスをホストする Exchange Server。
 - タスクの名前。

- **Exchange Server** への接続時に使う **Enterprise Vault** システムメールボックス。これは **Exchange** メールボックスタスクが使うのと同じシステムメールボックスにすることができます。

ジャーナルポリシー設定のレビュー

Exchange Server ジャーナルメールボックスのアーカイブ時に使う設定は、使用する **Exchange** ジャーナルポリシーから指定されます。デフォルトの **Exchange** ジャーナルポリシーがあり、必要に応じて編集できます。代わりに、必要に応じて別のポリシーを作成し、デフォルトのポリシーとして異なるポリシーを設定することもできます。

デフォルトの **Exchange** ジャーナルポリシーの設定をレビューする方法

- 1 管理コンソールの左側のペインの[ポリシー]コンテナを展開します。
- 2 [Exchange]コンテナを展開し、[ジャーナル]をクリックします。
- 3 右側のペインの[デフォルトの **Exchange** ジャーナルポリシー]をダブルクリックします。
ポリシーのプロパティが表示されます。
- 4 [詳細]タブの設定を確認して、必要に応じて変更します。
それぞれの設定をクリックすると、設定する内容の説明を確認できます。設定については、管理コンソールのヘルプと『管理者ガイド』を参照してください。

Exchange Server ジャーナルメールボックスのアーカイブ対象としての追加

このセクションでは、**Exchange Server** ジャーナルメールボックスをアーカイブ対象として追加する方法について説明します。

メモ: **Exchange Server** ジャーナルのアーカイブの設定を完了すると、**Enterprise Vault** は直接ジャーナルメールボックスを対象にします。このため、同じ **Exchange** 組織にある **Exchange Server** にジャーナルメールボックスを移動する必要がある場合に、ジャーナルアーカイブを再設定する必要がありません。

Exchange Server ジャーナルメールボックスをアーカイブ対象として追加する方法

- 1 管理コンソールの左ペインの[対象]を展開します。
- 2 ジャーナルメールボックスを追加する **Exchange Server** がインストールされているドメインを展開します。
- 3 [Exchange Server]を展開します。

- 4 [Exchange Server]を展開します。
- 5 [ジャーナルメールボックス]を右クリックし、ショートカットメニューを[新規作成] > [ジャーナルメールボックス]の順にクリックします。
新規ジャーナルメールボックスウィザードが起動します。
- 6 ウィザードに従って操作します。次の情報を指定する必要があります。
 - アーカイブする Exchange ジャーナルメールボックスの名前
 - 使用する Exchange ジャーナルタスク
 - 適用する Exchange ジャーナルポリシー
 - アーカイブ済みアイテムに適用する保持カテゴリ
 - 使用するアーカイブ

ジャーナルタスクの起動

このセクションでは、Exchange ジャーナルタスクを起動する方法について説明します。

ジャーナルタスクを起動する方法

- 1 管理コンソールの左側のペインの Enterprise Vault サイト階層を展開し、[Enterprise Vault サーバー]コンテナを表示します。
- 2 [Enterprise Vault サーバー]コンテナを展開します。
- 3 開始する Exchange ジャーナルタスクのあるコンピュータの名前を展開します。
- 4 タスクをクリックします。
- 5 右側のペインで、タスクを右クリックし、ショートカットメニューの[開始]をクリックします。
通常は、この方法で Exchange ジャーナルタスクを開始する必要はありません。デフォルトでは、タスク制御サービスを起動すると、ジャーナルタスクが自動的に開始されます。
- 6 タスクは継続的に実行され、Exchange Server ジャーナルメールボックスからアイテムがすぐにアーカイブされます。アイテムはアーカイブされるとメールボックスから削除されます。ショートカットは作成されません。

ジャーナルメッセージのアーカイブ設定後の処理

ジャーナルメールボックスを監視し、アイテムが即座にアーカイブされていることを確認することが大切です。メールボックスの監視方法について詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。

Exchange Server ジャーナルメールボックスをカスタマイズして、アイテムを別のアーカイブや別の保持カテゴリでアーカイブできます。詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。

エンベロープジャーナル

この章では以下の項目について説明しています。

- [Enterprise Vault と Exchange Server のジャーナルレポートについて](#)

Enterprise Vault と Exchange Server のジャーナルレポートについて

エンベロープジャーナルは、Exchange Server でメッセージの完全な受信者一覧をキャプチャするために使用されます。Enterprise Vault Exchange ジャーナルタスクは、エンベロープメッセージを自動的に認識し、メッセージに応じて適切に処理します。

各ジャーナルメッセージは、次の 2 つの部分で構成されます。

- ジャーナルレポート (P1 エンベロープメッセージ)
- 元のメッセージ (P2 メッセージ)

ジャーナルレポート本文には、TO、CC、および BCC の受信者に加えて、分類されない受信者が表示される場合があります。これは、このような受信者の元のカテゴリを検出する方法がない場合に発生します。Enterprise Vault ではこのような受信者は非公開受信者に分類されます。

Enterprise Vault による検索などのアプリケーションの高度な機能を使用して非公開受信者を検索できます。インデックスプロパティ RNDN は、非公開受信者に対して使用されます。

非公開受信者は、Compliance Accelerator 検索と Discovery Accelerator 検索で認識されます。

ジャーナルレポートはメッセージ保存セットに元のメッセージとともに格納されますが、Enterprise Vault は現在アーカイブからのジャーナルレポートの取り込みをサポートしていません。

このセクションでは、Enterprise Vault ジャーナルタスクで異なる Exchange Server ジャーナルレポートを処理する方法について説明します。

Exchange Server 2013 以降用の Enterprise Vault Office Mail App の設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [Microsoft Office メールアプリケーションについて](#)
- [Enterprise Vault について Office Mail App](#)
- [Enterprise Vault Office Mail App のポリシー設定とオプション](#)
- [Enterprise Vault Office Mail App の使用に必要な HTTPS の初期設定](#)
- [Enterprise Vault Office Mail App の配備](#)
- [Enterprise Vault Office Mail App のユーザーのコンピュータに関する追加の必要条件](#)
- [特定のデバイスタイプに対する Enterprise Vault Office Mail App の無効化と再有効化](#)
- [ユーザーまたは組織のための Enterprise Vault Office Mail App の削除、無効化、再有効化](#)
- [Enterprise Vault Office Mail App のトラブルシューティング](#)

Microsoft Office メールアプリケーションについて

Microsoft の Office 用アプリケーションは、Office のクライアントアプリケーションの中でホストされる Web ページです。Web ページの機能に加えて、Office 用アプリケーションは Office アプリケーションおよびユーザーのコンテンツと連携できます。

Microsoft Office メールアプリケーションには Exchange Server 2013 以降が必要です。Web ページは、Outlook 2013 以降と Outlook Web App (OWA) for Exchange 2013 以降の現在選択している項目の次に表示されます。

Exchange Server 2016 では、Microsoft Office メールアプリケーションという用語は Microsoft Office アドインに、Outlook Web App は Outlook on the web に名前が変更されています。Enterprise Vault Office メールアプリケーションは Exchange Server 2013 以降、Outlook 2013 以降、Exchange Server 2013 以降の Outlook Web App (OWA) に適用されるため、現在、このマニュアルでは以前の用語が使われています。特に記載がない限り、これらの用語はサポート対象のすべてのバージョンを表します。

Microsoft Office メールアプリケーションについて詳しくは、Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

Enterprise Vault について Office Mail App

Enterprise Vault Office Mail App は Exchange 2013 以降上のメールボックスで使われる次のメールクライアントに Enterprise Vault の機能を提供します：

- Outlook 2013 以降。Enterprise Vault Outlook のアドインのインストール状態を問わず、Outlook の Office Mail App を有効にできます。
- OWA 2013 以降。Office Mail App は OWA ユーザーが唯一利用可能な Enterprise Vault クライアントです。

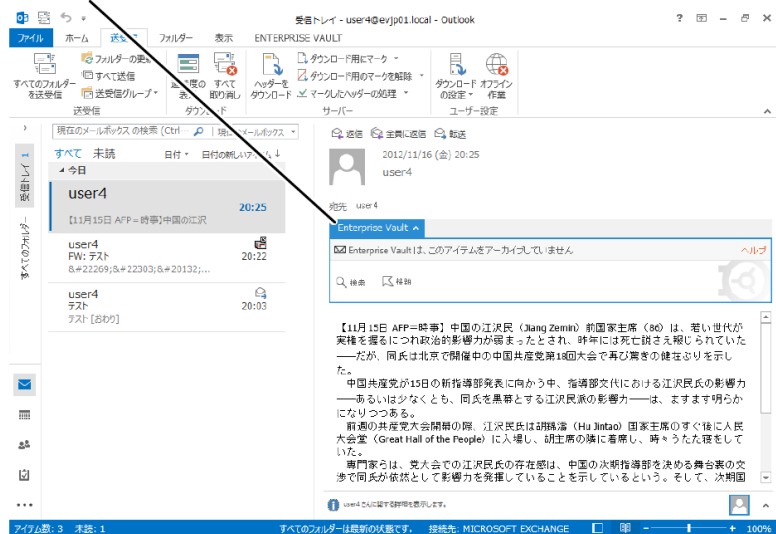
Enterprise Vault Office Mail App には、以前の Enterprise Vault と Exchange サーバーおよび OWA との統合よりもすぐれた次のような長所があります。

- Exchange サーバーにインストールの影響がありません。Exchange 管理シェルの Microsoft PowerShell の cmdlet を使って、Office Mail App を配備することをお勧めします。
- クライアントのインストールは Outlook または OWA の Office Mail App を有効にするために必要ではありません。

タブレットとスマートフォンでの Office Mail App の使用をサポートするオペレーティングシステムについて詳しくは、Enterprise Vault [Compatibility Charts](#) を参照してください。

次の図は Outlook 2013 での Office Mail App を示します。

Enterprise Vault Office メールアプリケーション



Enterprise Vault Office Mail App の機能

Enterprise Vault Office Mail App は次の Enterprise Vault クライアントからのさまざまな機能を提供します。

- Enterprise Vault Outlook アドイン
- Enterprise Vault と Exchange Server 2010 および OWA 2010 との統合

表 9-1 では違いについて説明しています。この情報は Outlook ユーザーに Enterprise Vault Office Mail App、Enterprise Vault Outlook アドイン、またはその両方を提供するかどうかを決めるときに役立ちます。他に記載がなければ、Outlook 2013 以降と OWA 2013 以降の両方の Enterprise Vault Office Mail App に適用されます。

表 9-1 Enterprise Vault Office メールアプリケーションと他の Enterprise Vault クライアントの違い

機能	相違点
ショートカットから開く、返信、転送する	アーカイブされた項目をショートカットから直接開いたり、返信したり、転送したりすることはできません。Office Mail App でアイテムを表示してから処理を実行しなければなりません。
	Mac コンピュータの場合、Enterprise Vault Office Mail App は Outlook 2016 に[表示]ボタンを配置しません。

機能	相違点
複数選択したアイテムの処理	Office Mail App では 1 つの選択アイテムを処理でき、複数の選択アイテムを処理することはできません。
アーカイブできる種類のアイテムすべての利用可否	Office Mail App は、ユーザーがメールアイテム、カレンダーアイテム、またはミーティング要求を選択したときのみ利用できます。 異なる種類のアーカイブ済みアイテムまたはショートカットのないアイテムを検索する場合、ユーザーは Enterprise Vault Search などの機能を開くことができます。
アーカイブされたアイテムの Outlook および OWA による削除のサポート	Office Mail App では、アーカイブされた項目を標準の Outlook または OWA 削除オプション (ショートカットを選択して[削除]キーを押すなど) を使用して削除する操作をサポートしません。 削除の処理を実行するためには、ユーザーは Office Mail App を使わなければなりません。
下書きアイテムの可用性	下書きアイテムでは Office Mail App を利用できません。
パブリックフォルダの利用可否	Office Mail App ではパブリックフォルダのアイテムを利用できません。
OWA Light クライアントの Enterprise Vault サポート	Office Mail App は OWA 2013 以降のプレミアムクライアントでのみ利用できます。OWA Light クライアントは Microsoft Office Mail App をサポートしていません。

Enterprise Vault Office Mail App のポリシー設定とオプション

Exchange デスクトップポリシーの Enterprise Vault Office Mail App 詳細設定にある [可用性] では、Office Mail App の可用性を制御します。Outlook と OWA のどちらか一方または両方を選択して、Office Mail App を利用できるように設定できます。他にも詳細設定を使用することによって、Office Mail App の動作を細かく制御できます。

Office Mail App の詳細設定について詳しくは、『Symantic Enterprise Vault 管理者ガイド』を参照してください。

Exchange デスクトップポリシーの [オプション] タブの設定を使用すれば、Office Mail App オプションの可用性を制御できますが、次のように制御できない項目もあります。

- [オプション] タブの [有効期限レポート] 設定: Office Mail App は [有効期限レポート] オプションを含みません。
- [オプション] タブの [ヘルプ] 設定: Office Mail App の [ヘルプ] オプションは常に利用できます。

- [オプション]タブの[ショートカットの削除]設定: このオプションは Office Mail App には適用されません。

Exchange デスクトップポリシーの[オプション]タブの設定について詳しくは、管理コンソールのヘルプを参照してください。

表 9-2 では、Office Mail App で利用できる Enterprise Vault オプションについて説明します。

表 9-2 Enterprise Vault Office Mail App オプション

Enterprise Vault Office Mail App オプション	メモ
[表示]: ショートカットからアーカイブ済みアイテムを表示	<p>Office Mail App の[表示]オプションは常に利用できる状態にあります。</p> <p>Office Mail App 詳細ポリシー設定[Mail App パーの動作]では、Office Mail App によってアイテムが開かれる方法を制御します。Office Mail App パーの[Enterprise Vault]タブをクリックすると次の両方の処理を実行するように指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ショートカットで利用できるオプションの表示 ■ 自動的に新しいウィンドウで項目を開く <p>デフォルトでは、自動的に項目を開かないで Office Mail App のオプションを表示します。</p>
[格納]: アイテムを手動でアーカイブ	<p>Office Mail App 詳細ポリシー設定の[モード]を使用して、Office Mail App のモードを選択できます。</p> <p>簡易モードはデフォルトです。ライトモードでは、Enterprise Vault はアイテムが入っているメールボックスフォルダのデフォルトの保持カテゴリを使用してアイテムをアーカイブします。フルモードでは、ユーザーはアイテムを手動でアーカイブするときに、保持カテゴリを選択できます。</p>
検索: Enterprise Vault Search を開く	Office Mail App から Enterprise Vault Search を開くことができます。
[復元]: アーカイブ済みアイテムの復元	<p>ユーザーはショートカットからアーカイブ済みアイテムを復元できます。</p> <p>Office Mail App の[表示]オプションでアーカイブ済みアイテムを開いた場合、アイテムが開いている間は[復元]オプションを利用できません。</p>
[削除]: アーカイブ済みアイテムの削除	他の Enterprise Vault クライアントと同様に、Office Mail App の[削除]オプションでは、選択されたショートカットおよびアーカイブ済みアイテムを削除します。

Enterprise Vault Office Mail App オプション	メモ
[キャンセル]: 処理の取り消し	Office Mail App の[キャンセル]オプションは、ユーザーによって取り消すことが可能な処理が実行されている間のみ、一時的に表示されます。

Enterprise Vault Office Mail App の使用に必要な HTTPS の初期設定

Office Mail App では、クライアント接続に Secure Sockets Layer (SSL) を使用する必要があります。このため、Enterprise Vault Office Mail App を実行する Enterprise Vault サーバーに適切な証明書で HTTPS が設定されていることを確認する必要があります。

Enterprise Vault 12.3 以降の新規インストールでは、IIS の Enterprise Vault 仮想ディレクトリにデフォルトで SSL が設定されます。Enterprise Vault 設定ウィザードは自己署名証明書を作成してインストールします。

証明書は認証局から取得してインストールすることを推奨します。認証局ではない別の入手元からの証明書の場合、ブラウザで警告が表示され、ユーザーによる証明書の受け入れが必要になる場合があります。証明書の受け入れの確認を求めるメッセージの表示は、Office Mail App では利用できません。その結果、Office Mail App ではユーザーに空白のウィンドウが表示されます。

SSL 証明書を要求してインストールする手順に関しては次のテクニカルノートを参照してください。

<https://www.veritas.com/docs/100038186>

Enterprise Vault Office Mail App の配備

Enterprise Vault Office Mail App は Outlook または OWA ではデフォルトでは表示されません。ユーザーの配備が必要です。

Exchange 管理シェルの Microsoft PowerShell の cmdlet を使って、Office Mail App を配備することを推奨します。

主な方法は次のとおりです。

- Enterprise Vault に対して有効になっている各ユーザーに Office Mail App を配備する。
- Office Mail App を組織レベルで配備する。
組織レベルで Office Mail App の配備を検討している場合、次のことに注意してください。

- Outlook 2013 以降や OWA 2013 以降では、Enterprise Vault で有効にされていないユーザーを含むすべてのユーザーに Office Mail App が表示されます。ユーザーが Enterprise Vault で有効になっていなければ、Office Mail App 内のメッセージで利用できないと表示されます。
- すべてのユーザーからの Office Mail App 要求に対して同じ Enterprise Vault サーバーが使用されるので、サーバーの全体的なパフォーマンスが影響を受ける可能性があります。

Office Mail App 向けの PowerShell cmdlet について

Microsoft PowerShell の次の cmdlet が Office Mail App を管理するために利用可能です。

Get-App	インストール済みの Office Mail App に関する情報を返します。
New-App	Office Mail App を配備します。
Remove-App	指定した Office Mail App を削除します。
Disable-App	特定のユーザーの特定の Office Mail App を無効にします。
Enable-App	特定のユーザーの Office Mail App を有効にします。
Set-App	Office Mail App の設定プロパティを設定します。

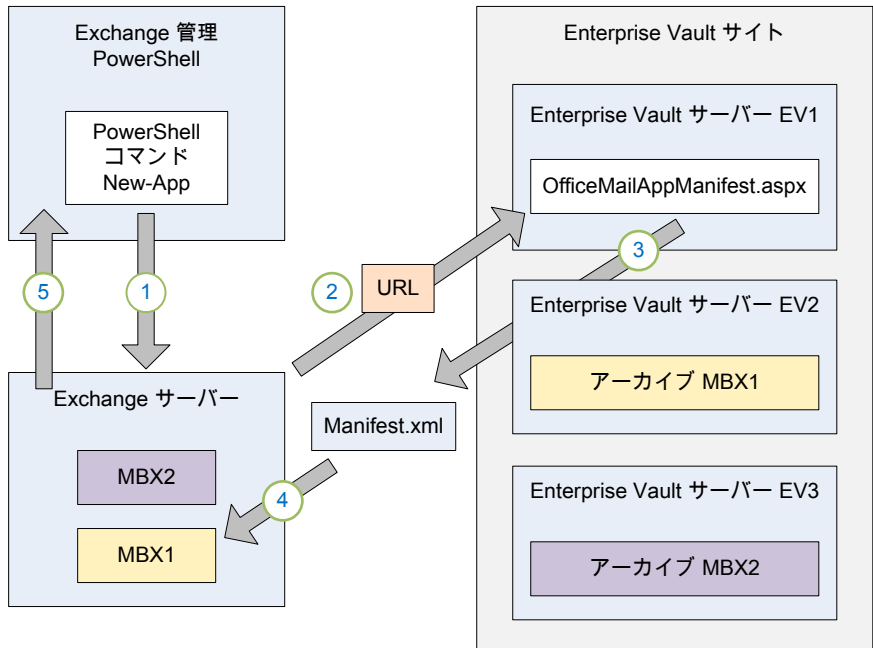
New-App cmdlet を使用した Office Mail App の配備について

[図 9-1](#) に、New-App cmdlet を使って Enterprise Vault Office Mail App を個々のユーザーに配備する場合の手順を示します。簡略化した構文の表示は図の先頭で示されています。

この手順は、組織全体での Office Mail App の配備と同様です。New-App cmdlet でも、メールボックスは 1 つのみ指定します。このメールボックスは、そのアーカイブがすべての組織レベルの要求を送信する Enterprise Vault サーバーに格納されるメールボックスである必要があります。この場合 Exchange サーバーは組織のすべてのメールボックス用にマニフェストファイルを設定します。その結果、単一の Enterprise Vault サーバーがすべてのユーザーに Office Mail App を配布する必要があります。

図 9-1 New-App cmdlet の概要

New-App -mailbox MBX1 -url URL



図の中の番号が示している手順は次のとおりです。

- 1 Exchange 管理シェルで New-App PowerShell cmdlet を実行します。
cmdlet で次を指定します。
 - アーカイブを有効にし、Office Mail App で有効にするメールボックス (MBX1)。
 - OfficeMailAppManifest.aspx ページの URL。
URL で指定するサーバーは、サイトにあるどの Enterprise Vault サーバーでも構いません。この例で、URL は EV1 という名前のサーバーを指定しています。
OfficeMailAppManifest.aspx の URL は、Enterprise Vault サーバー上の IIS で有効になっているプロトコルによって、HTTP または HTTPS を使用できます。
- 2 Exchange サーバーは Enterprise Vault サーバー EV1 にマニフェストファイルを設定するための要求を送信します。

- 3 EV1 で、OfficeMailAppManifest.aspx ページは MBX1 のためのマニフェストファイルを生成し、Exchange サーバーに送信します。マニフェストファイルには MBX1 用の Office Mail App の設定が含まれています。設定には Office Mail App がロードされる URL が含まれています。この例では MBX1 アーカイブが EV2 に格納されているため、URL は Enterprise Vault サーバー EV2 上にあります。
- 4 マニフェストファイルは Exchange サーバーの MBX1 と関連付けられます。
- 5 New-App cmdlet が完了します。

Enterprise Vault Office Mail App 用の New-App コマンドパラメータについて

New-App コマンドで、OfficeMailAppManifest.aspx ページを使用して Active Directory 属性 LegacyExchangeDN を指定する必要があります。必要であれば他のパラメータも指定できます。OfficeMailAppManifest.aspx ページは次のクエリー文字列パラメータをサポートします。

LegacyMbxDN	必須。ユーザー用の Active Directory 属性 LegacyExchangeDN。 LegacyExchangeDN 値に URI 予約文字が含まれる場合は、-Uri パラメータの LegacyExchangeDN 値をエンコードする必要があります。URI 予約文字の例を次に示します。 :/?#[]@ \$ & ' / + , ; =
OfficeAppName	省略可能。Office Mail App パー内の Office Mail App の名前。デフォルトの名前は Enterprise Vault です。
BaseURL	省略可能。Office Mail App のロードに使われるサーバーの EnterpriseVault 仮想ディレクトリの URL。この値を外部 URL または必要であれば特定の Enterprise Vault サーバーに設定できます。

無効な値が入力された場合、マニフェストファイルは生成されません。一般的な原因は次のとおりです。

- メールボックスのアーカイブが有効ではありません。
- -Uri パラメータの LegacyExchangeDN 値には予約文字が含まれるが、値はエンコードされない
- BaseURL 値が無効です。

マニフェストファイルが生成されない場合、New-App コマンドが次のようなエラーメッセージを返す場合があります。

```
The app couldn't be downloaded. Error message: The remote server
returned an error: (500) Internal Server Error.
```

Office Mail App のトラブルシューティング情報には、マニフェストファイルが作成されない場合に詳細なエラーメッセージを返すサンプルスクリプトが含まれています。

p.138 の「[Enterprise Vault Office Mail App マニフェストファイルが作成されない](#)」を参照してください。

個々のユーザーへの Enterprise Vault Office Mail App の配備

Enterprise Vault Office Mail App を個々のユーザーに配備するには、Exchange 管理シェルの `New-App` PowerShell cmdlet を使います。

p.121 の「[New-App cmdlet を使用した Office Mail App の配備について](#)」を参照してください。

メモ: User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange サーバーにログインする必要があります。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。

次の例では、`New-App` cmdlet を使って個々のユーザーが Office Mail App を使えるようにする方法を示します。

バッククォート (```) は PowerShell の行連結文字です。

```
Add-Type -AssemblyName System.Web
$Mbx = get-mailbox "メールボックス"

New-App -mailbox $Mbx.LegacyExchangeDN -Url `
("http://EV_server/EnterpriseVault/OfficeMailAppManifest.aspx?LegacyMbxDn=" +
[System.Web.HttpUtility]::UrlEncode($Mbx.LegacyExchangeDN))
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- `mailbox` はアーカイブが有効になっていて、Office Mail App を有効にするメールボックスの名前です。
- `EV_server` は、サイトにある任意の Enterprise Vault サーバーの名前です。この Enterprise Vault サーバーは Office Mail App のロードに使われているものとは限りません。Office Mail App のロードに使われる Enterprise Vault サーバーは、指定したメールボックスのアーカイブがあるサーバーです。指定したメールボックスの正しい Enterprise Vault サーバーの名前は、マニフェストファイル内に返されます。

ユーザーは、直接アクセスではなく外部から Enterprise Vault サーバーにアクセスすることが許されます。この場合、外部アクセスを提供するサーバーの URL を、マニフェストファイルで指定する必要があります。同じサーバーが内部アクセスにも使われます。例え

ば、サーバーは **Microsoft** 社の最新の脅威管理ゲートウェイサーバー (TMG) である場合があります。

次の例は、外部アクセスを提供するサーバーを示すマニフェストファイルを設定するための、OfficeMailAppManifest.aspx ページでの **BaseURL** パラメータの使用方法を示しています。

バッククォート (`) は PowerShell の行連結文字です。

```
Add-Type -AssemblyName System.Web
$Mbx = get-mailbox "mailbox"

New-App -mailbox $Mbx.LegacyExchangeDN -Url `
  ("http://EV_server/EnterpriseVault/OfficeMailAppManifest.aspx?LegacyMbxDn=" +
  [System.Web.HttpUtility]::UrlEncode($Mbx.LegacyExchangeDN) +
  "&BaseURL=https://external_access_server/EnterpriseVault")
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- *mailbox* はアーカイブが有効になっていて、Office Mail App を有効にするメールボックスの名前です。
- *EV_server* は、サイトにある任意の Enterprise Vault サーバーの名前です。この Enterprise Vault サーバーは Office Mail App のロードに使われているものとは限りません。Office Mail App のロードに使われる Enterprise Vault サーバーは、BaseURL パラメータで指定したサーバーです。
- *external_access_server* は外部アクセスを提供するサーバーの名前です。

p.168 の「[Outlook 2013 および OWA 2013 向けの Threat Management Gateway 2010 について](#)」を参照してください。

複数ユーザーへの Enterprise Vault Office Mail App の配備

次の例の PowerShell スクリプトは、Enterprise Vault Office Mail App を複数のユーザーに配備する方法を示します。すべてのユーザーは単一の組織単位内である必要があります。

ユーザー数が多い場合、この種類のスクリプトの完了に時間がかかる場合があります。スクリプトがユーザーを有効にする速度は、実行する特定の環境のシステムによって異なります。

メモ: User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange サーバーにログインする必要があります。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。

バッククォート (`) は PowerShell の行連結文字です。

```
Add-Type -AssemblyName System.Web
function EVDeploy([string]$evserver, [string]$ou) {
  Get-Mailbox -OrganizationalUnit $ou |
    ForEach-Object {
      If (New-App -mailbox $_.LegacyExchangeDN -ErrorAction:Ignore -Url `
        ("http://" + $evserver +
        "/EnterpriseVault/OfficeMailAppManifest.aspx?LegacyMbxDn=" +
        [System.Web.HttpUtility]::UrlEncode($_.LegacyExchangeDN))) {
        Write-host ("Deployed to: " + $_.DisplayName);
      } Else {
        If (Get-App -mailbox $_.LegacyExchangeDN `
          -Identity 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710 `
          -ErrorAction:Ignore) {
          Write-host ("Already deployed to: " + $_.DisplayName);
        } Else {
          Write-host ("Could not deploy to: " + $_.DisplayName);
        }
      }
    }
};

EVDeploy "EV_server" "org_unit"
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- *EV_server* は、サイトにある任意の Enterprise Vault サーバーの名前です。この Enterprise Vault サーバーは Office Mail App のロードに使われているものとは限りません。Office Mail App のロードに使われる Enterprise Vault サーバーは、指定したメールボックスのアーカイブがあるサーバーです。指定したメールボックスの正しい Enterprise Vault サーバーの名前は、マニフェストファイル内に返されます。
- *org_unit* は、Office Mail App を配備するユーザーを含む組織単位です。

メモ: このスクリプトの最終行の *EV_server* および *org_unit* のみを置換する必要があります。

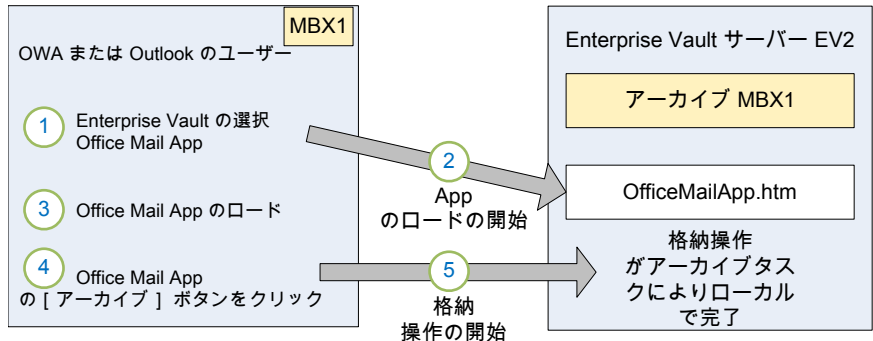
GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

個々のユーザーに配備した後の Enterprise Vault Office Mail App について

図 9-2 に、次の場合にどうなるかを示します。

- Office Mail App が個々のユーザーに配備された。
- ユーザーが Office Mail App を選択し、アイテムを格納した。

図 9-2 個々のユーザーに配備した後の Office Mail App



図の中の番号が示している手順は次のとおりです。

- 1 メールボックス MBX1 のユーザーが、OWA または Outlook で Office Mail App を選択します。
- 2 Office Mail App のロード要求が Enterprise Vault サーバー EV2 の OfficeMailApp.htm に送信されます。ここに MBX1 のアーカイブが格納されます。
- 3 Office Mail App がロードされます。
- 4 ユーザーはアーカイブされていないアイテムを選択し、[格納]をクリックします。
- 5 Office Mail App は EV2 にアイテムを格納する要求を送信します。EV2 で、Enterprise Vault はアーカイブ MBX1 にアイテムを格納します。

各 Enterprise Vault サーバーはアーカイブがそのサーバーで格納されるユーザーにのみ Office Mail App を提供します。

組織内への Enterprise Vault Office Mail App の配備

アーカイブを単一の Enterprise Vault インストールに対して行う Exchange 環境では、Office Mail App の配備を組織レベルで行うように決定することもできます。組織レベルの配備の長所は、個々のメールボックスに配備するよりも簡単で速いことです。

ただし、組織レベルで Enterprise Vault Office Mail App を配備することを検討する場合は次のことに注意してください。

- Outlook 2013 以降や OWA 2013 以降では、Enterprise Vault で有効にされていないユーザーを含むすべてのユーザーに Office Mail App が表示されます。ユー

ザーが Enterprise Vault で有効になっていなければ、Office Mail App 内のメッセージで利用できないと表示されます。

- すべてのユーザーからの Office Mail App 要求に対して同じ Enterprise Vault サーバーが使用されるので、サーバーの全体的なパフォーマンスが影響を受ける可能性があります。

この Enterprise Vault サーバーが利用できなくなると、Office Mail App をロードする要求がすべて失敗します。ラウンドロビン DNS 負荷分散ソリューションの使用によって、この影響、およびパフォーマンスへの他の影響を緩和できる場合があります。

Enterprise Vault Office Mail App を組織レベルで配備するには、Exchange 管理シェルの New-App PowerShell cmdlet を使います。

p.121 の「New-App cmdlet を使用した Office Mail App の配備について」を参照してください。

メモ: Org Custom Apps と User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使用して Exchange サーバーにログインする必要があります。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこれらのロールが割り当てられます。このアカウントに関連付けられたメールボックスは Exchange Server 2013 以降に存在する必要があります。

次の例は、組織向けに Office Mail App を有効にする場合の New-App cmdlet の使用方法を示しています。

バッククォート (') は PowerShell の行連結文字です。

```
Add-Type -AssemblyName System.Web
$Mbx = get-mailbox "メールボックス"

New-App -OrganizationApp -DefaultStateForUser:enabled -Url `
("http://EV_server/EnterpriseVault/OfficeMailAppManifest.aspx?LegacyMbxDn=" +
[System.Web.HttpUtility]::UrlEncode($Mbx.LegacyExchangeDN))
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- *mailbox* はアーカイブを有効にするメールボックスの名前です。このメールボックスは、そのアーカイブがすべての組織レベルの要求を送信する Enterprise Vault サーバーに格納されるメールボックスである必要があります。
- *EV_server* は、サイトにある任意の Enterprise Vault サーバーの名前です。この Enterprise Vault サーバーは Office Mail App のロードに使われているものとは限りません。すべてのユーザーの Office Mail App のロードに使われる Enterprise Vault サーバーは、指定したメールボックスのアーカイブがあるサーバーです。指定したメー

ルボックスの正しい Enterprise Vault サーバーの名前は、マニフェストファイル内に返されます。

組織のユーザーは、直接アクセスではなく外部から Enterprise Vault サーバーにアクセスすることが許されます。この場合、外部アクセスを提供するサーバーの URL を、マニフェストファイルで指定する必要があります。同じサーバーが内部アクセスにも使われます。例えば、サーバーは Microsoft 社の最新の脅威管理ゲートウェイサーバー (TMG) である場合があります。

次の例は、外部アクセスを提供するサーバーを示すマニフェストファイルを設定するための、OfficeMailAppManifest.aspx ページでの BaseURL パラメータの使用方法を示しています。

バッククォート (`) は PowerShell の行連結文字です。

```
Add-Type -AssemblyName System.Web
$Mbx = get-mailbox "mailbox"

New-App -OrganizationApp -DefaultStateForUser:enabled -Url `
("http://EV_server/EnterpriseVault/OfficeMailAppManifest.aspx?LegacyMbxDn=" +
[System.Web.HttpUtility]::UrlEncode($Mbx.LegacyExchangeDN) +
"&BaseURL=https://external_access_server/EnterpriseVault")
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- *mailbox* はアーカイブが有効になっているメールボックスの名前です。
- *EV_server* は、サイトにある任意の Enterprise Vault サーバーの名前です。この Enterprise Vault サーバーは Office Mail App のロードに使われているものとは限りません。すべてのユーザーの Office Mail App のロードに使われる Enterprise Vault サーバーは、BaseURL パラメータで指定したサーバーです。
- *external_access_server* は外部アクセスを提供するサーバーの名前です。

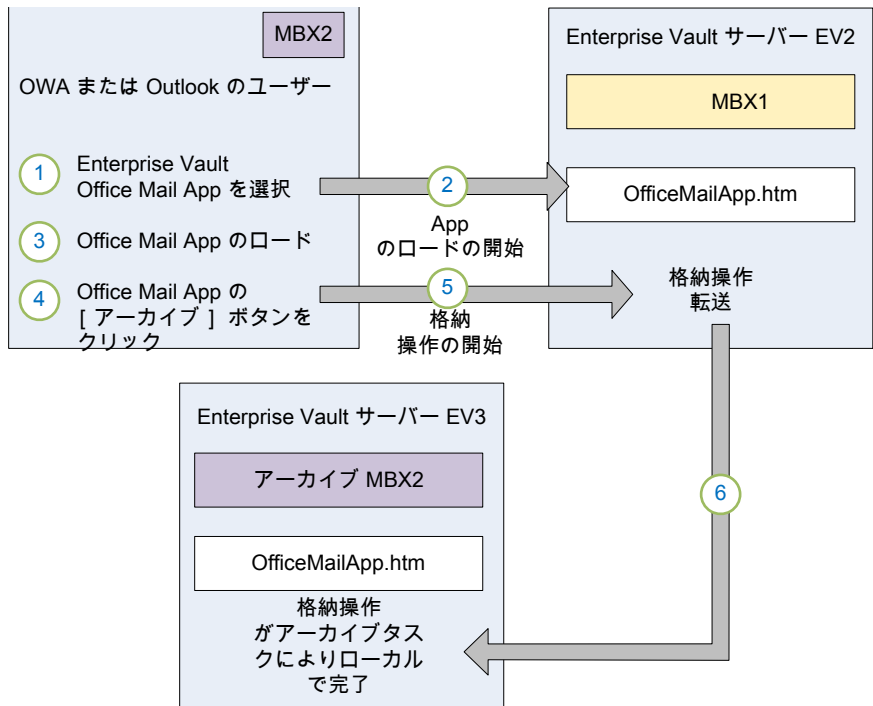
p.168 の「[Outlook 2013 および OWA 2013 向けの Threat Management Gateway 2010 について](#)」を参照してください。

組織に配備した後の Enterprise Vault Office Mail App について

図 9-3 に、次の場合にどうなるかを示します。

- Office Mail App が組織に配備された。
- New-App コマンドによって、メールボックス MBX1 および OfficeMailAppManifest.aspx の Enterprise Vault サーバー EV1 の URL が指定された。
- ユーザーが Office Mail App を選択し、アイテムを格納した。

図 9-3 組織に配備した後の Office Mail App



図の中の番号が示している手順は次のとおりです。

- 1 メールボックス MBX2 のユーザーが OWA または Outlook の Office Mail App を選択します。
 - 2 Office Mail App のロード要求が Enterprise Vault サーバー EV2 の OfficeMailApp.htm に送信されます。ここに MBX1 のアーカイブが格納されます。
 - 3 Office Mail App がロードされます。
 - 4 ユーザーはアーカイブされていないアイテムを選択し、[格納]をクリックします。
 - 5 Office Mail App は EV2 にアイテムを格納する要求を送信します。
 - 6 EV2 上の Enterprise Vault は Enterprise Vault サーバー EV3 に要求を転送します。EV3 で、Enterprise Vault はアーカイブ MBX2 にアイテムを格納します。
- 格納要求の転送は、アーカイブが EV2 上にあるユーザーには行われません。

Office Mail App の使用を有効にするためにアップグレードした後のメールボックスの同期

Enterprise Vault をアップグレードして Enterprise Vault Office Mail App を既存のユーザーのメールボックスに配備した場合、これらのメールボックスを同期化する必要があります。

メールボックスが同期化されるまでは、ユーザーが Enterprise Vault タブをクリックしても、Office のメールアプリが完全にはロードしません。どのボタンも表示されず、その代わりに状況に即したエラーメッセージが表示されます。

Exchange のメールボックスをアーカイブするタスクが自動実行されるよう設定されている場合は、次回そのタスクが実行されるときにメールボックスが同期化されます。起動タイプが手動の場合、または次回の実行予定時刻よりも前にそのタスクを実行しようという場合、管理コンソールからこのタスクを起動できるオプションがあります。起動タイプは、管理コンソールの [Exchange メールボックスのタスクプロパティ: 全般] タブで設定されます。

Enterprise Vault Office Mail App のユーザーのコンピュータに関する追加の必要条件

Enterprise Vault Office Mail App を使う際には、クライアントコンピュータが次の追加の必要条件を満たすことを確認してください。

- Internet Explorer 9 以降がクライアントコンピュータにインストールされている必要があります。サポート対象ブラウザの最新情報については、Enterprise Vault [Compatibility Charts](#) を参照してください。
- Internet Explorer のセキュリティ設定で、Enterprise Vault サーバーがローカルイントラネットゾーンに含まれている必要があります。ローカルイントラネットゾーンに Enterprise Vault サーバーが含まれることにより、ユーザーへの不要な認証指示が防止されます。
Enterprise Vault Outlook アドインのインストールにより、自動的に Enterprise Vault サーバーがローカルイントラネットゾーンのサイトに追加されることに注意してください。
- この要件は次の両方に該当する場合に適用されます。
 - Internet Explorer 10 以降がインストールされています。
 - Exchange サーバーと Enterprise Vault の Web サーバーは、Internet Explorer のセキュリティ設定の異なるゾーンにあります。

この場合、各ゾーンの [保護モードを有効にする] の設定内容は同じでなければなりません。

[保護モードを有効にする] の設定が異なる場合、[検索] などのブラウザウィンドウを開く Office Mail App が動作しない場合があります。この問題は、ユーザーが Internet

Explorer 10 以降で OWA から Office Mail App を実行した場合にのみ発生します。ユーザーが Outlook で Office Mail App を実行した場合には発生しません。ウィンドウを開けない場合は、エラーメッセージによってユーザーに通知されます。

- ユーザーのコンピュータは外部インターネットアクセスがなければなりません。Office Mail App を正しくロードするには、次の URL にアクセスする必要があります。
 - <https://appsforoffice.microsoft.com/lib/1.0/hosted/office.js>
 - <https://ajax.aspnetcdn.com/ajax/3.5/MicrosoftAjax.js>

特定のデバイスタイプに対する Enterprise Vault Office Mail App の無効化と再有効化

配備後の Enterprise Vault Office Mail App は、デフォルトによりコンピュータ、タブレット、電話に対して有効化されます。Enterprise Vault サーバー上の web.config ファイルにエントリを追加して、これらのデバイスタイプのいずれかに対して Office Mail App を無効化できます。たとえば、タブレットと電話に対して Office Mail App を無効化し、コンピュータに対して有効のままにしておくことができます。

web.config ファイルは、たとえば C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\WebApp のように、Enterprise Vault インストールフォルダ内の WebApp フォルダにあります。

デバイスタイプを無効化すると、Enterprise Vault タブは継続的に表示されますが、Office Mail App に通常のオプションが表示されなくなります。その代わりに、次のメッセージが表示されます。

The Enterprise Vault Office Mail App is not available on this device

特定のデバイスタイプに対して Office Mail App を無効化するには

- 1 web.config のコピーを作成し、後で復帰できるようにコピーの名前を変更しておきます。
- 2 web.config をテキストエディタで開きます。

メモ: ユーザーアカウント制御 (UAC) により、通常の場合で web.config を変更できない場合があります。その場合は、WebApp フォルダから編集できる場所にコピーします。

- 3 <appsettings> セクションが存在しない場合は追加します。開始と終了タグは <appsettings> と </appsettings> です。
- 4 <appsettings> セクションに次の行を追加します:

```
<add key="key_name" value="false"/>
```

ここで、`key_name` は次のいずれかです。

- コンピュータに対して Office Mail App を無効化する場合:
`OMAShouldRunOnDesktop`。
- タブレットに対して Office Mail App を無効化する場合: `OMAShouldRunOnTablet`。
- 電話に対して Office Mail App を無効化する場合: `OMAShouldRunOnPhone`。

5 `web.config` を保存して閉じます。

6 必要な場合は、編集した `web.config` ファイルを ¥WebApp フォルダをコピーして戻します。

特定のデバイスタイプに対して Office Mail App を再有効化するには

- 1 上記の 1 と 2 の手順を繰り返します。
- 2 `<appsettings>` セクションで次のいずれかを実行します。
 - デバイスタイプの無効化を指定した行を削除します。
 - 関連する行で、`false` から `true` に値を変更します。
- 3 上記の 5 と 6 の手順を繰り返します。

ユーザーまたは組織のための Enterprise Vault Office Mail App の削除、無効化、再有効化

`Remove-App PowerShell cmdlet` を使って、個々のユーザーまたは組織の Enterprise Vault Office Mail App を削除できます。

`Disable-App cmdlet` を使って、個々のユーザーの Office Mail App を無効にできます。組織レベルでインストールされた Office Mail App は無効にできません。

Office Mail App を無効にした後、`Enable-App cmdlet` を使って再度有効にすることができます。

`Disable-App` で Office Mail App を無効にすると、Office Mail App がロードされないため、Enterprise Vault のタブが Office Mail App バーに表示されなくなります。この代わりとして、より簡単に元に戻せる別の方法によって、特定のデバイスタイプに対して Office Mail App を無効にすることができます。この方法を使用すれば、Office Mail App はロードされます。これによって、Office Mail App バーに Enterprise Vault タブが表示されますが、通常のオプションが使用できなくなります。

p.132 の「特定のデバイスタイプに対する Enterprise Vault Office Mail App の無効化と再有効化」を参照してください。

個々のユーザーの Office Mail App を削除する方法

- 1 User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server にログインします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。
- 2 Exchange 管理シェルの開きます。
- 3 次の例に基づいて PowerShell コマンドを実行してください。

```
Remove-App -mailbox mailbox -Identity 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710
```

mailbox は Office Mail App を削除するメールボックスです。

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

処理を確認するメッセージが表示されます。

- 4 確認するには、応答を入力して Enter キーを押します。

組織の Office Mail App を削除する方法

- 1 User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server にログインします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。
- 2 Exchange 管理シェルの開きます。
- 3 次の PowerShell コマンドを入力します。

```
Remove-App -OrganizationApp -Identity 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710
```

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

処理を確認するメッセージが表示されます。

- 4 確認するには、応答を入力して Enter キーを押します。

個々のユーザーの Office Mail App を無効にする方法

- 1 User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server にログインします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。
- 2 Exchange 管理シェルの開きます。

3 次の例に基づいて PowerShell コマンドを実行してください。

```
Disable-App -mailbox mailbox -Identity 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710
```

mailbox は Office Mail App を無効にするメールボックスです。

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

処理を確認するメッセージが表示されます。

4 確認するには、応答を入力して Enter キーを押します。

個々のユーザーの Office Mail App を再度有効にする方法

1 User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server にログインします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。

2 Exchange 管理シェルの開きます。

3 次の例に基づいて PowerShell コマンドを実行してください。

```
Enable-App -mailbox mailbox -Identity 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710
```

mailbox は Office Mail App を再度有効にするメールボックスです。

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

処理を確認するメッセージが表示されます。

4 確認するには、応答を入力して Enter キーを押します。

Enterprise Vault Office Mail App のトラブルシューティング

このセクションには、次のトピックが含まれます:

- 「Enterprise Vault Office Mail App: クライアントのトレース」
- 「Enterprise Vault Office Mail App: サーバーのトレース」
- 「Enterprise Vault Office Mail App の配備の確認」
- 「Enterprise Vault Office Mail App マニフェストファイルが作成されない」
- 「Enterprise Vault Office Mail App を組織レベルで配備できない」
- 「Enterprise Vault Office Mail App のウィンドウは空白またはエラーメッセージを含んでいます」
- 「Enterprise Vault Office Mail App の処理が失敗し、エラーメッセージが表示されます」

Enterprise Vault Office Mail App: クライアントのトレース

Enterprise Vault Office Mail App はクライアントコンピュータのコンソールトレースウィンドウに書き込みます。

新しいウィンドウのコンソールトレースを起動するには

- ◆ Ctrl キーを押したまま、Enterprise Vault Office Mail App のウィンドウの[ヘルプ]をクリックしてください。

Enterprise Vault Office Mail App: サーバーのトレース

DTrace ユーティリティを使うことで、Enterprise Vault サーバー上で起きる Office Mail App の問題をトレースできます。

表 9-3 に、DTrace で監視する処理を示します。

表 9-3 Office Mail App で監視する処理

処理	説明
W3wp.exe	この処理は、.aspx のページをホストしています。この処理をトレースすると、.aspx のページでのエラーを表示できます。
AgentClientBroker.exe	Enterprise Vault では、アーカイブ、復元、削除、または表示するアイテムに最初にマーク付けするときに、AgentClientBroker.exe を使います。この処理をトレースすると、Exchange サーバーへの接続時のエラーを表示できます。
ShoppingService.exe	Enterprise Vault は、この処理を復元および表示機能の一部として使用します。
RetrievalTask.exe	Enterprise Vault では、アイテムを取り込むときに、この処理を使用します。
StorageRestore.exe	Enterprise Vault では、アイテムを復元するときに、この処理を使用します。
StorageDelete.exe	Enterprise Vault では、アイテムを削除するときに、この処理を使用します。
StorageArchive.exe	Enterprise Vault では、アイテムをアーカイブするときに、この処理を使用します。

DTrace について詳しくは Enterprise Vault の『ユーティリティ』ガイドを参照してください。

Enterprise Vault Office Mail App の配備の確認

Enterprise Vault Office Mail App の配備についての次の情報を Get-App PowerShell cmdlet を使って調べることができます。

- Office Mail App が組織レベルで配備されているかどうか。
- Office Mail App が個別に配備されたメールボックスのリスト。

Office Mail App が組織レベルで配備されているかどうか確認する方法

- 1 User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server にログインします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。
- 2 Exchange 管理シェルの開きます。
- 3 次を実行します。

```
Get-App -OrganizationApp -Identity 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710
```

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

このコマンドでは、Office Mail App が配備されていることが報告されるか、アプリケーション ID が見つからなかったというエラーが表示されます。

Office Mail App が個々に配備されたメールボックスをリストする方法

- 1 User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server にログインします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。
- 2 Exchange 管理シェルの開きます。
- 3 次を実行します。バッククォート (`) は PowerShell の連結文字です。

```
Get-Mailbox |
ForEach {
    If (Get-App -mailbox $_.LegacyExchangeDN `
        -Identity 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710 `
        -ErrorAction:Ignore | Where {$_.Type -Eq "Private"})
    {Write-Host $_.DisplayName} }
```

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

このコマンドでは、Office Mail App が個々に配備されたすべてのメールボックスの表示名がリストされます。

Enterprise Vault Office Mail App マニフェストファイルが作成されない

OfficeMailAppManifest.aspx ページで、New-App PowerShell cmdlet に対して無効なパラメータ値を入力した場合、マニフェストファイルは作成されません。cmdlet は失敗し、次のようなエラーメッセージが返されます。

```
The app couldn't be downloaded. Error message: The remote server
returned an error: (500) Internal Server Error.
```

このエラーの一般的な原因は次のとおりです。

- Enterprise Vault に対してユーザーを有効にできません。
- -Url パラメータの LegacyExchangeDN 値には予約文字が含まれるが、値はエンコードされない
- BaseURL 値が無効です。

次に、指定した個々のユーザーに対してマニフェストファイルが作成されない場合に詳細なエラーメッセージを返す例を示します。このスクリプトには、アプリケーションのマニフェストをファイルにダウンロードしてから URL の代わりに New-App cmdlet でファイルを指定する方法も示されています。

```
Add-Type -AssemblyName System.Web
$Mbx = get-mailbox "メールボックス"
$uri = new-object system.uri(
    "http://EV_server/EnterpriseVault/OfficeMailAppManifest.aspx?LegacyMbxDn=" +
    [System.Web.HttpUtility]::UrlEncode($Mbx.LegacyExchangeDN))
$webclient = New-Object Net.Webclient
$webClient.UseDefaultCredentials = $true
try
{
    $bytes = $webclient.DownloadData($uri)
    New-App -mailbox $Mbx.LegacyExchangeDN -FileData $bytes
}
catch [Net.WebException]
{
    [Net.HttpWebResponse] $webResponse = [Net.HttpWebResponse]$_.Exception.Response;
    Write-Warning $webResponse.StatusDescription
}
```

それぞれの内容は次のとおりです。

- *mailbox* は Office Mail App の使用許可を与えるメールボックスの名前です。
- *EV_server* は Enterprise Vault サーバーの名前です。

Enterprise Vault Office Mail App を組織レベルで配備できない

Enterprise Vault Office Mail App を組織レベルで配備するには、「Org Custom Apps」と「User Options」の管理ロールが割り当てられているアカウントを使用して Exchange サーバーにログインする必要があります。このアカウントに関連付けられたメールボックスが 2013 より前のバージョンの Exchange Server に存在している場合、New-App コマンドが失敗します。次の例のようなエラーメッセージが返されます。

```
Cannot open mailbox /o=Example/ou=Exchange Administrative Group
(FYDIBOHF23SPDLT)/cn=Configuration/cn=Servers/cn=EX01/
cn=Microsoft System Attendant.
+ CategoryInfo           : NotSpecified:
(example.local/Users/Administrator:ADObjectId) [New-App],
MailboxInTransitException
+ FullyQualifiedErrorId :
[Server=EX03,RequestId=7f1977fb-0bac-4ca1-99d7-33b7db3a5da2,
TimeStamp=04/08/2015 13:26:43] [FailureCategory=
Cmdlet-MailboxInTransitException]
4A87ABB,Microsoft.Exchange.Management.Extension.NewApp
+ PSComputerName         : ex03.example.local
```

この問題を解決するには、アカウントのメールボックスを Exchange Server 2013 以降のバージョンに移行して、New-App コマンドを再実行します。

Enterprise Vault Office Mail App のウィンドウは空白またはエラーメッセージを含んでいます

Enterprise Vault Office Mail App は Office Mail App バーに表示される場合がありますが、そのウィンドウは空白かまたはエラーメッセージのみを表示します。

この問題が発生したら、次の手順を実行します。

- 複数の Enterprise Vault サーバーがある場合、Enterprise Vault が Office Mail App をロードする際にどの Enterprise Vault サーバーを要求するかを決定します。
- クライアントコンピュータから次の Web ページをロードできるかどうか調べてください。

https://EV_server/EnterpriseVault/OfficeMailApp.aspx

EV_server は、Office Mail App のロード元となる Enterprise Vault サーバーの名前です。

直接 OfficeMailApp.aspx へナビゲートすると次のことを表示することができます。

- 証明書のエラーがあるかどうか
 - Web ページをロードするときに特定の問題があるかどうか
- Office Mail App をこの方法でロードすると、完全には初期化されません。

- 次の URL がクライアントコンピュータからアクセス可能であることを確認します。

- <https://appsforoffice.microsoft.com/lib/1.0/hosted/office.js>

- <https://ajax.aspnetcdn.com/ajax/3.5/MicrosoftAjax.js>

Office Mail App を正しくロードするには、これらの URL へのアクセスが必要です。それらがアクセス可能でない場合、クライアントコンピュータがインターネット接続を備えていないか、または接続速度が遅すぎるためと考えられます。

Get-App cmdlet を使って Enterprise Vault サーバーを判断する方法

- 1 User Options の管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server にログインします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。

- 2 Exchange 管理シェルの開きます。

- 3 Office Mail App が組織に配備されている場合、手順 4 に進みます。

Office Mail App が個々のユーザーに配備されている場合、次を実行します。

```
Get-App 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710 -Mailbox mailbox | Format-List ManifestXML
```

mailbox は、トラブルシューティングしているメールボックスです。

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

- 4 Office Mail App が組織に配備されている場合、次を実行します。

```
Get-App 0cc6d075-e610-4b8a-90c6-1460e6d4d710 -OrganizationApp | Format-List ManifestXML
```

GUID は Enterprise Vault Office Mail App を識別する ID で、変わりません。

- 5 出力された XML で、<DesktopSettings> ノードを探します。DefaultValue には、Enterprise Vault が Office Mail App をロードする際に要求する Enterprise Vault サーバー URL が含まれています。

Enterprise Vault Office Mail App の処理が失敗し、エラーメッセージが表示されます

ユーザーが Enterprise Vault Office Mail App のオプションをクリックすると、問題が発生して処理が失敗する場合があります。Office Mail App にエラーメッセージが表示されます。

処理が失敗したときにエラーメッセージの上にカーソルを置くと、追加情報が表示されます。

たとえば、[アイテムのアーカイブに失敗しました]というエラーメッセージが表示された場合、追加情報として表示される可能性のあるメッセージは次のようなものです。

サービスが実行されていないため、Enterprise Vault は要求された処理を実行できません。

Office Mail App クライアントのトレースには、さらに多くの詳しい情報が含まれています。

p.136 の「[Enterprise Vault Office Mail App: クライアントのトレース](#)」を参照してください。

Enterprise Vault から Exchange Server 2010 上 の OWA クライアントへのア クセスの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [OWA クライアントの Enterprise Vault の機能について](#)
- [Exchange Server 2010 環境の Enterprise Vault OWA Extensions](#)
- [OWA ユーザーの Enterprise Vault アクセスの設定手順](#)
- [Exchange 2010 CAS サーバーから匿名で接続するための Enterprise Vault の設定](#)
- [ExchangeServers.txt ファイルの作成](#)
- [データアクセスアカウントの設定](#)
- [OWA 設定用の管理サービスの再起動とメールボックスの同期](#)
- [OWA 用の Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーの設定](#)
- [Enterprise Vault OWA 2010 Extensions のインストール](#)
- [OWA で使うための Exchange Server 2010 CAS プロキシ処理の追加の設定手順](#)

OWA クライアントの Enterprise Vault の機能について

Exchange Server 2010 の OWA クライアントの Enterprise Vault にアクセスするには、すべての Exchange Server 2010 CAS コンピュータに Enterprise Vault OWA 2010 Extensions をインストールします。

Exchange Server 2013 以降で提供しているメールボックスの場合は、OWA クライアントの Enterprise Vault Office Mail App に Enterprise Vault 機能が用意されています。この機能は Exchange Server 2010 OWA クライアントのユーザーが利用可能な機能とはわずかに異なります。

p.116 の「[Enterprise Vault について Office Mail App](#)」を参照してください。

メールボックスが Exchange Server 2010 で提供されるユーザーが利用可能な機能を次に示します。

- 標準の OWA 機能を使ったアイテムの表示。
- ショートカットまたは元のアイテムに対する応答とそれらの転送（標準の OWA 機能を使用）。
- Enterprise Vault のボタンまたはメニューオプションを使ったアイテムとフォルダのアーカイブ。デフォルトのアーカイブプロパティは変更可能です。
- Enterprise Vault のボタンまたはメニューオプションを使ったアイテムの復元。復元プロパティは設定可能です。
- Enterprise Vault のボタンやメニューオプション、または標準の OWA 機能を使ったショートカットやアーカイブ済みアイテムの削除。
- アーカイブの参照と検索。
- アーカイブされたパブリックフォルダアイテムの表示。
- 管理者による、プレミアムクライアントと基本クライアントで利用可能な Enterprise Vault の機能の設定。

Enterprise Vault 管理コンソールの Exchange デスクトップポリシー設定を使うと、OWA 以降のクライアントの Enterprise Vault の機能をカスタマイズできます。Exchange デスクトップポリシーの[オプション]ページの設定を使うと、OWA と Outlook クライアントでユーザーが使える機能を選択できます。Exchange デスクトップポリシーの[詳細]ページにある OWA 設定と Outlook 設定の各リストを使うと、異なるクライアントの Enterprise Vault 機能の動作をカスタマイズできます。詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。

Outlook Anywhere クライアント(RPC over HTTP モードで働く Outlook クライアント)から Enterprise Vault にアクセスする場合は Enterprise Vault の拡張機能は不要です。

p.161 の「[Enterprise Vault への Outlook Anywhere クライアントアクセスの設定](#)」を参照してください。

Enterprise Vault の OWA フォームベース認証について

フォームベース認証を使う場合には OWA ユーザーは Enterprise Vault による検索を開始するとき、またはアーカイブ済みアイテムを Enterprise Vault 表示モードを使って初めて開くときにログイン資格情報を再入力する必要があります。これは、異なる認証が必要な別の Web サーバーにアクセスするために要求されます。

Exchange デスクトップポリシーの[詳細]ページにある OWA 設定で、[表示モード]を [Enterprise Vault]に設定できます。[表示モード]設定は、カスタムショートカットのバナーで[元のアイテムを表示します]をクリックしたときの動作を制御します。OWA がこの設定の値として設定されている場合は、OWA によって元のアイテムが表示されます (OWA メッセージのように見えます)。Enterprise Vault がこの値に設定されている場合は、Enterprise Vault によって元のアイテムが表示されます。

Exchange Server 2010 環境の Enterprise Vault OWA Extensions


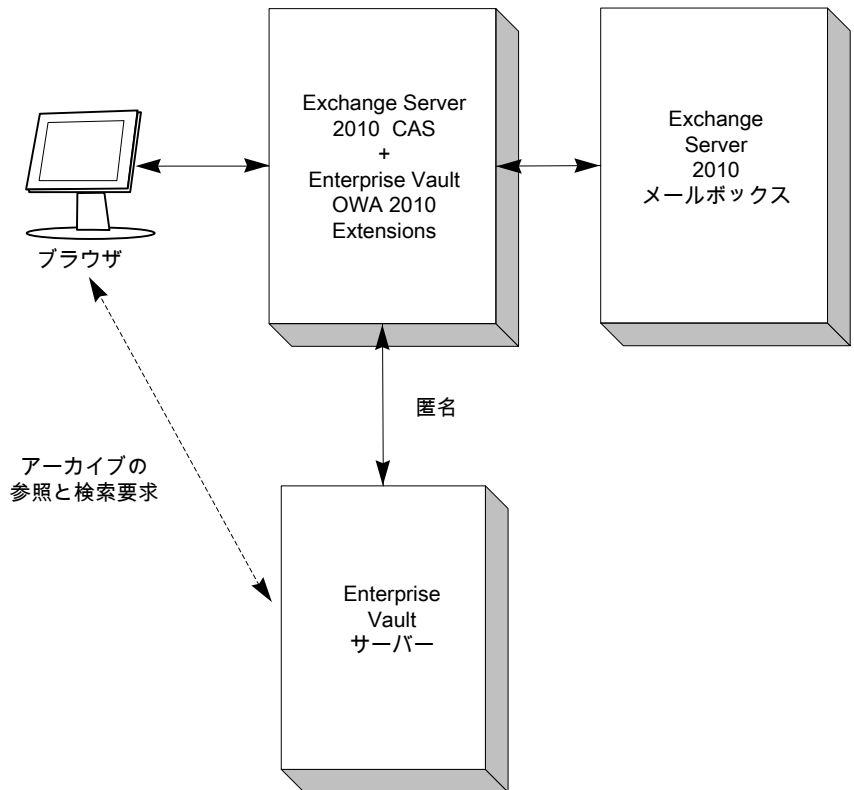
 10-1 に、Exchange Server 2010 環境の単純な OWA を示します。

図 10-1 Exchange Server 2010 環境の単純な OWA



この設定では、Exchange CAS コンピュータに Enterprise Vault OWA 2010 Extensions をインストールしています。通常、Exchange メールボックスサーバーは別のコンピュータにありますが、Exchange CAS と同じ場所に配置することもできます。

OWA クライアントユーザーがアーカイブを参照または検索するときに、クライアントが常に Enterprise Vault サーバーの Enterprise Vault Web サーバーに直接接続しようとします。

クライアントがファイアウォールソフトウェアを使って Exchange CAS コンピュータに接続する場合は、Web 公開ルールを使って Exchange CAS の URL と Enterprise Vault Web サーバーの URL の両方を公開する必要があります。

Exchange CAS は、匿名認証を使って Enterprise Vault サーバーに接続します。Enterprise Vault サーバーでは、匿名接続を管理するためにデータアクセスアカウントが設定されます。

クラスタ化された OWA の設定

Exchange Server 2010 の OWA 環境では、メールボックスサーバーはクラスタ化できませんが、CAS サーバーはクラスタ化できません。CAS サーバーは Enterprise Vault サーバーにアクセスするため、Exchange Server 2010 メールボックスサーバーをクラスタ化しても、Enterprise Vault の設定は影響を受けません。

OWA ユーザーの Enterprise Vault アクセスの設定手順

このセクションで説明するタスクを開始する前に、Exchange サーバーと Enterprise Vault サーバーが『Veritas Enterprise Vault インストール/設定』の「OWA の前提条件」で説明している前提条件を満たしていることを確認することが重要です。

Enterprise Vault OWA 2010 Extensions を Exchange サーバーにインストールする場合は、必ず、すべての Exchange サーバーに同じ Enterprise Vault リリースバージョンの拡張機能をインストールします。Extensions をインストールしたすべての Exchange Server は同じ Exchange Server Service Pack であり、同じ Hotfix レベルである必要があります。

表 10-1 に、OWA クライアントに Enterprise Vault のアクセスを設定する必要があるタスクを示します。拡張機能をインストールする前に完了が必要なタスクがいくつかあります。また、OWA 環境によっては、インストール後に必要な手順もあります。

表 10-1 OWA クライアントの Enterprise Vault の設定手順

手順	作業	関連情報
手順 1	Enterprise Vault サーバーでデータアクセスアカウントを設定します。	<p>データアクセスアカウントを使って Exchange 2010 CAS サーバーからの匿名接続を受け入れます。</p> <p>p.148 の「Exchange 2010 CAS サーバーから匿名で接続するための Enterprise Vault の設定」を参照してください。</p> <p>このタスクを完了するには Enterprise Vault 管理サービスを再起動する必要があります。</p>

手順	作業	関連情報
手順 2	Enterprise Vault 管理コンソールで Exchange デスクトップポリシーの OWA のオプションを設定します。	必要に応じて、Exchange デスクトップポリシーの OWA のオプションを設定して OWA クライアントで利用可能な Enterprise Vault の機能を変更できます。 p.151 の「OWA 用の Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーの設定」を参照してください。
手順 3	Exchange 2010 CAS サーバーコンピュータに、Enterprise Vault OWA 2010 Extensions をインストールします。	p.155 の「Enterprise Vault OWA 2010 Extensions のインストール」を参照してください。
手順 4	Exchange Server 2010 環境に CAS プロキシサーバーを搭載している場合は、CAS プロキシサーバーで Exchange Web サービスの偽装をさせるようにする必要があります。	p.156 の「OWA で使うための Exchange Server 2010 CAS プロキシ処理の追加の設定手順」を参照してください。
手順 5	ファイアウォールソフトウェアを使っている場合は Exchange CAS サーバーの URL と Enterprise Vault Web サーバーの URL の両方を公開するルールを設定します。	OWA 2010 のクライアントユーザーがアーカイブを参照または検索することを選択した場合にはクライアントは Enterprise Vault サーバーに直接アクセスしようとします。そのため、Enterprise Vault サーバーの URL をクライアントに公開する必要があります。 p.168 の「Outlook 2013 および OWA 2013 向けの Threat Management Gateway 2010 について」を参照してください。 p.169 の「OWA 2010 から Enterprise Vault にアクセスする場合の ISA Server 2006 の設定」を参照してください。 Enterprise Vault への内部アクセスと外部アクセス用に異なる URL を設定する方法について詳しくは、Veritas サポート Web サイトで次の文書を参照してください。 https://www.veritas.com/docs/100019125

Enterprise Vault OWA 2010 Extensions をインストールするとき、または OWA を使ってアーカイブ済みアイテムにアクセスするときに問題が起きた場合は、Veritas サポート Web サイトで次の文書を参照してください。<https://www.veritas.com/docs/100020572>

この文書には、Enterprise Vault OWA 2010 Extensions の詳しいトラブルシューティング情報が記載されています。

Exchange 2010 CAS サーバーから匿名で接続するための Enterprise Vault の設定

Exchange 2010 CAS サーバーから Enterprise Vault サーバーに匿名で接続できるようにするには、[表 10-2](#) に示すタスクを実行します。

表 10-2 匿名接続の設定手順

手順	作業	関連情報
手順 1	各 Enterprise Vault サーバーで IIS ロールと機能の委任権限を正しく設定していることを確認します。	『Veritas Enterprise Vault インストール/設定』の「Requirements for OWA 2010」を参照してください。
手順 2	OWA サーバーから接続要求を受け取る可能性がある Enterprise Vault サーバーごとに、ExchangeServers.txt ファイルを Enterprise Vault インストール先フォルダに作成します。	このファイルに、Enterprise Vault サーバーに接続する Exchange 2010 CAS サーバーすべての IP アドレスの一覧を含めます。 p.149 の「ExchangeServers.txt ファイルの作成」 を参照してください。
手順 3	Active Directory で、Exchange サーバーから Enterprise Vault サーバーに匿名で接続するために使うドメインアカウントを作成または選択します。	このアカウントはデータアクセスアカウントと呼ばれます。 p.149 の「データアクセスアカウントの設定」 を参照してください。 データアクセスアカウントは、Domino メールボックスアーカイブの Web アプリケーションに匿名で接続する場合にも使います。Enterprise Vault OWA 2010 Extensions と Domino メールボックスアーカイブの両方を設定する場合は、どちらの機能にもデータアクセスアカウントと同じアカウントを使うことが重要です。
手順 4	ExchangeServers.txt ファイルを作成した Enterprise Vault サーバーごとに owauser.wsf スクリプトを実行してデータアクセスアカウントを設定します。	p.149 の「データアクセスアカウントの設定」 を参照してください。
手順 5	メールボックスを同期し、Enterprise Vault Admin Service を再起動します。	p.150 の「OWA 設定用の管理サービスの再起動とメールボックスの同期」 を参照してください。

ExchangeServers.txt ファイルの作成

ExchangeServers.txt ファイルを作成する方法

- 1 メモ帳を開きます。
- 2 Enterprise Vault サーバーに接続する各 Exchange CAS サーバーの IP アドレスを 1 行に 1 つ入力します。

アドレスは IPv4 または IPv6 の形式を使用できます。IPv6 のアドレスの形式は、`fdfa:9c37:5267:d2e3:a192:b168:cc80:d204` でなければなりません。
- 3 Enterprise Vault インストール先フォルダ (たとえば、`C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault`) に `ExchangeServers.txt` という名前でファイルを保存します。ファイルを保存するときは、ANSI、Unicode、Unicode big endian のいずれかのエンコードを選択します。
- 4 メモ帳を閉じます。

データアクセスアカウントの設定

Enterprise Vault サーバーに匿名で接続する場合にデータアクセスアカウントとして使うドメインアカウントを作成または選択します。このアカウントは基本ドメインアカウントである必要があります。ローカルコンピュータアカウントは使えません。アカウントは、どの管理グループ (管理者またはアカウントオペレータなど) にも属していない必要があります。

Enterprise Vault OWA 2010 Extensions と Domino メールボックスアーカイブの両方を設定する場合は、どちらの機能にもデータアクセスアカウントと同じアカウントを使うことが重要です。Domino メールボックスアーカイブを設定してある場合は、管理コンソールの [ディレクトリプロパティ] の [データアクセスアカウント] タブに指定されているアカウントの詳細を書き留めておきます。このセクションの説明に従って OWA にこのアカウントを設定します。

OWA のデータアクセスアカウントを設定する方法

- 1 ボルトサービスアカウントとして Enterprise Vault サーバーにログオンします。
- 2 管理者権限でコマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 3 Enterprise Vault インストールフォルダにナビゲートします。

4 次のコマンドを入力します:

```
cscript owauser.wsf /domain:domain /user:username  
/password:password
```

Enterprise Vault インストール先フォルダに `owauser.wsf` ファイルはインストールされています。

domain には、データアクセスアカウントのドメインを指定します。

username には、データアクセスアカウントのユーザー名を指定します。

password には、データアクセスアカウントのパスワードを指定します。

`cscript` コマンドのヘルプを表示するには、次のように入力します。

```
cscript owauser.wsf /?
```

5 スクリプト実行の進捗状況が、コマンドプロンプトウィンドウに表示されます。

スクリプトによって行われる設定の変更については、シマンテック社のサポート Web サイトの次の **Veritas サポート Web サイト** で説明されています。

<https://www.veritas.com/docs/100020572>

設定スクリプトが終了すると、**Enterprise Vault Admin Service** を再起動してメールボックスを同期するように求めるメッセージが表示されます。

6 環境内に複数の **Enterprise Vault** サーバーがある場合は、`ExchangeServers.txt` ファイルを作成したそれぞれのサーバーにログオンし、このセクションの指示に従ってスクリプト `owauser.wsf` を実行します。

後で、別の **Exchange CAS** サーバーを環境に追加する場合は **Exchange** サーバーが接続する **Enterprise Vault** サーバーの `ExchangeServers.txt` ファイルにサーバーの IP アドレスを追加して `owauser.wsf` スクリプトを再実行します。

OWA 設定用の管理サービスの再起動とメールボックスの同期

設定を完了するには、**Enterprise Vault** 管理サービスを再起動して **Enterprise Vault** サーバーのメールボックスを同期する必要があります。**Admin Service** の再起動により、**Enterprise Vault** 認証がデータアクセスアカウントの ID 情報を識別します。メールボックスの同期によって、クライアントの非表示のメッセージが **Enterprise Vault** への接続時に **OWA Extensions** が使う URL とともに更新されます。

管理サービスを再起動する方法

- 1 [コントロールパネル]で、[サービス]を選択します。
- 2 [Enterprise Vault 管理サービス]を右クリックし、[再起動]を選択します。
Enterprise Vault サービスおよびタスクが再起動します。
- 3 [サービス]コンソールを閉じます。

メールボックスを同期する方法

- 1 Enterprise Vault 管理コンソールを起動します。
- 2 Enterprise Vault の[ディレクトリ]コンテナとサイトを展開します。[Enterprise Vault サーバー]を展開して、必要な Enterprise Vault サーバーを選択します。このコンテナを展開します。[タスク]を展開します。
- 3 右側のペインで、[Exchange Server メールボックスアーカイブタスク]をダブルクリックして、タスクのプロパティウインドウを表示します。
- 4 [同期]タブを選択します。[すべてのメールボックス]と[メールボックスのプロパティと権限]が選択されていることを確認します。
- 5 [同期]をクリックします。
- 6 [OK]をクリックしてプロパティウインドウを閉じます。
- 7 Enterprise Vault 管理コンソールを閉じます。

OWA 用の Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーの設定

必要に応じて、OWA クライアントで利用可能な Enterprise Vault の機能をカスタマイズできます。

[Exchange デスクトップポリシー]プロパティの[詳細]ページにある[2013 年以前の OWA バージョン]の設定で Exchange Server 2010 の OWA クライアントをカスタマイズできます。表 10-3 に示す設定を利用できます。

これらの設定について詳しくは、『Enterprise Vault 管理者ガイド』を参照してください。

Exchange デスクトップポリシーで設定を変更した場合、メールボックスを同期する必要があります。

p.151 の「[メールボックスを同期する方法](#)」を参照してください。

表 10-3 2013 より前の OWA バージョン (Exchange デスクトップポリシーの詳細設定)

設定	説明
アーカイブの確認	ユーザーがアイテムを手動でアーカイブしようとするときに、確認メッセージを表示するかどうかを指定します。デフォルトは[有効]— 確認メッセージを表示します。
[サブフォルダをアーカイブ]	手動アーカイブでは、ユーザーの選択にサブフォルダが含まれている場合にサブフォルダをアーカイブするかどうかを制御します。デフォルトは[有効]— サブフォルダをアーカイブします。
基本的なアーカイブ機能	OWA 基本クライアントのユーザーがアイテムを手動でアーカイブするときに、保持カテゴリや移行先アーカイブなどのアーカイブ設定の選択を許可するかどうかを制御します。デフォルトは[基本]— ユーザーはアーカイブ時に設定を変更できません。
基本的な復元機能	OWA 基本クライアントで、OWA のコンテキストメニューに[復元]オプションを表示するかどうかを制御します。デフォルトは[基本]— コンテキストメニューに[復元]オプションを表示しません。
復元後にショートカットを削除	ショートカットが、それに対応するアーカイブ済みアイテムの復元に使われたときに、そのショートカットを削除するかどうかを制御します。デフォルトは[削除]。
外部 Web アプリケーション URL	Enterprise Vault の外部 URL、すなわち、社内ネットワークの外で、ファイアウォールを介して Enterprise Vault サーバーにアクセスするために使われる URL を指定します。この設定の使用方法の詳細については、Veritas のサポート Web サイトにある次のテクニカルノートを参照してください。 https://www.veritas.com/docs/100019125

設定	説明
転送モード	<p>ユーザーが Enterprise Vault のショートカットの転送を選択したときの動作を制御します。ショートカット自体を転送するか、アーカイブ済みアイテムを転送することが可能です。受信者は、アーカイブに対するアクセス権限を持っていないければ、アーカイブ済みアイテムにアクセスすることはできません。デフォルトは[アーカイブ済みアイテム]。</p>
復元したアイテムの場所	<p>ショートカットを使って復元されるアイテムの復元先を制御します。次のいずれかを復元先にできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在の場所 (ショートカットと同じフォルダ) ■ Enterprise Vault の[復元済みアイテム]フォルダ <p>デフォルトは[現在の場所]。</p>
オープンモード	<p>ユーザーが Enterprise Vault のショートカットを開いたときの動作を制御します。デフォルトは[アーカイブ済みアイテム]。</p>
OWA の[アーカイブポリシー]コンテキストメニューオプション	<p>Exchange Server 2010 で OWA のアーカイブポリシーはセカンダリの Exchange Server メールボックスにアイテムをアーカイブすることを可能にします。この設定は OWA 2010 プレミアムクライアントで OWA のアーカイブポリシーオプションを非表示にすることを可能にします。値を[表示]に設定して次のメニューから OWA のアーカイブポリシーオプションを削除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [フォルダ]コンテキストメニューの[アイテム]コンテキストメニュー (非対話ビュー) ■ [アイテム]コンテキストメニュー (対話ビュー) ■ 対話の[処理]メニュー <p>デフォルトは[無効]— オプションはメニューに表示されます。</p>
プレミアムアーカイブ機能	<p>OWA プレミアムクライアントのユーザーがアイテムを手動でアーカイブするときに、保持カテゴリや移行先アーカイブなどのアーカイブ設定の選択を許可するかどうかを制御します。デフォルトは[拡張]— ユーザーは手動アーカイブを実行するときにアーカイブ設定を選択できます。</p>

設定	説明
プレミアム復元機能	OWA プレミアムクライアントのユーザーがアイテムを手動でアーカイブするときに、保持カテゴリや移行先アーカイブなどのアーカイブ設定の選択を許可するかどうかを制御します。デフォルトは[拡張]— ユーザーは手動アーカイブを実行するときにアーカイブ設定を選択できます。
返信モード	ユーザーが Enterprise Vault のショートカットに返信することを選択したときの動作を制御します。デフォルトは[アーカイブ済みアイテム]— アーカイブ済みアイテムが返信先になります。
[全員に返信]モード	ユーザーがショートカットを選択し、[全員に返信]を選択したときの動作を制御します。デフォルトは[アーカイブ済みアイテム]— アーカイブ済みアイテムが返信先になります。
復元の確認	アーカイブ済みアイテムの復元を選択した後、ユーザーに確認を求めるかどうかを制御します。デフォルトは[有効]— アイテムを復元する前に確認メッセージが表示されます。
OWA 基本クライアントの[ボルトの検索]	OWA 基本クライアントで Enterprise Vault Search を利用可能にするかどうかを制御します。デフォルトは[有効]— Enterprise Vault Search を利用可能にします。
OWA プレミアムクライアントの[ボルトの検索]	OWA プレミアムクライアントで Enterprise Vault Search を利用可能にするかどうかを制御します。デフォルトは[有効]— Enterprise Vault Search を利用可能にします。
表示モード	ユーザーがカスタムショートカットのバナーで[元のアイテムを表示します]をクリックしたときに、元のアイテムを OWA で表示する (Outlook のメッセージのように見えます) か、Enterprise Vault で表示する (Web ブラウザのページのように見えます) かを制御します。デフォルトは[OWA]。
Web アプリケーションのエイリアス	匿名接続の仮想ディレクトリの名前である EVAnon を指定します。これは各メールボックスの非表示の設定に同期されます。

Enterprise Vault OWA 2010 Extensions のインストール

Enterprise Vault OWA 2010 Extensions をインストールする前に、必要なタスクが完了していることを確認します。

p.146 の「[OWA ユーザーの Enterprise Vault アクセスの設定手順](#)」を参照してください。

すべての Exchange Server 2010 CAS コンピュータに同じ Enterprise Vault リリースバージョンの拡張機能をインストールします。Extensions をインストールしたすべての Exchange Server は同じ Exchange Server Service Pack であり、同じ Hotfix レベルである必要があります。

Enterprise Vault OWA 2010 Extensions は、Enterprise Vault リリースメディア上のフォルダ Veritas Enterprise Vault¥OWA Extensions¥OWA 2010 Extensions にあります。

ReadMeFirst ファイルは、フォルダ Veritas Enterprise Vault にあります。Extensions をインストールする前に、必ずこのファイルで最終的な変更の詳細を確認してください。

このセクションで説明する手順に従って、対話モードで拡張機能をインストールします。別の方法として、MSI コマンドラインまたはソフトウェア配布アプリケーションを使って拡張機能をサイレントに配備することもできます。

インストール処理のログ記録を有効にするには、サーバー上の Windows インストーラのログポリシーを設定するか、msiexec コマンドラインを使ってインストーラを実行し、次のログオプションを含めます。

```
/l*v log_filename
```

拡張機能のインストールに問題がある場合は、Veritas サポート Web サイトで次のテクニカルノートを参照してください。

<https://www.veritas.com/docs/100020572>

この文書には、Enterprise Vault OWA 2010 Extensions の詳しいトラブルシューティング情報が記載されています。

Enterprise Vault OWA 2010 Extensions をインストールする方法

- 1 Enterprise Vault OWA 2010 Extensions .msi ファイルを Exchange Server 2010 CAS コンピュータにコピーします。
- 2 .msi ファイルをダブルクリックしてインストールウィザードを起動します。
- 3 インストールの説明に従って操作します。
- 4 各 Exchange 2010 CAS コンピュータに対してインストールを繰り返します。

OWA で使うための Exchange Server 2010 CAS プロキシ処理の追加の設定手順

CAS プロキシ処理を Exchange Server 2010 の環境で設定する場合、CAS プロキシサーバーが Exchange Web サービスの偽装を使うことができるように追加の設定手順を実行する必要があります。

CAS プロキシサーバーでの Exchange Web サービスの偽装の設定

- 1 プロキシサーバーとして機能する Exchange Server 2010 CAS コンピュータのみを含む新しいセキュリティグループを作成します。
- 2 管理ロールが割り当てられているアカウントを使って Exchange Server 2010 コンピュータにログオンします。デフォルトでは、「組織の管理」ロールグループのメンバーにはこのロールが割り当てられます。
- 3 Exchange 管理シェルを使って、次のコマンドラインを実行します。

```
New-ManagementRoleAssignment -Name:role assignment  
name-Role:ApplicationImpersonation -SecurityGroup:security group  
name
```

role assignment name は、ユーザーが選択した名前にすることができます。

security group name は、プロキシの Exchange 2010 CAS コンピュータ用に作成したセキュリティグループの名前です。

Outlook RPC over HTTP クライアントから Enterprise Vault へのアクセスの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [Outlook RPC over HTTP と Outlook Anywhere の設定について](#)
- [Enterprise Vault への Outlook Anywhere クライアントアクセスの設定](#)
- [Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定](#)
- [Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーでの RPC over HTTP の設定](#)

Outlook RPC over HTTP と Outlook Anywhere の 設定について

このセクションでは、Outlook RPC over HTTP クライアントと Outlook Anywhere クライアントから Enterprise Vault へのアクセスに関する概要を示します。設定タスクの詳細については、他のセクションを参照してください。

Exchange Server 2010 の環境では、ユーザーは HTTP 経由で RPC (Remote Procedure Call) を使ってメールボックスにアクセスできます。この機能を Outlook Anywhere と呼びます。RPC over HTTP を使うと、リモートの Outlook ユーザーは OWA や VPN 接続を必要とせず、Exchange Server のメールボックスに接続できます。

RPC over HTTP を有効にすると、Enterprise Vault Outlook アドインで以下の処理を実行できます。

- アーカイブ済みアイテムの表示

- アイテムの手動アーカイブ
- アーカイブ済みアイテムの復元
- アーカイブ済みアイテムを削除します。
- アーカイブの参照と検索。
- ボルトキャッシュの使用
- クライアント主導の PST 移行の実行

Exchange Server Outlook Anywhere の設定について

Outlook Anywhere では、Enterprise Vault Outlook アドインは Enterprise Vault サーバーに直接接続します。Enterprise Vault クライアントが Exchange サーバー CAS コンピュータを使って要求を Enterprise Vault ヘルパーティングすることはありません。Outlook Anywhere クライアントから Enterprise Vault へのアクセスをサポートするために Enterprise Vault OWA Extensions は必要ありません。

図 11-1 Outlook Anywhere と Exchange Server の設定例

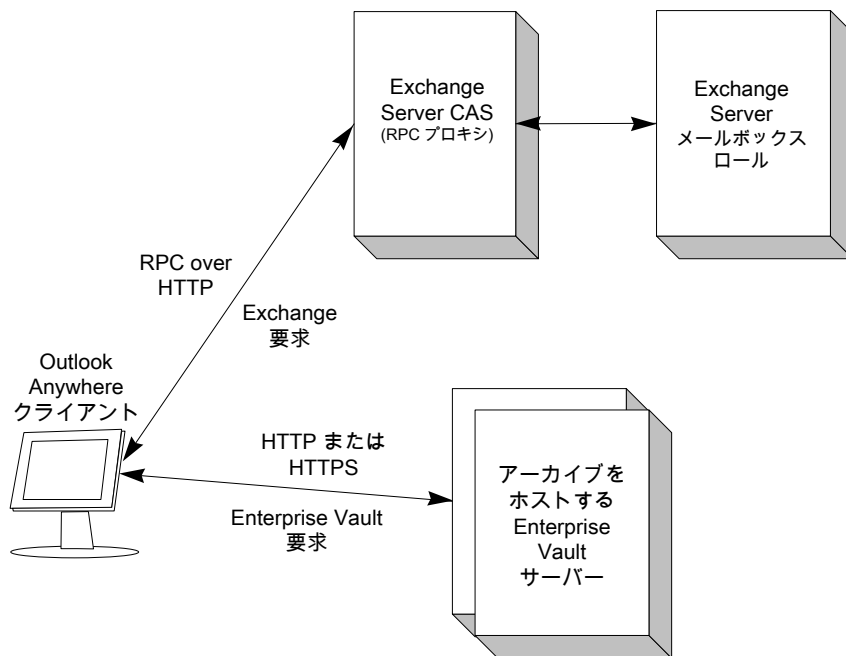


図 11-1 では、Outlook が Outlook Anywhere に対して構成され、Enterprise Vault Outlook アドインが RPC over HTTP 接続に対して有効になっています。Enterprise Vault クライアントは Enterprise Vault に次のように接続します。

- デフォルトでは、まずクライアントはアーカイブをホストするデフォルトの Enterprise Vault サーバーに接続を試行します。
- これが利用できない場合、クライアントは Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーで構成されている代替 Web アプリケーション URL を使います。
- Enterprise Vault ポリシーに URL が指定されていない場合、および Enterprise Vault が Outlook プロファイルからクライアントの RPC over HTTP 接続の設定を特定できる場合は、そのプロファイル設定から URL が生成されます。

直接接続では、アーカイブをホストするすべての Enterprise Vault サーバーに内部クライアントと外部クライアントがアクセスできる必要があります。複数の Enterprise Vault サーバーを外部クライアントに公開しない場合は、Enterprise Vault サーバーをプロキシサーバーとして使うことができます。クライアントは Enterprise Vault プロキシサーバーに接続し、そのプロキシサーバーは、アーカイブをホストする Enterprise Vault サーバーに要求を転送します。

p.159 の「[Outlook RPC over HTTP クライアントにアクセスするための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定について](#)」を参照してください。

p.161 の「[Enterprise Vault への Outlook Anywhere クライアントアクセスの設定](#)」を参照してください。

Outlook RPC over HTTP クライアントにアクセスするための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定について

必要に応じて、Outlook Anywhere が設定されている Enterprise Vault Outlook アドインからの Enterprise Vault の要求に対して Enterprise Vault サーバーをプロキシサーバーとして使うことができます。Enterprise Vault プロキシサーバーは、アーカイブをホストする Enterprise Vault サーバーに Enterprise Vault の要求を転送します。複数の Enterprise Vault のサイトが含まれる環境では、別の Enterprise Vault のプロキシサーバーが各サイトに必要になります。

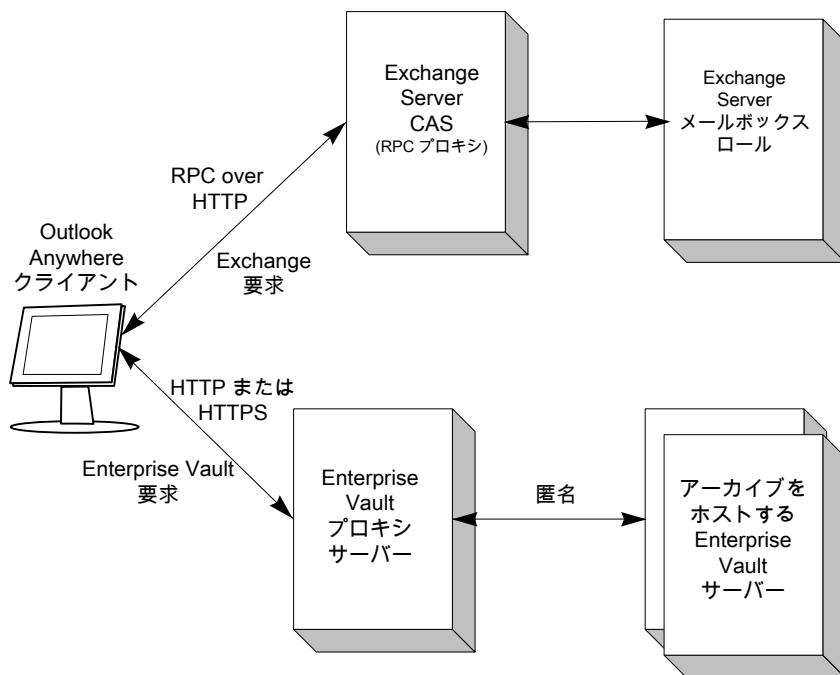
Enterprise Vault プロキシサーバーは、次のような場合に役立ちます。

- 複数の Enterprise Vault サーバーを外部ユーザーに公開しない場合。
- 外部と内部の Enterprise Vault ユーザーに個別の URL を公開する場合。

Enterprise Vault プロキシサーバーは Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理する場合にのみ使うことができます。OWA などの他の種類の接続には使うできません。

図 11-2 に、Outlook Anywhere 設定での Enterprise Vault プロキシサーバーを示します。プロキシサーバーとして使われる Enterprise Vault サーバーは、必要に応じてアーカイブをホストすることもできます。また、プロキシサーバーとしてのみ使う最小の Enterprise Vault サーバーを設定することもできます。

図 11-2 Enterprise Vault プロキシサーバーを使った Outlook Anywhere の設定例



Outlook で RPC over HTTP を使うように設定している場合は、Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーの設定で Enterprise Vault Outlook アドインの動作を設定することができます。

Enterprise Vault クライアントは Enterprise Vault に次のように接続します。

- Enterprise Vault クライアントは、まず、アーカイブをホストするデフォルトの Enterprise Vault サーバーに接続を試行します。
- これが利用できない場合、クライアントは Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーで構成されている代替 Web アプリケーション URL を使います。
 このロジックによって、ユーザーはアーカイブをホストする Enterprise Vault サーバーに社内ですべて直接接続できます。社外では、Enterprise Vault クライアントは Enterprise Vault プロキシサーバーに接続します。
- Enterprise Vault ポリシーに URL が指定されていない場合、および Enterprise Vault が Outlook プロファイルからクライアントの RPC over HTTP 接続の設定を特定できる場合は、そのプロファイル設定から URL が生成されます。

Enterprise Vault プロキシサーバーは、匿名接続を使って、アーカイブをホストする Enterprise Vault サーバーに接続します。このため、プロキシサーバーが接続する各 Enterprise Vault サーバーに匿名接続のサポートを設定する必要があります。

Enterprise Vault クラスタでは、クラスタ内の各ノードを匿名接続用に設定する必要があります。

同様に、ビルディングブロック構成では、プロキシサーバーコンピュータに匿名接続のサポートを設定する必要がある場合があります。ストレージサービスが Enterprise Vault プロキシサーバーコンピュータにフェールオーバーできる場合、仮想ボルトユーザーにはこの設定が必要です。

Enterprise Vault プロキシサーバーを設定し、匿名接続のサポートを設定する手順については次のセクションを参照してください。

p.162 の「[Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定](#)」を参照してください。

Enterprise Vault への Outlook Anywhere クライアントアクセスの設定

このセクションでは、Enterprise Vault サーバーへの Outlook Anywhere クライアントアクセスを有効にするために必要な設定手順について説明します。

Outlook Anywhere 環境で Enterprise Vault を設定する方法

- 1 Exchange Server とクライアントコンピュータで必須作業が完了していることを確認します。

p.162 の「[Enterprise Vault への Outlook Anywhere アクセスを設定するための必須作業](#)」を参照してください。

- 2 Enterprise Vault プロキシサーバーを使う場合は、そのプロキシサーバーとそのプロキシサーバーが接続するすべての Enterprise Vault サーバーを準備します。

p.162 の「[Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定](#)」を参照してください。

- 3 Enterprise Vault サーバーの Exchange デスクトップポリシーの RPC over HTTP 設定を設定し、Enterprise Vault Outlook アドインの Enterprise Vault 機能を有効にしてカスタマイズできます。

p.166 の「[Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーでの RPC over HTTP の設定](#)」を参照してください。

Enterprise Vault への Outlook Anywhere アクセスを設定するための必須作業

Enterprise Vault への Outlook Anywhere アクセスの設定手順は、次の作業が完了していることを前提としています。

- Exchange 環境と Outlook プロファイル を Outlook Anywhere 用に設定しています。
- Exchange Server のメールボックスをアーカイブするように Enterprise Vault サーバーを設定しています。
- Enterprise Vault Outlook アドインをデスクトップコンピュータにインストールしています。

Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定

このセクションでは、Enterprise Vault プロキシサーバーを使って Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理する場合に実行する必要がある操作について説明します。次のような作業が含まれます。

- Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定
p.162 の「[Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定](#)」を参照してください。
 - Enterprise Vault プロキシサーバーからの匿名接続用の Enterprise Vault サーバーの設定
p.163 の「[Enterprise Vault プロキシサーバーからの匿名接続用の Enterprise Vault サーバーの設定](#)」を参照してください。
- p.159 の「[Outlook RPC over HTTP クライアントにアクセスするための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定について](#)」を参照してください。

Outlook Anywhere クライアントからの接続を管理するための Enterprise Vault プロキシサーバーの設定

複数の Enterprise Vault サイトがある場合、サイトごとに Enterprise Vault プロキシサーバーが個別に必要です。

プロキシサーバーとして使われる Enterprise Vault サーバーは、必要に応じてアーカイブをホストすることもできます。また、プロキシサーバーとして使う最小の Enterprise Vault サーバーを設定することもできます。

プロキシサーバーには、少なくとも次の **Enterprise Vault** コンポーネントがインストールされ、構成されている必要があります。

- 管理サービス
- ディレクトリサービス
- ショッピングサービス
- タスク制御サービス
- **Web Access** アプリケーション

クライアントは基本 **Windows** 認証または統合 **Windows** 認証 (**IWA**) を使って **Enterprise Vault** プロキシサーバーに接続します。必要に応じて、クライアント接続を保護するために **Enterprise Vault** プロキシサーバーに **SSL** を設定できます。

『インストール/設定』ガイドの **Enterprise Vault Web Access** コンポーネントのセキュリティのカスタマイズに関する説明を参照してください。

Enterprise Vault プロキシサーバーは、アーカイブをホストしない場合、**Enterprise Vault** の要求をサポートするための追加の構成を必要としません。

Enterprise Vault プロキシサーバーは、アーカイブをホストする **Enterprise Vault** サーバーに接続するときに匿名接続を使います。匿名接続がサポートされるように **Enterprise Vault** サーバーを設定する方法に関する詳細情報を参照できます。

p.163 の「[Enterprise Vault プロキシサーバーからの匿名接続用の Enterprise Vault サーバーの設定](#)」を参照してください。

Enterprise Vault プロキシサーバーがアーカイブをホストしている場合は、プロキシサーバーを匿名接続用に設定する必要もあります。

クラスタ化された **Enterprise Vault** 環境では、クラスタ内の各ノードを匿名接続用に設定する必要があります。

Enterprise Vault プロキシサーバーからの匿名接続用の Enterprise Vault サーバーの設定

このセクションで示す手順は、**OWA Exchange** サーバーからの匿名接続用に **Enterprise Vault** サーバーを設定する場合の手順とほぼ同様です。**Enterprise Vault** プロキシサーバーからの匿名接続をサポートするために同じスクリプト `owauser.wsf` を実行しますが、**Exchange Servers** ではなく **Enterprise Vault** プロキシサーバーを接続する場合の詳細を指定します。

Enterprise Vault プロキシサーバーからの匿名接続用に Enterprise Vault サーバーを準備する方法

- 1 『Veritas Enterprise Vault インストール/設定』の「OWA 2010 のための必要条件」セクションの説明に従って、IIS ロールと機能委任権を設定していることを確認します。
- 2 Enterprise Vault プロキシサーバーから匿名接続を受け取る可能性がある Enterprise Vault サーバーごとに、このセクションの説明に従って ExchangeServers.txt ファイルを作成します。このファイルに、Enterprise Vault サーバーに接続するすべての Enterprise Vault プロキシサーバーの IP アドレスの一覧を含めます。
- 3 ExchangeServers.txt ファイルを作成した Enterprise Vault サーバーごとに、このセクションの説明に従ってスクリプト owauser.wsf を実行します。このスクリプトによって、データアクセスアカウントが匿名接続用に設定されます。
- 4 Enterprise Vault 管理サービスを再起動します。
- 5 メールボックスを同期します。

ExchangeServers.txt ファイルを作成する方法

- 1 メモ帳を開きます。
- 2 Enterprise Vault サーバーに接続する各 Enterprise Vault プロキシサーバーの IP アドレスを 1 行に 1 エントリずつ入力します。

アドレスは IPv4 または IPv6 の形式を使用できます。IPv6 のアドレスの形式は、**fdfa:9c37:5267:d2e3:a192:b168:cc80:d204** でなければなりません。
- 3 Enterprise Vault インストール先フォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) に ExchangeServers.txt という名前でファイルを保存します。ファイルを保存するときは、ANSI、Unicode、Unicode big endian のいずれかのエンコードを選択します。
- 4 メモ帳を閉じます。

データアクセスアカウントを **Outlook RPC over HTTP** クライアント接続用に設定する方法

- 1 **Enterprise Vault** を OWA サーバーアーカイブまたは **Domino** サーバーアーカイブ用にすでに構成済みの場合、匿名接続を管理するためのアカウントはすでに存在します。このアカウントがデータアクセスアカウントです。このアカウントがすでに存在する場合は、**Enterprise Vault** プロキシサーバーからの匿名接続に同じアカウントを使う必要があります。

Domino メールボックスアーカイブの場合、データアクセスアカウントの詳細は管理コンソールの[ディレクトリプロパティ]の[データアクセスアカウント]タブに指定されています。

データアクセスアカウントが存在しない場合は、この目的用にアカウントを作成します。このアカウントは基本ドメインアカウントである必要があります。ローカルコンピュータアカウントは使えません。アカウントは、どの管理グループ (管理者またはアカウントオペレータなど) にも属していない必要があります。

- 2 ボルトサービスアカウントを使って、**Enterprise Vault** プロキシサーバーからの匿名接続を受け取る **Enterprise Vault** サーバーにログインします。
- 3 管理者権限でコマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 4 **Enterprise Vault** インストールフォルダにナビゲートします。
- 5 次のコマンドラインを入力します。

```
cscript owauser.wsf /domain:domain /user:username  
/password:password
```

Enterprise Vault インストール先フォルダに `owauser.wsf` ファイルはインストールされています。

domain には、データアクセスアカウントのドメインを指定します。

username には、データアクセスアカウントのユーザー名を指定します。

password には、データアクセスアカウントのパスワードを指定します。

`cscript` コマンドのヘルプを表示するには、次のように入力します。

```
cscript owauser.wsf /?
```

- 6 スクリプト実行の進捗状況が、コマンドプロンプトウィンドウに表示されます。
スクリプトによって行われる設定の変更については、シマンテック社のサポート Web サイトの次の Veritas サポート Web サイトで説明されています。
<https://www.veritas.com/docs/100020572>
設定スクリプトが終了すると、Enterprise Vault Admin Service を再起動してメールボックスを同期するように求めるメッセージが表示されます。
[サービス]コンソールを使って Admin Service を再起動します。
Enterprise Vault 管理コンソールを使ってメールボックスを同期します。[Exchange メールボックスアーカイブタスク]プロパティで、[同期]タブを選択します。すべてのメールボックスの[メールボックスのプロパティと権限]を同期します。
Admin Service の再起動により、Enterprise Vault 認証がデータアクセスアカウントの ID 情報を識別します。メールボックスの同期によって、クライアントの非表示のメッセージが Enterprise Vault プロキシサーバーへの接続時に使う URL とともに更新されます。
- 7 環境内に複数の Enterprise Vault サーバーがある場合は、ExchangeServers.txt ファイルを作成したそれぞれのサーバーにログオンします。このセクションで示す手順に従ってスクリプト owauser.wsf を実行します。
後日、別の Enterprise Vault プロキシサーバーを環境に追加する場合は、まずサーバーの IP アドレスを ExchangeServers.txt ファイルに追加します。その後、スクリプト owauser.wsf を再実行します。

Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーでの RPC over HTTP の設定

Enterprise Vault Exchange デスクトップポリシーの RPC over HTTP 設定を使うと、Enterprise Vault へのアクセスが有効になり、Outlook RPC over HTTP クライアントで Enterprise Vault 機能をカスタマイズできます。

RPC over HTTP 用に Exchange デスクトップポリシーの設定を修正する方法

- 1 管理コンソールの左ペインで、[Exchange デスクトップ]ポリシーが表示されるまで [ポリシー]コンテナを展開します。
- 2 右側のペインで、編集するポリシーの名前をダブルクリックします。
ポリシーのプロパティが表示されます。
- 3 [詳細]タブをクリックします。
- 4 [一覧表示する設定の種類]の横にある[Outlook]を選択します。
- 5 必要に応じて次の設定を編集します。

設定をダブルクリックして編集するか、設定を 1 回クリックして選択してから、[修正] をクリックします。

- [RPC over HTTP の制限]。Outlook RPC over HTTP クライアントから Exchange Server 2010 でホストされるメールボックスへのアクセスは、デフォルトで無効です ([Outlook アドインの無効化])。他のいずれかの値を選択して、Outlook に必要な機能を構成します。

なし	すべての Enterprise Vault クライアント機能が利用可能です。
Outlook アドインを無効化	Outlook RPC over HTTP クライアントで Enterprise Vault 機能は利用できません。これはデフォルト値です。 Exchange Server 2013 では RPC over HTTP を使う接続だけが許可されます。デフォルト値が選択されている場合、Exchange Server 2013 でホストされているメールボックスで Outlook アドイン機能が利用できます。
ボルトキャッシュの無効化	ボルトキャッシュが無効になります。
PST インポートの無効化	クライアント主導の PST 移行が無効になります。 現在、RPC over HTTP モードで Outlook クライアントを使っていると、マップされたネットワークドライブに存在するファイルをクライアント側 PST 移行で移行することはできません。
ボルトキャッシュと PST インポートの無効化	ボルトキャッシュとクライアント主導の PST 移行が無効になります。

- [代替の Web アプリケーション URL]。デフォルトの Web アプリケーション URL が解決しない場合は、この設定によって Enterprise Vault サーバーの代替 URL を指定できます。
たとえば、外部ネットワークのクライアントは、Enterprise Vault サーバーに接続するためにプロキシサーバーを使う必要があることがあります。その場合は、[代替 Web アプリケーション URL] の設定を使って次のような URL を指定できます。
`https://proxy_server/EnterpriseVault`

- 6 設定は、次に行われる Exchange メールボックスタスクの同期の実行中にメールボックスに適用されます。次の同期の前に変更を適用する場合は、Exchange メールボックスタスクのプロパティの [同期] タブにある [同期] を実行します。

OWA および Outlook への外部アクセスのためのファイアウォールソフトウェアの使用

この章では以下の項目について説明しています。

- Outlook 2013 および OWA 2013 向けの Threat Management Gateway 2010 について
- OWA 2010 から Enterprise Vault にアクセスする場合の ISA Server 2006 の設定
- Outlook Anywhere クライアントから Enterprise Vault にアクセスする場合の ISA Server 2006 の設定について

Outlook 2013 および OWA 2013 向けの Threat Management Gateway 2010 について

Microsoft Forefront Threat Management Gateway 2010 (Forefront TMG 2010) を使うと、Exchange サーバーへの安全な外部アクセスを作成できます。その後、Web 公開ルールを使って、インターネットで利用可能な OWA、Outlook、Enterprise Vault を作成できます。

OWA 2013 と Outlook 2013 から Enterprise Vault にアクセスするための Forefront TMG 2010 の設定方法については、次のテクニカルノートを参照してください。

<https://www.veritas.com/docs/100023834>

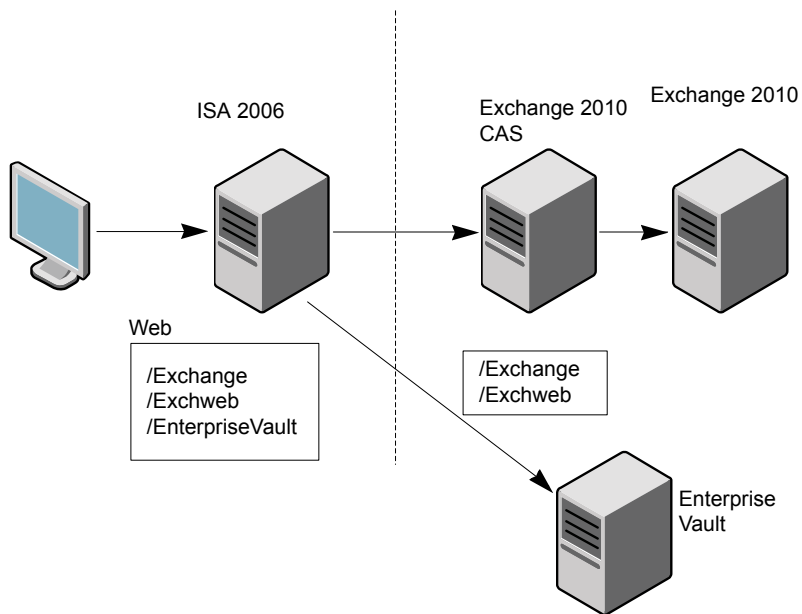
OWA 2010 から Enterprise Vault にアクセスする場合の ISA Server 2006 の設定

Microsoft ISA Server 2006 を使うと、Web 公開ルールを使って OWA から Exchange Server 2010 に安全にアクセスし、Exchange OWA Web サイトをインターネットで利用できます。

OWA クライアントがアーカイブの参照と検索の要求のために Enterprise Vault に直接接続するため、クライアントが Enterprise Vault にアクセスできるように ISA Server を設定する必要があります。OWA Web サイトの公開に加え、Enterprise Vault Web サーバーの URL をクライアントに公開する必要があります。

図 12-1 に、ISA Server 2006 によってどのように Enterprise Vault へのアクセスが提供されるかを示します。

図 12-1 ISA Server 2006 を使った Enterprise Vault へのアクセス



OWA クライアントから Enterprise Vault にアクセスできるように ISA Server 2006 を設定する手順について詳しくは次のテクニカルノートを参照してください。

<https://www.veritas.com/docs/100018731>

Outlook Anywhere クライアントから Enterprise Vault にアクセスする場合の ISA Server 2006 の設定について

Microsoft ISA Server 2006 を使うと、Web 公開ルールを使って Outlook Anywhere クライアントから Exchange 2010 CAS コンピュータに安全にアクセスし、RPC サーバーをインターネットで利用できます。

Outlook Anywhere クライアントが Enterprise Vault に直接接続する場合があるため、Enterprise Vault にクライアントがアクセスできるように ISA Server を設定する必要があります。

Outlook Anywhere クライアントを使っているときに Enterprise Vault にアクセスできるように ISA Server 2006 を設定する手順について詳しくは次のテクニカルノートを参照してください。

<https://www.veritas.com/docs/100018731>

フィルタ処理の設定

この章では以下の項目について説明しています。

- [フィルタについて](#)
- [ジャーナルの選択の設定](#)
- [ジャーナルのグループ化の設定](#)
- [カスタムフィルタの設定](#)

フィルタについて

フィルタによって、Enterprise Vault アーカイブタスクによるアーカイブ実行時のアイテムの処理方法を詳細に制御できます。

メモ: 作成したフィルタ設定は、開発サーバーで実際のデータを使ってテストしてから、実働サーバーに実装することが重要です。

Enterprise Vault には、次のフィルタ処理機能があります。

- **ジャーナルの選択。**この機能を使うと、Exchange Server ジャーナルメッセージの簡易フィルタが提供されます。ジャーナルの選択の外部フィルタを呼び出すように Exchange ジャーナルタスクを設定すると、外部フィルタを使ってアイテムをアーカイブするか削除するかを決定することができます。メッセージを選択するには、[宛先]、[CC]、[差出人]フィールドに一致するようにフィルタルールを設定します。メッセージがこれらのルールのいずれかに一致する場合はアーカイブされ、一致しない場合は削除されます。
ジャーナルの選択を Enterprise Vault サーバーで有効にすると、そのコンピュータで管理されているすべての Exchange ジャーナルタスクで有効になります。
- **ジャーナルのグループ化。**この機能を使うと、以降の検索範囲を狭めるために、Exchange ジャーナルタスクで選択したメッセージをマーク付けできます。この機能

は、大量のジャーナル化された電子メールがあり、ユーザーの特定のグループ間で送信されるメッセージを識別できるようにする場合に特に有効です。

- カスタムフィルタ。この機能により高度なフィルタ処理が提供されます。電子メールアドレス、件名、メッセージの方向、特定のメッセージプロパティの値などの 1 つ以上の属性を照合してメッセージを選択するルールを作成します。

ルールには、選択したメッセージを **Enterprise Vault** が処理する方法についての指示も含めます。これには、メッセージのアーカイブ、特定の保持カテゴリの割り当て、指定したアーカイブへのメッセージの格納、指定した種類またはサイズの添付ファイルの削除、メッセージの削除またはマーク付けを含めることができます。

どのフィルタルールにも一致しないアイテムはデフォルトではアーカイブされます。ルールと一致するアイテムのみアーカイブされるようにフィルタルールを設定できます。

p.188 の「[カスタムフィルタルールセットの概要](#)」を参照してください。

- カスタムプロパティ。この機能は、カスタムフィルタの拡張機能です。カスタムフィルタによって選択されたメッセージの追加のプロパティをインデックス付けするように **Enterprise Vault** を設定できます。これらのプロパティは、デフォルトの **Enterprise Vault** システムではインデックス付けされない標準プロパティか、他社アプリケーションによって独自にメッセージに追加されたプロパティなどです。

カスタムプロパティでは、「内容のカテゴリ」という概念も導入されています。この概念は、ルールに一致するメッセージに適用する設定をグループ化する場合に使われます。これらの設定には、割り当てる保持カテゴリ、使用するアーカイブ、インデックス付けする追加のプロパティを含めることができます。

カスタムプロパティ機能はカスタムフィルタへの拡張機能を提供します。カスタムフィルタを使っている場合に有効になり、また、カスタムフィルタの設定を共有します。

エンベロープジャーナルによるジャーナルフィルタについて

ジャーナルメールボックスのすべてのフィルタ処理で、**Microsoft Exchange Server** のエンベロープジャーナルがサポートされています。この機能により、BCC、非公開、代替受信者のすべてのフィールドの対象アドレスがキャプチャされます。

p.114 の「[Enterprise Vault と Exchange Server のジャーナルレポートについて](#)」を参照してください。

ジャーナルフィルタが有効になっている場合、エンベロープジャーナルを有効にするには、実働 **Exchange Server** 上でエンベロープジャーナルを有効にする前に、既存のフィルタをテストしてその結果を確認することを推奨します。

エンベロープジャーナルを有効にする前に、必要に応じて、ジャーナルレポートまたは元のメッセージにアクセスできるように、選択したメッセージを修正する専用のジャーナルフィルタを変更する必要があります。

詳しくは『**Application Programmer's Guide**』の「**Exchange Filtering API**」に関するセクションを参照してください。

ジャーナルの選択の設定

表 13-1 ではジャーナルの選択の設定に必要な手順を説明します。Enterprise Vault Exchange ジャーナルタスクをホストする各 Enterprise Vault サーバーで手順を繰り返します。

表 13-1 ジャーナルの選択の設定手順

手順	Action	関連情報
手順 1	Exchange ジャーナルアーカイブを設定します。	手順について詳しくは、このガイド内の「ジャーナルメッセージのアーカイブの設定」の章を参照してください。
手順 2	フィルタルールファイルを作成します。コンピュータで管理されているすべての Exchange ジャーナルタスクで、同じフィルタルールファイルを使います。	p.173 の「ジャーナルの選択ルールファイルの作成」を参照してください。
手順 3	Exchange ジャーナルタスク用のジャーナルの選択のレジストリ設定を追加します。	p.175 の「ジャーナルの選択のレジストリ設定の追加」を参照してください。
手順 4	Exchange ジャーナルタスクを再起動します。	p.112 の「ジャーナルタスクの起動」を参照してください。

ジャーナルの選択ルールファイルの作成

このセクションでは、ジャーナルのフィルタルールファイルを作成する方法について説明します。

フィルタルールファイルを設定する方法

- 1 ボルトサービスアカウントとして Exchange ジャーナルタスクコンピュータにログオンします。
- 2 メモ帳を使い、Enterprise Vault のインストール先フォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) に SelectiveJournal_config.dat という名前のファイルを作成します。
- 3 ファイルに、ジャーナルされたメッセージをアーカイブ対象に選択するために使うフィルタのルールを指定します。

p.173 の「ジャーナルの選択フィルタルール」を参照してください。
- 4 ファイルを Unicode ファイルとして保存します。

ジャーナルの選択フィルタルール

ルールファイルの各行の形式は、次のとおりです。

`keyword:value`

表 13-2 に、ファイルに入力できるキーワードと値を示します。

表 13-2 ジャーナルの選択ルールのキーワード一覧

キーワード	説明	値
cont	指定されたテキストを含むアドレスに送信されたすべてのアイテムをアーカイブします。	テキスト文字列。次に例を示します。 <code>cont:flashads</code> SMTP アドレスの一部を指定できます。
distlist	指定された配布リストに含まれるユーザーに送信されたすべてのアイテムをアーカイブします。 ジャーナルの選択では動的配布グループがサポートされないことに注意してください。	配布リストの <code>legacyExchangeDN</code> 。次に例を示します。 <code>distlist:/o=acme/ou=finance/cn=recipients/cn=allfinance</code>
ends	指定されたテキストで終わるアドレスに対して送受信されたすべてのアイテムをアーカイブします。	テキスト文字列。次に例を示します。 <code>ends:example.com</code> SMTP アドレスの一部を指定できます。
exact	指定された電子メールアドレスに送信されたすべてのアイテムをアーカイブします。	受信者の SMTP 電子メールアドレス。次に例を示します。 <code>exact:smith@example.com</code>
recip	指定された受信者に送信されたすべてのアイテムをアーカイブします。受信者は、ユーザーアカウントと配布リストのどちらでもよいです。	受信者のユーザーアカウントまたは配布リストの <code>legacyExchangeDN</code> 。次に例を示します。 <code>recip:/o=acme/ou=developer/cn=recipients/cn=smithj</code>
starts	指定されたテキストで始まるアドレスに送信されたすべてのアイテムをアーカイブします。	テキスト文字列。次に例を示します。 <code>starts:john</code> SMTP アドレスの一部を指定できます。

メモ: `legacyExchangeDN` プロパティは、`ADSIEdit.msc` または同様の Active Directory ツールを使って表示できます。

組織の従業員とリソースが、内部の **Exchange Server** アドレスに加えて複数の SMTP アドレスを使う場合があります。組織内の受信者へのすべての電子メールをキャプチャする場合は、`legacyExchangeDN` を使って指定したアドレスとともに `recip` または `distlist` キーワードを使います。次に例を示します。

```
recip:/o=acme/ou=first administrative  
group/cn=recipients/cn=John Doe
```

代わりに、メンバーとして受信者が含まれる配布リストを指定します。次に例を示します。

```
distlist:/o=acme/ou=first administrative  
group/cn=recipients/cn=Sales
```

recip または **distlist** キーワードを使うと、受信者のすべての **SMTP** アドレスへの電子メールと、**Exchange Server** アドレスへの内部の電子メールがキャプチャされます。この場合、**exact**、**starts**、**ends**、**cont** キーワードは、受信者が使う一部のアドレスへの外部インバウンドの電子メールがキャプチャされない可能性があるため適切ではありません。

exact、**starts**、**ends**、**cont** キーワードを使って、組織外部のドメインまたは **SMTP** アドレスとの間の電子メールをキャプチャできます。たとえば、**ends:acme.com** を使うと、外部ドメインの **acme.com** との間のすべての通信をキャプチャできます。

ジャーナルの選択のレジストリ設定の追加

このセクションでは、選択的なジャーナルを有効にするレジストリ設定を追加する方法について説明します。

ジャーナルの選択のレジストリ設定を追加する方法

- 1 ボルトサービスアカウントとしてジャーナルタスクコンピュータにログオンします。
- 2 **regedit** を実行し、次の場所にナビゲートします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE  
¥Software  
¥Wow6432Node  
¥KVS  
¥Enterprise Vault  
¥External Filtering  
¥Journaling
```

Enterprise Vault の下に **External Filtering** キー、**External Filtering** の下に **Journaling** キーが存在しない場合は、それらのキーを追加します。

- 3 Journaling に、1 という新しい文字列値を作成し、その値を `SelectiveJournal.SJFilter` に設定します。

デフォルトでは、アーカイブされないアイテムは、ジャーナルメールボックスの **Deleted Items** フォルダに送られます。

アイテムを **Deleted Items** フォルダに移動せずに、すぐに削除する場合は、DWORD 値 `HardDeleteItems` を次の場所に追加し、値 1 を指定します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
¥Software
¥Wow6432Node
¥KVS
¥Enterprise Vault
¥Agents
¥SelectiveJournal
```

`SelectiveJournal` キーが存在しない場合は、追加します。

- 4 変更を適用するには、サーバーのすべてのジャーナルタスクを停止してから再起動します。ルールファイルに変更を加えた場合や、レジストリ値を修正する場合は、この操作を行う必要があります。

ジャーナルの選択を使った無効な配布リストの管理

配布リストが無効な場合に **Exchange** ジャーナルタスクで実行する内容を制御するために、次のレジストリエントリを設定できます。

無効な配布リストを管理する方法

- 1 ボルトサービスアカウントとしてジャーナルタスクコンピュータにログオンします。
- 2 `regedit` を実行し、次の場所にナビゲートします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
¥Software
¥Wow6432Node
¥KVS
¥Enterprise Vault
¥Agents
```

- 3 `ActionForInvalidDL` という名前の新しい **DWORD** 値を作成し、その値を次のいずれかに設定します。
 - 0 (デフォルト) 配布リストが無効な場合、受信者リストの残りの処理を続行します。
 - 1 配布リストが無効な場合、受信者リストの処理を停止します。
 - 2 配布リストが無効な場合、一致していると見なし、メッセージをアーカイブします。
 - 3 配布リストが無効な場合、ジャーナルメールボックスにメッセージを残し、エラーイベントをイベントログに報告します。

ジャーナルのグループ化の設定

ジャーナルのグループ化は、メッセージが 2 つの識別されるグループ間で送信された場合に、そのメッセージを特定の保持カテゴリでスタンプします。検索基準に保持カテゴリを加えることにより、それ以降の検索の範囲を大幅に狭めることができます。

保持カテゴリが設定されたメッセージのサンプルのみをアーカイブするように指定することもできます。設定に割合を指定します (最小値 0.1%、つまり 1000 メッセージごとに 1 つ)。

Enterprise Vault サーバーでジャーナルのグループ化を有効にすると、そのコンピュータで管理されているすべての **Exchange** ジャーナルタスクで有効になります。

表 13-3 ではグループジャーナルの設定に必要な手順を説明します。Enterprise Vault Exchange ジャーナルタスクをホストする各 Enterprise Vault サーバーで手順を繰り返します。

表 13-3 ジャーナルのグループ化の設定手順

手順	Action	関連情報
手順 1	Exchange ジャーナルアーカイブを設定します。	手順について詳しくは、このガイド内の「ジャーナルメッセージのアーカイブの設定」の章を参照してください。
手順 2	ルールファイルを作成します。このファイルで、一致させるアドレス、割り当てる保持カテゴリ、サンプルサイズを指定します。そのコンピュータで管理されているすべての Exchange ジャーナルタスクで、同じルールファイルを使います。	p.178 の「 ジャーナルのグループ化ルールファイルの作成 」を参照してください。
手順 3	一致するメッセージに割り当てる保持カテゴリが存在しない場合は、作成します。	この操作を行う手順について詳しくは『管理者ガイド』を参照してください。
手順 4	配布リストを確認します。	Exchange Server で、配布リストが存在し、必要なユーザーでポピュレートされていることを確認します。 ジャーナルのグループ化では動的配布グループがサポートされないことに注意してください。
手順 3	Enterprise Vault Exchange ジャーナルタスクコンピュータで、ジャーナルのグループ化のレジストリ設定を追加します。	p.180 の「 ジャーナルのグループ化のレジストリ設定の追加 」を参照してください。
手順 4	コンピュータですべての Exchange ジャーナルタスクを再起動し、設定をテストします。	p.112 の「 ジャーナルタスクの起動 」を参照してください。 p.180 の「 ジャーナルのグループ化設定のテスト 」を参照してください。

ジャーナルのグループ化ルールファイルの作成

このセクションでは、ジャーナルのグループ化ルールファイルを作成する方法について説明します。そのコンピュータで管理されているすべての Exchange ジャーナルタスクで、同じルールファイルを使います。

ジャーナルのグループ化ルールファイルの作成方法

- 1 ボルトサービスアカウントとして Exchange ジャーナルタスクコンピュータにログオンします。
- 2 メモ帳を使い、Enterprise Vault のインストール先フォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) に SJGroupFilter.dat という名前のファイルを作成します。

- 3 ファイルに、ジャーナルされたメッセージをアーカイブ対象に選択するために使うフィルタのルールを指定します。

p.179 の「ジャーナルのグループ化フィルタルール」を参照してください。

- 4 ファイルを Unicode ファイルとして保存します。

ジャーナルのグループ化フィルタルール

ルールファイルの各行の形式は、次のとおりです。

```
<keyword>:<value>
```

表 13-4 に、ファイルに入力できるキーワードと値を示します。

表 13-4 ジャーナルのグループ化ルールのキーワード一覧

キーワード	説明	値
retcat	一致するメッセージに割り当てる保持カテゴリ。ファイルに 1 つの保持カテゴリ行を記述する必要があり、その保持カテゴリは存在する必要があります。	保持カテゴリ名。次に例を示します。 retcat:Flagged
sample	一致するメッセージをアーカイブする際のサンプリングレートの割合。この行がない場合、サンプリングレートはデフォルトで 100 % になります。	整数 (% 記号はなし)。次に例を示します。 sample:25
userset	一致させるユーザーアドレスのグループを定義します。ルールファイルには、グループに 1 つずつ、計 2 つの userset 行が含まれる必要があります。各行で、グループメンバーのアドレスが含まれる配布リストを定義します。指定した配布リストは空にできません。 ジャーナルのグループ化では動的配布グループがサポートされないことに注意してください。	配布リストの legacyExchangeDN 。次に例を示します。 userset:/o=acme/ou=research/cn=recipients/cn=groupa

メモ: **legacyExchangeDN** プロパティは、**ADSIEdit.msc** または同様の **Active Directory** ツールを使って表示できます。

次のルールファイル例を使うと、ある配布リストのメンバーから別の配布リストのメンバーに送信したメッセージの **25%** に保持カテゴリ **Flagged** が割り当てられます。

```
useriset:/o=acme/ou=research/cn=recipients/cn=groupa
useriset:/o=acme/ou=research/cn=recipients/cn=groupb
retcat:Flagged
sample:25
```

ジャーナルのグループ化のレジストリ設定の追加

このセクションでは、ジャーナルのグループ化のレジストリ設定を追加する方法について説明します。

ジャーナルのグループ化のレジストリ設定を追加する方法

- 1 ボルトサービスアカウントとしてジャーナルタスクコンピュータにログインします。
- 2 **regedit** を実行し、次の場所にナビゲートします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
¥Software
¥Wow6432Node
¥KVS
¥Enterprise Vault
¥External Filtering
¥Journaling
```

External Filtering キーと Journaling キーが存在していない場合は、追加します。

- 3 1 という新しい文字列値を作成し、その値を `SelectiveJournal.SJGroupFilter` に設定します。
- 4 コンピュータ上のすべての **Enterprise Vault Exchange** ジャーナルタスクを再起動します。

ジャーナルのグループ化設定のテスト

このセクションでは、ジャーナルのグループ化の設定をテストする方法について説明します。

ジャーナルのグループ化の設定をテストする方法

- 1 指定した一方の配布リストのユーザーからもう一方の配布リストのユーザーにメッセージを送信します。
- 2 **Enterprise Vault** がメッセージをアーカイブするまで待機してから **Enterprise Vault Search** で保持カテゴリを基準に検索します。

このメッセージにジャーナルのグループ化の保持カテゴリが割り当てられていることを確認します。

- 3 逆方向のテストを繰り返します。2 番目の配布リストのユーザーから最初の配布リストのユーザーにメッセージを送信します。

この場合も、メッセージにジャーナルのグループ化の保持カテゴリが割り当てられます。

- 4 最初の配布リストのユーザーから 2 番目の配布リストにないユーザーにメッセージを送信します。

メッセージは、デフォルトの **Exchange** ジャーナルポリシーで指定された保持カテゴリでアーカイブされます。

- 5 2 番目の配布リストのユーザーから最初の配布リストにないユーザーにメッセージを送信します。

この場合も、メッセージは、デフォルトの **Exchange** ジャーナルポリシーで指定された保持カテゴリでアーカイブされます。

カスタムフィルタの設定

ジャーナルの選択とジャーナルのグループ化では、非常に限定的なフィルタ機能が提供され、**Exchange Server** ジャーナルメールボックスアーカイブのみで利用でき、同じフィルタ処理が **Enterprise Vault** サーバーコンピュータで設定された **Exchange** ジャーナルタスクが対象とするすべてのジャーナルメールボックスに適用されます。カスタムフィルタでは、**Exchange Server** アーカイブのすべての種類 (ユーザーメールボックス、ジャーナルメールボックス、パブリックフォルダ) に対してより高度なフィルタ処理が提供されます。たとえば、特定の件名、送信者、または受信者のアイテムを別のアーカイブに送ったり、社内で送信されたメッセージに専用の保持カテゴリ「**Internal**」を設定したりすることができます。

カスタムフィルタを有効にするすべてのアーカイブタスクに適用されるデフォルトのフィルタを設定できます。また、パブリックフォルダアーカイブ用、特定のユーザーメールボックスまたはジャーナルメールボックス用に個別のカスタムフィルタを作成できます。

カスタムプロパティがアイテムに追加されている場合、選択アイテムに対してこれらのプロパティにインデックスを付けることができます。カスタムフィルタを拡張してカスタムプロパティ機能を使う方法についての説明があります。

p.225 の「[カスタムプロパティと内容カテゴリの設定](#)」を参照してください。

表 13-5 カスタムフィルタの設定手順

手順	処理	関連情報
手順 1	必要なアーカイブタスクのカスタムフィルタを有効にするようにレジストリを設定します。	<p>p.183 の「Exchange Server ジャーナルカスタムフィルタのレジストリ設定」を参照してください。</p> <p>p.185 の「Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリ設定」を参照してください。</p> <p>p.187 の「Exchange Server パブリックフォルダカスタムフィルタのレジストリ設定」を参照してください。</p>
手順 2	必要に応じて、1 つ以上の XML ルールセットファイルにフィルタルールと処理を作成します。ルールセットファイルは、Enterprise Vault¥Custom Filter Rules フォルダに格納する必要があります。	<p>p.188 の「カスタムフィルタルールセットの概要」を参照してください。</p> <p>p.195 の「カスタムフィルタのルールセットファイルの一般的な形式について」を参照してください。</p> <p>p.199 の「カスタムフィルタのルール処理について」を参照してください。</p> <p>p.202 の「カスタムフィルタのメッセージ属性フィルタについて」を参照してください。</p> <p>p.215 の「カスタムフィルタの添付ファイル属性フィルタ」を参照してください。</p> <p>p.221 の「カスタムフィルタのルールセットファイルの例」を参照してください。</p>

手順	処理	関連情報
手順 3	カスタムフィルタを有効にしたアーカイブタスクを再起動します。	<p>Exchange Server アーカイブタスクが開始すると、次のメッセージが Enterprise Vault イベントログに送信されます。</p> <p>EventID = 45329 Description = External Filter</p> <p>'EnterpriseVault.CustomFilter' initialising...</p> <p>Exchange Server アーカイブタスクが停止すると、次のメッセージが Enterprise Vault イベントログに送信されます。</p> <p>EventID = 45330 Description = External Filter</p> <p>'EnterpriseVault.CustomFilter' stopped.</p>

分散 Enterprise Vault 環境でのカスタムフィルタについて

複数のコンピュータでアーカイブタスクを実行している分散環境では、カスタムフィルタを有効にするアーカイブタスクを管理する各コンピュータで、レジストリエントリを設定する必要があります。同様に、XML ルールセットファイルを、カスタムフィルタを有効にするアーカイブタスクを管理するすべてのコンピュータにコピーする必要があります。

レジストリ設定または XML ファイルを変更する場合、他の各コンピュータに変更を伝播してください。

Exchange Server ジャーナルカスタムフィルタのレジストリ設定

このセクションで説明するレジストリ設定を行うと、サーバーで管理されるすべての **Exchange** ジャーナルタスクでカスタムフィルタが有効になります。

名前付きのルールセットファイルを作成すると、特定のジャーナルメールボックスにフィルタを制限できます。

p.188 の「[カスタムフィルタルールセットの概要](#)」を参照してください。

メモ: すべてのジャーナルメッセージから要求された割合でキャプチャするために **Compliance Accelerator** を使っている場合、選択されたメッセージを削除するカスタムフィルタを設定しないでください。メッセージを削除すると、**Compliance Accelerator** 監視ポリシーの精度が低下します。削除されたメッセージは、キャプチャで利用できないためです。

Exchange Server ジャーナルカスタムフィルタのレジストリを設定するには

- 1 **Enterprise Vault Exchange** ジャーナルタスクを管理するコンピュータで、ボルトサービスアカウントとしてログオンします。
- 2 レジストリエディタを起動します。
- 3 次の場所にナビゲートします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
¥Software
  ¥Wow6432Node
    ¥KVS
      ¥Enterprise Vault
        ¥External Filtering
          ¥Journaling
```

External Filtering キーが存在しない場合、次の手順を一覧表示された順序で実行して作成します。

- Enterprise Vault を右クリックし、[新規]、[キー]の順に選択します。

- キーに External Filtering という名前を付けます。

同様に、Journaling キーが存在しない場合、次のように作成します。

- [External Filtering]を右クリックし、[新規]、[キー]の順に選択します。

- キーに Journaling という名前を付けます。

- 4 Journaling キーが存在する場合、既存のフィルタがその下に一覧表示されます。フィルタ名には 1 から始まる連続した番号が付加されます。
- 5 新しいカスタムフィルタ設定に新しい文字列値を作成します。この設定の名前は、既存のシーケンス番号に適合する必要があります。他のジャーナルフィルタが存在しない場合は、名前を 1 に設定します。値 EnterpriseVault.CustomFilter を指定します。

- 6 オプションで、Override という名前の DWORD エントリが存在しない場合はこれを作成できます。0 (ゼロ) に値を設定します。このエントリは、Exchange ジャーナルタスクがジャーナルメールボックスを処理するたびに MARK_DO_NOT_ARCHIVE としてマーク付けされるメッセージを再診断するかどうか制御します。値が 0 であるか、または Override エントリが存在しない場合、Exchange ジャーナルタスクはメッセージを再診断しません。

ルール処理を後で変更する場合は、一時的に値を 1 に設定できます。この値を設定すると、ジャーナルメールボックスのメッセージを再処理する Exchange ジャーナルタスクが実行されます。

- 7 MoveOnFilterFailure という DWORD 値が存在しない場合は作成し、その値を 1 に設定します。

このエントリは、処理できないエラーが外部フィルタで発生した場合に、Exchange ジャーナルタスクがフォルダ Failed External Filter にメッセージを移動するかどうかを制御します。このフォルダは、必要に応じてジャーナルメールボックスに自動的に作成されます。

MoveOnFilterFailure レジストリエントリが存在しなければ、処理できないエラーが外部フィルタで発生した場合に、Exchange ジャーナルタスクはジャーナルメールボックスの Enterprise Vault Journaling Service¥Invalid Journal Report フォルダに関連するメッセージを移動します。

- 8 レジストリエディタを閉じます。
- 9 必要な XML フィルタルールを設定したら、Exchange ジャーナルタスクを再起動します。

p.188 の「[カスタムフィルタルールセットの概要](#)」を参照してください。

Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリ設定

このセクションで説明するレジストリ設定を行うと、サーバーで管理されるすべての Exchange メールボックスタスクでカスタムフィルタが有効になります。

名前付きのルールセットファイルを作成すると、特定のメールボックスにフィルタを制限できます。

p.188 の「[カスタムフィルタルールセットの概要](#)」を参照してください。

Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリを設定するには

- 1 Enterprise Vault Exchange メールボックスタスクを管理するコンピュータで、ボルト サービスアカウントとしてログオンします。
- 2 レジストリエディタを起動します。
- 3 次の場所にナビゲートします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
¥Software
  ¥Wow6432Node
    ¥KVS
      ¥Enterprise Vault
        ¥External Filtering
```

External Filtering キーが存在しない場合、次の手順を一覧表示された順序で実行して作成します。

- Enterprise Vault を右クリックし、[新規]、[キー]の順に選択します。
- キーに External Filtering という名前を付けます。

4 Mailbox キーを次のように作成します。

- [External Filtering]を右クリックし、[新規]、[キー]の順に選択します。
- キーに Mailbox という名前を付けます。

5 新しいカスタムフィルタエントリに新しい文字列エントリ 1 を作成します。

6 新しいエントリを右クリックし、[修正]を選択します。値を指定します。

```
EnterpriseVault.CustomFilter
```

7 任意で、Override という名前の新しい DWORD エントリを作成し、0 (ゼロ) に値を設定できます。このエントリの値を変更することによって、Exchange メールボックスタスクがアーカイブの間にカスタムフィルタルールを適用するかどうかを制御できます。

- 0 (ゼロ): Exchange メールボックスタスクは、すべてのメッセージにカスタムフィルタルールを適用します。
- 1: Exchange メールボックスタスクはカスタムフィルタルールを適用しません。

Override エントリが存在しなければ、タスクはすべてのメッセージにカスタムフィルタルールを適用します。

- 8 MoveOnFilterFailure という DWORD エントリが存在しない場合は作成し、その値を 1 に設定します。

このエントリは、処理できないエラーが外部フィルタで発生した場合に、Exchange メールボックスタスクがフォルダ Failed External Filter にメッセージを移動するかどうかを制御します。このフォルダは、必要に応じてユーザーメールボックスに自動的に作成されます。

MoveOnFilterFailure レジストリエントリが存在しなければ、処理できないエラーが外部フィルタで発生した場合に、Exchange メールボックスタスクは関連するメッセージを移動しません。タスクは各アーカイブの実行時にメッセージを処理することを試みます。

- 9 レジストリエディタを閉じます。
- 10 必要な XML フィルタルールを設定したら、Exchange メールボックスタスクを再起動します。

Exchange Server パブリックフォルダカスタムフィルタのレジストリ設定

このセクションで説明するレジストリ設定を行うと、サーバーで管理されるすべての Exchange パブリックフォルダタスクでカスタムフィルタが有効になります。パブリックフォルダルールセットファイルを作成して、パブリックフォルダアーカイブに特定のルールを適用できます。

メールボックスフィルタとは異なり、特定のパブリックフォルダのフィルタを設定するために、名前付きのルールセットファイルを使うことはできません。

Exchange Server パブリックフォルダカスタムフィルタのレジストリを設定するには

- 1 Enterprise Vault Exchange パブリックフォルダタスクを管理するコンピュータで、ボルトサービスアカウントとしてログオンします。
- 2 レジストリエディタを起動します。
- 3 次の場所にナビゲートします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
¥Software
¥Wow6432Node
¥KVS
¥Enterprise Vault
¥External Filtering
```

External Filtering キーが存在しない場合、次のように作成します。

- Enterprise Vault を右クリックし、[新規作成]、[キー]の順に選択します。
- キーに External Filtering という名前を付けます。

- 4 PublicFolder キーを次のように作成します。
 - [External Filtering]を右クリックし、[新規作成]、[キー]の順に選択します。
 - キーに PublicFolder という名前を付けます。
- 5 新しいカスタムフィルタエントリに新しい文字列値 1 を作成します。
- 6 新しいエントリを右クリックし、[修正]を選択します。値を指定します。

```
EnterpriseVault.CustomFilter
```

- 7 任意で、Override という名前の新しい DWORD エントリを作成し、0 (ゼロ) に値を設定できます。このエントリの値を変更することによって、Exchange パブリックフォルダタスクがアーカイブの間にカスタムフィルタルールを適用するかどうかを制御できます。
 - 0 (ゼロ): Exchange パブリックフォルダタスクは、すべてのメッセージにカスタムフィルタルールを適用します。
 - 1: Exchange パブリックフォルダタスクはカスタムフィルタルールを適用しません。

Override エントリが存在しなければ、タスクはすべてのメッセージにカスタムフィルタルールを適用します。

- 8 レジストリエディタを閉じます。
- 9 必要な XML フィルタルールを設定したら、Exchange パブリックフォルダタスクを再起動します。

p.188 の「[カスタムフィルタルールセットの概要](#)」を参照してください。

カスタムフィルタルールセットの概要

カスタムフィルタのルールおよび処理は、XML のルールセットファイルで定義されます。各ルールセットファイルは関連付けられた処理を用いる 1 つ以上のルールを含んでいます。

各ルールには次の内容が含まれます。

- アーカイブタスクが処理する各アイテムを評価するための、1 つ以上の属性フィルタのセット。すべての属性フィルタが評価されるため、ルールでの属性フィルタの順序は重要ではありません。
- ルールのすべての属性フィルタに一致するアイテムに適用される処理。特定の保持カテゴリを適用したり、指定されたアーカイブにアイテムを格納したりするといった処理があります。一致するアイテムには複数の処理を適用できます。

ルールでの属性フィルタの順序は重要ではありませんが、ルールセットファイルでのルールの順序は重要です。ルールはファイルに出現する順序で評価されます。最初に一致したルールに関連付けされている処理がアイテムに適用され、そのアイテムではその他のルールは評価されません。アイテムに一致するルールがない場合、デフォルトの処理はアイテムのアーカイブです。

アイテムはメッセージの場合も添付ファイルの場合もあります。メッセージに添付ファイルがある場合、最初にメッセージが評価され、次に添付ファイルが評価されます。

デフォルトでは、ルールと一致しないアイテムは、メールボックスアーカイブタスクまたはジャーナルアーカイブタスクによってアーカイブされます。ルールに一致するアイテムのみをアーカイブする場合は、最後のルールとしてルールセットファイルに「**catch-all**」ルールを作成します。この最後のルールに「**MARK_DO_NOT_ARCHIVE**」処理を割り当てます。

フィルタの開発およびテスト実行中、ルールに「**MARK_DO_NOT_ARCHIVE**」処理を割り当てることを推奨します。実働環境で使う処理に変更する前に、ルールが想定どおりに適用されていることを確認します。

すべてのルールセットファイルは、カスタムフィルタを有効にするアーカイブタスクを管理するコンピュータのメイン **Enterprise Vault** フォルダ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) にあるフォルダ Custom Filter Rules に配置される必要があります。

Enterprise Vault がインストールされた後、このフォルダには次の XML ファイルが格納されます。

- Example Filter Rules.xml。フィルタルールの例を提供します。
- ruleset schema.xdr。XML ルールセットファイルの妥当性を検証するための XML スキーマが含まれます。
- Example Custom Properties.xml。custom properties.xml ファイルのエントリ例を提供します。
p.228 の「[Custom Properties.xml の一般的な形式について](#)」を参照してください。
- customproperties.xsd。カスタムプロパティ XML ファイルの妥当性を検証するための XML スキーマが含まれます。

ルールセットファイルを作成したり、既存のルールセットファイルを修正する場合、変更が反映される前に関連付けられたアーカイブタスクを再起動してください。分散環境では、カスタムフィルタを有効にしたタスクのある各コンピュータに更新済みのファイルをコピーしてから、各コンピュータで関連付けされたタスクを再起動する必要があります。

メモ: 特殊文字を含んでいる名前と一致するルールを作成する場合、Unicode のエンコードを用いる XML のルールセットファイルを保存してください。

カスタムフィルタのデフォルトのフィルタルールファイルについて

デフォルトのフィルタおよび処理は、Default Filter Rules.xml という名前のルールセットファイルで定義されます。

パブリックフォルダ用または特定のメールボックス用に特定のフィルタを実装する場合は、デフォルトのルールセットファイルだけでなく、名前付きのルールセットファイルを作成できます。名前付きのルールセットファイルに関連付けられたそれぞれの対象場所は、そのルールセットファイルのルールに従って処理されます。その他すべてのカスタムフィルタは、デフォルトのルールセットファイルのルールを使います。

Default Filter Rules.xml を使用しない場合は、IGNORENODEFAULT レジストリ値を設定してください。

p.191 の「[デフォルトのカスタムフィルタの動作の制御について](#)」を参照してください。

この方法では、カスタムフィルタは、名前付きのルールセットファイルで明示的に定義された対象場所のみに適用されます。

カスタムプロパティ機能を実装し、アーカイブタスクが処理するすべてのアイテムに同じ処理を適用する場合（つまり、一致する属性で処理するように特定のアイテムが選択されていない場合）は、ルールセットファイルをすべて無効にし、ファイル custom properties.xml でデフォルトの内容のカテゴリを定義できます。

次のセクションでは、内容のカテゴリと custom properties.xml ファイルについて説明しています。

p.225 の「[カスタムプロパティと内容カテゴリの設定](#)」を参照してください。

個々の Exchange Server メールボックスの名前付きのルールセットファイルについて

個々の Exchange Server ユーザーメールボックスまたはジャーナルメールボックスのカスタムフィルタを設定するには、フィルタ処理するメールボックスごとに個別のルールセットファイルを作成する必要があります。各ルールセットファイル名は mailbox_owner.xml にする必要があります。

一般に、メールボックスの所有者は、アカウントの[表示名]と同じですが、何らかの理由でメールボックス所有者名を変更した場合は異なることがあります。

たとえば、John Doe のメールボックスをフィルタ処理する場合、John Doe がメールボックスの所有者名であれば、「John Doe.xml」というルールセットファイルを作成します。メールボックスの所有者名が「Journal US1」であるジャーナルメールボックスにフィルタを適用する場合は、「Journal US1.xml」というルールセットファイルを作成します。名前付きのルールセットファイルがなく、かつカスタムフィルタ用に有効にされているアーカイブタスクが対象とするその他のメールボックスは、デフォルトのルールセットファイル Default Filter Rules.xml を使って処理されます。

カスタムフィルタのアーカイブタスクが有効であるにもかかわらず、デフォルトのルールセットファイルも、名前付きルールセットファイルも存在しない場合、アーカイブタスクは `custom properties.xml` で定義されたデフォルトの内容のカテゴリを使います。前のファイルがいずれも存在しない場合は、エラーがログに記録され、アーカイブタスクが停止します。

IGNORENODEFAULT レジストリ設定を使って、不明なデフォルトを適切に管理するようにアーカイブタスクを設定できます。

p.191 の「[デフォルトのカスタムフィルタの動作の制御について](#)」を参照してください。

このレジストリ設定は、フィルタを名前付きのメールボックスのみに制限する場合に、特に便利です。

メモ: すべての **Exchange Server** メールボックスアーカイブでカスタムフィルタが有効であり、かつ **Exchange Server** ユーザーメールボックスとジャーナルメールボックスに別々のルールを適用する場合は、名前付きのルールセットファイルを **Exchange Server** ジャーナルメールボックス用に作成し、デフォルトのルールセットファイルをすべてのユーザーメールボックスのフィルタ用に設定できます。これにより、名前付きのルールセットファイルを多数作成する必要がなくなります。

パブリックフォルダの名前付きルールセットファイルについて

Exchange Server パブリックフォルダに専用のフィルタを設定するには、`Public Folder Rules.xml` という別のルールセットファイルを作成する必要があります。**Enterprise Vault** サーバーコンピュータで管理されているすべての **Exchange** パブリックフォルダタスクで、そのルールファイルを使います。`Public Folder Rules.xml` が存在しない場合は、デフォルトのルールセットファイル `Default Filter Rules.xml` が使われます。これらのファイルがどちらも存在せず、デフォルトの内容のカテゴリが `custom properties.xml` で定義されている場合、アイテムはデフォルトの内容のカテゴリの設定に従ってアーカイブされます。

p.225 の「[カスタムプロパティと内容カテゴリの設定](#)」を参照してください。

`Public Folder Rules.xml` と `Default Filter Rules.xml`、デフォルトの内容のカテゴリのいずれも存在しない場合は、**IGNORENODEFAULT** レジストリ設定を設定されていない限り、エラーがログに記録され、アーカイブタスクが停止します。

IGNORENODEFAULT レジストリ設定を使って、不明なデフォルトを適切に管理するようにアーカイブタスクを設定できます。

デフォルトのカスタムフィルタの動作の制御について

Enterprise Vault アーカイブタスクのフィルタ処理が有効である場合、アーカイブ時の処理は次のさまざまな設定エンティティの存在によって決まります。

- Enterprise Vault¥Custom Filter Rules フォルダの XML ルールセットファイル
- XML ルールセットファイル Default Filter Rules.xml
- XML カスタムプロパティファイル Custom Properties.xml
- Custom Properties.xml の内容のカテゴリのエントリ

一部の設定エンティティが定義されていない場合、追加の設定オプションである **IGNORENODEFAULT** レジストリエントリを使ってアーカイブタスクの動作を変更できます。

p.192 の「[カスタムフィルタの IGNORENODEFAULT レジストリエントリの設定](#)」を参照してください。

さまざまな設定と各設定に伴うアーカイブタスクの動作を、[表 13-6](#)と[表 13-7](#)に示します。

カスタムフィルタの IGNORENODEFAULT レジストリエントリの設定

適切なレジストリキーを設定してアーカイブタスクのカスタムフィルタやカスタムプロパティを有効にした場合は、特定の設定エンティティを使ってアーカイブタスクのデフォルトの処理を定義する必要があります。たとえば、特定のフィルタルールを使って特定の対象をアーカイブする場合、カスタムフィルタを行うアーカイブ対象ごとに名前付きの XML ルールセットファイルが存在している必要があります。また、アーカイブタスクが処理するその他のアーカイブ対象で使うフィルタルールを提供するため、Default Filter Rules.xml ファイルも存在している必要があります。このファイルが存在しない場合、アーカイブタスクは停止し、イベントログにエラーが報告されます。

代わりに、Default Filter Rules.xml ファイルが存在しなくても

IGNORENODEFAULT レジストリエントリを設定すると、アーカイブタスクはファイルが存在しないという事実を無視し、名前付きのルールセットファイルが存在しないすべての対象のアーカイブ時にデフォルトのアーカイブタスクポリシー設定を使います。

また **IGNORENODEFAULT** レジストリエントリを使って、名前付きのルールセットファイルの存在するアーカイブ対象のみにカスタムフィルタを制限できます。(Default Filter Rules.xml ファイルが存在する場合、カスタムフィルタが有効になっているすべてのアーカイブタスクでデフォルトとして使われます)。

同様に、特定の対象アーカイブの場所にカスタムプロパティのインデックス付けを適用するには、通常は次の設定エンティティが必要です。

- インデックス付けするカスタムプロパティと関連付けされた内容のカテゴリを定義するエントリを含んだ Custom Properties.xml ファイル
- カスタムプロパティのインデックス付けが必要な各アーカイブ対象の個別の名前付きルールセットファイル

- Custom Properties.xml で、名前付きルールセットファイルで対応していない他の場所からアーカイブされたすべてのメッセージに使うデフォルトの内容のカテゴリ

ただし、カスタムフィルタとカスタムプロパティのインデックス付けを名前付きの対象に制限する場合は、Custom Properties.xml でのデフォルトの内容のカテゴリの設定を省略し、IGNORENODEFAULT レジストリエントリを設定する方がより効率的です。この方法を使った場合、カスタムプロパティのインデックス付けは、名前付きルールセットファイルで明示的に定義された場所에만適用されます。

カスタムフィルタの IGNORENODEFAULT レジストリエントリを設定する方法

- 1 カスタムプロパティとカスタムフィルタが有効になっているアーカイブタスクを実行しているコンピュータに、Enterprise Vault サービスアカウントでログインします。
- 2 レジストリエディタを起動します。
- 3 次の場所にナビゲートします。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE
¥Software
¥Wow6432Node
¥KVS
¥Enterprise Vault
¥External Filtering
¥Journaling|Mailbox|PublicFolder
```

- 4 必要なアーカイブキー (Journaling、Mailbox、PublicFolder のいずれか) を右クリックし、[新規]、[キー]の順に選択します。
- 5 新しいキーに EnterpriseVault.CustomFilter という名前を付けます。
- 6 EnterpriseVault.CustomFilter を右クリックし、IGNORENODEFAULT という新しい DWORD を作成します。
- 7 値を 1 に設定すると、不明なデフォルトファイルや設定が無視されます。
このキーは、選択したアーカイブの種類すべてのタスクに適用されます。
- 8 レジストリエディタを閉じます。
- 9 関連付けされたアーカイブタスクを再開します。

複数のコンピュータでアーカイブタスクを実行している分散環境では、カスタムフィルタとカスタムプロパティが有効になっているアーカイブタスクを実行している各コンピュータで、これらの手順を実行する必要があります。

カスタムフィルタのデフォルト動作の概略

表 13-6 に、カスタムフィルタとカスタムプロパティの 10 種類の異なる設定を示します。ケースごとにアーカイブタスクが実行する処理については、表 13-7 で説明しています。

いずれの場合も、適切なレジストリ設定が行われ、カスタムフィルタ用にアーカイブタスクが有効であることを前提としています。次の設定エンティティが考慮されます。

- Enterprise Vault¥Custom Filter Rules フォルダの名前付き XML ルールセットファイル。以下に示す例では、John Doe.xml と Sam Cole.xml がそれぞれメールボックス John Doe と Sam Cole の名前付きルールセットファイルです。
名前付きルールセットファイルは、Exchange Server パブリックフォルダまたは特定の Exchange Server ジャーナルメールボックスに対しても作成できます。
p.188 の「[カスタムフィルタールールセットの概要](#)」を参照してください。
- すべての種類のアーカイブのデフォルトルールセットファイル Enterprise Vault¥Custom Filter Rules¥Default Filter Rules.xml。
- インデックス付けを行うカスタムプロパティが定義されたカスタムプロパティファイル Enterprise Vault¥Custom Filter Rules¥Custom Properties.xml。
- Custom Properties.xml ファイルの内容のカテゴリのエントリ。
- 値が 1 のレジストリ設定 IGNORENODEFAULT。

表 13-6 カスタムフィルタとカスタムプロパティの設定の例

ケース	カスタムプロパティファイルが存在する	デフォルトの内容のカテゴリが定義されている	John Doe.xml の名前付きルールセットファイルが存在する	Sam Cole.xml の名前付きルールセットファイルが存在する	デフォルトのルールセットファイルが存在する	IGNORENODEFAULT が設定されている
1	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
2	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	はい
3	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	いいえ
4	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ	はい
5	いいえ	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
6	いいえ	いいえ	はい	いいえ	はい	はい
7	はい	いいえ	いいえ	はい	いいえ	いいえ
8	はい	いいえ	いいえ	はい	いいえ	はい
9	はい	はい	いいえ	はい	いいえ	いいえ
10	はい	はい	いいえ	はい	いいえ	はい

表 13-7 設定例に伴う処理

ケース	発生する処理
1	カスタムフィルタは有効だが、ルールセットファイルもカスタムプロパティファイルも存在しないため、エラーがイベントログに書き込まれ、アーカイブタスクは停止します。
2	存在しないデフォルト設定は無視され、両方のメールボックスはデフォルトのメールボックスポリシーに従ってアーカイブされます。
3	デフォルトのルールセットファイルもカスタムプロパティファイルも存在しないため、 Sam Cole のメールボックスはエラーが報告され、アーカイブタスクは停止します。
4	John Doe のメールボックスは <code>John Doe.xml</code> のルールに従ってアーカイブされ、 Sam Cole のメールボックスはデフォルトのメールボックスポリシーに従ってアーカイブされます。存在しないデフォルト設定は無視されます。
5	John Doe のメールボックスは <code>John Doe.xml</code> のルールに従ってアーカイブされ、 Sam Cole のメールボックスは <code>Default Filter Rules.xml</code> のルールに従ってアーカイブされます。 カスタムプロパティはインデックス付けされません。内容のカテゴリは使えません。
6	ケース 5 と同様。IGNORENODEFAULT の設定による影響はありません。
7	適用可能な名前付きルールセットファイル、デフォルトのルールセットファイル、カスタムプロパティファイルのいずれかが存在しないため、 John Doe のメールボックスはエラーが報告され、アーカイブタスクは停止します。
8	John Doe のメールボックスはデフォルトのメールボックスポリシーのルールに従ってアーカイブされます。 Sam Cole のメールボックスは <code>Sam Cole.xml</code> のルールに従ってアーカイブされます。
9	John Doe のメールボックスのすべてのメッセージがアーカイブされ、カスタムプロパティがインデックス付けされます。 Sam Cole のメールボックスのメッセージは <code>Sam Cole.xml</code> のルールに従ってアーカイブされます。
10	ケース 9 と同様。IGNORENODEFAULT の設定による影響はありません。

カスタムフィルタのルールセットファイルの一般的な形式について

このセクションでは、XML ルールセットファイルに要求される全体の形式について説明します。

すべてのルールセットファイルは、カスタムフィルタを有効にするアーカイブタスクを管理するコンピュータのメイン **Enterprise Vault** フォルダ (たとえば、`C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault`) にあるフォルダ `Custom Filter Rules` に配置される必要があります。

ルールセットファイルの一般的な形式は、次のとおりです。

```
<?xml version="1.0"?>
<RULE_SET xmlns="x-schema:ruleset schema.xdr">

  <RULE [NAME="rule_name"] [ACTION="match_action"]
    [ATTACHMENT_ACTION="match_action"]
    [CONTENTCATEGORY="content_category"]
    [RETENTION="retention_category"]
    [ARCHIVEID="archiveid"]>

    <message_attribute [attribute_value_operators]>
      <attribute_value>
        [<attribute_value>]
      </message_attribute>

      [<message_attribute>... </message_attribute>]

      [<attachment_attributes> [attribute_value_operator]>
        <attachment_attribute_values>
          [<attachment_attribute_values>]
        </attachment_attributes>]

      [<attachment_attributes>... </attachment_attributes>]

    </RULE>

  [<RULE> ... </RULE>]
</RULE_SET>
```

ルールセットには、1 つ以上のルールを含めることができます。ルールに名前を付ける指定 (NAME="rule_name") は、省略可能です。文書化するためと、トレース出力でルールを識別するために、ルールの名前付けを含めることを推奨します。

各ルールには、メッセージを評価するための 1 つ以上のメッセージ属性フィルタが含まれます。メッセージの添付ファイルを評価するための添付ファイル属性フィルタもルールに含めることができます。

表 13-8 に、メッセージの選択に使うことができるメッセージ属性を示します。

表 13-8 カスタムフィルタのためのメッセージ属性

メッセージの属性	関連情報
Author	p.203 の「カスタムフィルタのメッセージの作成者と受信者のフィルタ」を参照してください。

メッセージの属性	関連情報
Recipients	p.203 の「カスタムフィルタのメッセージの作成者と受信者のフィルタ」を参照してください。
Direction	p.211 の「カスタムフィルタのメッセージ方向でのフィルタ」を参照してください。
件名テキスト	p.213 の「カスタムフィルタのメッセージの件名でのフィルタ」を参照してください。
MAPI 名前付きプロパティ	p.214 の「カスタムフィルタの MAPI 名前付きプロパティフィルタについて」を参照してください。

表 13-9 に、メッセージに添付された特定のファイルの選択に使うことができる添付ファイルの属性を示します。

表 13-9 カスタムフィルタのための添付ファイルの属性

添付ファイルの属性	関連情報
ファイル名	p.215 の「カスタムフィルタの添付ファイル属性フィルタ」を参照してください。
ファイルサイズ	p.215 の「カスタムフィルタの添付ファイル属性フィルタ」を参照してください。

属性値の一致では、大文字と小文字が区別されます。ルールすべてのメッセージ属性フィルタがメッセージに適用されるため、ルールにおけるメッセージ属性フィルタの順序は重要ではありません。メッセージがルールに含まれるすべてのメッセージ属性フィルタに一致すると、メッセージはそのルールに一致します。メッセージがルールに一致すると、**ACTION=** で指定された処理がメッセージに適用されます。

メッセージ属性がルールを満たすと、次に添付ファイル属性を使って添付ファイルが評価されます。添付ファイルがルールに一致すると、**ATTACHMENT_ACTION=** で指定された処理が添付ファイルに適用されます。

各ルールには、関連付けされたメッセージ処理を設定します。**ACTION="match_action"** は、メッセージがルールに一致するときにメッセージに適用される処理を定義します。たとえば、アイテムを評価済みとしてマーク付けしても、アーカイブしないように処理することができます (**ACTION="MARK_DO_NOT_ARCHIVE"**)。アイテムをアーカイブする処理の場合は、追加の処理を指定できます。たとえば、特定の保持カテゴリを割り当てたり (**RETENTION="retention_category"**)、アイテムを特定のアーカイブに格納したり (**ARCHIVEID="archive_ID"**) することができます。処理が指定されない場合のデフォルトは、**"ARCHIVE_ITEM"** です。

ルールに一致するメッセージがアーカイブされる方法を指定する場合は、内容のカテゴリを割り当てることを推奨します。内容のカテゴリは、アーカイブ済みアイテムに適用され

る設定のグループです。保持カテゴリ、アーカイブ ID、Enterprise Vault でインデックスが付けられる追加プロパティの一覧を含めることができます。内容のカテゴリはファイル `custom properties.xml` で定義します。

p.233 の「[内容のカテゴリについて](#)」を参照してください。

メッセージの添付ファイルが評価される場合、ルールには添付ファイル処理 (`ATTACHMENT_ACTION="match_action"`) が関連付けされている必要があります。添付ファイル処理を指定する場合は、添付ファイル属性要素 (`<FILES>` 要素) もルールに設定する必要があります。この要素は、添付ファイルの一致に使うファイル名またはファイルサイズ (あるいはその両方) を定義します。添付ファイルが指定された添付ファイルフィルタに一致する場合は、添付ファイル処理が実行されます。入れ子になっているメッセージの添付ファイルもフィルタで処理されます。

メモ: メッセージ (および添付ファイル) に対して、ルールセットファイルの各ルールがファイルに出現する順序で評価され、最初に一致したルールだけが実行されます。このため、優先度の最も高いルールを先頭に配置することが重要です。

カスタムフィルタの XML ルールセットファイルの妥当性の検証について

カスタムフィルタを有効にしたアーカイブタスクは、アイテムのアーカイブを開始するときに、スキーマ `ruleset schema.xdr` に対してルールセットの XML の妥当性を検証します。無効な XML がある場合はタスクが停止するので、エラーを修正してからタスクを再開する必要があります。

構文エラーによるタスクの中断を回避するため、タスクがアクセスする前に、XML ファイルの妥当性を検証することを推奨します。Liquid XML Studio の GUI の XML エディタなど、他社のツールを使うことができます。

<http://www.liquid-technologies.com/XMLStudio/Free-Xml-Editor.aspx>

このツールを使う場合、次のように名前空間を指定します。

```
x-schema:ruleset schema.xdr
```

スキーマファイル `ruleset schema.xdr` は、Custom Filter Rules フォルダに含まれています。どのルールセットファイルでも、次のようにファイルの先頭でスキーマを参照する必要があります。

```
<?xml version="1.0"?>  
<RULE_SET xmlns="x-schema:ruleset schema.xdr">
```

ファイルに非 ANSI 文字が含まれる場合は、最初の行で適切なエンコーディングが設定されていることと、ファイルが適切なエンコーディングで保存されていることを確認してください。

メモ: このマニュアルで大文字で示すすべての XML タグと事前定義済みの値は、大文字と小文字が区別されるため、ルールセットファイルでは大文字で入力する必要があります。入力する値も、大文字と小文字を区別する必要があります。

カスタムフィルタのルール処理について

ルールフィルタに一致するメッセージに適用できる処理は次のとおりです。

- **ACTION="ARCHIVE_ITEM"**。メッセージをアーカイブします。**ACTION=** 句を含まない場合、またはメッセージがいずれのルールにも一致しない場合の、デフォルトの処理です。
この処理では、アイテムへの保持カテゴリの割り当て (**RETENTION="<retention_category>"**)、特定アーカイブへのアイテムの送信 (**ARCHIVEID="<archive_ID>"**)、特定の内容のカテゴリの割り当てなどの追加の処理を指定できます。
p.201 の「[カスタムフィルタの保持カテゴリの割り当て](#)」を参照してください。
p.201 の「[カスタムフィルタのアーカイブの指定](#)」を参照してください。
- **ACTION="MARK_DO_NOT_ARCHIVE"**。メッセージをアーカイブせず、もとの場所に残します。

メモ: **MARK_DO_NOT_ARCHIVE** としてマークが付けられたメッセージは、もとの場所に残ります。フィルタをジャーナルメールボックスに適用する場合、この処理はメッセージ数が少ない場合に使うようにしてください。多くのメッセージが残されると、ジャーナルのパフォーマンスに影響がある場合があります。

ルール処理を後で変更する場合は、タスクでマークの付いたアイテムを再処理するように、一時的に **Override** レジストリの値を **1** に設定できます。**Override** レジストリの値について詳しくはアーカイブタスクのカスタムフィルタレジストリ設定を設定する方法について説明しているセクションを参照してください。

- p.183 の「[Exchange Server ジャーナルカスタムフィルタのレジストリ設定](#)」を参照してください。
- p.185 の「[Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリ設定](#)」を参照してください。
- p.187 の「[Exchange Server パブリックフォルダカスタムフィルタのレジストリ設定](#)」を参照してください。
- **ACTION="MOVE_DELETED_ITEMS"**。メッセージをアーカイブせず、Deleted Items フォルダに移動します。
この処理は、パブリックフォルダフィルタでは使えません。この処理を設定すると、エラーがログに記録され、タスクが停止します。

- **ACTION="HARD_DELETE"**。メッセージをアーカイブせず、Deleted Items フォルダに移動しないですぐに削除します。この処理は、Exchange Server パブリックフォルダフィルタには推奨されません。

メモ: すべての Exchange Server ジャーナルメッセージから要求された割合でキャプチャするために **Compliance Accelerator** を使っている場合、選択されたメッセージを削除するカスタムジャーナルフィルタを設定しないでください。これを設定すると、**Compliance Accelerator** 監視ポリシーの精度が低下します。削除されたメッセージは、キャプチャで利用できないためです。

添付ファイルフィルタに一致するメッセージ添付ファイルに適用できる処理は次のとおりです。

- **ATTACHMENT_ACTION="REMOVE"**。メッセージに添付されたファイルが、添付ファイル属性フィルタで指定された名前またはサイズと一致する場合は、そのファイルを削除します。
- **ATTACHMENT_ACTION="REPLACE"**。メッセージに添付されたファイルが、添付ファイル属性フィルタで指定された名前またはサイズと一致する場合は、そのファイルを Deleted Attachments.txt というファイルと置き換えます。このファイルには、削除された添付ファイルの一覧があります。

p.202 の「[カスタムフィルタの Deleted Attachments.txt ファイルについて](#)」を参照してください。

メッセージに添付ファイルのある入れ子になったメッセージがある場合、処理はすべての入れ子になったメッセージ添付ファイルに適用されます。

メッセージに適用される処理が **"HARD_DELETE"** である場合、メッセージに添付されたファイルは評価されません。

以下に、ルールセットファイル内でルール名、メッセージ処理、添付ファイル処理をどのように指定するかを示します。この例では、メッセージ属性フィルタを満たすすべてのメッセージは、デフォルトのアーカイブにアーカイブされます。また、添付ファイルフィルタに一致するすべての **Exchange Server** メッセージは削除されて、Deleted Attachments.txt というファイルに置き換わります。

```
<RULE NAME="Archive Rule 1" ACTION="ARCHIVE_ITEM"
  ATTACHMENT_ACTION="REPLACE">
  <message attribute filters>
  <attachment attribute filter>
</RULE>
```


カスタムフィルタの保持カテゴリの割り当て

RETENTION="*retention_category*" オプションは、ルール処理が ACTION="ARCHIVE_ITEM" の場合のみ適用されます。

retention_category は、Enterprise Vault で定義された既存の保持カテゴリの名前です。別のルールには別の保持カテゴリを指定できます。

ルールセットファイル内のオプションの指定方法の例を以下に示します。この例では、メッセージ属性フィルタを満たすすべてのメッセージは、アーカイブされ、保持カテゴリ **Legal** が割り当てられます。

```
<RULE NAME="Example rule2" ACTION="ARCHIVE_ITEM"
  RETENTION="Legal">
  <message attribute filters>
</RULE>
```

メモ: 保持フォルダや分類機能など、Enterprise Vault の特定の機能は、この保有カテゴリを上書きできます。保持について詳しくは、『管理者ガイド』を参照してください。

カスタムフィルタのアーカイブの指定

ARCHIVEID="*<archive_ID>*" オプションは、ルール処理が ACTION="ARCHIVE_ITEM" の場合のみ適用されます。*archive_ID* は、既存の有効なアーカイブを指定します。

別のルールには別のアーカイブを定義できます。アーカイブを指定しない場合、メールボックスまたはパブリックフォルダのデフォルトのアーカイブが使われます。

ルールセットファイル内のオプションの指定方法の例を以下に示します。この例では、メッセージ属性フィルタを満たすすべてのメッセージは、指定されたアーカイブに格納されます。

```
<RULE NAME="Example rule" ACTION="ARCHIVE_ITEM"
  ARCHIVEID="15165263832890493848568161647.server1.local">
  <message attribute filters>
</RULE>
```

目的のアーカイブの ID を検索する方法

- 1 Enterprise Vault 管理コンソールでアーカイブを右クリックします。
- 2 [プロパティ]を選択します。アーカイブの ID が[プロパティ]の[詳細]ページに表示されます。

カスタムフィルタの Deleted Attachments.txt ファイルについて

添付ファイルの処理が "REPLACE" の場合、フィルタで添付ファイルが削除されたメッセージに Deleted Attachments.txt というファイルが添付されます。このファイルを開くと、削除されたファイルの一覧があります。

このファイルの内容は、Enterprise Vault ディレクトリ (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault) のファイル CF_Replace_Attachment.txt から取得されます。必要に応じて、このファイルのテキストを修正できます。たとえば、説明テキストをローカライズできます。

カスタムフィルタのメッセージ属性フィルタについて

各ルールには、1 つ以上のメッセージ属性フィルタを含めることができます。各メッセージ属性フィルタでは、メッセージで評価する属性を定義します。ルールに一致するには、メッセージがルールに含まれるすべてのメッセージ属性フィルタを満たす必要があります。つまり、ルールに含まれるすべてのメッセージ属性の間には、AND が暗黙に存在します。ルール内部の属性の順序は重要ではありません。

メッセージ属性は、次の汎用形式でルールに定義されます。

```
<RULE NAME="rule_name" ...>

    <message_attribute [attribute_value_operators]>
        <attribute_value>
            [<attribute_value>]
        </message_attribute>

    [<message_attribute>... </message_attribute>]
</RULE>
```

message_attribute は、一致させるメッセージ属性を定義します。これには、AUTHOR、RECIPIENTS、DIRECTION、SUBJECTS または NAMEDPROP を指定できます。

attribute_value は、一致させるメッセージ属性値を定義します。各属性には、1 つ以上の値を指定できます。

attribute_value_operators は、特殊な演算子オプションで、属性の値の適用方法を定義できます。AUTHOR、RECIPIENTS、SUBJECTS、NAMEDPROP でフィルタ処理するときに否定一致と肯定一致を定義する場合は、演算子 INCLUDES= と ALLOWOTHERS= が特に便利です。

p.206 の「INCLUDES と ALLOWOTHERS 演算子を使った複雑なフィルタの作成について」を参照してください。

メッセージ属性 DIRECTION を指定した場合は、属性値の演算子を利用できません。

カスタムフィルタのメッセージの作成者と受信者のフィルタ

メッセージの送信者のアドレス([差出人]のアドレス)と受信者のアドレス([宛先]、[CC]、[BCC]、[非公開]のアドレス)を一致させるために、メッセージ属性 **<AUTHOR>** **</AUTHOR>** と **<RECIPIENTS>** **</RECIPIENTS>** を使うことができます。ルールセットファイルの概略では、メッセージ属性は次のように表されます。

```
<message_attribute>...</message_attribute>
```

メモ: 属性値の一致では、大文字と小文字が区別されます。

次の XML 要素 (ルールセットファイルの概要では **<attribute_value>** 行で表される) を使うと、一致させる実際のアドレスを SMTP 電子メールアドレス、表示名、または SMTP ドメインとして指定できます。

- **<EA>name@domain</EA>**

この形式は、SMTP アドレスを指定するために使われます。指定する値は、完全な SMTP 電子メールアドレスである必要があります。ここで指定した値がアドレスの一部分だけである場合、メッセージは一致しません。ワイルドカード文字を使うことはできません。

アンパサンド文字 (&) が SMTP アドレスに含まれる場合、この文字は次のように置き換える必要があります。

```
&amp;
```

アンパサンド文字 (&) は XML で特別な文字であるためです。たとえば、SMTP アドレス **admin&finance@ourcompany.com** は、XML ファイルでは次のように指定する必要があります。

```
admin&amp;finance@ourcompany.com
```

- **<DISPN>display name</DISPN>**

この形式は、表示名を指定するために使われます。SMTP アドレスの場合と同様に、値はワイルドカード文字が含まれない完全な表示名である必要があります。表示名は多数の異なる形式である可能性があるため、関連する SMTP アドレス用のフィルタを含めることを推奨します。

Exchange Server メッセージの表示名の例を次に示します。

```
<DISPN>John Doe</DISPN>
```

- **<DOMAIN>exampledomain.com</DOMAIN>**

この形式は、SMTP ドメインを指定するために使われます。指定する値は、完全なドメインとサブドメインのどちらでもかまいません。たとえば、次のドメイン値を指定するとします。

```
<DOMAIN>ourcompany.com</DOMAIN>
```

次のアドレスが一致します。

- john.doe@ourcompany.com
- jack.doe@hq.ourcompany.com
- jane.doe@uk.hq.ourcompany.com

ただし、次のアドレスは一致しません。

- john.doe@hqourcompany.com
- **<DL>distribution list name</DL>**
指定した配布リストまたはグループの任意のメンバーに送信されたメッセージに一致させる場合は、この形式を使ってください。たとえば、ルールに次の行があるとします。

```
<DL>ALL SALES</DL>
```

この場合、**ALL SALES** という配布リストまたはグループの任意のメンバーに送信されたメッセージが一致します。メンバーの名前がメッセージの表示名または **SMTP** アドレスとして表示されるかどうかは関係ありません。

メモ: カスタムフィルタは、Exchange 2013 および Exchange 2010 のグローバルアドレス一覧で非表示の配布リストに対して照合できません。

p.205 の「[カスタムフィルタを使った属性値での配布リストについて](#)」を参照してください。

次に、送信者がドメイン **ourcompany.com** のユーザーで、受信者一覧に **legal@ourcompany.com** または **Notes** ユーザー **Greg Court** があるすべてのメッセージをアーカイブし、保持カテゴリ **"Legal"** を設定する方法の例を示します。

```
<RULE ... ACTION='ARCHIVE_ITEM' RETENTION='legal'>
  <AUTHOR>
    <DOMAIN>ourcompany.com</DOMAIN>
  </AUTHOR>
  <RECIPIENTS>
    <EA>legal@ourcompany.com</EA>
    <DISPN>Greg Court/ourorg</DISPN>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

属性値演算子 **INCLUDES=** と **ALLOWOTHERS=** を使うと、複雑なフィルタを定義できます。

p.206 の「**INCLUDES** と **ALLOWOTHERS** 演算子を使った複雑なフィルタの作成について」を参照してください。

次の点に注意してください。

- メッセージに **SMTP** アドレスがない場合があります。たとえば、**PST** ファイルからメールボックスにインポートされたメッセージや、内部のメッセージング専用設定された **Exchange Server** アドレスなどです。このため、**INCLUDES="ALL"** 演算子を使っていない場合は、ルールに表示名と電子メールアドレスの両方を含める方法が安全です。
- 表示名は重複してもかまいません。たとえば、外部の送信者が内部の送信者と同じ表示名であってもかまいません。
- **Microsoft Exchange Server** の[グローバルアドレス一覧] (または **Active Directory** のグローバルアドレスカタログ) に対する変更が、カスタムフィルタに含まれるユーザーや配布リストに影響を与える場合、それに応じてカスタムフィルタのルールの更新が必要になる場合があります。たとえば、配布リストの表示名でフィルタ処理を行った後に表示名を変更する場合は、該当するルールセットファイルエントリを更新する必要があります。
- **Microsoft Exchange Server** の[グローバルアドレス一覧]に対する変更は、スケジュール設定された次の **GAL** 更新まで有効になりません。たとえば、ユーザーのアドレスが結婚後の名前に変更され、かつ新しいアドレスを **AUTHOR** として含むフィルタを設定した場合、メッセージが一致するようになるまで遅延が発生する可能性があります。
- **Exchange Server** ジャーナルメールボックスでフィルタ処理するときに **BCC** と非公開の受信者が利用可能であるには、**Microsoft Exchange Server** でエンベロープジャーナルが有効である必要があります。

カスタムフィルタを使った属性値での配布リストについて

特定の **Exchange Server** 配布リストのメンバーに送信されたすべてのメッセージに一致させる場合は、**<DL> </DL>** メッセージ属性を使います。次に例を示します。

```
<RECIPIENTS>  
  <DL>ALL SALES</DL>  
</RECIPIENTS>
```

この場合、配布リスト **ALL SALES** の任意のメンバーに送信されたすべてのメッセージに一致します。

この一致処理が機能するために、管理コンソールで配布リストの展開が有効になっていることを確認してください (**Exchange** ジャーナルポリシーの[詳細]タブの[アーカイブ全般]設定)。また、配布リストは、エージェントのレジストリ設定、**BlacklistedDLs** に含まれないようにしてください。

<EA>、<DISPN>、<DOMAIN> の各メッセージ属性を使って配布リストとグループを指定できます。ただし、指定された文字列を含むメッセージだけが一致します。メッセージの受信者を指定した配布リストの個々のメンバーと比較することはありません。

たとえば、Exchange Server 配布リストのメンバーが次のとおりであるとします。

- john.doe@ourcompany.com
- ken.brookes@ourcompany.com
- len.scott@ourcompany.com

ルールセットファイルでは、次のメッセージ属性フィルタがルールで指定されているとします。

```
<RECIPIENTS>  
    <DISPN>ALL SALES</DISPN>  
</RECIPIENTS>
```

メッセージの受信者リストに表示名 **ALL SALES** がある場合、このメッセージは前の属性フィルタを満たします。メッセージの受信者リストに表示名 **ALL SALES** がない場合は、受信者リストに配布リストのメンバーの電子メールアドレスが含まれている場合でも、属性フィルタに一致しません。

INCLUDES と ALLOWOTHERS 演算子を使った複雑なフィルタの作成について

AUTHOR、RECIPIENTS、SUBJECTS、および NAMEDPROP メッセージ属性に複数の値を使い、かつ演算子 **INCLUDES=** と **ALLOWOTHERS=** を使って属性値の一致方法を定義すると、より複雑なフィルタを作成できます。

INCLUDES= には次の値を指定できます。

- **INCLUDES="NONE"** は、属性に指定した値を含まないメッセージに一致することを意味します
- **INCLUDES="ANY"** は、属性に指定した値を 1 つ以上含むメッセージに一致することを意味します
- **INCLUDES="ALL"** は、属性に指定したすべての値を含むメッセージに一致することを意味します

INCLUDES= 演算子を指定しない場合は、**INCLUDES="ANY"** が指定されたと見なされます。

ALLOWOTHERS= には次の値を指定できます。

- **ALLOWOTHERS="N"** は、フィルタに指定した値だけを含み、その他の値は含まないメッセージに一致することを意味します
- **ALLOWOTHERS="Y"** は、フィルタに指定した値を含む場合、その他の値が含まれていてもメッセージに一致することを意味します

ALLOWOTHERS= 演算子を指定しない場合は、**ALLOWOTHERS="Y"** が指定されたと見なされます。

このセクションでは、**RECIPIENTS** メッセージ属性を併せた **INCLUDES=** と **ALLOWOTHERS=** 演算子の使用方法を例示します。

次の例では、受信者リストに一覧表示された **3** つの電子メールアドレスがすべて含まれ (**INCLUDES="ALL"**)、かつこれらのアドレスだけである (**ALLOWOTHERS="N"**) 場合に、メッセージがルールに一致します。

```
<RULE ... >
  <RECIPIENTS INCLUDES="ALL" ALLOWOTHERS="N">
    <EA>john.doe@ourcompany.com</EA>
    <EA>ken.brookes@ourcompany.com</EA>
    <EA>len.scott@ourcompany.com</EA>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

次の例では、一覧表示された電子メールアドレスのいずれかが含まれ (**INCLUDES="ANY"**)、かつそれ以外は含まれない (**ALLOWOTHERS="N"**) 場合に、メッセージがルールに一致します。

```
<RULE ... >
  <RECIPIENTS INCLUDES="ANY" ALLOWOTHERS="N">
    <EA>john.doe@ourcompany.com</EA>
    <EA>ken.brookes@ourcompany.com</EA>
    <EA>len.scott@ourcompany.com</EA>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

次の例では、受信者リストに一覧表示された電子メールアドレスのいずれも含まれない (**INCLUDES="NONE"**) 場合に、メッセージがルールに一致します。一致したメッセージには、受信者リストに他のアドレスが含まれることがあります (**ALLOWOTHERS="Y"**)。

```
<RULE ... >
  <RECIPIENTS INCLUDES="NONE" ALLOWOTHERS="Y">
    <EA>john.doe@ourcompany.com</EA>
    <EA>ken.brookes@ourcompany.com</EA>
    <EA>len.scott@ourcompany.com</EA>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

単一のルール内部で肯定一致と否定一致の両方を指定する場合、複数のメッセージ属性のエントリを含めて、必要に応じて **INCLUDES="NONE"** または **INCLUDES="ALL"** を使えます。次に例を示します。

```
<RULE ... >
  <RECIPIENTS INCLUDES="NONE">
    <EA>john.doe@ourcompany.com</EA>
    <EA>len.scott@ourcompany.com</EA>
  </RECIPIENTS>
  <RECIPIENTS> INCLUDES="ALL">
    <EA>Ken.Brookes@ourcompany.com</EA>
    <EA>robert.hill@ourcompany.com</EA>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

この例では、受信者リストに **john.doe@ourcompany.com** または **len.scott@ourcompany.com** が含まれないが、

```
<RECIPIENTS INCLUDES="NONE" ...</RECIPIENTS>
```

ken.brookes@ourcompany.com と **robert.hill@ourcompany.com** の両方が含まれる場合に、メッセージが一致します。

```
<RECIPIENTS INCLUDES="ALL" ... </RECIPIENTS>
```

INCLUDES= と **ALLOWOTHERS=** の値を異なる組み合わせで使うと、非常に複雑なフィルタを設定できます。

表 13-10 に、次のフィルタ例で演算子 **INCLUDES=** と **ALLOWOTHERS=** に値の異なる組み合わせを設定した場合に、さまざまなメッセージをフィルタした結果を示します。

```
<RULE ... ACTION="ARCHIVE_ITEM">
  <RECIPIENTS INCLUDES="NONE|ANY|ALL"
    ALLOWOTHERS="N|Y">
    <EA>Ann@example.com</EA>
    <EA>Bill@example.com</EA>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

Ann@example.com と **Bill@example.com** は、一致させる受信者アドレスです。

表 13-10 さまざまな演算子値の組み合わせを使った場合の効果

演算子値セット	メッセージ 1: 受信者は Ann です	メッセージ 2: 受信者は Ann、Bill です	メッセージ 3: 受信者は Ann、Bill、 Colin です	メッセージ 4: 受信者は Bill、 Colin です	メッセージ 5: 受信者は Colin です
INCLUDES="NONE" + ALLOWOTHERS="Y"	不一致	不一致	不一致	不一致	一致

演算子値セット	メッセージ 1: 受信者は Ann です	メッセージ 2: 受信者は Ann、Bill です	メッセージ 3: 受信者は Ann、Bill、Colin です	メッセージ 4: 受信者は Bill、Colin です	メッセージ 5: 受信者は Colin です
INCLUDES="NONE "+ ALLOWOTHERS="N"	不一致	不一致	不一致	不一致	不一致
INCLUDES="ANY "+ ALLOWOTHERS="Y"	一致	一致	一致	一致	不一致
INCLUDES="ANY" + ALLOWOTHERS="N"	一致	一致	不一致	不一致	不一致
INCLUDES="ALL" + ALLOWOTHERS="Y"	不一致	一致	一致	不一致	不一致
INCLUDES="ALL" + ALLOWOTHERS="N"	不一致	一致	不一致	不一致	不一致

表の列見出しに 5 種類のテストメッセージの受信者を示します。簡潔にするため、列見出しで受信者は **Ann、Bill、Colin** とします。

1 列目は、**INCLUDES=** 演算子と **ALLOWOTHERS=** 演算子に設定されたさまざまな組み合わせを示します。

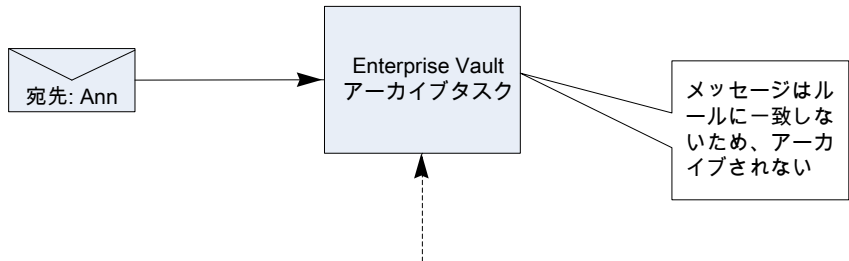
「不一致」は、左列に示される演算子の組み合わせが設定された場合に、列見出しに示された受信者に送信されたメッセージがフィルタルールを満たさないため、アーカイブされない (つまりルール処理が適用されない) ことを意味します。

「一致」は、左列に示される演算子の組み合わせが設定された場合に、列見出しに示された受信者に送信されたメッセージがフィルタルールを満たすため、アーカイブされることを意味します。

図 13-1 と図 13-2 に、表 13-10 のシナリオのうち 2 つで発生する処理を示します。

図 13-1

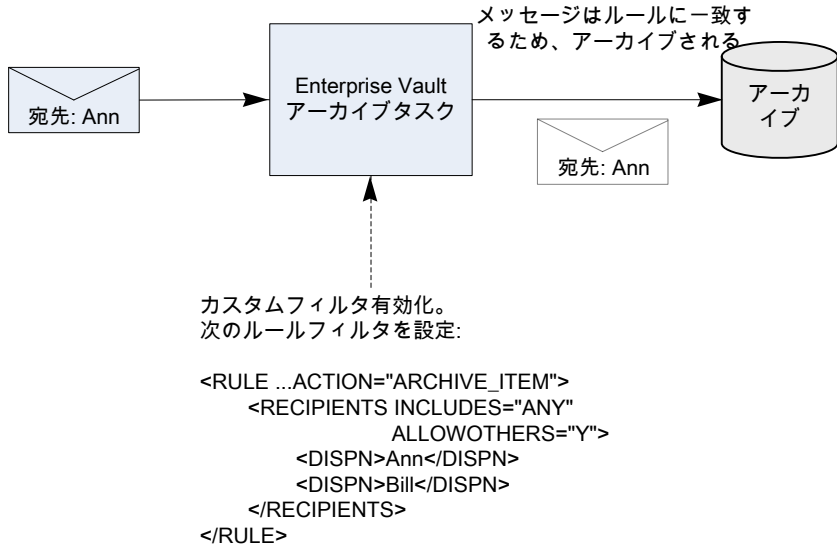
メッセージ 1 で INCLUDES="NONE" かつ ALLOWOTHERS="N" の場合



カスタムフィルタ有効化。
次のルールフィルタを設定:

```
<RULE ...ACTION="ARCHIVE_ITEM">
  <RECIPIENTS INCLUDES="NONE"
    ALLOWOTHERS="N">
    <DISPN>Ann</DISPN>
    <DISPN>Bill</DISPN>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

図 13-2 メッセージ 1 で INCLUDES="ANY" かつ ALLOWOTHERS="Y" の場合



カスタムフィルタのメッセージ方向でのフィルタ

<DIRECTION></DIRECTION> メッセージ属性を使うと、組織に対するメッセージの方向に基づいてメッセージを一致させることができ、ルールで作成者や受信者の詳細を指定する必要はありません。メッセージの方向は、組織の内部、組織からのアウトバウンド、組織へのインバウンドを指定できます。

<DIRECTION></DIRECTION> メッセージ属性では、次の値を 1 つ以上指定できます。

- **INTERNAL="Y"** は、内部アドレスから内部アドレスに送信される場合に、メッセージが一致することを意味します。メッセージの受信者リストには外部アドレスを含めることができません。
- **OUTBOUND="Y"** は、内部アドレスから外部アドレスに送信される場合に、メッセージが一致することを意味します。メッセージの受信者リストには 1 つ以上の外部アドレスが含まれる必要があります。
- **INBOUND="Y"** は、外部アドレスから内部アドレスに送信される場合に、メッセージが一致することを意味します。メッセージの受信者リストには 1 つ以上の内部アドレスが含まれる必要があります。

値を指定しない場合のデフォルトは、**"N"** です。何らかのメッセージが一致するには、1 つ以上の値が **"Y"** に設定される必要があります。

次のルール例では、ある内部アドレスから別の内部アドレスのみに送信されたメッセージをアーカイブして保持カテゴリ **"Internal"** を設定します。ある内部アドレスから別の内部アドレスへのメッセージで、受信者リストに外部アドレスも含まれる場合、このメッセージは外部であると見なされます。

```
<RULE NAME="Internal only" RETENTION="Internal" >  
  <DIRECTION INTERNAL="Y" OUTBOUND="N" INBOUND="N"/>  
</RULE>
```

次のルール例では、組織外部のアドレスとの間で送受信されたメッセージをアーカイブして保持カテゴリ **"External"** を設定します。

```
<RULE NAME="External" RETENTION="External" >  
  <DIRECTION OUTBOUND="Y" INBOUND="Y"/>  
</RULE>
```

ルールに一致するアイテムのみをアーカイブする場合は、ファイルの最後に次のようなルールを「**catch-all**」ルールとして追加します。

```
<RULE NAME="Do not archive anything else"  
ACTION="MARK_DO_NOT_ARCHIVE">  
<DIRECTION INBOUND="Y" OUTBOUND="Y" INTERNAL="Y"/> </RULE>
```

このルール例を使って評価される各アイテムでは、いずれかの **DIRECTION** 属性は必ず値「**Y**」に設定されます。そのため、ファイルにある他のルールに一致しないアイテムはこのルールには一致します。関連付けされている処理は、一致するアイテムをアーカイブしないことを意味します。

カスタムフィルタを使った内部のアドレスの定義について

Enterprise Vault では、内部アドレスか外部アドレスかを判別するために、Enterprise Vault ジャーナルタスクに関連付けされたシステムメールボックスアカウントに対して一覧表示される **SMTP** アドレスドメインが使われます。**Active Directory** では、メールボックスに関連付けされた電子メールアドレスを確認できます。

たとえば、次の **SMTP** アドレスがシステムメールボックスに対して一覧表示されるとします。

- VaultAdmin@ourcompanyplc.com
- VaultAdmin@ourcompanyinc.com

このとき、次のアドレスが内部であると認識されます。

- *@ourcompanyplc.com
- *@[*.]ourcompanyplc.com
- *@ourcompanyinc.com

- `*@[*.]ourcompanyinc.com`

[*.] は、`john.doe@sales.emea.ourcompanyplc.com` のように、文字列が繰り返してもよいことを示します。

その他のアドレスは外部と見なされます。

Exchange Server フィルタでは、ローカルの Microsoft Exchange Server からのアドレスも内部と見なされます。(これらのアドレスには、MAPI 属性 `PR_SENDER_ADDRTYPE` が含まれます。)

Exchange Server ユーザーの場合、Active Directory でメールボックスに関連付けされた電子メールアドレスを変更できます。

代わりに、Enterprise Vault 管理コンソールを使って追加の内部ドメインを指定できます。Enterprise Vault サイトのプロパティで、[内部 SMTP ドメインのリスト]という詳細な SMTP 設定を構成します。

カスタムフィルタのメッセージの件名でのフィルタ

`<SUBJECTS></SUBJECTS>` メッセージ属性を使うと、メッセージの件名テキストでメッセージを一致させることができます。`<SUBJECTS>` 属性内部では、一致させる値を次のように定義できます。

- 件名が指定した文字列とまったく同じメッセージを一致させる場合

```
<SUBJ MATCH="EXACT">string</SUBJ>
```

- 件名に指定した文字列が含まれるメッセージを一致させる場合

```
<SUBJ MATCH="CONTAINS">string</SUBJ>
```

- 件名が指定した文字列で始まるメッセージを一致させる場合

```
<SUBJ MATCH="STARTS">string</SUBJ>
```

- 件名が指定した文字列で終わるメッセージを一致させる場合

```
<SUBJ MATCH="ENDS">string</SUBJ>
```

属性値の一致では、大文字と小文字が区別されます。ワイルドカードを使うことはできません。

次の例では、件名が正確に「Welcome New Employee」に完全に一致するか、「Salary Summary for」で始まるか、または「Message Notification」で終わる場合に、そのメッセージをアーカイブせずに削除します。

```
<RULE NAME="Delete" ACTION="HARD_DELETE">  
  <SUBJECTS>
```

```

<SUBJ MATCH="EXACT">Welcome New Employee</SUBJ>
<SUBJ MATCH="STARTS">Salary Summary for</SUBJ>
<SUBJ MATCH="ENDS">Message Notification</SUBJ>
</SUBJECTS>
</RULE>

```

INCLUDES="NONE" 演算子を使うと、件名に特定の文字列が含まれないメッセージに一致させることができます。たとえば、次のルールでは、メッセージの件名に指定された値のいずれも含まないメッセージが一致します。

```

<RULE ... >
  <SUBJECTS INCLUDES="NONE">
    <SUBJ MATCH="EXACT">Welcome New Employee</SUBJ>
    <SUBJ MATCH="STARTS">Salary Summary for</SUBJ>
    <SUBJ MATCH="ENDS">Message Notification</SUBJ>
  </SUBJECTS>
</RULE>

```

カスタムフィルタの MAPI 名前付きプロパティフィルタについて

<NAMEDPROP> **</NAMEDPROP>** メッセージ属性を使うと、特定の MAPI 名前付きプロパティに割り当てられた値に応じて処理される **Exchange Server** メッセージを選択できます。名前付きプロパティは単一の値でも複数の値でもかまいません。

カスタムプロパティ機能を使って必要なプロパティを定義すると、**Enterprise Vault** によりプロパティにインデックスが作成されます。これにより、ユーザーは名前付きプロパティの特定の値セットを持つアーカイブ済みメッセージを検索できます。

名前付きプロパティを定義する方法についての説明があります。

p.230 の「[カスタムプロパティでの追加 MAPI プロパティの定義](#)」を参照してください。

名前付きプロパティフィルタの一般的な形式は、次のとおりです。

```

<NAMEDPROP TAG="EV_tag_name" INCLUDES="operator_value">
  <PROP VALUE="value" />
  [<PROP VALUE="value" />]
</NAMEDPROP>

```

TAG 属性の値は、**Enterprise Vault** がそのプロパティを識別するための名前です。これは、Custom Properties.xml ファイルで設定された **TAG** 値です。

演算子の値は、**"ANY"**、**"NONE"**、または **"ALL"** です。

各 **<PROP>** 行は、メッセージの評価時にカスタムフィルタが使うプロパティの特定の値を定義します。

たとえば、他社のアプリケーションが複数の値を持つ **MAPI** 名前付きプロパティ「**Location**」をメッセージに追加するとします。このプロパティは送信者または受信者の部門や場所を

識別します。このプロパティは、Custom Properties.xml ファイルで指定され、Enterprise Vault のタグ名「Loc」が付けられます。次の例では、「Location」プロパティに値 "Pittsburgh" または "Finance" が設定されたメッセージが一致するフィルタを示します。一致するあらゆるメッセージは保持カテゴリ「Confidential」でアーカイブされます。

```
<!--Example: Archive items that have Pittsburgh or Finance as values  
for the Location property -->  
<RULE NAME="Location rule" ACTION="ARCHIVE_ITEM"  
RETENTION="Confidential">  
  <NAMEDPROP TAG="Loc" INCLUDES="ANY">  
    <PROP VALUE="Pittsburgh" />  
    <PROP VALUE="Finance" />  
  </NAMEDPROP>  
</RULE>
```

この名前付きプロパティに指定した値が設定されたメッセージが検索されます。

MAPI 名前付きプロパティを使うサンプルカスタムフィルタを作成して実装する手順が用意されています。サンプルカスタムフィルタは、特定のメッセージクラスのメッセージに別の保持カテゴリを割り当てます。

p.244 の「[カスタムプロパティの例](#)」を参照してください。

名前付きプロパティについて詳しくは次の Microsoft 社の記事を参照してください。

<http://msdn.microsoft.com/library/office/cc765864.aspx>

カスタムフィルタの添付ファイル属性フィルタ

メッセージのアーカイブ前に特定の添付ファイルを削除できるようにするため、選択する添付ファイルを定義する添付ファイル属性フィルタをルールに含めることができます。

次の XML の例では、ルールに 1 つ以上の添付ファイル属性フィルタを含める方法を示します。

```
<RULE NAME="rule_name" ... ATTACHMENT_ACTION="action">  
  
  [<message_attribute>... </message_attribute>]  
  
  <FILES INCLUDES="ANY|ALL|NONE">  
    <FILE FILENAME="filename" SIZE_GREATER_THAN_KB="integer" />  
    <FILE ... />  
    ...  
  </FILES>  
  
  <FILES INCLUDES="ANY|ALL|NONE">
```

```
<FILE ... />
...
</FILES>

</RULE>
```

<FILES> タグは添付ファイルフィルタを定義します。

添付ファイル処理 (ATTACHMENT_ACTION=) を指定する場合は、1 つ以上の添付ファイルフィルタを含める必要があります (<FILES> タグを使う)。添付ファイルがルールに一致するには (かつ添付ファイル処理が適用されるには)、添付ファイルがルールで指定されたすべての添付ファイルフィルタを満たす必要があります。ルールで添付ファイルフィルタの順序は重要ではありません。

INCLUDES= 演算子を使うと、各添付ファイルの評価時に、以下の属性行が適用される方法を定義できます。

添付ファイルフィルタには、1 つ以上の <FILE> 要素が含まれます。この要素は一致する属性を定義します。各 <FILE> 要素には、次の属性の一方または両方が含まれます。

- FILENAME="filename"

<filename> は、一致するファイル名の全体または一部です。ファイル名にはワイルドカードを含めることができます。この属性を使うと、名前や拡張子に特定のテキスト文字列 ("*.AVI" など) が含まれるファイルをフィルタ処理できます。

ファイル拡張子を使ってファイルを選択すると、カスタムフィルタはファイル名の評価のみを行い、ファイルの内容の種類はチェックしません。通常はフィルタで削除されるファイルに別の拡張子が付いている場合、それらのファイルはフィルタでは削除されません。

また、ZIP ファイルなどの圧縮ファイルに含まれるファイルは評価されません。

- SIZE_GREATER_THAN_KB="integer"

特定のサイズを超える添付ファイルを削除するようにフィルタを設定できます。

<FILE> 要素でファイル名とサイズが指定される場合、添付ファイルが一致するには、ファイル名とサイズの両方が満たされる必要があります。たとえば、添付ファイルが次の行に一致するには、ファイルは拡張子が MP3、サイズは 1 MB より大きい必要があります。

```
<FILE FILENAME="*.MP3" SIZE_GREATER_THAN_KB="1000" />
```

添付ファイルの評価で使う複数の <FILE> 要素を指定する場合は、それぞれの要素が適用されます。添付ファイルがルールに一致するには、各 <FILE> 要素が一致する必要があります。

各添付ファイルの評価時に <FILE> 行が適用される方法を定義するには、INCLUDES= 演算子を使います。

- **INCLUDES="ANY"** は、少なくとも 1 つ以上の **<FILE>** 行に属性が指定されている場合に添付ファイルが一致することを意味します。これは、演算子が指定されない場合のデフォルトの処理です。
- **INCLUDES="ALL"** は、すべての **<FILE>** 行に属性が指定されている場合だけ添付ファイルが一致することを意味します。
- **INCLUDES="NONE"** は、**<FILE>** 行で指定されたどの属性も含まれない場合に添付ファイルが一致することを意味します。

次の例では、以下のすべての条件が満たされる場合に、添付ファイルがフィルタに一致します。

- ファイルは **MP3** ファイルで、**2 MB** より大きい
- ファイル名にテキスト「**enlarge**」が含まれ、ファイルが **1MB** より大きい
- ファイルの拡張子が **MPG** である
- ファイルが **12 MB** より大きい

```
<FILES INCLUDES="ANY">
  <FILE FILENAME="*.MP3" SIZE_GREATER_THAN_KB="2000" />
  <FILE FILENAME="*enlarge*.*" SIZE_GREATER_THAN_KB="1000" />
  <FILE FILENAME="*.MPG" />
  <FILE SIZE_GREATER_THAN_KB="12000" />
</FILES>
```

次の例では、複数の添付ファイルフィルタを使って特定の添付ファイルが削除されないようにする方法を示します。

```
<RULE NAME="Filter attachments rule" ... ATTACHMENT_ACTION="REMOVE">
```

```
  [<message_attribute>... </message_attribute>]
```

```
  <FILES INCLUDES="NONE">
    <FILE FILENAME="signature.jpg" />
  </FILES>

  <FILES INCLUDES="ANY">
    <FILE SIZE_GREATER_THAN_KB="5000" />
  </FILES>
```

```
</RULE>
```

これらの添付ファイルフィルタを使うと、ファイル名が **signature.jpg** ではなく、**5 MB** より大きい場合に、添付ファイルが削除されます。

カスタムフィルタへのメッセージフィルタと添付ファイルフィルタの適用方法

このセクションでは、Exchange Server メッセージをフィルタ処理するときに、メッセージと添付ファイルの評価が適用される順序について説明します。

カスタムフィルタがメッセージを処理するときは、次の一般事項に従います。

- メッセージと添付ファイルは別々に評価されます。最初にメッセージがルールセットファイルのルールに対して評価され、次に添付ファイルが添付ファイル処理を含むルールに対して評価されます。
添付ファイルがメッセージである場合、メッセージがルールのメッセージフィルタを使って評価され、次に入れ子になったメッセージの添付ファイルがルールの添付ファイルフィルタを使って評価されます。
- メッセージの評価では、ルールセットファイルでメッセージが一致する最初のルールだけが適用されます。同様に、添付ファイルの評価では、一致する最初のルールだけが添付ファイルに適用されます。このため、ルールセットファイルにおけるルールの順序が重要です。
- ルール処理 (さらに添付ファイル処理) は、ルールにおけるすべてのフィルタを満たすメッセージ (または添付ファイル) だけに適用されます。
- メッセージと添付ファイルの両方とも、デフォルトの処理は、アイテムのアーカイブです。つまり、どのルールにも一致しないメッセージや添付ファイルはアーカイブされます。


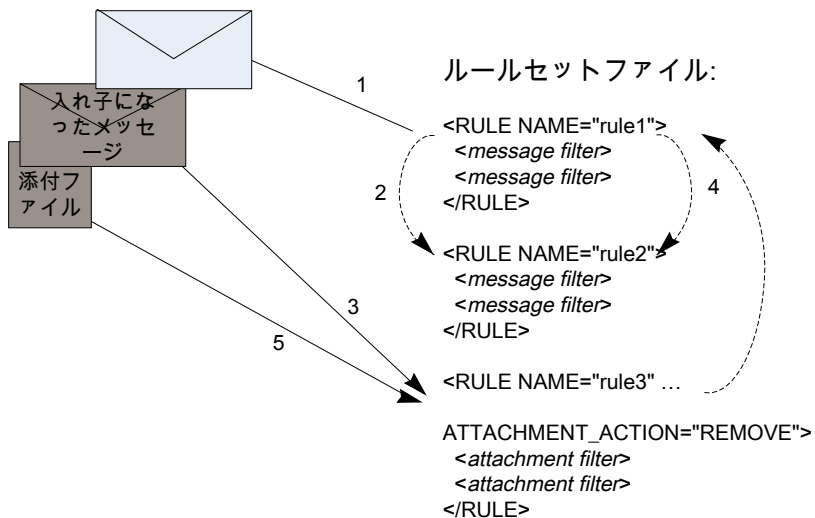
 **13-3** に、カスタムフィルタが添付ファイル付きのメッセージを処理する方法を示します。

図 13-3 添付ファイルの処理



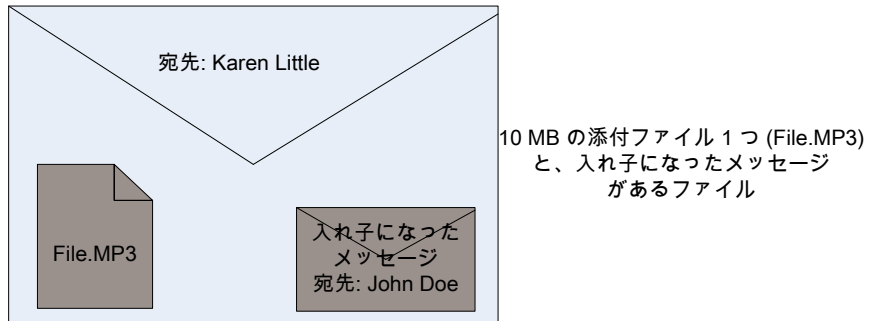
図に示したメッセージには入れ子になったメッセージが添付されていて、そのメッセージにはファイルが添付されています。次のように、簡単なルールセットファイルとして、メッセージフィルタが含まれる 2 つのルールと、添付ファイルフィルタが含まれる 1 つのルールがあります。

- 最初のメッセージルール **rule1** を使って、最上位のメッセージが評価されます。
- このルールに一致する場合、ルール **ACTION** がメッセージに適用されます。このルールに一致しない場合、**rule2** が試行されます。
- (メッセージ **ACTION** が **"HARD_DELETE"** である場合は、以降の評価は行われません。)ルールに **ATTACHMENT_ACTION** が設定され、かつメッセージに添付ファイルがあるため、**rule3** の添付ファイルフィルタを使って、メッセージの添付ファイルが評価されます。
- カスタムフィルタは、添付ファイルがメッセージであることを認識します。そのため、**ATTACHMENT_ACTION** の設定された任意のルールのメッセージフィルタに対して、添付ファイルであるメッセージが評価されます。この例では、**rule3** だけに **ATTACHMENT_ACTION** が設定されていますが、このルールにはメッセージフィルタがないため、メッセージはルールに一致しません。フィルタルールに一致しないアイテムはアーカイブされます (デフォルトの処理)。
- 入れ子になったメッセージの添付ファイルは、**rule3** の添付ファイルフィルタを使って評価されます。添付ファイルが添付ファイルフィルタに一致する場合、その添付ファイルには **ATTACHMENT_ACTION** が適用されます。

メッセージフィルタと添付ファイルフィルタを単一ルールで組み合わせると、特定のメッセージの添付ファイルを選択できます。

図 13-4 に、受信者が **Karen Little** で、MP3 ファイルが添付されていて、さらにメッセージが添付されている (入れ子になったメッセージのある) メッセージの例を示します。

図 13-4 添付ファイルのあるメッセージの例



入れ子になったメッセージにも添付ファイルがある可能性があります。

次のルールセットファイル例は、このメッセージに適用される単一ルールを示しています。このルールによる全体的な結果として、受信者が **Gill Smith** でも **John Doe** でもない **Exchange Server** メッセージの特定の添付ファイルが削除されます。**Gill Smith** または **John Doe** 宛てのメッセージの添付ファイルは削除されません。次の属性を持つ添付ファイルが削除されます。

- 2 MB より大きい MP3 の添付ファイル
- 1 MB より大きい JPG の添付ファイル
- 5 MB より大きい MPG ファイル

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<RULE_SET xmlns="x-schema:ruleset schema.xdr">

  <!--Disallowed attachment rule: This rule will delete the specified
  attachments for all recipients except Gill Smith and John Doe.-->

  <RULE NAME="Disallowed attachments (except directors)"
    ATTACHMENT_ACTION="REMOVE" >
    <RECIPIENTS INCLUDES="NONE" ALLOWOTHERS="N">
      <EA>Gill.Smith@example.com</EA>
      <EA>John.Doe@example.com</EA>
    </RECIPIENTS>
    <FILES INCLUDES="ANY">
      <FILE FILENAME="*.MP3" SIZE_GREATER_THAN_KB="2000" />
      <FILE FILENAME="*.JPG" SIZE_GREATER_THAN_KB="1000" />
      <FILE FILENAME="*.MPG" SIZE_GREATER_THAN_KB="5000" />
    </FILES>
  </RULE>
</RULE_SET>
```

```
</FILES>  
</RULE>
```

適切なアーカイブタスクでカスタムフィルタが有効であれば、次のようにこのルールセットのフィルタがメッセージ例に適用されます。

- まず、メッセージ属性フィルタ (<RECIPIENTS>) を最上位のメッセージに適用します。
- 受信者は **Gill Smith** でも **John Doe** でもないため、メッセージ属性フィルタが一致します。
- メッセージがルールに一致するため、メッセージはアーカイブされます (**ACTION=**)。
- **ATTACHMENT_ACTION** が含まれるルールがあるかどうかを調べます。[はい]。
<FILES> 添付ファイルフィルタを使って、メッセージのあらゆる添付ファイルを評価する必要があります。
- 添付ファイル名とファイルサイズがルールのいずれかの <FILE> 属性行と一致するかどうかを調べます。添付ファイルが最初の <FILE> 行に一致する場合、添付ファイルはルールに一致することになり、**ATTACHMENT_ACTION** の指定に従って添付ファイルを削除します。
- メッセージに別の添付ファイルがあるかどうかを調べます。添付されたメッセージがある場合、カスタムフィルタは、添付ファイルがメッセージであることを認識し、メッセージ属性フィルタ (<RECIPIENTS> 要素) を使ってメッセージを評価します。
- 入れ子になったメッセージは **John Doe** 宛てであるため、<RECIPIENTS> フィルタは満たされません。そのため、入れ子になったメッセージは、その添付ファイルとともにアーカイブされます。

カスタムフィルタのルールセットファイルの例

提供されているサンプルルールセットファイル `Default Filter Rules.xml` (Example Filter Rules.xml の名前を変更したコピー) を次に示します。カスタムフィルタが有効になるようにレジストリキーが設定されている場合、このファイルは、名前付きのルールセットファイルがないアーカイブ対象をフィルタ処理するために使われます。

```
<?xml version="1.0"?>  
<RULE_SET xmlns="x-schema:ruleset schema.xdr">  
  
  <!-- Example Rule 1: This rule will exclude any email from archiving  
  if it originates from someone in the Employee Benefits distribution  
  list.-->  
  
  <RULE NAME="Benefits correspondence" ACTION="MARK_DO_NOT_ARCHIVE">  
    <AUTHOR>  
      <DISPN>HR Employee Benefits</DISPN>
```

```
</AUTHOR>
</RULE>

<!--Example Rule 2: This rule will exclude any email from archiving
if it is sent to someone in the Employee Benefits distribution list.
-->
<RULE NAME="Benefits correspondence" ACTION="MARK_DO_NOT_ARCHIVE">
  <RECIPIENTS>
    <DISPN>HR Employee Benefits</DISPN>
  </RECIPIENTS>

</RULE>

<!--Example Rule 3: (Available for Exchange Server archiving only)
This rule will move email to the wastebasket if it comes
from any of the sources listed, and is about any of the
subjects listed.-->
<RULE NAME="Newsletters" ACTION="MOVE_DELETED_ITEMS">
  <AUTHOR INCLUDES="ANY">
    <EA>icweek@ucg.com</EA>
    <EA>WebDirect@ACLI.com</EA>
    <DOMAIN>limra.com</DOMAIN>
  </AUTHOR>
  <SUBJECTS INCLUDES="ANY">
    <SUBJ MATCH="STARTS">Society SmartBrief</SUBJ>
    <SUBJ MATCH="EXACT">TaxFacts ENews</SUBJ>
  </SUBJECTS>
</RULE>

<!--Example Rule 4: Delete mail from known junk-mail sources,
(and others), if it contains certain common spam subjects-->
<RULE NAME="Junk Mail" ACTION="HARD_DELETE">
  <AUTHOR INCLUDES="ANY" ALLOWOTHERS="Y">
    <DOMAIN>indiatimes.com</DOMAIN>
    <DOMAIN>websavings-usa.net</DOMAIN>
  </AUTHOR>
  <SUBJECTS INCLUDES="ANY">
    <SUBJ MATCH="CONTAINS">enlargement</SUBJ>
    <SUBJ MATCH="CONTAINS">weight loss</SUBJ>
  </SUBJECTS>
  <SUBJECTS INCLUDES="ALL">
    <SUBJ MATCH="CONTAINS">debt</SUBJ>
    <SUBJ MATCH="CONTAINS">consolidate</SUBJ>
```

```
<SUBJ MATCH="CONTAINS">loan</SUBJ>
</SUBJECTS>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 5: Take default action (ARCHIVE_ITEM) if the
subject matches the composite rule:
Must start with "MEMO", contain "INTERNAL"
and end in "OurCompany"
e.g. "MEMO : Contains information internal to OurCompany"
would match, but "MEMO : do not distribute" would not match.
Also allocates the message to a content category "Memoranda"-->
```

```
<RULE NAME="Internal Memo" CONTENTCATEGORY="Memoranda">
  <SUBJECTS INCLUDES="ALL">
    <SUBJ MATCH="STARTS">Memo</SUBJ>
    <SUBJ MATCH="CONTAINS">Internal</SUBJ>
    <SUBJ MATCH="ENDS">OurCompany</SUBJ>
  </SUBJECTS>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 6: Take default action (ARCHIVE_ITEM) on any
email from management members included here. Email from
management will be categorized under "ManagementMail"
and retained as "Important"-->
```

```
<RULE NAME="Management" CONTENTCATEGORY="ManagementMail"
RETENTION="Important">
  <AUTHOR INCLUDES="ANY">
    <EA>mike.senior@management.com</EA>
    <EA>jon.little@management.com</EA>
    <EA>jill.taylor@management.com</EA>
  </AUTHOR>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 7: Take default action (ARCHIVE_ITEM) if an email
is
addressed to any of the managers AND NO ONE ELSE
The message will be archived in a special archive reserved only
for this kind of email - specified by the ARCHIVEID-->
```

```
<RULE NAME="Sent to Management ONLY"
ARCHIVEID="16611B008A3F65749BC4118182E0021461110000evsite.
ourcompany.com">
  <RECIPIENTS INCLUDES="ANY" ALLOWOTHERS="N">
```

```
<EA>mike.senior@management.com</EA>
<EA>jon.little@management.com</EA>
<EA>jill.taylor@management.com</EA>
</RECIPIENTS>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 8: Do not archive mail that was sent to someone
outside OurCompany-->
```

```
<RULE NAME="External Recipient" ACTION="MARK_DO_NOT_ARCHIVE">
  <RECIPIENTS INCLUDES="NONE">
    <DOMAIN>OurCompany.com</DOMAIN>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 9: Archive and give the existing Retention
Category, Internal, to any email that was sent only to employees
in OurCompany-->
```

```
<RULE NAME="Internal Recipient" ACTION="ARCHIVE_ITEM"
RETENTION="Internal">
  <DIRECTION INTERNAL="Y"/>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 10: Use a special retention category for mail
addressed to any members of the specified DL-->
```

```
<RULE NAME="On the VIP list" RETENTION="VeryImportant">
  <RECIPIENTS>
    <DL>TheVIPs</DL>
  </RECIPIENTS>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 11: (Available for Exchange Server archiving only)
```

```
Delete MP3 attachments before archiving-->
```

```
<RULE NAME="DeleteMP3s" ATTACHMENT_ACTION="REMOVE">
  <FILES>
    <FILE FILENAME="*.MP3"/>
  </FILES>
</RULE>
```

```
<!--Example Rule 12:
```

```
Match against named MAPI properties (defined in
```



```
Custom Properties.xml), or named Domino properties (using
the Domino field name for a property on an item) -->
<RULE NAME="Category Match" ACTION="ARCHIVE_ITEM">
  <NAMEDPROP TAG="CaseAuthor" INCLUDES="ANY">
    <PROP VALUE="Engineering"/>
    <PROP VALUE="Support"/>
  </NAMEDPROP>
  <NAMEDPROP TAG="CaseStatus" INCLUDES="ANY">
    <PROP VALUE="Open"/>
    <PROP VALUE="Pending"/>
  </NAMEDPROP>
</RULE>
</RULE_SET>
```

カスタムプロパティと内容カテゴリの設定

カスタムプロパティは、カスタムフィルタの拡張機能です。カスタムフィルタによって選択されたメッセージの追加のプロパティをインデックス付けするように **Enterprise Vault** を設定できます。これらのプロパティは、デフォルトの **Enterprise Vault** システムではインデックス付けされない標準プロパティか、他社アプリケーションによって独自にメッセージに追加されたプロパティなどです。

このセクションでは、以下のことを説明します。

- **Enterprise Vault** インデックスに、アイテムの追加プロパティ (他社のアプリケーションによってメッセージに追加されたプロパティなど) を含める方法
- **Enterprise Vault Search** を設定してインデックス付きプロパティを検索できるようにする方法
- 内容のカテゴリを設定する方法

カスタムプロパティ機能はカスタムフィルタの拡張機能で、**Enterprise Vault** がアイテムのアーカイブ時にメッセージの追加プロパティにアクセスまたはインデックス付けできるようになります。プロパティには、次のような他社のアプリケーションによってメッセージに追加された **Exchange Server MAPI** プロパティがあります。

- 現在、**Enterprise Vault** によってインデックス付けされていない標準の **MAPI** プロパティ
- **MAPI** 名前付きプロパティ

内容のカテゴリは、アーカイブ時にメッセージに適用される設定のグループです。設定には、適用する保持カテゴリ、使用するアーカイブ、インデックス付けする特定のメッセージのプロパティが含まれます。特定のアーカイブタスクによってアーカイブするすべてのメッセージに内容のカテゴリを適用するように **Enterprise Vault** を設定できます。代わりに、カスタムフィルタをカスタムプロパティとともに使うことにより、選択したメッセージのみに内容のカテゴリを適用するように **Enterprise Vault** を設定することもできます。

p.244 の「[カスタムプロパティの例](#)」を参照してください。

XML ファイル Custom Properties.xml でカスタムプロパティと内容のカテゴリを定義します。このファイルはフォルダ Enterprise Vault¥Custom Filter Rules に存在する必要があります。このファイルにエントリを追加すると、Enterprise Vault Search などの他のアプリケーションでインデックス付きプロパティを利用できるようになります。この後、ユーザーはアーカイブ検索基準にカスタムプロパティを含めることができます。カスタムプロパティファイルのサンプル Example Custom Properties.xml が Custom Filter Rules フォルダにインストールされています。

アーカイブシステムでフィルタ処理の特別な必要条件がある場合は、Veritas が適切なカスタムフィルタを提供します。

表 13-11 カスタムプロパティまたは内容のカテゴリを設定する手順

手順	Action	関連情報
手順 1	必要なアーカイブタスクのカスタムフィルタレジストリ設定が完了していることを確認します。フィルタ処理を行わずにカスタムプロパティまたは内容のカテゴリを実装する場合でも、これらを設定する必要があります。	<p>p.183 の「Exchange Server ジャーナルカスタムフィルタのレジストリ設定」を参照してください。</p> <p>p.185 の「Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリ設定」を参照してください。</p> <p>p.187 の「Exchange Server パブリックフォルダカスタムフィルタのレジストリ設定」を参照してください。</p>

手順	Action	関連情報
手順 2	XML ファイル Custom Properties.xml を作成します。このファイルを Enterprise Vault¥Custom Filter Rules フォルダに格納します。	<p>p.228 の「Custom Properties.xml の一般的な形式について」を参照してください。</p> <p>Custom Properties.xml のエントリにより次のことを行うことができます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ メッセージのカスタムプロパティのインデックス付け。■ 必要な内容のカテゴリの定義。■ 専用の検索アプリケーションでカスタムプロパティと内容のカテゴリを表示する方法を定義します。 <p>フィルタ処理を実行せずにすべてのメッセージの特定のカスタムプロパティをインデックス付けするように Enterprise Vault を設定する場合、Custom Properties.xml ファイルを作成する必要がありますが、ルールセットファイルは必要ありません。Custom Properties.xml ファイルには、カスタムプロパティの定義とデフォルトの内容のカテゴリを含める必要があります。デフォルトの内容のカテゴリはすべてのメッセージに適用され、Enterprise Vault がインデックス付けするプロパティを定義します。この動作は、IGNORENODEFAULT レジストリ設定を使って変更できます。</p> <p>p.191 の「デフォルトのカスタムフィルタの動作の制御について」を参照してください。</p>
手順 3	選択したメッセージのプロパティをインデックス付けしたり、選択したメッセージに内容のカテゴリを適用したりする場合は、XML ルールセットファイルで必要なフィルタルールやフィルタ処理を作成します。これらは 1 つ以上の XML ルールセットファイルに格納されます。このファイルも Enterprise Vault¥Custom Filter Rules フォルダに格納する必要があります。	<p>p.181 の「カスタムフィルタの設定」を参照してください。</p>
手順 4	カスタムプロパティとフィルタを有効にしたアーカイブタスクを再起動します。	

Custom Properties.xml の一般的な形式について

Exchange Server メッセージの追加のカスタムプロパティまたは標準 MAPI プロパティに、Enterprise Vault でアクセスしてインデックス付けを行うには、プロパティを Custom Properties.xml ファイルで定義する必要があります。このファイルは、カスタムフィルタが有効になっているアーカイブタスクを実行しているコンピュータの Enterprise Vault¥Custom Filter Rules フォルダに作成します。インストールしたファイル Enterprise Vault¥Custom Filter Rules¥Example Custom Properties.xml に、このファイルの例が示されています。

このファイルには次のセクションを定義します。

- **<CONTENTCATEGORIES></CONTENTCATEGORIES>** のセクションでは利用可能な内容のカテゴリを定義します。内容のカテゴリは、アーカイブするときにアイテムに適用される設定のグループです。インデックス付けするカスタムプロパティを含めることもできます。
[p.233 の「内容のカテゴリについて」](#)を参照してください。
- **<CUSTOMPROPERTIES></CUSTOMPROPERTIES>** のセクションでは、Enterprise Vault が利用可能なメッセージの追加プロパティを定義します。
[p.230 の「カスタムプロパティでの追加 MAPI プロパティの定義」](#)を参照してください。
- **<PRESENTATION></PRESENTATION>** このセクションでは、内容のカテゴリやカスタムプロパティを専用のサードパーティアプリケーションで表示する方法を定義します。
[p.236 の「サードパーティのアプリケーションでのカスタムプロパティの表示方法の定義」](#)を参照してください。

メモ: これらのセクションの順序には意味があります。

以下に、ファイルの一般的な形式の概略を示します。

```
<?xml version="1.0"?>
<CUSTOMPROPERTYMETADATA xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/
XMLSchema-instance"
    xsi:noNamespaceSchemaLocation="customproperties.xsd">
<!-- 1. DEFINITION OF CONTENT CATEGORIES AVAILABLE -->
    <CONTENTCATEGORIES>
        <CONTENTCATEGORY> ... </CONTENTCATEGORY>
        [<CONTENTCATEGORY> ... </CONTENTCATEGORY>]
    </CONTENTCATEGORIES>

<!-- 2. DEFINITION OF CUSTOM PROPERTIES AVAILABLE -->
    <CUSTOMPROPERTIES>
        <NAMESPACE> ... </NAMESPACE>
```

```
[<NAMESPACE> ... </NAMESPACE>]
</CUSTOMPROPERTIES>

<!-- 3. DEFINITION OF PRESENTATION PROPERTIES AVAILABLE -->
<PRESENTATION>
  <APPLICATION>
    <FIELDGROUPS>
      <FIELDGROUP> ... </FIELDGROUP>
      [<FIELDGROUP> ... </FIELDGROUP>]
    </FIELDGROUPS>
    <AVAILABLECATEGORIES>
      <AVAILABLECATEGORY> ... </AVAILABLECATEGORY>
      [<AVAILABLECATEGORY> ... </AVAILABLECATEGORY>]
    </AVAILABLECATEGORIES>
  </APPLICATION>
  [<APPLICATION> ... </APPLICATION>]
</PRESENTATION>
```

次のセクションで、ファイル内のすべての必須要素とオプション要素の説明の概略を示します。

p.240 の「[カスタムプロパティの要素と属性の概略](#)」を参照してください。

ファイルを修正したときは、常に関連付けされたアーカイブタスクを再開する必要があります。分散環境では、カスタムプロパティが有効なタスクを実行している各コンピュータに更新したファイルをコピーし、関連付けされたタスクを各コンピュータで再開する必要があります。

Enterprise Vault Search を使ってカスタムプロパティを検索する場合は、IIS マネージャの Enterprise Vault アプリケーションプールも再起動する必要があります。

Enterprise Vault Search でカスタムプロパティを検索する場合は、Custom Properties.xml ファイルで指定したとおりに、検索条件にプロパティ名を入力する必要があります。検索条件のプロパティ名の大文字と小文字の区別はファイルのプロパティ名と一致する必要があります。カスタムプロパティに入力する値も大文字と小文字を区別する必要があります。

Custom Properties.xml の妥当性の検証について

Enterprise Vault をインストールすると、Custom Filter Rules フォルダに customproperties.xsd が格納されます。これが Custom Properties.xml の妥当性を検証するための XML スキーマです。

次のように、Custom Properties.xml ファイルの最初の

CUSTOMPROPERTYMETADATA エントリで、スキーマファイルを参照する必要があります。

```
<?xml version="1.0"?>  
<CUSTOMPROPERTYMETADATA xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/  
XMLSchema-instance"  
    xsi:noNamespaceSchemaLocation="customproperties.xsd">
```

ファイルに非 **ANSI** 文字が含まれる場合は、最初の行で適切なエンコーディングが設定されていることと、ファイルが適切なエンコーディングで保存されていることを確認してください。

関連付けられたタスクがメッセージの処理を開始するときに、**XML** の妥当性の検証が行われます。無効な部分がある場合はタスクが停止するため、エラーを修正してからタスクを再起動する必要があります。

構文エラーによるタスクの中断を回避するため、タスクがアクセスする前に、**XML** ファイルの妥当性を検証することを推奨します。**Liquid XML Studio** の **GUI** の **XML** エディタなど、他社のツールを使うことができます。

<http://www.liquid-technologies.com/XmlStudio/Free-Xml-Editor.aspx>

このツールを使う場合、次のように名前空間を指定します。

```
x-schema:customproperties.xsd
```

メモ: このマニュアルで大文字で表示されているすべての **XML** タグや事前定義済みの値は大文字と小文字が区別されるため、ファイルでは大文字で入力する必要があります。入力する値も、大文字と小文字を区別する必要があります。

カスタムプロパティでの追加 MAPI プロパティの定義

Custom Properties.xml の **<CUSTOMPROPERTIES>** セクションでは、**Enterprise Vault** で評価またはインデックス付けする **MAPI** の追加プロパティを定義します。

MAPI プロパティは、**Custom Properties.xml** で定義する前に **MAPI** サブシステムで定義する必要があります。現在、**Enterprise Vault** のカスタムプロパティ機能は **MAPI** プロパティの次の種類をサポートしています。

- 標準 **MAPI** プロパティ
Enterprise Vault は文字列と **double** 型のプロパティをサポートします。プロパティは単一または複数の値をとることができます。
- **MAPI** 名前付きプロパティ
0x8000 から **0xFFFFE** までの範囲のプロパティタグが付いた **MAPI** プロパティがあります。**Enterprise Vault** は文字列の識別子のみをサポートします。このため、名前付きプロパティ **Kind** は **MNID_STRING** である必要があります。プロパティ値は文字列または **double** 型のプロパティをとることができます。プロパティは単一または複数の値をとることができます。

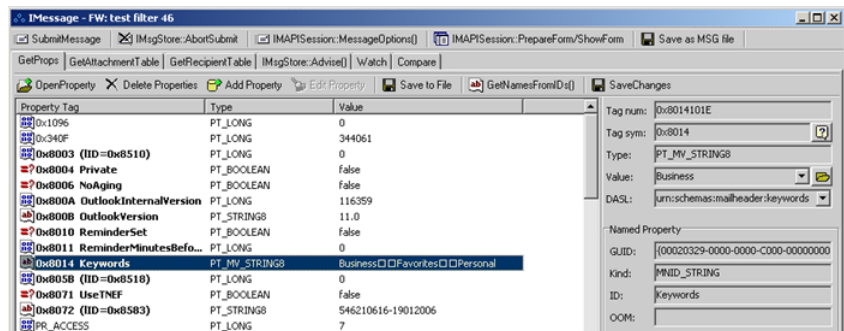
含めるプロパティごとに、次の MAPI サブシステムのプロパティ定義の詳細が必要です。

- プロパティが標準 MAPI プロパティである場合は、16 進 MAPI プロパティタグ。32 ビット 16 進 MAPI プロパティタグの識別子部分 (ビット 16 から 31)、または識別子部分 (ビット 16 から 31) とプロパティの種類部分 (ビット 0 から 15)。たとえば、標準プロパティの MAPI プロパティタグが 0x0070001E である場合は、Enterprise Vault NAME 値として 0x0070001E または 0x0070 を指定できます。
- プロパティが MAPI 名前付きプロパティの場合は、名前付きプロパティの文字列 ID と名前空間 GUID になる

OutlookSpy などの他社の MAPI ツールを使って、メールボックスアイテムに関連付けされた MAPI プロパティを表示できます。

図 13-5 は、OutlookSpy でメッセージの MAPI プロパティがどのように表示されるかを示しています。

図 13-5 MAPI プロパティの表示



選択されているプロパティは名前付きプロパティ「Keywords」です。この複数値のプロパティはメッセージに割り当てられた Outlook カテゴリを保持します。選択したプロパティの詳細は、ウィンドウの右側に表示されます。

ここでは、「Keywords」プロパティは、MAPI 名前付きプロパティの例としてのみ使われています。このプロパティはすでにデフォルトの Enterprise Vault システムでインデックス付けされていて、検索可能で取り込み可能であるため、カスタムプロパティとして追加する必要はありません。

MAPI プロパティを Enterprise Vault で利用可能にするには、Custom Properties.xml の <CUSTOMPROPERTIES> セクションで定義します。このセクションで定義したプロパティは、内容のカテゴリとプレゼンテーションのセクションで参照できます。

プロパティの定義方法の例を示します。

```
<!-- 2. DEFINITION OF CUSTOM PROPERTIES AVAILABLE -->
```

```
<CUSTOMPROPERTIES>
```

```
<NAMESPACE TYPE="MAPI"
GUID="{DA6007CD-01AA-408f-B7D3-6DA958A09583}">
  <PROPERTY NAME="Author1" TAG="CaseAuthor"/>
  <PROPERTY NAME="Status1" TAG="CaseStatus"/>
</NAMESPACE>

<NAMESPACE TYPE="MAPI"
GUID="{EF1A0001-01AA-408f-B7D3-6DA958A09583}">
  <PROPERTY NAME="Author2" TAG="Client"/>
</NAMESPACE>

<NAMESPACE TYPE="MAPI">
  <PROPERTY NAME="0x0070" TAG="Topic"/>
</PROPERTY>
  <PROPERTY NAME="0x1035" TAG="MsgID"/>
</PROPERTY>
</NAMESPACE>
</CUSTOMPROPERTIES>
```

この例では、**NAMESPACE** 要素が 3 つあります。最初の 2 つが **MAPI** 名前付きプロパティを定義します。これにより、プロパティの名前空間 **GUID** が必要です。3 つ目の **NAMESPACE** で定義されているプロパティは標準の **MAPI** プロパティであるため、**GUID** は必要ありません。

TYPE 属性の値はプロパティの種類を識別します。この例では、プロパティは **MAPI** プロパティです。

各 **NAMESPACE** では、次のように **PROPERTY** 要素の中で **NAME** 値と **TAG** 値を使ってプロパティが定義されています。

- プロパティが **MAPI** 名前付きプロパティの場合は、**NAME** は **MAPI** サブシステムで定義された文字列 ID。この値は大文字と小文字が区別されます。また、**MAPI** サブシステムの値と同じにする必要があります。

プロパティが標準 **MAPI** プロパティである場合、**NAME** は 16 進 **MAPI** タグの識別子部分 (ビット 16 から 31)、または識別子部分 (ビット 16 から 31) とプロパティの種類部分 (ビット 0 から 15) になります。

- **TAG** は **Enterprise Vault** 内のプロパティを識別します。4 文字以上の英数字記号 (**A** から **Z**、**a** から **z**、**0** から **9**) を含める必要があります。スペース文字とアンダースコア文字は含めることができません。プロパティの **TAG** に割り当てる値は **XML** ファイル内で重複しないようにする必要があります。**TAG** 値を使ってプロパティを相互参照できますが、ファイル内の他のエンティティを識別するために同じ値を使うことはできません。

特定のプロパティの値を一致させてメッセージを選択する場合は、適切な **XML** ルールセットファイルで **<NAMEDPROP>** フィルタを作成し、ここで定義した **TAG** 値を指定する必要があります。

p.214 の「カスタムフィルタの **MAPI** 名前付きプロパティフィルタについて」を参照してください。

内容のカテゴリについて

Custom Properties.xml の **<CONTENTCATEGORIES>** セクションでは、フィルタ処理されたメッセージに適用する内容のカテゴリを定義します。

内容のカテゴリは、アーカイブするときにアイテムに適用される設定のグループです。

設定には、次の情報を含めることができます。

- アイテムに割り当てる保持カテゴリ
- アーカイブ先
- Enterprise Vault がインデックス付けするメッセージの追加プロパティの一覧

<CONTENTCATEGORIES> 要素では、複数の内容のカテゴリを定義することができます。

ルールセットファイルでは、ルールに関連付けされた処理として、ルールを満たすメッセージへの特定の内容のカテゴリの割り当てを含めることができます。Custom Properties.xml の内容のカテゴリの定義では、内容のカテゴリのデフォルト設定が提供されます。特定のルールについてこれらの一部を上書きできます。

p.235 の「カスタムプロパティを設定する場合のルールでの内容のカテゴリの割り当てについて」を参照してください。

次の例は、**Litigation** という内容のカテゴリのエントリを示しています。

```
<!-- 1. DEFINITION OF CONTENT CATEGORIES AVAILABLE -->

<CONTENTCATEGORIES DEFAULT="Litigation">
  <CONTENTCATEGORY NAME="Litigation" RETENTIONCATEGORY="Litigation"
    ARCHIVEID="15165263832890493848568161647.server1.local">
    <INDEXEDPROPERTIES RETRIEVE="Y">
      <PROPERTY TAG="CaseAuthor"/>
      <PROPERTY TAG="CaseStatus"/>
    </INDEXEDPROPERTIES>
  </CONTENTCATEGORY>
</CONTENTCATEGORIES>
```

- **<CONTENTCATEGORIES></CONTENTCATEGORIES>** では、ファイルの内容のカテゴリのセクションを定義します。
- **DEFAULT** 属性は、デフォルトとして使われる内容のカテゴリを指定します。このデフォルトは、カスタムフィルタが有効なすべての種類のアーカイブに適用されます。

この属性は、カスタムフィルタが使われている場合はオプションですが、ルールセットが存在しない場合は、**IGNORENODEFAULT** レジストリ設定が設定されていない限り必須です。

ルールセットファイルでフィルタが設定されており、デフォルトの内容のカテゴリが指定されている場合は、いずれのルールにも一致しないアイテムは、デフォルトの内容のカテゴリでの設定に従ってアーカイブされます。デフォルトの内容のカテゴリが指定されていない場合、フィルタルールセットファイルで一致ルールが指定されていれば、内容のカテゴリは 1 つのアイテムにのみ適用されます。

適用可能なルールセットファイルが存在しない場合、`Custom Properties.xml` の **<CONTENTCATEGORIES>** 要素で **DEFAULT** 属性を使って、デフォルトの内容のカテゴリを指定する必要があります。内容のカテゴリの設定は、**IGNORENODEFAULT** レジストリ設定が設定されていない限り、アーカイブするすべてのメッセージに適用されます。

アーカイブタスクの処理は、ルールセットファイル、カスタムプロパティ、内容のカテゴリ、**IGNORENODEFAULT** レジストリ設定の組み合わせで決まります。

- **<CONTENTCATEGORY>** 要素は特定の内容のカテゴリを定義します。少なくとも 1 つの内容のカテゴリを定義する必要があります。
- 内容のカテゴリの **NAME** は、ファイルのプレゼンテーションセクション、カスタムフィルタルールセットファイルのルール、**Enterprise Vault Indexing Service** などの外部サブシステムで、この内容のカテゴリを識別するために使われます。名前は 5 文字以上にする必要があり、含めることができるのは英数字記号 (**A** から **Z**, **a** から **z**, **0** から **9**) だけです。スペース文字とアンダースコア文字は含めることができません。ファイルのプレゼンテーションセクションに内容のカテゴリが含まれている場合、この特定の内容のカテゴリを使ってアーカイブされたすべてのアイテムを検索するために、内容のカテゴリ名で検索することが可能になります。
- **RETENTIONCATEGORY** はオプションで、この内容のカテゴリを使ってアーカイブされた各アイテムに保持カテゴリを割り当てることができます。保持カテゴリは **Enterprise Vault** にすでに存在している必要があります。

メモ: いくつか **Enterprise Vault**、保持フォルダと、分類機能などの機能は、この保有カテゴリを上書きできます。保持について詳しくは、『管理者ガイド』を参照してください。

- **ARCHIVEID** はオプションで、アイテムのアーカイブ先を指定できます。アーカイブが存在し、有効になっている必要があります。アーカイブの ID を見つけるには、管理コンソールでアーカイブのプロパティを表示し、[詳細]タブをクリックします。
- **<INDEXEDPROPERTIES>** 要素は必須で、**Enterprise Vault** がインデックス付けする追加プロパティをグループ化します。

- RETRIEVE 属性はオプションで、アーカイブ検索結果とともに定義したプロパティが返されるかどうかを決定します。デフォルトでは、プロパティは検索結果とともに表示されません (RETRIEVE="N")。
- <PROPERTY> 要素は、インデックス付けする追加プロパティごとに必要です。
- TAG 値は、カスタムプロパティセクションで指定されている関連付けされた Enterprise Vault TAG 値と一致している必要があります。
p.230 の「[カスタムプロパティでの追加 MAPI プロパティの定義](#)」を参照してください。

カスタムプロパティを設定する場合のルールでの内容のカテゴリの割り当てについて

カスタムプロパティを使用するときは、ルールセットファイルのルールで内容のカテゴリを割り当てることが、フィルタルールに一致するメッセージに対する処理を指定する望ましい方法です。内容のカテゴリのデフォルト設定は Custom Properties.xml の内容のカテゴリセクションで定義します。

ルールセットファイルでは次のように内容のカテゴリを割り当てます。

```
<RULE NAME="Example rule" ACTION="ARCHIVE_ITEM"
  CONTENTCATEGORY="content_category_name">
  <message attribute filters>
</RULE>
```

「content_category_name」の値は、Custom Properties.xml で指定されている必要な内容のカテゴリの名前です。

ルールセットファイルでは、ACTION="ARCHIVE_ITEM" の場合にのみ内容のカテゴリを割り当てることができます。

デフォルトの内容のカテゴリ設定の上書き

ルールでは、内容のカテゴリを割り当て、デフォルトの内容のカテゴリ設定の一部を上書きできます。たとえば、インデックス付けするすべてのカスタムプロパティ、保持カテゴリ、アーカイブ先を定義する内容のカテゴリが存在する場合、必要に応じて、異なるルールで内容のカテゴリを割り当て、アーカイブまたは保持カテゴリの値を上書きできます。

たとえば、Litigation という内容のカテゴリが Custom Properties.xml で次のように定義されているとします。

```
<CONTENTCATEGORY NAME="Litigation" RETENTIONCATEGORY="Litigation"
  ARCHIVEID="15165263832890493848568161647.server1.local">
  <INDEXEDPROPERTIES RETRIEVE="Y">
    <PROPERTY TAG="AUTHOR01"/>
    <PROPERTY TAG="CASESTATUS"/>
```

```
</INDEXEDPROPERTIES>  
</CONTENTCATEGORY>
```

これはルールセットファイルで次のように参照できます。

```
<RULE NAME="Example rule1" ACTION="ARCHIVE_ITEM"  
  CONTENTCATEGORY="Litigation">  
  <message attribute filters>  
</RULE>  
<RULE NAME="Example rule2" ACTION="ARCHIVE_ITEM"  
  CONTENTCATEGORY="Litigation"  
  ARCHIVEID="1516526383289049384890493848.server2.local">  
  <message attribute filters>  
</RULE>
```

この内容のカテゴリで定義された追加プロパティは、両方のルールでインデックス付けされます。2 つ目のルールでは同じ内容のカテゴリが使われていますが、このルールに一致するアイテムは異なるアーカイブに格納されます。

メモ: 既存の設定を変更する前に、各種類のアーカイブに対して設定されているデフォルトの動作を理解しておく必要があります。Custom Properties.xml の内容のカテゴリの DEFAULT 属性と IGNORENODEFAULT レジストリ設定を確認してください。

p.191 の「[デフォルトのカスタムフィルタの動作の制御について](#)」を参照してください。

サードパーティのアプリケーションでのカスタムプロパティの表示方法の定義

ファイルのプレゼンテーションセクション <PRESENTATION> では、利用可能な内容のカテゴリやカスタムプロパティを専用のアーカイブ検索エンジンなどの外部アプリケーションで表示する方法を定義します。

プロパティの表示を基本のプロパティ定義と別にすることで、カスタムプロパティの詳細をユーザーインターフェースに柔軟にマップできます。これにより、複数言語のサポートも容易になります。

プレゼンテーションセクションのエントリでは次の内容を定義します。

- 指定のアプリケーションで表示可能なカスタムプロパティ
- アプリケーションでプロパティをグループ化して表示する方法
- アプリケーションで利用可能な内容のカテゴリ
- 各内容のカテゴリをアプリケーションで表示する方法

表示の情報は、アーカイブ済みアイテムのカスタムプロパティにアクセスが必要なアプリケーションごとに定義できます。

以下に、**Web** 検索アプリケーションでカスタムプロパティを表示する方法の定義を示したプレゼンテーションセクションの部分的な例を示します。

```
<!-- 3. DEFINITION OF PRESENTATION PROPERTIES AVAILABLE -->

<PRESENTATION>
  <APPLICATION NAME="engsearch.asp" LOCALE="1033">
    <FIELDGROUPS>
      <FIELDGROUP LABEL="Case Properties">
        <FIELD TAG="CaseAuthor" LABEL="Author" CATEGORY="Litigation">
        </FIELD>
        <FIELD TAG="CaseStatus" LABEL="Status" CATEGORY="Litigation">
        </FIELD>
      </FIELDGROUP>
      <FIELDGROUP LABEL="Client Properties">
        <FIELD TAG="Client" LABEL="Client Name" CATEGORY="ClientAction">
        </FIELD>
        <FIELD TAG="Topic" LABEL="Message Topic" CATEGORY="ClientAction">
        </FIELD>
      </FIELDGROUP>
    </FIELDGROUPS>

    <AVAILABLECATEGORIES>
      <AVAILABLECATEGORY CONTENTCATEGORY="Litigation" LABEL="Litigation">
      </AVAILABLECATEGORY>
      <AVAILABLECATEGORY CONTENTCATEGORY="ClientAction" LABEL="Client
Action">
      </AVAILABLECATEGORY>
    </AVAILABLECATEGORIES>
  </APPLICATION>

  <APPLICATION NAME="jpnsearch.asp" LOCALE="1041">
    <FIELDGROUPS>
      <FIELDGROUP LABEL="...">
        <FIELD TAG="CaseAuthor" LABEL="..." CATEGORY="Litigation"></FIELD>
        <FIELD TAG="CaseStatus" LABEL="..." CATEGORY="Litigation"></FIELD>
      </FIELDGROUP>
      <FIELDGROUP LABEL="...">
        <FIELD TAG="Client" LABEL="..." CATEGORY="ClientAction"></FIELD>
        <FIELD TAG="Topic" LABEL="..." CATEGORY="ClientAction">
        </FIELD>
      </FIELD>
    </FIELD>
  </FIELD>

```

```
</FIELDGROUP>
</FIELDGROUPS>
<AVAILABLECATEGORIES>
  <AVAILABLECATEGORY CONTENTCATEGORY="Litigation" LABEL="...">
  </AVAILABLECATEGORY>
  <AVAILABLECATEGORY CONTENTCATEGORY="ClientAction" LABEL="...">
  </AVAILABLECATEGORY>
</AVAILABLECATEGORIES>
</APPLICATION>
</PRESENTATION>
```

この例では、2 つのバージョン(英語(U.S.)バージョン(ロケール "1033")と日本語バージョン(ロケール "1041"))のアプリケーションエントリを示しています。この場合は、両方のバージョンに同じ要素と属性を指定していますが、2 つ目のバージョンの LABEL 値(例では省略)には日本語を指定します。

次の点に注意してください。

- 各アプリケーションで利用可能なプロパティは、<APPLICATION> 要素を使ってグループ化されます。
- NAME 属性でアプリケーションを識別します。
- LOCALE 属性の値は、呼び出すアプリケーションによって定義されます。この例では、アプリケーションで使う言語の標準 Microsoft ロケール ID を使うと仮定しています。1033 は英語(U.S.)を表します。例の 2 つ目のアプリケーション jpnpsearch.asp でも Microsoft ロケール ID を使います。1041 は日本語を表します。

アプリケーション検索ページでは、内容のカテゴリで定義しているグループでカスタムプロパティが表示されます。つまり、特定の内容のカテゴリを選択するとその内容のカテゴリでカスタムプロパティが表示されます。

次の点に注意してください。

- <FIELDGROUPS> 要素は、表示するカスタムプロパティのすべてのグループを定義するために使います。
- 各グループは <FIELDGROUP> 要素で定義します。LABEL 属性で、アプリケーションで表示されるプロパティのグループのタイトルを指定します。LABEL 属性の値は、アプリケーションで重複がないようにする必要があります。
- <FIELD> 要素はグループで表示される各プロパティを定義します。TAG 属性の値は表示するプロパティを識別します。ここで指定する値は、ファイルの <CUSTOMPROPERTIES> セクションのプロパティの関連付けされた TAG 値と一致する必要があります。

CATEGORY 属性の値は、このプロパティを関連付ける内容のカテゴリを定義します。検索基準でこの内容のカテゴリを選択すると、プロパティのフィールドを表示できます。CATEGORY で指定する値は、ファイルの内容のカテゴリセクションで指定した

内容のカテゴリの関連付けされた **NAME** 値と一致する必要があります。また、**CATEGORY** は **<AVAILABLECATEGORIES>** 要素で定義されたものと同一である必要があります。

TAG は **<FIELDGROUP>** 内で重複がないように、また **TAG** と **CATEGORY** の組み合わせは **<APPLICATION>** 要素内で重複がないようにする必要があります。

LABEL は、そのカスタムプロパティに対してユーザーインターフェースで表示する名前を定義します。

- **<AVAILABLECATEGORIES>** は、アプリケーションで選択可能な内容のカテゴリをグループ化します。各内容のカテゴリは、**<AVAILABLECATEGORY>** 要素を使って定義します。**CONTENTCATEGORY** 属性の値は、ファイルの内容のカテゴリセクションで指定した内容のカテゴリの名前と一致する必要があります。**LABEL** 属性は、ユーザーインターフェースで内容のカテゴリの表示に使う名前を定義します。

サンプル検索アプリケーションでのカスタムプロパティの表示

このセクションでは、サンプルのプレゼンテーションセクションのエントリが専用のアーカイブ検索アプリケーションでどのように表示されるかを示します。カスタムプロパティやユーザーインターフェースでこのプロパティを表示する方法の詳細を含む **Custom Properties.xml** ファイルを検索アプリケーションで使うと想定します。

図 13-6 に、サンプルのカスタムプロパティと内容のカテゴリが表示された検索条件を示します。

図 13-6 サンプルの検索ページに表示されたプロパティの表示例

ボルト	<アーカイブ 1> ▼		
件名	次のどれか 1 つ以上を含む ▼	<input type="text"/>	
作成者	次のどれか 1 つ以上を含む ▼	<input type="text"/>	
内容	次のどれか 1 つ以上を含む ▼	<input type="text"/>	
受信者	次のどれか 1 つ以上を含む ▼	<input type="text"/>	
日付	<input type="text"/>	から	<input type="text"/> まで
期限切れ日	<input type="text"/>	から	<input type="text"/> まで
ファイル拡張子	<input type="text"/>		
保持カテゴリ	<input type="text"/> ▼		
フォルダ	<input type="text"/>		参照...
内容のカテゴリ	Litigation ▼		
ケースのプロパティ	作成者:	<input type="text"/>	
	状態:	<input type="text"/>	
クライアントのプロパティ	クライアント名:	<input type="text"/>	
	メッセージピック:	<input type="text"/>	

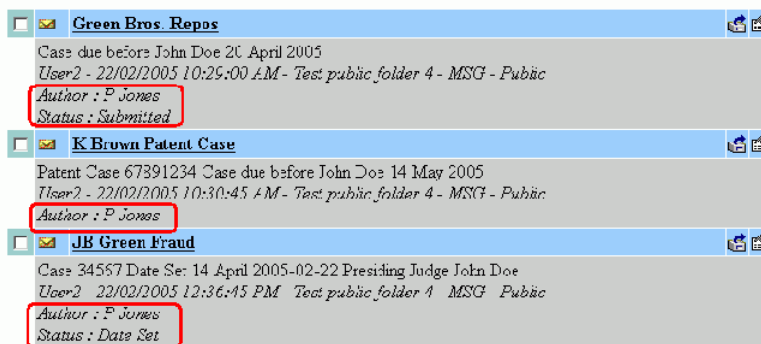
この例では、検索に利用可能な内容のカテゴリが[内容のカテゴリ]ドロップダウンボックスに表示されています。これらは <AVAILABLECATEGORIES> 要素を使って定義したものです。

内容のカテゴリを検索すると、選択した内容のカテゴリとアーカイブしたすべてのアイテムが返ります。

[Case Properties]と[Client Properties]セクションには、選択した内容のカテゴリに関連付けされたカスタムプロパティの各グループ (FIELDGROUP) が表示されます。カスタムプロパティ値の検索では、アーカイブ済みアイテムのカスタムプロパティのインデックスエントリを検索します。

Litigation という内容のカテゴリの定義で RETRIEVE= " Y" と設定した場合は、定義済みのカスタムプロパティが検索結果アイテムに表示されます。

図 13-7 検索結果に表示されるカスタムプロパティの例



Custom Properties.xml ファイルの内容が変更されると、検索で異なる結果が返される可能性があります。たとえば、1 つの内容のカテゴリを使ってアイテムをインデックス付けし、その内容のカテゴリに含まれるプロパティが変更された場合は、以降の検索で返るカスタムプロパティが異なります。もとのプロパティで検索できるように、もとの内容のカテゴリはそのままにして新しい内容のカテゴリを作成してください。

カスタムプロパティの要素と属性の概略

表 13-12 は、Custom Properties.xml のすべての要素と属性をまとめたものです。

「必須」列の値は、IGNORENODEFAULT レジストリ設定が使われていないことを想定しています。

表 13-12 Custom Properties.xml ファイルの XML 要素と属性

要素	属性	必須	説明
CONTENTCATEGORIES		はい	ファイルの内容のカテゴリセクションを定義します。
	DEFAULT=	いいえ	値は、デフォルトとして使われる内容のカテゴリの名前です。すべてのアイテムのカスタムプロパティをインデックス付けする場合に必要です。
CONTENTCATEGORY		はい	アーカイブ済みアイテムに割り当てられる設定のグループを定義します。
	NAME=	はい	値は、ルールセットや表示インターフェースがカテゴリを識別するための重複のない名前です。
	RETENTIONCATEGORY=	いいえ	値は、アーカイブ済みアイテムに割り当てられる保持カテゴリを示します。保持カテゴリは Enterprise Vault にて設定されている必要があります。 メモ: いくつか Enterprise Vault 、保持フォルダと、分類機能などの機能は、この保有カテゴリを上書きできます。保持について詳しくは、『管理者ガイド』を参照してください。
	ARCHIVEID=	いいえ	値は、アイテムを格納するアーカイブの ID を示します。 Enterprise Vault 管理コンソールのアーカイブのプロパティ値です。
INDEXEDPROPERTIES		はい	内容のカテゴリの追加プロパティセットを定義します。
	RETRIEVE=	いいえ	値は「Y」または「N」です。このセットのプロパティが検索結果で表示されるかどうかを示します。デフォルトは「N」です。
PROPERTY		はい	この内容のカテゴリを割り当てられたアイテムに対して、インデックス付けする追加プロパティを定義します。
	TAG=	はい	値は、プロパティの Enterprise Vault TAG です。

要素	属性	必須	説明
CUSTOMPROPERTIES		はい	ファイルのカスタムプロパティセクションを定義します。
NAMESPACE		はい	カスタムプロパティのグループを含む NAMESPACE を定義します。
	TYPE=	はい	値は「MAPI」プロパティの種類です。
	GUID=	はい	MAPI プロパティ用。値は、外部アプリケーションに対する NAMESPACE の ID 情報です。
PROPERTY		はい	カスタムプロパティを定義します。
	NAME=	はい	<p>プロパティがカスタム MAPI プロパティの場合、値は MAPI サブシステムで定義された STRING ID です。この値は大文字と小文字が区別されます。また、MAPI サブシステムの値と同じにする必要があります。</p> <p>プロパティが標準 MAPI プロパティである場合、値は 32 ビット 16 進 MAPI プロパティタグの識別子部分 (ビット 16 から 31)、または識別子部分 (ビット 16 から 31) とプロパティの種類部分 (ビット 0 から 15) になります。</p> <p>値は NAMESPACE 内で重複できません。</p>
	TAG=	はい	<p>TAG は Enterprise Vault 内のプロパティを識別します。4 文字以上の英数字記号 (A から Z、a から z、0 から 9) を含める必要があります。スペース文字とアンダースコア文字は含めることができません。値は XML ファイル内で重複できません。</p> <p>TAG 値はインデックスに格納されるプロパティ名です。</p>
PRESENTATION		はい	ファイルのプレゼンテーションプロパティセクションを定義します。
APPLICATION		はい	指定するアプリケーションが使うフィールドのグループを定義します。

要素	属性	必須	説明
	NAME=	はい	値は、この定義内のフィールドを使うアプリケーションの名前です。
	LOCALE=	はい	値は、呼び出すアプリケーションが言語を定義するために必要な内容によって異なります。たとえば、アプリケーションを実行する環境の Microsoft 標準ロケール ID 番号を使います。
FIELDGROUPS		はい	アプリケーションが利用可能なフィールドグループを定義します。
FIELDGROUP		はい	表示インターフェースでのフィールドの論理グループ。
	LABEL=	いいえ	値は、このフィールドグループを表すためにアプリケーションで表示されます。ラベルはアプリケーション内で重複できません。
FIELD		はい	カスタムプロパティを参照するフィールドを定義します。
	LABEL=	はい	値は、このカスタムプロパティを表すためにアプリケーションのユーザーインターフェースで表示されます。
	CATEGORY=	はい	値は、アプリケーションの AVAILABLECATEGORIES で指定される内容のカテゴリの名前です。
	TAG=	はい	値は、カスタムプロパティの TAG です。タグは FIELDGROUP 内で重複できません。
AVAILABLECATEGORIES		はい	アプリケーションが利用可能な内容のカテゴリを定義します。
AVAILABLECATEGORY		はい	内容のカテゴリを定義します。
	LABEL=	はい	値は、ユーザーインターフェースでの内容のカテゴリの表示方法を定義します。
	CONTENTCATEGORY=	はい	値は、ファイルの内容のカテゴリセクションで指定された、必要な内容のカテゴリの NAME です。

カスタムプロパティの例

このセクションでは、Exchange Server メールボックスアーカイブのカスタムフィルタの例を示します。サンプルカスタムフィルタは、カレンダーアイテム (Exchange メッセージクラス、IPM.Appointment) に別の保持カテゴリ (180Days) を割り当てます。

表 13-13 カスタムフィルタのサンプルを実装する手順

手順	Action	関連情報
手順 1	ルールセットファイル Default Filter Rules.xml を作成します。	p.244 の「 カスタムプロパティを設定するためのルールセットファイルの例 」を参照してください。
手順 2	カスタムプロパティファイル Custom Properties.xml を作成します。	p.245 の「 カスタムプロパティファイルの例 」を参照してください。
手順 3	Exchange Server メールボックスフィルタを有効にするようにレジストリを設定します。	p.185 の「 Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリ設定 」を参照してください。
手順 4	アーカイブタスクに DTrace ログを設定します (set ArchiveTask v を実行します)。	操作について詳しくは、『ユーティリティガイド』を参照してください。
手順 5	カスタムフィルタをテストします。	p.247 の「 カスタムプロパティを設定するためのカスタムフィルタの例のテスト 」を参照してください。
手順 6	DTrace ログのエントリを確認します。	p.248 の「 カスタムプロパティ設定時のカスタムフィルタの例の DTrace ログエントリ 」を参照してください。

カスタムプロパティを設定するためのルールセットファイルの例

次の Default Filter Rules.xml ファイルの例では、必要なフィルタルールを示します。このファイルは、Enterprise Vault インストール先フォルダの Custom Filter Rules (たとえば、C:\Program Files (x86)\Enterprise Vault\Custom Filter Rules) フォルダに配置される必要があります。

```
<?xml version="1.0"?>
<RULE_SET xmlns="x-schema:ruleset schema.xdr">
  <RULE NAME="MBX DIFF_RET_CAT" ACTION="ARCHIVE_ITEM"
    CONTENTCATEGORY="MsgClassTest" RETENTION="180Day">
    <NAMEDPROP TAG="MSGCLASS" INCLUDES="ANY">
      <PROP VALUE="IPM.Appointment" />
    </NAMEDPROP>
  </RULE>
</RULE_SET>
```

```
</RULE>
</RULE_SET>
```

ファイル内の設定は、次のように使われます。

- **NAME="MBX DIFF_RET_CAT"**。この設定はルールに名前を割り当てます。
Exchange メールボックスタスクに対して **DTrace** ログが有効になっている場合は、このルールを使ってアイテムが評価されるときにこのルール名が表示されます。
- **ACTION="ARCHIVE_ITEM" CONTENTCATEGORY="MsgClassTest" RETENTION="180Day"**。ルールに一致するアイテムは次のように処理されます。
 - アイテムがアーカイブされます。
 - 内容のカテゴリ **MsgClassTest** で定義する設定がアイテムに適用されます。(内容のカテゴリはファイル `Custom Properties.xml` で定義します。)
 - 既存の保持カテゴリ **180Day** がアイテムに割り当てられます。
- **<NAMEDPROP>** 要素は、このルールを使ってアイテムを評価するときに使うメッセージのプロパティと値を定義します。
TAG="MSGCLASS" はプロパティの **Enterprise Vault** ラベルです。このラベルは `Custom Properties.xml` の関連付けされた **MAPI** プロパティに割り当てられます。
INCLUDES="ANY"。表示されるプロパティ値を持つすべてのアイテムがルールに一致します。
<PROP VALUE="IPM.Appointment" />。アイテムに値が **IPM.Appointment** に設定された **MSGCLASS** プロパティがある場合、そのアイテムはルールと一致します。

カスタムプロパティファイルの例

内容のカテゴリ **MsgClassTest** とプロパティ **MSGCLASS** が次の `Custom Properties.xml` ファイルの例で定義されています。このファイルは、特定のアプリケーションでの内容のカテゴリとプロパティの表示方法も定義します。`Custom Properties.xml` は **Enterprise Vault** インストール先フォルダの `Custom Filter Rules` フォルダに配置される必要があります。

```
<?xml version="1.0"?>
<CUSTOMPROPERTYMETADATA xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/
  XMLSchema-instance" xsi:noNamespaceSchemaLocation=
  "customproperties.xsd">
  <CONTENTCATEGORIES DEFAULT="MsgClassTest">
    <CONTENTCATEGORY NAME="MsgClassTest">
      <INDEXEDPROPERTIES>
        <PROPERTY TAG="MSGCLASS"/>
      </INDEXEDPROPERTIES>
    </CONTENTCATEGORY>
  </CONTENTCATEGORIES>
```

```
<CUSTOMPROPERTIES>
  <NAMESPACE TYPE="MAPI">
    <PROPERTY TAG="MSGCLASS" NAME="0x001A" />
  </NAMESPACE>
</CUSTOMPROPERTIES>
<PRESENTATION>
  <APPLICATION NAME="mysearch.asp" LOCALE="1033">
    <FIELDGROUPS>
      <FIELDGROUP LABEL="Content Category">
        <FIELD TAG="MSGCLASS" LABEL="Message Class"
          CATEGORY="MsgClassTest"/>
      </FIELDGROUP>
    </FIELDGROUPS>
    <AVAILABLECATEGORIES>
      <AVAILABLECATEGORY CONTENTCATEGORY="MsgClassTest"
        LABEL="Message Class Test"/>
    </AVAILABLECATEGORIES>
  </APPLICATION>
</PRESENTATION>
</CUSTOMPROPERTYMETADATA>
```

ファイルでの設定は、次のように使われます。

- **<CONTENTCATEGORY>** 要素は内容のカテゴリ **MsgClassTest** を定義します。
<INDEXEDPROPERTIES> 要素の **<PROPERTY>** 要素は、内容のカテゴリがアイテムに適用されるときに **MSGCLASS** プロパティがインデックス付けされることを指定します。
- **<CUSTOMPROPERTIES>** 要素の **<PROPERTY>** 部分で、標準 MAPI プロパティ (**NAME="0x001A"**) が Enterprise Vault プロパティタグ (**TAG="MSGCLASS"**) にマップされます。
0x001A はメッセージクラスプロパティの 16 進 MAPI タグの識別子部分 (ビット 16 から 31) です。
- **<PRESENTATION>** 要素は、**<APPLICATION>** 要素で指定したアプリケーションでのメッセージクラスプロパティの表示方法を定義します。この例では、**NAME="mysearch.asp"** は検索アプリケーションを識別します。このアプリケーションの言語 (**LOCALE**) は英語 (U.S.) です。
ブラウザ検索アプリケーションのコンテキストで、**<FIELDGROUPS>** は検索ページに追加する新しい検索基準を指定します。新しいプロパティは関連付けされる内容のカテゴリの下に表示されるため、**<FIELDGROUP LABEL="Content Category">** は、最上位の検索基準ラベルを指定します。特定の内容のカテゴリを選択するときに表示されるプロパティは、**<FIELD>** 設定で指定します。**<AVAILABLECATEGORIES>** 要素は、選択することができる内容のカテゴリを指定します。この例では、内容のカテゴリは 1 つのみで、そのプロパティは 1 つのみです。

カスタムプロパティを設定するためのカスタムフィルタの例のテスト

実働 Enterprise Vault サーバーではなく、開発用システムでカスタムフィルタをテストすることを推奨します。

カスタムフィルタをテストする前に、次の操作を実行します。

- **Exchange Server** メールボックスフィルタを有効にするようにレジストリを設定します。
p.185 の「[Exchange Server メールボックスカスタムフィルタのレジストリ設定](#)」を参照してください。
- 新しいアイテムをすぐにアーカイブするように、**Enterprise Vault** 管理コンソールで **Exchange** メールボックスポリシーを設定します。
[メッセージクラス] タブをクリックし、[IPM.Appointment*] が選択されていることを確認します。
ポリシーが適切なプロビジョニンググループに割り当てられていることを確認します。
- **Enterprise Vault** 管理コンソールで、**180Day** という新しい保持カテゴリを作成します。
- **Enterprise Vault** 管理コンソールで **Exchange** メールボックスタスクを再起動し、ポリシーの変更とルールセットファイル Default Filter Rules.xml の変更を適用します。

カスタムフィルタをテストする方法

- 1 **Outlook** を起動し、テストユーザーとしてログインします。過去に発生した予定を作成します。この予定は定期的な予定ではなく、アラームも設定していないことを確認します。
- 2 **Exchange** メールボックスタスクを追跡するように **DTrace** を有効にします (set ArchiveTask v を実行します)。

DTrace ログの設定方法について詳しくは『ユーティリティ』を参照してください。
- 3 **Exchange** メールボックスタスクを実行して新しいアイテムをアーカイブした後、数分待ちます。

4 DTrace ログのエントリを確認します。

p.248 の「[カスタムプロパティ設定時のカスタムフィルタの例の DTrace ログエントリ](#)」を参照してください。

5 Enterprise Vault による検索を使って、テストユーザーのアーカイブで予定を検索します。

[詳細検索] ページで、[件名または内容] をクリックしてプロパティ検索に適したカスタムフィールドを選択します。このフィールドに、検索するプロパティの内容のカテゴリとプロパティタグを入力します。前述の例では、[カスタムテキストフィールド] を選択して `MsgClassTest.MSGCLASS` と入力しています。[次のいずれかを含む] を選択して `Appointment` と入力します。検索結果には、カスタムフィルタルールに一致したアイテムが表示されます。このカレンダーアイテムは保持カテゴリ `180Day` のはずです。

Enterprise Vault による検索で列をカスタマイズして `MsgClassTest.MSGCLASS` プロパティの値を表示できます。

検索結果にカスタムプロパティを表示するには、属性 `RETRIEVE="Y"` を `Custom Properties.xml` の内容のカテゴリ定義にある `<INDEXEDPROPERTIES>` 要素に含める必要があります。

p.233 の「[内容のカテゴリについて](#)」を参照してください。

カスタムプロパティ設定時のカスタムフィルタの例の DTrace ログエントリ

このセクションでは DTrace ログの行の例を示します。含まれる行には、カスタムフィルタをロードし、予定アイテムを評価し、ルール処理を適用するアーカイブタスクが表示されます。

DTrace ログでは、カスタムフィルタの例が正常にロードされたことが次のように表示されます。

```
1167927    06:23:38.027      [6860]      (ArchiveTask)      <17472>
EV~I Event ID: 45329 External Filter 'EnterpriseVault.CustomFilter'

initialising... |
1167950    06:23:38.308      [6860]      (ArchiveTask)      <17472>
EV-M
{CustomPropertiesDefinition} Loading Custom Properties from file:
¥C:¥PROGRAM FILES (X86)¥ENTERPRISE VAULT¥Custom Filter Rules¥
Custom Properties.xml
1167951    06:23:38.308      [6860]      (ArchiveTask)      <17472>
EV-L
{CustomPropertiesDefinition} Loading Custom Property definitions...
```



```

1167952    06:23:38.324    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV-L
{CustomPropertiesDefinition} Adding property MSGCLASS [namespace=]
1167953    06:23:38.324    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV-L
{CustomPropertiesDefinition} Adding content categories...
1167954    06:23:38.324    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV-L
{CustomPropertiesDefinition} Adding category MsgClassTest
1167955    06:23:38.324    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV-L
{CustomPropertiesDefinition} Default Category = MsgClassTest
1167956    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV-L
{CustomPropertiesDefinition} Adding presentation applications...
1167957    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV-L
{CustomPropertiesDefinition} Adding application search.asp
(Locale='1033')
1167958    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
[CustomXMLFilter] Setting DEFAULT Content Category to [MsgClassTest]
1167959    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Adding External Filter 'EnterpriseVault.CustomFilter' to the list
for processing|
1167960    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Successfully added External Filter 'EnterpriseVault.CustomFilter'|
Calling Initialize
1167961    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
[CustomXMLFilter] Custom Filter initialized on thread.
1167962    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
CEVFilterController::CreateFilterObject() (Exit) |Success [0] |
1167963    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
CEVFilterController::InitializeFiltersFromRegistry -
MoveOnFilterFailure
RegKey: [0x00000000]
1167964    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M

```

```
CEVFilterController::InitializeFiltersFromRegistry() (Exit) |Success
[0] |
1167965    06:23:38.339    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Successfully enabled external filtering
```

予定がフィルタルールの例を使って評価され、一致することが次のように表示されます。

```
1171158    06:23:49.996    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:H
[CustomXMLFilter] Custom Filter processing message 'test appointment'
1171159    06:23:49.996    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
...
1171161    06:23:49.996    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:H
[CustomRules][CRuleSet] Getting rule data...
...
1171164    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:H
[CustomXMLFilter] New RuleDataXML is now '<?xml version="1.0"
encoding="UTF-16"?> <RULE_DATA><DATATYPE NAME="NAMEDPROPERTIES">
<DATA NAME="TAG"><VALUE>MSGCLASS</VALUE> </DATA></DATATYPE>
</RULE_DATA>'
1171165    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomXMLFilter] GetMessageNamedProperties - XML RULE Data =
'<?xml version="1.0" encoding="UTF-16"?><RULE_DATA><DATATYPE NAME=
"NAMEDPROPERTIES"><DATA NAME="TAG"><VALUE>MSGCLASS</VALUE></DATA>
</DATATYPE></RULE_DATA>'
...
1171167    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomXMLFilter] GetMessageNamedProperties - Getting Tag =
'MSGCLASS' from custom properties
...
1171169    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
CEVFilterController::get_MessageClass - Returning
'Original Message Class' = IPm.Appointment
1171170    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomXMLFilter] Custom tag 'MSGCLASS' and name
'0x001A', set to IPm.Appointment
```

```
1171171    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomXMLFilter] Adding property 'PR_MESSAGE_CLASS (0x001a)'
to Items XML. [tag='MSGCLASS', value=
'IPm.Appointment']
1171172    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomRules][CRule] Evaluating item against MBX DIFF_RET_CAT rule...
1171173    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomRules][CNamedPropClause] testing against ANY of 1 NamedProps
1171174    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomRules][CNamedPropClause] : ipm.appointment    MATCHED
ipm.appointment
1171175    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomRules][CNamedPropClause] match with test ''ipm.appointment''
1171176    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomRules][CNamedPropClause] Named prop clause: MSGCLASS    MATCHED

ANY PROP Values
1171177    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomRules][CRule] Finished evaluating item against MBX DIFF_RET_CAT

rule; matches
```

フィルタールの例の処理がテストメッセージに適用されることが次のように表示されます。

```
1171179    06:23:50.058    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
[CustomXMLFilter] Reading MBX DIFF_RET_CAT rule properties...
...
1171181    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
[CustomXMLFilter] Setting recognised ACTION to [1]
1171182    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
[CustomXMLFilter] Setting message content category to [MsgClassTest]
...
1171184    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
```

```
EV:M
CEVFilterController::get_MessageClass - Returning
'Original Message Class' = IPm.appointment
...
1171187    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
[CustomXMLFilter] Adding property 'PR_MESSAGE_CLASS (0x001a)'
to index property set 'MsgClassTest' [tag='MSGCLASS',
value='IPm.appointment']
1171188    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
[CustomXMLFilter] Setting retention category to
[167A06CB31E01744F8500E3D54FC80BEC1b10000evsite]
1171189    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Returning IndexedPropertiesSet = <?xml version="1.0"
encoding="UTF-16"?>|<ARCHIVED_ITEM xmlns:o="urn:kvsplc-com:
archived_item" version="1.0"><MSG><PROPSETLIST><PROPSET
NAME="MsgClassTest" SEARCH="y" RESULTS="y"><PROP NAME="MSGCLASS">
<VALUE>IPm.appointment</VALUE></PROP></PROPSET>
</PROPSETLIST></MSG></ARCHIVED_ITEM>|
1171190    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Returning Create Shortcut = TRUE
1171191    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Returning Delete Original = TRUE
1171192    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Returning Vault Id = 1E5850B2EA77101459FCD56CBC4D3A5871110000evsite
1171193    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Returning Retention Category = 167A06CB31E01744F8500E3D54FC80BEC
1b10000evsite
1171194    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
Returning Action = 1
1171195    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
CEVFilterController::FilteringCompleted() (Entry) |
1171196    06:23:50.074    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
CEVFilterController::FilteringCompleted() (Exit) |Success [0] |
```

```
...
1171200    06:23:50.089    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
EF: Item will be archived|Mailbox: /o=EV Training/
ou=First Administrative Group/cn=Recipients/cn=VSA|Folder: Calendar|
Message: test appointment
1171201    06:23:50.089    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:L
CArchivingAgent::ExternalFiltering() (Exit) |Success [0] |
1171202    06:23:50.089    [6860]    (ArchiveTask)    <17472>
EV:M
CArchivingAgent::ProcessItemInternal - After call to
ExternalFiltering.
RetentionCategory[167A06CB31E01744F8500E3D54FC80BEC1b10000evsite]
ArchiveId[1E5850B2EA77101459FCD56CBC4D3A5871110000evsite]
ContainingArchiveId[1DF2DFF131A9AFB4EB0B493648330C02B1110000evsite]

IndexedPropertiesSet[<?xml version="1.0" encoding="UTF-16"?>|
<ARCHIVED_ITEM xmlns:o="urn:kvsplc-com:archived_item" version="1.0">
<MSG><PROPSETLIST><PROPSET NAME="MsgClassTest" SEARCH="y" RESULTS="y">
<PROP NAME="MSGCLASS"><VALUE>IPm.appointment</VALUE>
</PROP></PROPSET></PROPSETLIST></MSG></ARCHIVED_ITEM>|]
MessageModified[FALSE] RetryCount[0] [0x00000000]
```